
大魔王が倒せない

はぐれっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔王が倒せない

【NZコード】

N2219W

【作者名】

はぐれっち

【あらすじ】

突如として現れた大魔王を自称する美少女は瞬く間にある国を支配し、自由気ままな大魔王ライフを送り始める。そんな大魔王少女が様々な敵と戦っていくお話。

「1章：大魔王 対 勇者」魔王を退治した勇者一行。だが魔王は死に際に、お前らの国は落ちたと語る。帰還した勇者を待っていたのは大魔王が支配するいつもと変わらない街の姿だった。勇者達は大魔王に挑むことにするが……。

「2章：大魔王 対 大魔導師」魔法使いになりたいという少年ア

ル。ボロボロの格好の少女を伴い魔法使いに家に向かうが……。現在2章を不定期に更新中（大体1週間間隔）。もうそろそろ2章は終わりそうです。

文章が堅苦しい感じなんですが書いてる人はお気楽エントメぐらいのつもりです。

注)

- ・微エロぐらいのお色氣的表現はありますので苦手な方は回避してください。
- ・大魔王は残虐無比で外道な感じというよりは、のん気な感じの人です。大魔王という語感から感じるイメージと違うかもしれません。

1章の登場人物（終了時点）（前書き）

ただの登場人物表です。

本編をご覧なりたい方は、「プロローグ」の大魔王があらわれた
からお読みください。

割り込みで設定を入れるのは後々まずそうだと思ったのでこの設定
集は2章終了時点で全体的に整理して消そうかと思っています。

最新の設定集は（<http://tueee.seeesa.net/tag/>）に用意しました
のでこちらを御覧ください。

1章の登場人物（終了時点）

注意事項：

未設定となつてているのは作者が全く考えていないということです。その情報がストーリーの中で意味を持つようならその時点で設定されます。

未公開はそのうち作中で公開される予定。そんな大した話でも無いですが、1章終了時点でのネタバレが含まれますので未読の方はご注意ください。

1章の登場人物

・大魔王

性別：女

年齢：未公開

マテウ国の支配者。首都ベイヤーで適当に暮らしている。すげー強い。勇者を蹴散らすもその全貌は未だ不明。

・マテウ国軍の代表者

性別：男

年齢：おっさん

大魔王の第一被害者の一人。貴族。セブテム国との小競り合いを大魔王に邪魔された。この後の話で関わってくる予定は特にない。

・セブテム国軍の代表者

性別：男

年齢：おっさん

大魔王の第一被害者の一人。貴族。マテウ国との小競り合いを大魔王に邪魔された。大魔王に見逃され国に返った。後でちょっとと

大魔王について報告するようなシーンがあれば出てくるかもしれません
い。

・マテウ国王

性別：男

年齢：未設定、壮年。渋目のおっさん。

大魔王にレガリアを奪われ最高権力者の座から落とされた。ただ大魔王が権力にあまり興味を示さない性質だったため、そのまま国王を続いている。貴族の中でも特に王族と呼ばれているグループの一員。

・王族達

王の家族構成は特に設定されていないが、王妃とか王子とか王女とかはいるはず。なんとなくだけ王女は話に関わってくるかも。

・フォグ

性別：男

年齢：未設定、多分20歳ぐらい

聖剣の勇者。貴族。王直轄部隊、第一遊撃隊の隊長。白銀の鎧と聖剣がトレードマーク。魔族に対してはほぼ無敵の人類の守護者。魔王を倒している。

・アイゼン

性別：男

年齢：未設定、フォグと同じぐらい。20歳ぐらい？

第一遊撃隊隊員。魔法使い。契約魔法の使い手。貴族っぽい格好をしているが平民。近接戦闘ではあまり役に立たない。知識が豊富でなんでお前がそんなこと知ってるんだよ！ つてことを平然と解説してくれる人。今後も大魔王戦で解説だけしにやつてくるかもしれない。

戦闘スタイルは事前に魔法による罠を仕掛けて、はめるよつた陰険な感じ。

・ゲルン

性別：女

年齢：未設定、他と同じで20前後。

第一遊撃隊隊員。貴族。戦士。戦斧の使い手。力自慢で戦斧を適当に振り回す戦闘スタイル。大魔王にやられた後はほとんど出てこない。どうしたんだろう？ 多分落ち込んで黙りこんでたんだと思う。そういうことにしといてください。

・マキノ

性別：女

年齢：未設定、他より少し若い。 17・18？

第一遊撃隊隊員。平民。神官。神聖魔法の使い手。お祈りマキノの愛称で親しまれる。マジキチ。狂信者と化した彼女に対抗出来たのは今のところ大魔王だけ。

勇者をして「もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな」と言わしめる。（正確にはこう言つてないですけど）

武器は聖堂。（武器なんだろうか？）

・アルベリク

性別：男

年齢：未設定、見た目はおっさん。

第3魔族領を支配していた魔王。魔族。槍を投げつけて森を破壊するなど臂力は勇者以上で、またもに戦えば勇者に勝ち目はなかつたはずだが、勇者の持つ聖剣と相性が悪かつたため敗れた。

・ホルス

性別：男

年齢：未設定、フォグ達よりは年上。20～30の間？

冒険者の貴族。第三魔族領の魔王城の発見者。数々の実績を持つそれなりに有名な人物だが魔王に殺された。魔王に挑んだ動機は不明だが、増長と傲慢故だと思われる。

・ダフニー

性別：女

年齢：未設定、フォグ達と似たようなもの。20前後？
首都の入り口の検問所で手続きを行う兵士。

気さくで人好きのする明るい性格。街の案内も気軽にを行うが、最近では大魔王のことばかり聞かれ、そのため大魔王の現在地を大体把握するに至った。そんなムダ知識の持ち主。

・ゴドワイン

性別：男

年齢：未設定、フォグよりは少し年上のイメージ。

第二遊撃隊隊長。貴族。聖盾の勇者。ごつい。特に活躍はしない。今後も出てくるのかは不明。

・デリク

性別：男

年齢：14

アレがヤバイ亭の女将の息子。店で働いている。大魔王に密かに興味をもっているが、それは見ている人間誰もが知っている。

・リサ

性別：女

年齢：未設定。14歳の息子がいるぐらいの歳。いつ産んだのかで結構幅はあると思いますが。

アレがヤバイ亭の女将。恰幅のいい気のいいおばちゃん。大魔王

からは「オカミ」という名前だと思われている。

アレがヤバイ亭はこれからもちょくちょく出てくるので、リサもそれなりに出てくると思つ。

・ライサ

性別：女

年齢：未設定。幼女。

大魔王の友達の一人。迷子になつていた所を大魔王に保護され、ソフトクリームを奢つてもらつた。まあ大魔王は金払つてないけど。

・ネルデフォウス

性別：男

年齢：未設定。かなり長い時を生きている。

大魔王に召喚された悪魔。人間研究家。人間の生物的な仕組みに詳しく述べ、人間の修復が得意。見た目は召喚者により異なる。大魔王の召喚時には背中から3本目の腕が生えている小男の姿だった。メーレーヌの召喚時には美青年の姿を取つていてる。

・魔族の大魔王

性別：男

年齢：未公開

魔族の大魔王。魔族を統べるもの。魔族国家エレシアでえらそつにふんぞりかえつていてる。

・魔族の幹部、竜

性別：未公開

年齢：未公開

魔族の幹部。幹部の集まりには、竜の姿で登場した。今後どちらの話に関わるかは不明。ソードマスター・ヤマトみたいにまとめてやられる可能性もある。

・魔族の幹部、狼

性別：未公開

年齢：未公開

魔族の幹部。幹部の集まりには、狼の姿で登場した。ソードマス

ター（略）

・魔族の幹部、本

性別：未公開

年齢：未公開

魔族の幹部。幹部の集まりには、本の姿で登場した。ソードマス

ター（略）

・魔族の幹部、石

性別：未公開

年齢：未公開

魔族の幹部。幹部の集まりには、石の姿で登場した。ソードマス

ター（略）

・シオドア

性別：未公開

年齢：未公開

魔族の幹部。幹部の集まりには、剣の姿で登場した。大魔王の過去話に関連するので、大魔王の過去話に話が進むようなら今後も出番はあるかも。

・メレーヌ

性別：未公開

年齢：未公開

魔族の幹部。幹部の集まりには、人形の姿で登場した。ネルデフ

オウスと契約している。大魔王の過去話に関連するので、大魔王の過去話に話が進むようなら今後も出番はあるかも。最強の勇者やらなんやら伏線ぽいこと言っているが、これもソードマスターよろしく、「別にそんなことはなかつたぜー」となかつたことにされる可能性はある。

2章の登場人物（6話時点）（前書き）

ただの登場人物表です。

本編をご覧なりたい方は、「プロローグ」の大魔王があらわれた
からお読みください。

割り込みで設定を入れるのは後々まずそうだと思ったのでこの設定
集は2章終了時点で全体的に整理して消そうかと思っています。
最新の設定集は（<http://tuee.seeesa.net/tage/>）に用意しました
のでこちらを御覧ください。

2章の登場人物（6話時点）

注意事項：

未設定となつてているのは作者が全く考えていないということです。その情報がストーリーの中で意味を持つようならその時点で設定されます。

未公開としているのはそのうち作中で公開される予定。そんな大した話でも無いですが、2章更新中の現時点でのネタバレが含まれるかもしれませんので未読の方はご注意ください。

2章の登場人物

・大魔王

性別：女

年齢：未公開

相変わらず街中でフリーダムに行動している。2章になつてから全然出てこない。一応主人公。めっちゃ強い。

・アル

性別：男

年齢：15歳ぐらい

栗色の髪の少年。瞳は黒。魔法使いになるため街にやつてきた。職業は日雇い作業員。今のところ主役面して出張っている。

・リーリア

性別：女

年齢：16

金髪碧眼の美少女。髪は腰まである。巨乳。平民。職業は侍女。アルと一緒に行動している。ヒロイン面してしゃしゃり出てきてい

る。

・ベティ

性別：女

年齢：30手前ぐらい。

首都ベイヤーにある職業斡旋所の所員。平民。あまり繁盛していないためいつも暇そうにしている。仕事はちゃんとやる。キャシーの姪。

・ケイン

性別：男

年齢：40ぐらい？

ディーン開拓団の団員。アルに職業斡旋所を紹介した。

・ディーン

性別：男

年齢：じじい

ディーン開拓団の団長。本編未登場。多分出てくることはなさそう。

・キャシー

性別：女

年齢：見た目は25ぐらい。

魔法使い。平民。無駄に口うるさい感じの美女。アル達に部屋掃除の仕事を依頼した。職業は彫金士。アクセサリーを作っている。魔法使いとしての実力は不明。アル達に魔法の講義を行った。ベティの叔母。

・テオバルト

性別：男

年齢：未公開。見た目は美青年。
現時点では詳細は未公開。

・ヴァルター

性別：男

年齢：未設定

聖棍の勇者、第三遊撃隊の隊長。名前だけ登場。

・セルジュ

性別：男

年齢：未設定

第三遊撃隊の隊員。魔法使い。名前だけ登場。

・エーヴェルト

性別：男

年齢：未設定

第三遊撃隊の隊員。短槍使い。名前だけ登場。

・ギャリ

性別：男

年齢：未設定

第三遊撃隊の隊員。司祭。神聖魔法の使い手。名前だけ登場。

・フォグ

性別：男

年齢：未設定、多分20歳ぐらい

聖剣の勇者。魔王を倒しているが、大魔王には返り討ちにあつた。
リーリアの話にだけ登場。リーリアの憧れの人。けど、このお話
は安心安全をモットーとしておりますので……。

・野族の隊長

性別：男

年齢：30ぐらい？

貴族くずれの盗賊。ひどい目にあわされ生死の境をさ迷いながら狼に引きずられている。

・リーリアの同僚の従者

性別：女

年齢：20ぐらい。

ヴァルターの従者の一人。リーリアにひどいことをした。

設定説明（レガリア）（前書き）

これも設定説明のみで本編ではありません。すいません。
本編をご覧なりたい方は、「プロローグ」の大魔王があらわれた
からお読みください。

割り込みで設定を入れるのは後々ますそうだと思つたのでこの設定
集は2章終了時点で全体的に整理して消そうかと思っています。
最新の設定集は（<http://tuee.seesa.net/tage/%90%D9%92%E8%8FW>）に用意しました
のでこちらを御覧ください。

設定説明（レガリア）

本編でわざわざ説明しない設定のメモのようなもの。本編で説明しないぐらいですから話には直接関係ありません、多分。もし本編に関わることがある場合で矛盾する場合は設定変更を行つ場合もあります。」了承ください。

- ・レガリア

- ・王権の象徴。国内でのみ有効な絶大な能力を発揮するアーティファクト。神の恩寵とされている。

- ・大抵の国ではこれの所持者が王となる。

- ・レガリアの基本機能

- ・レガリアは支配領域内の生物から魔力を吸収することで作動している。

- ・強制ではなく拒否することは可能。その場合は国民とは見做されない。ただ、人間では魔力の操作を行うことが出来ないためほぼ強制ということになる。

- ・一定期間レガリアの支配域から離れると、この国民登録は削除される。

- ・吸収率はレガリア保持者が自由に設定できる。

- ・通常は魔物対策のため吸収率を20%程度に設定。魔力は一般人には無用の長物のためある程度は影響はないが、やりすぎると国内の活気が失われる。

- ・魔物は魔力の搾取を嫌がるため通常はレガリア支配域へ侵入することはない。

- ・浸蝕の宝玉は1%に設定されている。そのため浸蝕の宝玉の支配領域では魔物の活動が活発になる。

- ・国民を一定期間中立地帯へ置くことで、その地域への支配域の

拡大が可能。

- ・レガリアのモード
 - ・レガリアには、初期状態、起動状態、移譲状態、保留状態、休止状態の5つのモードがある。
 - ・初期状態：なにも設定されていない初期の状態。この状態のレガリアコアに血を登録することで所有者となる。所有者が死亡時に継承者が設定されていない場合この状態となり、設定は全て初期化され初期状態となる。
 - ・起動状態：レガリアが起動し効果を発揮している状態。
 - ・保留状態：レガリアがその効果を停止し、所有者の変更を待つ状態。起動状態のレガリアのコアに血を登録することでこの状態に移行する。この強制所有者変更には時間がかかる。かかる時間は、前登録者の在位年数を日に換算した時間。7年であれば7日。保留状態の間に、前登録者が再度登録を行えば即座にそれまでの状態で起動状態へと移行する。
 - ・移譲状態：所有者による設定で移譲を行うことが出来る。その際は瞬時に所有者の変更が行われる。所有者の死亡時には登録されている継承順に基づいて自動で移譲される。
 - ・休止状態：機能が停止する。保留状態と似ているが、休止状態では登録関連処理も休止するため所有者の変更が出来ない。レガリアを国外へ持ちだした場合にこの休止状態となる。
 - ・モードではないが、所有者の死亡時には登録されている継承順に基づいて自動で移譲される。この際は保留状態とはならず瞬時に移譲される。
 - ・レガリアの複数所持。
- レガリアは複数所持が可能で、その場合所持しているレガリアの支配範囲が拡大される。A国のレガリアとB国のレガリアを両方所持した場合、A国のレガリアがB国でも発動できることになる。

- ・レガリアの制限
- ・レガリアを使用できるのは所有者のみ。
- ・レガリアにはレプリカを産むものがあり、レプリカは王以外でも使用可能。様々な条件でその効果を発揮する。
- ・レガリアは国内でのみ使用可能。

- ・現在確認されているレガリア

春風の外套、支配の王錫、救済の王冠、誓約の天秤、断罪の聖剣、凶王の修練場、浸蝕の宝玉。世界には中立地帯が数多く存在するため、それらに対応した未発見のレガリアがあるともされている。

- ・春風の外套

国内の完全な気象制御を行うことが出来る。どんな気象変化でも起こせるが、部分制御は出来ない。（一部地方に雨を降らせるなどは出来ない。雨を降らせれば国内全てに雨が降る）

武器として使えばかなり強力だがその場合国内全てを犠牲にする諸刃の剣となる。

- ・浸蝕の宝玉

アンチレガリアの性質を持つ。このレガリアは他のレガリアの支配領域を押しのける。

宝玉は同効果のレプリカを一定時間ごとに排出する。宝玉一つの効果範囲は宝玉を中心に半径数キロ程度だが時間と共に拡大していく。

本体にはレプリカの制御機能が存在する。

レガリアは通常破壊不可能とされているが、レプリカは破壊可能。

大魔王があらわれた

「今からあなたたちを攻撃します。死なない程度に手加減はしますが、体力に自信のない方は地面に伏せ手を頭の後ろで組んでください」

突如として戦場に現れた少女はこう言った。

まさに激突せんばかりだった両軍は戸惑つた。その少女がどこから現わされたのかは誰も見ていない。気づけばこれから戦場の中心となるはずの場所に一人佇んでいた。

とても綺麗な少女だ。髪と瞳は黒。腰まである黒髪を白いリボンでくくり一本結びにしている。ドレスは基本黒だが袖や裾などのエッジ部分は白いフリルがあしらわれていた。肌は顔と手足の一部しか覗いていなかつたが、抜けるように白い。

ほとんどの者がその美しさに目を奪われた。

皆が呆けたようになつてている中、少女が手のひらを上にして右手を擧げる。その動作に呼応するように上空10m程の空間に巨大な光り輝く玉が現われた。

「攻撃範囲はこの球体を中心に1kmです。地面に伏せている方は降伏したとみなし攻撃対象から除外します。この攻撃は全員が降伏するまで続きますので、これ以上耐えられないと思えば無理せずに伏せてくださいね」

少女が右腕を振り下ろす。両軍合わせて2000名、その全てに雷撃が降り注いだ。

少女の言うように手加減された攻撃のようだつたがそれだけで半数の者がバタバタと倒れていく。

「やはり人間を無力化するには電撃は効果的ですね」

独り言ではあるがその言葉は先ほどからの発言と同じくその場にいる全員に聞こえていた。特に大きな声ではないが、自然と通る声だった。

「次、来ますよ」

再びの雷撃。その攻撃は少女の動作を必要とはしなかつた為、一度目は耐えた者たちも完全に不意を付かれた。雷球は一定間隔で条件に合った者を自動的に攻撃するようだ。2度目の攻撃の前に立てられたものはほんの数人だった。

少女は静寂に包まれた戦場を見渡す。その立つていられた数人が慌てて地に伏せると満足そうに頷いた。

「静かになりましたね。全員降伏していただけたようになります。さて、両軍の代表者の方、立ち上がっていただけますか？ 2名までは攻撃対象外に設定しましたので怖がらなくてもいいですよ？」

両軍から代表者と思しき人物がそつとあたりを伺いながら立ち上がった。どちらも全身甲冑を身にまとっている。電撃で所々焼け焦げているがそれほどダメージは無いようだった。

「ではこちらに来ていただけますか？」

代表者はよたよたと少女の元へやってきた。その顔は責めている。

「こんにちは」

少女は何事もなかつたかのよつに挨拶をした。

「では質問です。あなた達はどこの国の軍隊でこれから戦う所だつたんですね？ 所属を見分けるにはどうすればいいですか？ その外套の色で区別出来るんでしょうか？」

代表者の一人は愕然とした。この少女は我々が何者かを理解しないまま攻撃を仕掛けてきたのか？

「あ、ああ、我々マテウ国のは緑色を身につける。そいつらマテウム国は赤だ」

あれほどの攻撃を見せられた後に余計な事を言つ氣にもなれずマテウ国軍の代表者は問われるまま素直に答えた。

「なるほどわかりました。ではあの方はマテウ国の方だったようですね。では……そちらの赤の方。セプテム国でしたか。あなた達は撤収していただいてかまいませんよ。お国はどちらの方角ですか？」

「……南だ」

「では、この雷球から遠ざかる方には攻撃しないようにしました。もう立つて頂いても大丈夫ですよ。最初に言いましたように攻撃範囲は1kmですのでまつすぐお帰りくださいね。こちらに近づいたらまた同じ目に合いますよ。攻撃の度に威力が上がるようになつていますから次ぐらいからは死人が出るかもしれません」

「わかった。本当に安全は保証してくれるんだな？」

「ええ、大魔王の名に賭けて誓いましょう」

二人は思つても見なかつた名が飛び出したことに驚愕した。人間は有史以来魔族と争いを続けているためそれなりに魔族については研究を進めている。それによれば魔族は小集団の「ミコニティ」を魔王という名の頭領を中心に形成しており、それぞれの「ミコニティ」同士に緩やかな繋がりがあるとされていた。そしてその「ミコニティ」全てを統括するものこそが大魔王とされていた。

なぜ、この場に大魔王が現れるのか？ マテウ国軍代表が考え込んでいるうちにセブテム国側は撤収を始めていた。少女が言つとうに攻撃はされていない。

「俺たちはどうすればいい？」

「あなた達はしばらくそのまま伏せていてください」

「わかった。その通りにしていよう。だが一つ聞いていいか？」

「いいですよ」

「何故だ？ 何故このようなことをする？」

「私はすぐそここの村はずれに住んでいるんですが、側で戦争されるのがとても鬱陶しかったからです」

「なに？」

「それと村にあなた達の軍の方が略奪にやつてきたからです。まあ、それ 자체にはさほど思つところはないのですが、私のささやかな家庭菜園を踏み荒らしてくれました。ですので報復することにしたの

です

「ば、馬鹿な！ そんなことでか！」

中立地帯での略奪は恒例行事だ。中立地帯には国からあぶれた者達がそこかしこに小集団を作っている。どこの国にも属さない者のためその行為を咎めるものはどこにもいなかった。そうされたくなれば国庇護下に入り税を納めればいいというのが国側の理屈だ。

「質問は終わりですか？ では10分差し上げますので、あなたはお仲間の所に戻り伏せたままでいることを言い含めてください。それが終わったらあなたももう一度伏せてくださいね」

「何故だ？」

「それは簡単です。今からあなたたちの国、マテウ国ですか？ を襲撃しようと思うのですが出来れば人を殺したくないのです。ですのでこの場にしばらく留まつていただくことにしました。あなたたちの行動の最終的な責任は王にあると思いますのでマテウ国王に責任を取つて頑こうかと」

マテウ国の代表者は激昂しかけた。何故一足飛びに王の責任ということになつてゐるのか！

だがここで怒りに任せて何をしようともこの戦況を覆す術がないことは自明だった。激情に身を任せこの少女に反駁するのはただの自殺行為だ。

「……部下の狼藉の責任は私にある。私の身を持つて償つことでは代えられないだろうか？」

なんとかこの場で事を納めたい。なんならこの場にいる全員が犠牲になつても構わないとすら思つたが、少女の返答はにべもないものだった。

「結局は最高責任者である王に責任をとつてもひじかないと思いますよ?」

何か手はないかと考え続けたが、やがてマテウ国代表者は踵を返した。10分の時間制限のうちに戻らねばならない。部下たちの元へと戻るところのままの姿勢で待機することを言い渡し自らも伏せた。

「この雷球はしばらくここで待機していますので気をつけください。雷球が消えた後なら動いてもらつてもかまいませんのでそれまでの間不自由をおかけしますがよろしくお願ひします」

「なんとなくこちらに来ましたが、マテウ国といつのはこのまま北に行けばいいんですか? 国王はぜひひこでいらっしゃいます?」

「……北へ行けばマテウ国だ。街道沿いに北上すれば首都ベイヤーに辿り着くが、ベイヤーはまだ國の中心部だ。ここからではかなりの距離がある

「徒歩でまだ一晩かかるでしょうか?」

「一週間といつはいか?」

「さうですか。結構かかりますね。まいりですのんびり行きます。」

雷球は1時間ほどで消えると思いますけど追つてこないでくださいね。このへんであなたちものんびりしていればいいと思いますよ

そう言つおいて少女はまた歩き出した。

「！」の野郎！ ふざけやがつて！

一人の兵士が立ち上がった。

「あ！ 3回目からは威力がかなりあがつてるので注意してくださいね

言い終わる前にその兵士は雷撃に打ち倒された。その後少女に逆らうものは現れなかつた。

一週間が過ぎた。

今少女は首都ベイヤーにある王城内、王の私室にいる。王を守護する近衛兵は既に沈黙していた。王も虫の息とこつたところだ。

「貴様……何者だ……」

「とりあえずお仕置きに来ただけだったんですが、いいものを手に入れてしましました」

少女はまるで話を聞いていない。その手には王が直前まで身につ

けていた緑色のマントがあつた。室内で外套を着続けるというのも変な話だが、王権の象徴であるレガリアを目の届かない場所に置いておく気がなかつた王はそのマントを常に身につけていた。

「さて、私はあなたに勝つたのでこれは私のものだと思つのです。所有権の移譲手続きをしていただけませんか？」

「断る！」

息も絶え絶えながらも、しつかりとした声で王は拒絶した。

「では強制移譲を行つことになりますね。私レガリアには詳しいんですね？」

そういうマントの留め具になつていてる宝玉を中程でひねる。半球状の蓋が外れると内部にあつた針の様な物が露出した。

「ここに私の指先でも押し付けて血を『えればレガリアは保留状態に移行します……在位年数は？』

先程から王はこの少女の正体をなんとか推測しようとしていたが、必死に行つていた思索は全て吹つ飛んでしまつた。何故だ？ 何故知つてゐる？

レガリア保有国ではレガリアの所持者こそが王となる。そこに血筋や身分、能力は一切関係無い。そのためレガリアの所有権移行手続きに関する事は王族のみの知る最高機密に属した。上位の貴族といえどもこの事は知らない。王位の継承は血族間で行われると素直に信じられていた。レガリアは王のみが持つことの出来る強大な魔法具であるとは広く知られているが、実態がその逆であることを知る立場はかなり限定されることになる。

「ほーっとしてないで質問に答えてください。移譲しちゃいますよ？」

「……10年だ」

王はまともらない考えに没頭していたが、ぼそりと「ふやくみつに答えた。

強制移譲はまずい。この国ではなおさらだ。そして少女はその事を知りながら騒っている。王はもう考えた。

マテウ国は本来、極寒の地だ。1年のほとんどを雪と氷に覆われ、人が住むのはほぼ不可能に近い。そのマテウ国が年中快適な气温に保たれ常春の国と呼ばれているのはひとえにレガリア、春風の外套の恩恵だ。

「では10日とこいつとひりますね。耐えられますかね、みなさん」

レガリアは強制移譲中は保留状態となり全ての機能を停止する。その際、前所有者が再登録することで移譲の取り消しを行うことが出来る。保留状態は前所有者の所有年数を日数に換算したほどの期間だった。

「本来、奪われたレガリアを取り返しやすいようにするための仕様だと思うのですが、この国だとまずいですよね。まあ私はどうでもいいんですけど」

この国の者は皆しくあたりまえのようにレガリアの恩恵を享受している。この国が本来極寒の地であったことなど誰も意識していない。そんなことははるか昔のお伽話としか思われていなかつた。

「10日もあれば全滅でしょうが。冬の備えなんてまつたくないんでしょうから、1日も持たないかもしませんね」

少女はさつきから同じ内容を繰り返し語っていた。要は正当な移譲をしなければこの国は滅ぶということだ。

王は考える。自殺をするというのはどうだ？ 所有者が死んだ場合、レガリアに登録された継承順位に従って所有権は自動的に移譲される。その際は保留状態にはならないので機能停止にはならない。だがレガリアがこの場にある時点でそれは意味がなかつた。簒奪者は誰に継承されようが勝手に強制移譲を行えばいいのだ。宝物庫にでもしまいこみ厳重に保管していればよかつたと後悔した。それならばこの化け物じみた少女がレガリアに興味を抱くことはなかつたかも知れない。

王族にのみ伝わるレガリアの伝承に思いを巡らせるも結局移譲以外にこの国を守る方法を思いつけなかつた。

「わかつた……レガリアを……譲るわ……」

苦渋に満ちた声を搾り出すよつに王は言った。

「ありがとうございます。では一度お返ししますね」

そういうと少女はマントを王に手渡した。受け取った王は留め具の中にあるレセプタと呼ばれる針状の物に触れる。

「貴様……名はなんといつ？」

「ああ、移譲に名が必要でしたね。本名はすごく長いので……そうですね、大魔王と。私のエイリアスです。この世界でただ一つ私のみを指し示す言葉ですので名の代わりになるでしょう」

「……所有権を大魔王に委譲する」

特に複雑な手続きは必要としなかった。明確な言葉さえあればレガリアは処理を行う。特に何が起こるわけでもなかつたがこれで移譲手続きは完了した。

王は黙つたままマントを差し出した。少女はにこやかにそれを受け取る。王はその笑顔に一瞬とはいえ状況を忘れ魅入つてしまつた。

「それで……王となつて貴様はどうするのだ？」

「別になにも……ああ、何か誤解させてしまつたようですね。国家元首はあなたのままでかまいませんよ。今まで通りにお過ごしください。私は王の上に立つ大魔王ということになります。何かしてもらいたいことがあれば言いますそれには服従してもらいますけど、今のところ何もありませんので」

「ではレガリアはなんのために必要だと言つのだ！」

「じついう趣味はなんと言えばいいんでしょうか。秘宝蒐集？ 私、不思議な道具が大好きなんですよ。特にこういつた意思の宿る神授の秘宝というのですか。さて、春風の外套なのでハルさんでいいですね。ハルさん、コーディングタフニースを音声モードにしてください」

『……了解しました。コーディングタフニースを音声モードに移行します』

王は目を見開き驚愕した。

「レガリアが喋るだと…」

「言つたじやないですか、レガリアには詳しいって。音声以外にも
インターフェイスはいろいろありますけど、人間にはあまり意味ない
かもしませんね。ではハルさん、外見の変更は可能ですか？ ま
縁なマントというのは趣味じやないのです」

『はい、外套の範疇であるならどのような形態を取ることも可能で
す』

「では短めの白いケープをお願いします」

マントは瞬時に指示通りにケープへと姿を変えた。少女はそれを
羽織るとそのまま場でぐるっと一回転してみた。

「どうです？ 似合つてるでしょうか」

王は薄れ行く意識の中で可憐に微笑む少女の姿を見た。まるで人
間にしか見えないな。そう思ったのを最後に王は意識を失った。

* * * * *

しばらくして国中に高札が掲示された。

高札は雨に濡れるのを防ぐために簡単な屋根のついた板に文字を
書いたものだ。それに大人の目の高さぐらいになるように棒に固定
して地面に突き刺したり、街の中だと専用の掲示場がありそこに掲
示される。高札は王国から国民への公的メッセージの発信手段であ
り、法令の掲示などに使われていた。街中では文字の読めない者の

ために役人を配置し読み上げさせることもしている。

マテウ国の首都ベイヤーの中心に位置する広場。その一角は戸惑いの声にあふれていた。

「なあ、みんな騒いでるけどこれ何が書いてあるんだよ」

「ああ、なんでも王様の上の位が出来てそれが大魔王なんだってよ」

「なんだそりや、大魔王つてお伽話かよ」

「そりいや、魔族の王が魔王で、その魔王の上に大魔王つてのがいるって聞いたことがあるな」

「まさか、魔族に負けたのか俺たちは！」

「いや、負けるも何も攻めこまれた覚えがないが？」

「勇者はどうしたんだよ！ こないだ魔族領に攻め込むつて出陣したばかりじゃないか！」

「魔王が出てきたつて言われてても……突然だよな」

「別に今まで通りで変わりはないらしいぞ？」

「そなのか？ 別に気にしなくてもいいのか？」

結局の所、平民にとつて特に何も変わらないといつことがわかり騒ぎは自然と落ち着いていった。

ただ高札の最後の言葉に言い知れぬ不安を覚えるものもいた。そこにはこう書いてあった。

大魔王の言葉は全てに優先する、と。

世界を土地という基準でみるならそのほとんどが中央大陸に占められていた。世界のほぼ全てと呼んでもいいそれは超大陸とも呼ばれており、世界の土地の約9割の面積を有することになる。だが人類の版図はここにはない。人類にとって中央大陸は全くの謎としかいいようがなかつた。有史以来、幾度も調査の手を伸ばすも成果はほとんど得られていない。

人類の大半はその中央大陸をとりまく環状大陸を活動の範囲としている。では残り1割が全て人類のものかというとそれすら人類には許されていない。

魔族。人類に敵対する知的種族の為だ。

魔族が占拠する魔族領と呼ばれる土地が環状大陸を虫食い状に蝕んでいた。いつから人間と魔族の対立が続いているのかさだかではないが記録に残っている最初の記述では環状大陸にある1国が魔族領、魔族の住まう国とされていた。

それから歴史が進むに連れ魔族領は奇妙な形で人類の領土を浸蝕していく。ある日突然、人間の領土内に魔族領が現れるのだ。魔族領となつた土地は魔獣が跋扈し、魑魅魍魎にあふれるため凡そ人の住める環境では無くなる。その繰り返しが進むに連れ人類は徐々にその勢力を減らしていった。世界創造を紀元とする創造歴19760年の現在において環状大陸における魔族と人類の勢力比は7対3となつていた。圧倒的な劣勢である。

人類の勢力図は魔族領に分断され、文明が断絶された。今となつては魔族領を超えた先にどのような国が人が文化があるのか、極少数の命知らずの冒険家によるほそぼそとしたやりとり以外で知るすべはなくなつていた。

人類と魔族が霸を競う舞台である環状大陸であるがこれはおおよそ3つの地域にわかれていた。環状大陸は環状の名の通り中央大陸

の周りを円状に取り囲んでいる。一部に切り込みの入った円、Cの形を思い浮かべるとわかりやすい。これを3等分し、中央大陸を基準に、北大陸、西大陸、南大陸と分けると大体現状の大陸間の位置関係を表せている。

このうち、かろうじて人類側が優勢といえるのが北大陸だ。人類の国家は現在ほとんどがここに集中している。西大陸や南大陸には人類に似た亜人が住むとされているが大陸間の連絡はすでに途絶えているため今となつてはそれも分からぬ。

北大陸は現在6つの国家と魔族領、そのどちらにも該当しない中立地帯からなつていて、

その6つの国家のうちの一つマテウ国の西端に接する魔族領、光輝の森があつた。マテウ国内では魔族領の発見順に番号で呼ぶため第3魔族領ということになる。

この地を舞台に人類対魔族、その勢力図を書き換える事件が起っこりつつあつた。

まだ薄暗い夜明け前の森の中、4人の男女が身を潜めていた。

「しかしあれだな、魔王の住む城だつづーからどんなもんかと思えば、えつらいしょぼいな。木造じやねえか」

全身を白銀の甲冑に身を包んだ青年がぼやくように言った。彼の名はフォグ、マテウ国軍内での地位は王直轄の第1遊撃隊の隊長だ。巷では聖剣の勇者と呼ばれていた。その名の所以はもちろん腰に下げられた聖剣にある。

「そうですね。私の村の村長の屋敷でもあれよりはましでしたね」

そう答えるのは鬱蒼とした森を行くには不釣り合いな貴族然とした格好の男。今の言葉どおり地方の寒村の出身のため、貴族ではないが魔法使い故にそのような装いが許されていた。名をアイゼンといつ。

「あたしはあの冒険家の報告があやしいとと思うけどねえ。魔王城をとつとう発見した！ ってどうなんだ？」

冒険家の発見報告に意義をとなえだしたのが、軽装の皮鎧を着込んだ短髪の女だ。体格は華奢に見えるが、その手に持った自らの身長をも超える、度肝抜くようなサイズの戦斧を扱えるというならかなりの膂力をほこるのだろう。彼女の名はゲルン。全くそのようには見えないが一応貴族だ。3等貴族の中でも序列が110位のためほぼ領地には縁がないが本人は、領地なんぞあつてもめんどくさくてしかたねーだろ！ と、どこ吹く風といった様子だ。

そしてもう一人、先程からの会話に加わってこない少女がいるのだが、彼女は寝袋に包まれ夢の中だ。

この4人が先程から森の中にある魔族の集落と思われるものの観察を続けている。

彼らは第一遊撃隊に下された勅令により魔王城の偵察にやつきていた。

「村つて程でもねーな。なんだよあれ掘つ立て小屋が5、6件建つてるだけじゃねーか。あれか？ ここは魔族の限界集落か？ 若いもんは皆過疎の村を見捨てて出ていきましたってか？」

その過疎のような村の中でもまだ立派といえなくもないのが魔王城と思しき建物だ。この建物だけが2階建てで、その広さは周囲の

掘つ立て小屋で換算するなら5件分はある。

「つーかよー、その冒険者はなんであれを魔王城なんて思つたわけ?
確かに魔族集落の発見だけでもすげーとは思うけどさあ。話盛つてんじゃねーの?」

「わつですね、この認識の齟齬が作戦行動に影響を及ぼす可能性が
……」

「いって、いって。余計なこと考えるだけ無駄無駄!
敵は魔族なんだ。とりあえずぶつ殺せばいいんだよー!」

フォグはアイゼンの慎重論を適当に否定した。アイゼンもこのまま
隊長に従つことにする。

「ではどうします? 襲撃するにしても作戦は?」

「これぐらいの規模の集落ならよ、まとめてどかーんと吹っ飛ばす
とかどうよ、魔法でなんかねーか?」

「そうですね、ここまでに戦闘ではあまりお役に立てませんでした
が建物」と殲滅するということであれば魔族のスピードに翻弄され
ることもありませんし、いけるかもしれませんね」

「ゲルンはなんかないのかよ」

「ああ? あたしが何か作戦立てて戦つたことなんかあつか? あ
たしが馬鹿なんは知つてただろ? が! 聞いてどうすんだよ、突つ
込んで暴れりやそれでいいだろ? が!」

「いや、それはさすがにどうよ、お前一応軍人だぞ？ ちつとは頭使えよ」

「お祈り」

「え？」

いつの間にか寝ていたはずの少女が起きてきていた。真っ白い神官服をきた愛らしい少女だ。若くして中央正教の神官位に上り詰め、街では聖女もかくやといった扱いを受けている。実際に聖人に列する動きもあるらしい。彼女は正式には遊撃隊の隊員ではなく、教会から派遣されている形になっていた。名はマキノといつ。

「朝になりました。お祈りの時間です」

そういうて彼女は自分の背丈ほどもある箱を展開し組み立て始めた。この箱には底に車輪がついていて、彼女はここまでこの箱をひっぱりながら運んできた。

「いやいや、こんなとこでかよ」

今までも半ば無理矢理、朝夕の礼拝に付き合わされて来た遊撃隊だが、魔王城を目前にしてまですることだとは思ってもみなかつた

「場所は関係ありません」

そういう間に組み立ては終わっていた。簡易聖堂と呼ばれるものだ。中央正教では祈りは聖堂で捧げると定められている。簡易聖堂は聖堂としての要件を最低限満たすものだがマキノのものは通常の物と比べてもやけに大袈裟に見えた。展開状態だと大人が両腕を広

げた程の幅がある。平民の一般信徒の家庭にも聖堂はあるがこれよりもずっと規模は小さい。

「せめて朝飯食つてからにしね？」

ゲルンは少しひきぎみに言った。腕力でなら圧倒出来るはずだがどうも強く出られない。

「いえ、このような場所での祈祷では信仰が下がってしまいますので、信仰の強化のために朝起きて直ぐのお祈りが効果的です」

「いやいや、俺ら徹夜してるじゃん？」

「徹夜明け一番の朝のお祈りでも代用は可能です」

この場にはマキノの謎信仰理論に反論出来る者は誰もいなかつた。渋々、フォグとゲルンが聖堂に向かって祈りを捧げる。アイゼンは魔法を使うために悪魔と契約をかわしおり中央正教の信者ではない。マキノは異教徒、無神論者には寛大で信仰を押し付けるような真似はしないのでこれが原因で揉める事もなかつた。

「ゲルンさん」

マキノは優しく微笑かける

「は、はい」

対するゲルンはいたずらがばれる直前の子供のよつた微妙な表情を見せた。

「30点のお祈りです。少し良くなりましたが、さつやつ、からつじて、じつにいか神に対しての礼を失しないものでした。この調子で明日以降もがんばってください」

ゲルンはまつと胸をなでる。

「勇者フォグ、2点です」

「アリを見るのはいつのまにこいつのが正にこそれだつた。美少女の蔑みに性的興奮を覚えるような輩にとつては最高のシチュエーションと言えるかもしけないが生憎勇者にはそのような趣味はなかつた。今後のことを考へるならこれをして樂しめるようになつたほうがいいのかもしれない。

「なんでだよー！ ちやんとやつたじやねーかー！」

「言語体系が違うのでしょうか？ あなたがなにを言つてこらのかわかりません。勇者でさえなればバラバラにしてつちのポチの餌に混ぜてポチがたべる寸前に蹴飛ばしてやるといひです」

「わけわからぬーよ、なんだその遠まわしな齊し文句ねー！」

「あなたが犬も食わない生アリミドだつてこいつのはここの際置いておくとしても、聖剣の能力は使用者の信仰が影響するのですよ？ 勇者としてあり続けたいなら信仰を疎かにすべきではありませんー！」

「わかったよ、やつ直せばいいんだらうが！」

「やつ直す？ ……お祈りを……やり直す？」

マキノの目から光が消えた。これはまずい、狂信者の、いや狂神官のスイッチが入りかけている。フォグは慌てて謝罪の言葉を口にした。

「いや、すまん、ちゃんとやるから、な、怒るなよ、次はちゃんとやるから…な…」

「我を忘れかけてはいたがまだ聞く耳は持っていたようだ。マキノは謝罪受け入れた。

「朝」一度祈るなど言語道断です。いいですか、今から私が祈りを捧げます。低脳勇者でもわかるように子供用のお祈りをさらに簡略化したものをお見せしますので明日からはこれを行ってください！」

そういうマキノは簡略化したといつ祈りを捧げた。その作法は折り目正しく、まさに神官といつものだった

「ええ！ そっちの方が簡単じゃん！ あたしもそれ……」

マキノと目があつたためそれ以上言つことができなかつた。

「ゲルンさんは大人の女性用をちゃんとやつてくれさいね」

「はい」

ゲルンは素直に頷いた。

マキノはてきぱきと用の済んだ聖堂を元の箱型に戻していく。それが終わると全員で朝食を取つた。

「さて、お祈りも朝食も済んだ所で今後のことを相談したいのです

が

「ああ、そうだったな、忘れるところだつたぜー。」

「ここで忘れて他に何をするのかと言いたくなつたがアイゼンは自重した。お祈り騒ぎの間にすつかり朝日が登つてしまつてゐる。払暁が襲撃には適していふと言われるがその期は既に失われていた。

「日が登つてしまつた今から襲撃をかけるといつのも間抜けな氣もするのですが」

「まあ、もともと偵察が目的だしな。とりあえずこのまま様子見てあそこには本当に魔王がいんのか確認しても……お、なんか出てきたぞ」

魔王城から出てきたのは威丈夫といつていいだらう戦士然とした男の魔族だ。袖のない単純な白い貫頭衣を着ており、むき出しの腕には黒縄をより合わせたような筋肉が盛り上がつてゐる。その手には背丈を超える槍が握られていた。

魔族は集団」とにそれぞれ特徴があるが、この集落の魔族の肌はどうやら黒いらしかつた。

「ふむ、なかなか雰囲氣のある奴じゃないか。あれが魔王か?」

フォグがそう判断したのは、ここにやつてくるまでに遭遇した魔族よりも格段に強そうに思えたからだ。

「魔王城を発見したつて冒険者はあいつを見たのかねえ。まああれならわからんでもないか」

妙に冒険者に固執するゲルンだつた。

「あれは、投槍だな。狩りにでも行くのか？」

魔王らしき魔族は館から出た後は何をするわけでもなくただ立っていた。しばらくすると周辺の小屋からも魔族が出てきた。これも男だ。そろそろと他の小屋からも出でくると館の前に集まり始めた。全員がその手に槍や弓を持つている。服装も似たり寄つたりだつた。

「総勢15名ですか。魔族の家族形態は知りませんが人間に当たはめるなら男が全員出てきたといった所でしょうね」

「全員、遠距離武器だし狩りに行くんだろうな。で、この中だとやつぱり最初に出てきた奴が一番強そうに思えるな。ゲルンはどうよ

「ああ、間違いねえな。あいつが魔王だ」

「……このあたりで一旦撤収しませんか？ 敵の構成もだいたいわかつたことですし」

アイゼンはだんだん嫌な予感がしてきた。人払いの魔法をかけているので森の中に入る限りはまず気づかれる事はないはずだが、それでも魔族が近くに寄つてくれれば発見されてしまうだらう。狩りが目的だとしてもこちらに来ないとも限らない。

「やうだな一旦引き返して他の遊撃隊と合流すれば戦力的には……ン？」

「どうしました？」

「いや、今魔王と曰があつたよつな……」

4人は魔王に注目した。確かにこちらを見ている気がする。魔王だけでなく魔族全員がこちらを見ていた。フォグの目はまっすぐ魔王をとらえ、そして魔王もまたフォグをまっすぐに見つめていた。

「狩られるのつて……もしかして俺ら?」

魔王が槍を振りかぶつた。最大限まで背をそらし力を溜める様は引き絞られた強弓を思わせる。槍の穂先は力タカタと音を上げ、徐々に早くなる振動はやがて「ヴゥン」という唸りをあげるにいたつた。高速振動する穂先は白熱化し光を放ち始める。無理やり注ぎ込まれる力に耐え切れずこのままで槍が持たない。誰もがそう思う瞬間魔王がその力を解き放つた。

槍は空を裂いた。雷鳴の如き唸りを上げ瞬時に森に到達し、そして森が爆発した。

フォグ達のいた地点を中心に樹々は放射状に吹き飛んでいた。根こそぎだ。根っこからまる」と吹き飛ばされた樹々は、さらに他の樹々を巻き込んで被害を広げ、森の中に空白地帯を作り出していた。巻き上がった土砂が一体の視界を妨げる。爆発の余波はいまだおまわりず砂塵を攪乱し小規模な嵐さえ巻き起こっていた。

しばらくして砂嵐が、砂煙程度の規模におさまってくるとぼんやりと爆発の中心に何かがあるのが見えてきた。魔族たちもこの間、黙つて様子を見ている。

そこにあつたのは聖堂だった。

「げほつ、げほつ、なんだこりゃ、ひでえな、なんにも見えねえ」

「なんですか、あれは？ 魔王とこりのまほのまほまでのものですか！」

？」

「いや、あたしはそれよりこの聖堂の頑丈さに恐れいつてるんだけ
ビ……」

「当然です！ 神の宿りし聖堂が魔王だとあたしやんとお祈りする
せん！」

「ああ、いやすまんかった。これからは本当にちやんとお祈りする
わ。神様さままだな」

「しかし……少し疑問に思つたのですが……マキノさん、あなた礼
拝の度に聖堂を手作業で展開してましたよね？ 今この聖堂が、勝
手に私達の前に飛び出して勝手に展開したように見えたのですが……」

「…」

「神のこ加護です！」

マキノは胸を張つた。それは信仰にたいする一片の曇もない、信
者とはかくあるべきとこりの姿だった。彼女には神の使徒たる神官を
害することなど出来るはずがないといつ狂信的な確信があった。

「でだ、どつすりやいい？ マキノの信仰バリアーであれが防げる
としても、あれを連発されりやどつじょうもねーぞ

「そう何度もあの規模の攻撃はないと信じたいですね

「今の攻撃は結構溜めがあった。接近してその暇あたえなきやどつにかかるだろ。まあいつもの作戦でいくしかねーな」

「その場合はまた私の出番はないわけですね」

魔族相手に遊撃隊が主に取っている作戦というのはこうだ。気づかれる前に、アイゼンが魔法により攻撃。その後マキノが神聖魔法により魔族を弱体化させ、そこにフォグとゲルンが突っ込んで暴れるというものだ。気づかれてしまっている状態ではアイゼンの発動に時間のかかる魔法は使いづらいし、神聖魔法が発動してしまった後ではアイゼンの魔法は相殺されてしまうためすることがなくなってしまう。

「魔王は俺がやる。ゲルンは周りのやつを頼む」

「了解！」

「魔王を除いても14名は一人では多すぎるでしょう。私もいきます」

マキノが前線に出てくるのは珍しい。大抵の場合は神聖魔法「神の牢獄」の維持に努めて後衛に待機している。

「じゃカウントダウンな、3、2、1、GOー！」

合図とともに3人が聖堂の影から飛び出す。まだ視界はよくないがまずは集落の方に駆け出す。

砂塵を抜けるとそこには15人の魔族全員の姿があった。この魔族の行動は、魔王の攻撃に全幅の信頼を置いていたがために致命的

な油断となつた。まさか無傷で切り抜けるとは思つていなかつたのだ。15人全員で行動しているのも生き残りがいた際に中途半端なことはせず全員で押し包み殲滅するためだつた。

まずは戦斧を腰だめにしたゲルンが飛び出す。彼女は周り全てが敵といった戦に滅法強い。おあつらえ向きの状況だ。

「つりああああああああ！」

何も考えずただ戦斧を振り回す。初撃で3人の魔族が両断され吹き飛んだ。魔族側も驚愕から立ち直り一旦距離を取つて手にした弓や槍を打ち放つ。だがそれは暴風のように無茶苦茶に振り回される戦斧に阻まれゲルンには届かない。

ゲルンに巻き込まれないように十分距離をとつてフォグが出た。魔王を視認すると聖剣を鞘より抜き放ち振りかぶつた。そのまま一気に距離を詰める。振りかぶつただけの聖剣が輝きを放つた。これが聖剣の聖剣たる所以だ。この光は魔族の動きを一瞬だが止める。そしてその一瞬があれば魔族を屠るには十分だつた。フォグは聖剣を手にして以来魔族には全く苦戦していない。この聖剣の力により魔族退治は害虫駆除程度にしか感じなくなつていた。

「死ねや、害虫が！ 人間様なめてんじやねー！」

聖剣を魔王に上段から叩きつけた。動きを封じられた魔王を両断するはずの聖剣の軌跡。だが、それは魔王の右腕によつて防がれた。上にあげた魔王の手首あたりで受け止められている。

「人間風情が、我が槍を防ぎ、我に一太刀浴びせる……これが勇者といつやつか？」

「は！ 余裕こいてんじやねー！」

フォグは聖剣に力を込める。聖剣のさらなる能力が発動した。剣と手首の鍔迫り合いのようなものはあつさりとその天秤をフォグに揺らす。手首を切り飛ばし、後ずさつた魔王の胸元を切り裂いた。聖剣は魔族に対して異常に効果のある対魔族専用の武装だ。魔族は触れただけでもただでは済まない。

「貴様……」

魔王は己の不利を悟った。1対1では対抗手段がない。聖剣の輝きは事前の覚悟さえあれば多少抵抗できるが一瞬動きが止まるのは避けられず、そして受けてしまえば問答無用で切り裂かれる。

魔王は部下を見た。数は魔族側の方が多い。見たところ飛び出して来た敵は3人だった。数で押せばなんとかなるだろうと期待したがそこには予想外の光景が広がっていた。

「……第5の使いが鐘を鳴らす。汝信仰を示せ。イネレクの民は一番の歌謡いの舌を引き抜き御使に捧げた……」

「……第6の使いが笛を吹く。汝信仰を示せ。イネレクの民は一番の鍛冶の右腕をもぎ取り御使に捧げた……」

マキノが歌うように神聖魔法の祈祷を行っていた。そこにあるのは理不尽で一方的なものだ。

ゲルンへの攻撃を無駄と悟った魔族はマキノを標的と定め矢を放つた。が、当たらない。ゆっくりと無造作にこちらに歩いてくるマキノだ。狙いを外すなどありえない距離で放った矢はなぜか当たらぬ。

マキノは神聖魔法の発動に必要な呪文を唱える。経典にあるイネレクの民の章だ。驕り高ぶったイネレクの民に神の使いが信仰を問いただし、民が信仰を示すために試行錯誤する。最初は工芸品や

金品などといった物質的なものを捧げることから始まるが、徐々に苦痛や生贊を捧げていき、最終的には全ての民が身を投げ出すがそれでも神は許さないという身も蓋もない話だ。

その故事になぞらえた現象が魔族の身におき始めていた。舌が抜け、目が抉られ、腕をもぎ取られる。一人に起きる現象は一つのため壊滅にはいたつていないが、苦痛に身をよじれば、ゲルンの戦斧が襲いかかる。詠唱が進むほど苛烈な内容になつて行っため後の方の現象の餌食となつたものはほぼ即死だつた。

「ど、こんなものでしょ？ 第14の御使いまで詠つてしまいますとこの場の全員が死にかねませんし」

「マキノちゃん……」

ゲルンは呆れた顔でマキノを見つめた。今まで「神の牢獄」を使うマキノしか見たことがなかった。神の牢獄は一定範囲を神の恩寵で囲い範囲内の魔族を弱体化させる神聖魔法だ。マキノの信仰が加わった神の牢獄は、弱い魔獣程度なら消しとばすが、それでも神聖魔法というのは怪我の治療や支援に使うものだと思い込んでいた。

「で、魔王さんよ、お仲間は全滅だぜ！」

フォグが勢い込む。嵩に掛かつて連撃を加えた。魔王もなんとか抵抗しようとするも、いちいち動きを止められるため完全には避けれない。致命傷とはいえないが、それでも小さくない傷がだんだん増えていき、反撃もままならないまま魔王は地に膝をつきその動きを止めた。

「まあ、なんだ、最初の攻撃には焦つたが聖剣だけで方がついたな。精靈魔法も見せてやりたい所だったが」

フォグは聖剣を肩に担ぎ上げ魔王を見下す。勝負は決したとフォグが確信した時、日差しが一瞬陰った。

鳥だ。

空の彼方からあらわれた鳥はゆっくりと降下し魔王の肩に止まる。

「使い魔でしょうか？」

「つま！ アイゼンかよ、急に出てくんなんよ」

聖堂の影にすっと隠れていたアイゼンがいつの間にかフォグ達4人の間に立っていた。

「大勢は決したようすで危險はないかと思いまして」

「なんかお前、今回あんまり役にたって無いよな？ 人払いの魔法も見破られたし、攻撃にも参加してないし」

「それはまあ、魔法使いという以前に參謀的位置づけでもありますし、いちこち前線に出なくともいいかとは思つのですが

苦笑氣味にアイゼンは言つが、役に立つていなことは少し気にしていた。

「へへへへ、はははははは！」

魔王の哄笑が響き渡つた。何がそんなにおかしいのか、死にかけの体を揺すつての大笑だ。

「はははははは、貴様らに面白いことを教えてやるつ……マテウ国

……貴様らの国だらう？ 落ちたぞ

「は？」

フォグ達は何を言われたのか分からなかつた。

「俺たちと遊んでいる間に、貴様らの国は落ちたといつたのだ！ 残念だつたな！」

「負け惜しみにしちゃ、痛々しそうだ、お前。魔王らしく潔く死ねよ」

「ああ、殺すがいい。しかし、大魔王とはな！ あれが何なのか…」

フォグは肩に担いでいた聖剣を振り下ろした。袈裟懸けに断たれた魔王の半身が地に落ち、肩の鳥は一声鳴くと飛び立つた。

「なんだよ、気分わりーな、こっちが負けてるみたいな感じじゃねーか」

「大魔王とは一体…。とにかく館を捜索しレガリアを破壊します。そこまで出来れば残党は問題ないはずです」

館内の捜索はあっけなく終了した。入つて直ぐの広間にご丁寧に鎮座していたからだ。レガリア、侵食の宝玉。人類を悩ませる魔族領の発生の原因だつた。侵食の宝玉は、時間と共に複製を産むというやつかいな性質を持つている。

聖剣の一太刀を浴びせると宝玉は簡単に壊れた。レガリアは破壊出来ないとそれでいるのでこれは複製だと判断出来る。

捜索を終えた勇者フォグとその仲間たちは急いで国へと戻ることにした。

マテウ国 の最高権力者が交代してから1週間が過ぎた。ほとんど国民にとつては特にこれといった事件は起つておらず、今までと変りない生活を過ごしていた。

少し変わった事があるとすれば、とても美しい少女を街で見かけるようになったことぐらいだろう。彼女は特に何をするわけでもないがベイマーの街をうろついている。

一番影響があったのは商売をやっている者達だ。この少女は気まぐれに店を訪れ物色し気に入つたものがあればそのまま持つしていく。基本的には着の身着のままと言つた様子で物をあまり持つている様子はなく、あまり大きな物を持っていくことはないが、特に困ったのは食料品店や飲食店だ。

八百屋や菓子店では店頭で美味しいそうなものを見つけてはその場で食べてしまう。飲食店ではメニューを見て内容を吟味して注文したあげく、舌鼓を打ち、礼儀正しく「うちそうをまでした」と言ってそのまま立ち去る。

そんなことをされても困るので文句をつけるも少女はまったく聞く耳を持たない。暴力に訴えるにしても相手は少女だし気が引ける。そこで役所に訴え出ても役人も困った顔をするばかりでどうともしてくれない。明確な犯罪行為だというのに訴えは全く退けられた。なぜならこの少女は大魔王でこの国で何をしようと一切が免責されると言つのだ。

しかし商売人たるものこの状況をも利用できなくてはならない。彼らは大魔王には逆らわずに、「大魔王様のお気に入り!」「大魔王様御用達!」「大魔王様も!」満足!などと宣伝に利用することを始めた。

実際大魔王の趣味はなかなか良くお薦めに足るものだった。

大魔王は金だけは頑なに払おうとはしなかったが、店側がお薦め

文を書いて欲しいと言うと一つ返事で請け負うし、一緒に写真を取りたいという頼みも快く引き受けた。

それらの宣伝と共に謎に包まれていた大魔王という存在は徐々に知られていった。

まず非常に穏やかな気質らしいことだ。誰に対しても丁寧な口調で話しかけるし、どんな暴言に対しても特に怒ることはしない。多少嫌そうな顔をすることもあるがそれで首が飛ぶというようなことはなかつた。これは街で横暴な振る舞いをする貴族の連中と比べると天地の差がある。

ただ明確な挑戦に対する処置は果斷だつた。

この特に強そうにも見えない少女が大魔王だと知り名を上げようと挑んだものがいる。貴族の冒険者で名をホルスと言つた。実績のある冒険者で有名な所では第1魔族領の踏破によるティアル王国への行路の確立、最近では第3魔族領の魔王城の発見が挙げられる。その実力から勇者候補とされたが軍に束縛されることを厭い冒険者を続ける逸材だ。

街の広場で大魔王と対峙したのだがそれは戦いと呼べるものではなかつた。大魔王は戦闘の開始と同時にホルスの左肩にそつと右手を乗せ、右下へ軽く手を振り切つた。それは紙を引き裂くのでももう少し手間がかかるだろうというぐらいあつさりしたもので、内容物をまき散らして絶命したホルス本人も死の直前まで何をされたのかわかつていなかつただろう。そしてその後、

「 そうそう、負けたと思つたら命乞いをしていただければ命までは取りませんよ 」

と、物言わぬ死体に話かけた。どうやらどの程度やれば人間が死ぬかがわかつていなかつたらしい。

この顛末を見学していたものがさらに驚いたのが、派手に臓物をぶちまけて死んでいるホルスを前にした大魔王には返り血の一滴も

ついていないということだった。

そして明確な挑戦がないのならばどんな暴力にも特に反応を示すことはなかつた。石を投げつけようが、矢を射掛けようが、剣で斬りかかろうが、魔法をかけようがまるで問題としない。それらは大魔王に痛痒すら感じさせることはなく反撃するまでもなかつた。

結局のところ、喧嘩を売りさえしなければ危険はないということだつた。逆にうまく利用すれば商売の役にも立つ。

その事が自然に広まつていくにつれ大魔王という存在は街になじみつつあつた。

勇者フォグ一行は一週間程かけて首都ベイヤーに戻つてきた。荷物を打ち捨て、馬を乗り継ぐなどすればもっと早く戻れたのかもしれないが、聖堂を運ぶ関係上大型の馬車が必要になりあまり無茶な事もできなかつた。他の荷物はともかく聖堂の放棄はマキノが頑なに拒否したせいだ。

途中国内で情報収集を行いながら戻つてきたが、国境近くでは大魔王の存在が知られていなかつた。首都に近づくほど確かになつてきた情報をまとめると、突然大魔王という存在があらわれ王の上に立つたが、今の所国民の生活になんら変化はないということになる。

「意味がわからん」

「じょやくのはフォグ。

「とりあえず王に謁見するのが早いのではないでしょうか」

アイゼンは御者席から返事をする。

街の入口で彼らは検問の順番を待っていた。検問の行列待ちはいつものこととこれほど同じことと変わりが無いようだった。

「つーかよー、特に魔物の集団に占拠されるとかじゃないんなら急いで戻ってきた意味ねーんじやねーの？」

ゲルンが馬車の中であぐらをかき、戦斧の手入れをしながら言った。

マキノはぐっすりと眠っている。フォグはこの女はお祈りしているか寝てるかだな、と思った。

検問の順番が回ってくるころには日が暮れそうになっていた。軍事関係者である彼らには別の入口もあるのだが、今更急ぐ理由もないということで検問所を通過することにした。入出の管理が分かれると少しやせこじくるので出来れば検問所を通ったほうがいいという理由もある。寝ているマキノは馬車に置いておき、3人で検問所へ赴いた。

「これは、フォグさん。お帰りなさい。あれ、マキノさんは？」

検問所の女性兵士が親しげに声を掛けってきた。軍服姿ではあるが威圧感を与えない明るい感じの女性だ。

「よお、ダフーーー！ ああ、マキノなら馬車で寝てるけどかまわんだろ？ さつそくだけどよ、魔族に襲われたってほんとか？ そんな感じは全然ないんだが」

フォグは久しぶりに会ったダフーーで気軽に返事をする。ダフーーは少し困った顔をした。

「ええと、襲われてはいないのですが……」

「ん？ 大魔王つてのが来たんだろ？」

「フォグは首をかしげながら問い直す。やはり何か思つていたのと違つ。

「そうですね、大魔王様は確かにおられるのですが、別に襲われたということは……」

ゲルンがダフニーを睨みつけた。

「てめえ、どういうつもりだ？ 大魔王様だあ？ 何様づけしてんだよー！」

ダフニーは慌ててゲルンを黙らせようと口を抑えにかかった。

「ちょ、ちょっと滅多なこと言わないでくださいよ！ 誰に聞かれてるかわかりませんよー もうこの国は大魔王様の支配下にあるんですからー！」

「二人共落ち着いてください。……そうですね、まずは私達がいない間にどうなったのか教えて下さいませんか？」

アイゼンが仲裁に入った。このままゲルンが騒いでいると話が進まない。

「えーと、襲われたとかはなかつたようですね。2週間ほど前に突然大魔王様がおいでになられたようです。高札が立てられて、この国は大魔王様の支配下になつたという御触れが出されました。レガリ

ア、春風の外套は大魔王様がお持ちになられています。今のところ特に国の体制としては変化はありません。王は「」健在で今まで通りに政務についておられます」

ダフニーは一気に喋りきつた。

実際は国王の周りにいた近衛兵は襲われているのだが、検問所の兵士にまでその話は伝わっていないようだ。

「……君臨すれども統治せずつてやつか？」

「それはちょっと違うような気がしますが……」

「あたしら急いで戻つてくる必要なかつたんじやないか？ なんか思つてたのと違うしよー。それならせつからく魔王は倒したんだ。残党をきつちり処理して魔族領を開放したほうがよかつたんじやねーか？」

「まあ、そつは言いましてもあの場では何もわかりませんでしたしね。確かに魔王の言葉に踊らされた感はありますが」

「とにかくだ、一田城に行くしかないな。現状の報告と今後について考える必要がある」

フオグは考える。魔王を倒したと思つたら大魔王があらわれた。魔族は敵だ。普段は向こうから積極的に襲いかかつてくることはないが、それでも突然魔族領を発生させ、人類の領土を奪つていく。故に魔族が特に何もしていよいよ見えるというのは、こちらが戦いを挑まない理由にはならない。そのうちいすこかに魔族領が発生するのだ。奪い返さねばならない。もし、それが大魔王という存在の元に行われているというならこれはチャンスだ。ここで人類の

大逆転といふこともあり得る。

「では、手続きはいかでしておきますので、皆さんはお城に向かってください」

フォグ達はその言葉に甘え城に向かつことにした。

城の謁見の間。そこにフォグを隊長とする第1遊撃隊とゴドワインという男を隊長とする第2遊撃隊の姿があった。

城に向かい謁見の申請を行うとすぐさま許可が下りたのだが、なぜか第2遊撃隊も呼ばれている。

今までの経緯は謁見の申請時におらましは述べてあつた。
彼らが跪き頭を下げる状態で待機しているとしばらくして王がわられた。

「楽にするがいい」

王の指示に従い頭を上げる。少しおやつれになられたか？ とフォグは思つたが、さほど変わりがないような氣もする。少なくとも敗戦国の王といった風には感じられなかつた。

「まずは、勇者フォグ。大儀であつた。魔王討伐に関しての論功行賞は春の大祭で行つこととする

論功行賞は春と秋の大祭で通常行われていた。魔王討伐ともなれば大々的に行われるのだろうと思っていたが、今となつてはどうな

るのか。大魔王の支配下で魔王討伐の功績を讃えられるなど笑い話にもならない。

「そして勇者ゴードウイン。そちには、魔王亡き後の第3魔族領完全開放を命じる。開拓団300人を率いよ」

そして第2遊撃隊に命じられたのはフォグ達の残務処理だ。レガリアの破壊により魔族領としての勢力は消失している。そのうち蔓延っていた魔獸の類も自然といなくなるだろう。だが、魔族は別だ。その場に留まるかもしれない残党の殲滅が必要だつた。

それと元魔族領は中立地帯ということになる。この領土をマテウ国に組み入れる必要があつた。国の領土はレガリアの有効範囲とされている。この有効範囲を広げるにはレガリアの支配下におかれていない地域にレガリアの恩恵を受けている国民が長期的に暮らす必要があつた。その為の開拓団だ。

衣食住が保障され一定期間暮らすだけの仕事なのだが、魔族の残党や、他国の侵略などで命の危機にさらされることもある。基本的にただの平民の集まりである開拓団に戦闘能力はないので襲われればまず助かるとはなかつたが、特に職能が必要ないのでそれなりに人気はある職業だつた。

「以上だ。だが、皆聞きたいこともあるだろつ。許す。なんなりと申せ」

フォグの目に何か言いたげなものを感じたのか、発言を許可した。

「では……大魔王……様との国の関係はどうなつてているのです？
その、一体どのような方なのでしょう？」

フォグもこの場では言葉を取り繕つ。

「レガリア、春風の外套の所持者だ。しかしそれだけだな。あやつは国政には口を出さんよつので今まで通りだ」

馬鹿な！ レガリアを奪われたということはこの国の全てを奪われたということだ。それが今まで通りだと！

「まあ、なんだあやつもあまり無茶はせん……と思つ。今のどこの無錢飲食ぐらいのものだ」

大魔王が無錢飲食つて何だよ！

「どのような方か……あやつは……いやなんでもない」

王は少し顔を赤くした。何赤くなつてんだよ！ ねえ、今何考えたの、ねえ！

王にツッコめるわけもなく、喉まで出かけたそれらのフォグは言葉を飲み込んだ。喉のあたりに何か詰まつたようにすら感じた。

「他にないか？ ではこれで謁見を終わる」

王が退室した。

残された遊撃隊員たちは微妙な表情になつてゐる。

「おい、ゴドワイン！ お前これでいいのか！」

フォグは「ゴドワインに訴えかけた。一体俺達のいない間に何が起つてゐる？」

「知らん。王命に従う。それだけだ」

言葉少なにゴドウインが答えた。ゴドウイン。第2遊撃隊隊長、またの名を聖盾の勇者。フォグに比べて頭ひとつ大きい背丈に、筋肉で膨れ上がった大柄な体。殴り合えば確實にフォグが打ち負けるだろう。その名を示す聖盾は謁見の間へは持ち込んでいないが、この武装も魔族に有効なものだつた。

「クソッ！ おい、アイゼン、ゲルン、マキノ！ 行くぞ」

吐き捨てるように仲間達を呼びつける。その目につきものフォグにはない光を感じたゴドウインは思わず声をかけた。

「待て、どこへ行く？」

「大魔王だ！ この目で直接見る！」

「……なら、検問所の兵士に知り合いがいたらう、奴に聞け。大魔王の居場所を知つてはいるはずだ」

なぜダフニーがと思いつつも忠告は素直に聞くことにしふオグ達は謁見の間を後にした。

その店は「アレがヤバイ亭」と呼ばれていた。最近注目の宿屋兼酒場だ。これまで「まずネーミングセンスがヤバイ」とか「アレつてなんだよ」とか散々な言われようだつた。

木造2階建てで1階が食事も出す酒場になつてあり、2階が宿屋

となっていた。名前以外の特徴としては街の郊外にあるせいか同様の店よりも広くゆったりとした空間を贅沢に使っており、知る人ぞ知る店だった。店名のアレさに加えて郊外といふこともあってか客足は悪かった。

この店が注目を集めるようになったのは1週間前からだ。その頃に大魔王がふらりとあらわれ無銭飲食をしていった。それ以来何が気に入ったのか大魔王は毎日一度はあらわれ、ご飯を食べたり、隅で寝転がったり、2階の宿屋の一室を占拠したりと好き放題し始めた。

大魔王がよくやつてくるという噂が広まり始めるとあつと言う間に人が集まるようになり、繁盛するようになった。元々質の良い店だつたこともあり常連客も増え始める。店にとつてはいいことづくめだつたが中には納得のいっていないものもいた。

「おい、こら、大魔王、いい加減に金払えよ！」

宿屋の一人息子デリク、今年14歳になる少年だ。デリクは金を絶対に払わない大魔王にいらいらしていた。

大魔王は窓際の4人掛けの丸テーブルを一人で占領している、大魔王の好みはよくわからないがそこがお気に入りらしい。店内はほぼ満席で、外にも幾人か並んでいるのだが、大魔王と相席になろうというものは誰もいなかつた。

大魔王はいつも同じ格好をしている。今日も黒いドレスに、白いケープ、髪は無造作に白いリボンでくくつてあつた。そう何着も同じ服を持っている様にも思えないのだが、いつ見ても埃の一つもついていない。

大魔王は手にしたフォークを口に運ぶ。テーブルの上には大量の料理が置かれていた。

「オカミさん、この豚肉はおいしいのでもつと欲しいです。出来れ

ば丸焼きでください」

妙なイントネーションで店主を呼ぶのは、女将さんと他の常連が読んでいるのを聞いて「オカミ」という名前だと勘違いしているからだ。特に誰も訂正しないし、結局似たようなものなのでこれで落ち着いていた。

昼時で騒がしい店内でも大魔王の声は自然と必要な者の元へと届く。

「あいよー、いらっしゃりク！ 遊んでないで働きな！」

「オカミー！」とリサが大声を張り上げる。こちらは大声を張り上げないことはデリクの元に声は届かない。

「遊んでねーよー！」の馬鹿から金を受け取るのも仕事のつちだ！」

「そうです。働かざるもの食うべからずといいますよ？ あなたはその手にもつているお皿を私のテーブルにおいて他のお客さんにも料理を運ぶべきです」

「お前にだけは言われたくねーよー！ つーか、お前は畜生じゃねー！ なあ、お前大魔王なんだろ？ えらいんだろ？ だつたら大金持ちだよな？ 金持つてんだよな？」

「金？」

大魔王が可愛く小首をかしげる。デリクは顔を真っ赤にした。本人は怒りによるものだと信じたいところだが、どう見ても大魔王の魅力にやられているようにしか見えない。

「な、何、初めて、そんな単語聞きました、みたいな風にしてんだよ！」

「どん！ と皿を置くとデリクは厨房に戻った。それ以上この場にいると何かおかしくなつてしまいそうだ。」

結局の所大魔王の集客効果は大魔王が食べる分の金額よりも遙かに上だ。女将も最初こそ戸惑つたものの今では逆に有難がつっていた。デリクが大魔王に絡み続けるのは、気になつた娘に何かとちょつかいをかける子供のようにしか見えていなかつたし、今ではこのやり取りも店の名物として集客の一助になつていた。

いくら大魔王が寛大で何を言つても怒らないといつても、ここまでの勢いで大魔王に絡める人間はそうはいない。

「なんだかわかりませんが勝つた気分がしますね」

大魔王は豚肉のささつたフォークを片手ににこりと微笑んだ。そんな大魔王のいつものやりとりを離れた席から食い入るように見ている者達がいた。

フォグ達勇者4人組だ。4人ともフード付きのコートを着こみ顔が見えないように工夫していたが傍から見るにかなり怪しい。しかし昼時の混雑のせいか彼らに注目するものは誰もいなかつた。

彼らはダフニーに大魔王の居場所を聞いてここにやつてきた。ダフニーが言つには、最近は街の外からやつてくる人達の中にも大魔王を一目見たいと言うものが多く、何度も案内するうちに各時間帯における大魔王の居場所を把握するに至つていた。

「ええつと……俺、何がなんだかわかんないんだが……」

「私に聞かないでください」

「あたしにも聞くなよ、わかんねーから」

「豚肉おこしありうですね」

ああ、3人がマキノを見やる。

「お前はなんかあいつと氣が合いそつだな」

3人を代表してフォグが言った。

「しかし思つていたのとは随分違いますね。女性ですか、随分と愛らしく……」

「くわい、鼻の下伸ばしてんじゃねーぞ、ありや敵だらうが！」

「ですが、彼女を殺せますか？ どう見ても普通……とはいえないぐらいの美少女ですが、人間にしか見えませんよ」

「つーか、全く強そうに見えねー。素手でもひねり潰せるだらあれなら？」

4人はテーブルの上で顔を付き合わせぼそぼそと喋つていた。

「……俺は勇者だ。あいつが大魔王だと言つなら俺の敵だ、戦うしかないな」

「止めはしません。ですが、じつしましょつ。まさかこんな所で戦うわけにもいきませんし」

「ダフナーに聞いた所、大魔王は広場で戦つらしき。なのでそれは

問題ないはずだ。……よし、俺が大魔王を誘い出す。お前らは先に広場に行つて準備をしておいてくれ

「わかりました」

3人が席を立ち、勘定を済ませ先に店を出でいった。ここは街の郊外なので広場までは歩くと20分はかかる。準備も考えると1時間は要るか？ と考えフォグはその場でじっと待つことにした。その間も魔王は豚肉やら牛肉やら鶏肉やら羊肉やら蛙肉やら蛇肉やらを食べ続けていた。肉ばっかかよ！ 野菜も食えよ！ バランスを考えろ！ とツツコミたくなるぐらい大魔王を凝視していたフォグは時間が来たと判断して立ち上がり大魔王のテーブルへと向かった。

「おい

「なんでしょう？」

大魔王が側に立つフードの男を見上げた。全身をコートで包んでいるため何者かははつきりしないが、隙のない身のこなしが戦いに身を置くものだと思わせる。

「お前が大魔王と言つるのは本当か？」

「はい。そうですが、何か御用でしょつか？」

フォグはフードの付いた外套を一気に脱ぎ捨てた。何か面白そうなことが始まつたのか？ と店中の客が注目し始める。そこにいたのが白銀の鎧を着た聖剣の勇者であるとわかつた時、店は一瞬静まり返つた。その一瞬が過ぎた後、店内が爆発したように騒がしくな

る。

「おじおこ、あれ勇者様じやねーか！」

「え、いろいろあって忘れてたけど、勇者ってどうなったんだつけ？」

「ばかやー、出陣式やつてたろつが。つーか、聖盾の勇者とか、聖棍の勇者とかいろいろいるだろー！」

「で、なに大魔王ちゃんに何か用かよ」

「まさか、戦うとか？」

「いやいや、前の馬鹿がやられたとこ見たけどあれ見た後、挑む奴はいねーだろ?」

「じゃ、告白すんじやね?」

「おお、そっちの方がまだありそうだなー!」

喧騒の続く中デリクが大魔王とフォグの間に飛び出した。両手を広げ大魔王の前に立つ。デリクは大魔王の素性について詮索したことはないが、言葉通りに大魔王だとは思っていなかった。ふざけた態度がまかりとることと、その美貌から王族に連なるやんごとき方ではないかと夢想したこともある。彼としては深窓の姫君を守る騎士のような気分だった。

フォグは訝しげな顔をした。

「お、おこ、勇者のにーちゃん、こいつになんの用だよー！」

は大魔王とか言つてゐるけど、悪いやつじやねーんだ、いや、金払わないから悪いのかもしれんけど、別に人に迷惑かけたりしてねーよ！」

「フォグはまだ用件は何も言つていないのだが、早とちりした『デリク』は喚いた。

「フォグはこれからという所を騒がれ、喚かれたことに苛立つた。邪魔だといわんばかりに『デリク』を押しのける。『デリク』は立つていられず尻餅をついた。それを見た大魔王の眉が一瞬動いたが、それに気づくものはいなかつた。

「勝負しろ！俺は聖剣の勇者フォグ。王直轄部隊、第1遊撃隊の隊長だ！」

大魔王はフォグの名乗りをろくに見ていなかつた。席から立つと、『デリク』の手を取り立ち上がりさせる。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ、べ、別になんてことねーよ」

大魔王の顔を今までになく間近に見て、『デリク』は真っ赤になつた。手まで取られているし、それに何かいい匂いもする。どうしようもなく恥ずかしくなつた。

大魔王はフォグの方を振り向いた。

「勝負ですね。では広場に行きましょうか。ここでは狭いですし汚れてしましますからね」

大魔王は、女将のリサにごちそうさまでした。大変美味しかつた

です。と挨拶をして店を出た。フォグはそれに黙つて続く。

大魔王は店を出た後ゆっくりと広場に向かって歩き始めた。かなりの鈍足だ。フォグは後ろについて歩いていたが歩幅をあわせるのに苦労した。

「このペースじゃ20分以上は楽にかかるな、とイラつき始めると大魔王がこちらを向いた。

「大魔王と勇者が戦いの場にのこのゝと連れ立つて歩いて行くといつのはおかしいと思いませんか？」

何を言い出す? とフォグが疑問に思うと大魔王の顔が目前にあつた。今の発言中のどこかで間合いを詰められたようだがその瞬間が分からぬ。

大魔王がフオグの襟元を掴む。細く白い手だった。纖手とはこの
ようなものを指すのかもしれない。

「 ですので、あなたは先に行つて後からゆつくりとあらわれる大魔王を迎えるといふのはどうでしょうか。いいですね、そうしまし

と言うと一人で勝手に納得した大魔王はフォグを片手でぶん投げた。広場の方に向かつて。

六六六六六

フォグは叫び続けた。視界が真っ赤に染まり、回転し、自分がど

「」にいてどうなつてゐるのかまるで分からぬ。

真つ赤な視界に広場の噴水が目に入ったような気がした。時間感覚が間延びしていく中、一部冷静な自分が益体もない計算を始める。一瞬見えた広場の様子から半分ほどの距離を飛んできていた。大雑把に考えて広場までの距離が2kmとするところまで約1秒、秒速1キロメートルとする……音速を超えていた。マジハ3ぐらいだ。「」のまま地面に激突すれば即死だ。どんどんと時間が遅くなつていく、視野も何故か妙にくつきひとつ、拡大して見えるようになつてきた。いや、これは単に広場に近づいてきているだけか。はつきりと、仲間たちの姿が見えた。

広場で人払いを行つてゐるアイゼン。ははつあいついつもあんなことばつかしてんな。

戦斧を手に仁王立ちするゲルン。お前格好良すぎるだろ、そんなんだから男にもてねーんだよ。

何かよくわからぬお祈りをしているマキノ。ちゃんとお祈りにつきあつてやりやよかつたよ、真面目にやんなくてごめんな。
……つて、ちげーよ！ なに別れの言葉みたいなこと考えてんだよ！

愛すべき仲間たちの姿を見かけた瞬間、思考がさらに爆発的に加速した。

ちくしょう！ こんなところで死ねるかよ！ 全力で考えるんだ！ 生死の境で過去の記憶が高速でよぎつて行く。その中にフォグは活路を見出した。精霊魔法だ！ こんな時こそ精霊の加護を使わなくてどうする！？ 風か？ 土か？ 炎か？ 水か？ いやなんでもいい、つーか全部だ！

「精霊達よ！ なんでもいいから助けやがれー！ ……！」

まず風の精霊が動いた。小さな少女の姿をした精霊が逆風を吹かせた。これで速度が落とせる！

次に水の精霊が動く、妖艶な美女の姿の精霊が広場の噴水を操つた。水が飛び出しフォグを包み込む。これでなんとか耐えられるか！そして土の精霊が動いた、小太りのオヤジの姿の精霊が広場の石畳を泥状に変えていく。いいぞ、泥ならぶつかってもなんとかなりそうだ！

最後に炎の精霊が動いた、蜥蜴の顔をした青年の姿の精霊がその筋肉質の腕を大きく広げ、そこからゆっくりと腕を組んだ。そして黙つてこちらを見つめている。少し困り顔だ。……いや、お前もなんかしるよ！ なんで黙つて見てんだよ！！

炎の精霊にツッコミを入れてる間にフォグは広場に激突した。激突の恐怖が紛れたという意味でなら炎の精霊も多少は役に立つたのかも知れない。

轟音と共に広場の中央から盛大な泥飛沫が跳ね上がった。泥は上空高く舞い上がり周囲一帯に泥の雨を降らせた。

幸いアイゼンが広場の人払いを行つていたおかげで怪我人は出なかつた。ただ街の人間にとつてはいい迷惑であることは間違いない。屋台などは広場の端にまで移動していたのだが、それでも食い物などは泥をかぶつてしまい売り物にならなくなつてしまつた。

街の人間は特に説明をうけないまま人払いをされていたのでこの

大爆発を見て、ああ、だから人払いをしていたのかと納得した。

街の人間以上に驚愕しているのがアイゼン達だ。何か叫び声が聞こえたと思ったら突如広場が泥だらけになつて爆発したのだ。

呆然としていたが、あの叫び声がフォグのものだったのではない

かと思い至るとアイゼンは動転した。慌てて広場の中心を見る。

泥の中に砕けた噴水の破片がそこかしこに埋まっていた。その破片を押しのけるように水で出来た玉がゆっくりと浮かび上がつてき

た。

「フォグ！」

水球の中にはいるフォグを確認し、恐慌状態になつたアイゼンが泥の中に飛び込む。体は泥の中に腰まで埋まつてしまつた上に、焦りも手伝い中々前に進めない。落ち着きをなくしたアイゼンだが、がむしゃらに手で泥をかき分けながらなんとか水球に辿りついた。

「み、水が！　このままでは息ができない！」

水球に完全に包まれていてるフォグをはつきりと確認し、さらに狼狽するアイゼンにマキノの一言一言ゆっくりと発するような落ち着

いた声がかけられた。聖職者として人々に広く訴えかける日常で身についたものだ。

「アイゼンさん、落ち着いてください。それは水の精霊によるものです。精霊の加護を受けている勇者に危険はありません」

マキノの声でアイゼンは少し冷静さを取り戻した。だが、どうしていいのか判断がつかない。

「とりあえず上がってこいやー、多分精霊がうまくやるだろ」

ゲルンもやつてきてアイゼンを促す。この調子で泥に侵入した所で身動きできない人間が増えるだけだ。

アイゼンは泥から抜け出すべく引き返した。帰りが比較的に楽になっていたのは泥が固まり始めていたからだろう。アイゼンが抜けだす頃、水球もその全体を表した。中には頭の後ろで手を組み、頭を脇に近づけた胎児のようなフォグの姿があった。頭と体の中心部分を守るためにこのような態勢になつたのだろう。

程なくして水球が破裂し中のフォグを吐き出した。もうすっかり硬くなつた地面の上にフォグが落ちた。げほっ、と少し水は吐き頭を上げる。

「……死ぬかと思った……つか、俺死んでんじゃね?」

意外に元気そうだった。だが、勇者といえども精霊の加護を持ち、貴族の体をもつフォグでなければ切り抜けることは出来なかつただろ。

「大丈夫ですよ。神の国はあなたがやつてきたとしても受け入れ拒否です。追い返しますから」

「 そ、うそ、俺は神の国に受け入れられない…………って、結構ひどい事言つてねーか？」

「よかつた……無事だったのですね……」

アイゼンが安堵の余り膝から崩れ落ちた。

「無事……じやねーよ。体中がいてえ。まあ精霊のねかげで助かつた」

風の精霊が不安そうにフォグの周りを飛び回っていた。水の精霊が大破した噴水から溢れる水を癒しの雨と変えてフォグに降らせた。土の精霊は泥と化した広場を石状に戻していた。石畳から泥になつたはずだが、石畳そのものには戻せないらしい。炎の精霊は腕を突き出し親指を立てていた。

「グッジョブ！」じゃねーよ！お前結局なんもしてねーだろー。」

精霊はフォグ以外には見えていないので何の事か、仲間達には分からなかつた。たまに何もない空間にツツ「ミミ」始めるのはフォグの奇癖だ。

「一体何があつたのですか？」
「わけがわからないのですが」

「大魔王にぶん投げられた……」

「はあ？」

全員の声が揃つた。投げたということはあの酒場から？
俄には

信じられることではない。

「とにかくだ、大魔王がやって来る。とろとろ歩いてたから30分はかかるだろ。それまでに戦いの準備を整える！」「

「作戦はどうします？」

「いつも通りだ。アイゼンお前はとにかく最大威力の魔法をぶつばなせ。その後マキノが神の牢獄、俺とゲルンで突っ込む！」

「地霊爆を仕掛けましょ。30分あればかなりの数を用意できます」

「まかせた。マキノ、回復させてくれ！ 精霊だけだと時間がかかる。奴が来る前になんとか全快したい」

普段ならこんな時、あれこれ文句を言つマキノも今回ばかりは素直に祈祷を始めた。フォグの信仰度ではあまり神聖魔法は効かないのだが、マキノの手によればフォグの回復程度はなんということもなかつた。

神聖魔法による回復は朝夕の祈祷を行つた状態にまで回復させるものだ。つまりお祈りにより健康な状態の自分の状態情報を神に提供していることになる。その際適当なお祈りではその情報伝達が不十分になり回復魔法はうまく効果を發揮してくれない。ただそれは普通の信者に普通の聖職者が回復魔法を使用した場合であつてマキノなら話は別だ。彼女はフォグをよく知つていて、朝夕どころか常に見続けていた彼女は神になりかわりフォグの状態情報を無意識に維持していた。

ゲルンは何をするでもなく立っていた、戦う前からこの有様の広場を見渡し言い知れぬ不安を感じていた。

1時間が経つごとくやく広場に大魔王がやってきた。30分かかるという目算だったがそれ以上の時間が経過している。

大魔王は小さな女の子と手をつないでいた。反対側の手にはソフトクリームを持っている。女の子も同様にソフトクリームを持っていた。お揃いだ。二人はソフトクリームをちびちび舐めながら楽しそうに広場にやってきた。

フォグ達が黙つてみているとそのままどんどんと近づいて来る。広場の中心にある壊れた噴水のあたりまでやってきてようやく足を止めた。位置的には、大魔王、フォグ達、噴水が一直線に並んだ形になる。彼の距離約10メートル。

「なんだ、それはっ！」

対面したフォグが叫んだ。アイゼンも氣勢を削がれる。まさか子供ごと魔法に巻き込むわけにも行かない。

「ソフトクリームですよ。牛乳で作ったお菓子です。おいしいですよ？」

「ねー」

大魔王が話しかけると、女の子がうれしそうに返事をする。

「さて、これから勝負をするのです。ライサさん、お家はわかりますか？」

「うん、広場まで来たらわかるよー。」

「では、ここは危ないので広場の中には入ってこないでくださいね。まつすぐ帰るんですよ?」

「うんー、じゃーねー、大魔王のお姉ちゃん、またねー」

「はー、またお会いしましょー。あ、私のソフトクリームをあげますよ。よければ持つて行ってください」

女の子は思わず戦利品に目を丸くした。お礼を言つとソフトクリームを両手に元気よくかけていく。大魔王は女の子が広場を出、角を曲がつて見えなくなるまでその姿を見守つていた。

「お前のことだ、ソフトクリームでも舐めながら戦うのかと思つたがな！」

フォグは無視されているような気がしたので無理やり話しかけた。

「そんなことはしませんよ？　あれ、それは私があなたを舐めているのと、かけていたりします？」

「かけてねーよー。なんだよお前はー。どんだけ時間かかってんだよー。」

「それはそうと勇者さんも無事たゞりつけたようで何よりです。適当に広場の方に投げたあとで弾道計算を忘れていたことに気づきまし

フォグが精霊魔法を使わなければ広場を超えて街を飛び出すところだった。広場に着地させるつもりなら放物線を描くように山なりに放り投げるべきだったのだが、投げた後に気づいてもどうしようもない。大魔王は追いかけて広場に叩き落とそうかとも一瞬思ったようだがそれだと結局一緒に着いてしまうと思いつた。

「では……いつ始めますか？」

「今からだ！」

フォグ、ゲルンは大魔王から一度距離を取った。壊れた噴水ギリギリまで飛び下がる。アイゼンとマキノは援護のため噴水の後ろに回り込み隠れた。彼らの魔法は敵の視認は必要ない。事前に準備は済ませてあつた。

大魔王の周りの石置が次々と爆発した。

アイゼンの地霊爆だ。地面を爆破し指向性を持つた石礫を敵に叩きつける魔法だ。地味な魔法にも思えるが生身でまともに食らえれば原型を止めることは出来ない。噴水を中心に戦場になりそうな場所にこの魔法が大量に仕掛けた。破裂し砕けた石弾の全てが一斉に全方位から大魔王に襲いかかる。

だが大魔王は全く意に介さない。ただその場に立ち続けていた。

「こういう場合少し困りますね。食らつてもなんともないものをわざわざ躲すのも受け止めるのもなんだか違う気がしますし、かといってただ食らうのも癪ですし」

石礫は大魔王に触れることがなかつた。石礫がお互に干渉しない、ずらし、そらし何故か大魔王にあたらない軌道をとつていて、膨大な量の石礫の弾幕の中に凧いだ海のような静寂の空間が作り出されていた。

結局大魔王は無傷で地靈爆を切り抜けた。噴水の陰からその様子を見ていたアイゼンは青ざめた。十分に時間をかけて用意した必殺の布陣だ。この初撃で終わるとすら自負していたがその自信は木つ端微塵に碎かれた。

「こんな感じだと、スマートでしょうか」

大魔王がしたのは数度石礫を弾き返しただけだ。それがどのような計算の元にか散弾のような石礫の軌道を狂わせた。

マキノが神聖魔法、神の牢獄を唱える。これ自体には攻撃力はない。一定範囲内の魔族の力を抑えるだけだ。だがこの魔法が大魔王に聞いているとはとても思えなかつた。大魔王の様子は少しも変わらず、どんな些細な影響も感じていなことを伺わせた。

ゲルンが飛び出した。戦斧を叩きつける。ゲルンの闘法は我流であり、その太刀筋は無茶苦茶だ。ただ膂力にまかせて重量をぶちかます。今までそれでもうまくいっていたが、我流は我流。基本的な動きがなつていな。通常の流派ならあるはずの体の中心線を守るための動きが技に含まれていな。

戦斧が届く前に大魔王は動いていた。蹴りだ。ただの前蹴りがゲルンのがら空きのみぞおちを撃ちぬいた。その衝撃は革鎧越しに肋骨を折り、内蔵を押しつぶす。血反吐を吐きながらゲルンは吹っ飛んでいった。

同時に突進を開始していた、フォグが肩に担いだ聖剣を発動する。その輝きはあたり一帯を白く染めたが神の牢獄が効かない相手だ、素直に通用するとはフォグも思つていな。

さらに地を蹴り加速したフォグが聖剣の光の中から飛び出した。大魔王に真正面から斬りかかる。

しかし大魔王は無造作に左手を斜め後ろに付き出した。

「ちょっと面白かったんですけど、それをやるなら聖剣を匣にするぐ

らいの思い切りが欲しいところですね」

大魔王の手には白く輝く聖剣の刀身があった。大魔王の目前にいた勇者は見る間に色をなくし、透明な水と化すと、ぱしゃんと音を立てて石畳に広がった。

大魔王の斜め後ろから斬りかかったフォグはそのままの姿勢で硬直していた。聖剣を掴んだ大魔王の手がびくともしない。押そうと引こうと微動だにしなかった。

フォグは聖剣で目眩ましをした隙に水の精靈の力で分身を創りだし突撃させた。地の精靈で大魔王の足元を泥濘化し動きを止め、自らは風の精靈で急制動と急加速を駆使し大魔王の背後に回りこみそ の首を取つた。つもりだった。

だが、大魔王は分身は無視し、泥濘化した地面の上には普通に立つてはいる。一寸足りとも沈み込んでいたし、聖剣の一撃は軽く掴み取られてしまった。聖剣の魔族への特効もまるで通用していない。

どうすればいい？ 聖剣を手放して一旦距離を取るか？ いや、聖剣は絶対必要だ！ これが魔族攻撃の要なのは間違いない！ 本当にそうか？ 今も素手で掴まれているのにダメージを与えていい！

それは一瞬のことだったが、ぐるぐると空転する思考に囚われていたフォグの耳にみしりつという不吉な音が届いた。

「あれ、案外もろかつたですね」

聖剣がひしゃげた。じつくりと力をかけられた刀身が半ばから折れ曲がっている。大魔王の掴んでいる部分などは小枝のような細さにまで圧縮されていた。

「まったく使いこなせてませんよ、これじゃあ強度が下がるのも仕

方ないです」

大魔王が呆れたように言づ。

「まあ、これはこれでもうつて起きましょうか。珍しいですし」

大魔王の足が跳ね上がった。聖剣を握んでいる側、左の足刀がフォグの脇の下に入るとあっさり肩口を抜け顔の高さまで上がる。白銀の鎧は紙1枚程の抵抗も見せなかつた。

伸びきつた膝を折り曲げ足の裏でフォグを噴水まで押し飛ばすと、ゆっくりと足を揃えた。その一連の動作で大魔王の体軸がぶれることはいな。

「下着が見えてたら恥ずかしいですね」

切断された右腕付きの剣を片手に恥じらついていても、そんなものは誰も注目していなかつた。

フォグの絶叫が響く。肩から溢れ出す鮮血は噴水の水と混じりわずかに薄めながらあたり一面に広がつていく。

「フォグ！」

ここまで戦いを呆然と見ていたアイゼンとマキノが慌てて駆け寄つた。

「大分手加減というものを覚えたのです。そちらの人も死んでいいと思いますよ」

大魔王が右手でゲルンを指さした。こちらも噴水に激突していた。噴水は先程からの何度も衝撃で原型を留めていない。

アイゼンは死に物狂いでフォグの肩口を押さえて真っ赤になつていた。マキノは指摘を受けゲルンの様子を見る。ゲルンは肋を何か折つて内蔵を痛めたようだが命に別状はなさそうだつた。

水の精靈が癒しの雨を豪雨のように降らせておりおかげでフォグの朦朧としていた意識は回復した。出血も大分抑えられてきたが即座に回復できるわけではない。ここまでの大怪我となると神聖魔法でもそつ簡単に回復することは出来なかつた。

「何をやつてるんですか？ 腕ぐらい生やしてかかつてきてください」

「ふつ、巫山戯るな！ 腕が生える人間などいるか！」

アイゼンに支えられたまま頭を起こしたフォグはなんとか言い返したが、見るからに生氣がない。瀕死の重傷であることは間違ひ無いだろう。これ以上の鬭いは無理としか思えなかつた。

「失礼ですね、普通の人間の腕が生えないことぐらいは知つてます。でも、勇者だつたらそれぐらいしてください」

大魔王が拗ねた。ほおをふくらませて子供のようだ。

「わかりましたよ。じゃあこれを返しますからくつけてください。それぐらいなら出来るでしょ？」

と言つて大魔王はフォグの右腕を放り投げた。聖剣は握られたまま。結局そんなに興味がないのだとしたらフォグは一体なんのために右腕ごと奪われたのか意味がわからなかつた。

右腕の切斷面は恐ろしく綺麗だつた。だが、だからと言つてくつけて動くようになるものでは当然ない。

放り出された右腕を前に呆然とするフォグを見て大魔王はため息を付いた。

「それも無理なんですか？」

壊滅だ。遊撃隊はすでに戦闘を行える状態ではなかつた。近接戦闘を行える一人はすで身動きがとれない状態になつてしまつていて。後衛の一人でこれ以上の戦闘続行は不可能だつ。誰もがそう思つた。

「そつそつ、いつも戦いの前に言つのを忘れるんですが、負けを認めてくださいたら命までは取りませんよ。今回は死ぬ前に言えてよかつたです」

「負けを認めたら……どうなる？」

「別になにも。好きになさつたらいいと思いますよ。生き恥を晒すつもりはない、一思いに殺せ！ といつことでしたら殺しますけど」

フォグは考える。命を助けると言つのだ。その誘いは素直に受けねばいい。そして情報を集める。今回は相手の事を何も知らなかつた。今まで戦つた魔族の延長上でものを考えていた。それでは駄目だつた。こいつは何か根本的に違う。まずはこいつがなんのか徹底的に調べるのだ。再挑戦はそれからでも遅くはない。

「食べてくれ、という方もおられましたがそれにしますか？」

武器だ。聖剣以上の武器がいる。あれはこいつに通用しない。いや、他の勇者の武器はどうだ？ 遊撃隊の隊長で組んであたるつてのはどうだ？

フォグは結論を出した。とにかくこゝは生きて帰る！ 後はそれからだ！

「わ、わかった、俺達の負けだ、助けて……」

負けと言い出した時点でもマキノがゆらりと立ち上がった。ゲルンの応急処置は終えたらしい。

そしてフォグの元へとやつてきた。

「負けた？」

マキノが感情が一欠片も感じられない声でささやいた。フォグを見下ろす。

フォグは身をすくめた。マキノの目に光が感じられない。これは

……まずい。

マキノが大きく足を振りかぶった。そして、フォグの肩口を思いつきり蹴り飛ばした。フォグの絶叫が再度広場に響き渡った。

「マキノさん！ やめてくださいー！」

アイゼンがマキノを止めようと後ろから近づき羽交い絞めにしたが、マキノの蹴りは止まらなかつた。

フォグは悶絶じ「ごろと転がる。

「勇者が負けるなど認められると思つていいんですか？ 勇者とは聖遺物に選ばれたもの！ つまり神が選んだ！ つまりあなたが負けるということは神の選択を冒涙するものだと言つことです。わかつていいんですか、いえ、わかつていないとしょうね、だからあつさりと負けたなどと口にできる。腕が無くなつたぐらいでリタイアですか？ 神舐めてんですか？ まだ2本の足と、一本の腕があるでしようが！ それも無くなつたなら噛み付いてでも戦えよ！ なあ！ それに何聖剣壊されちゃつてんの？ はあ？ そりやあんたの信仰が足りないつて馬鹿でもわかるように教えちゃつてるじゃない。ねえ、満足？ 自分の無能さを世間にひけらかして満足？ 神が全知全能ではないとは広く知られた事実ですがそれでもこれはヒドイ。こんなを選んじゃうなんて！ ああ、今私は神を疑つてしましました。それもこれも全部あなたのせいですね？ ひどいですね、中央正教の神官に神の正氣を疑わせるなんてね！ この駄勇者！」

マキノが一気にまくしたてた。フォグは涙目で怯えている。苦痛より何よりマキノが怖かった。完全に狂神官のスイッチが入つている。

何かわからんが俺はもうダメだ、とフォグが打ち碎かれようとした時、マキノは一転聖職者の穏やかな笑顔を見せた。

「すいません、少し言い過ぎましたね。でも私はフォグさんは期待しているんですよ。負けたなんて言つのは作戦だったんですよ。そう言って敵の油断を誘つつもりだったんですね。でも、それならそつと相談してくださいね。うつかり本気にしちゃうじゃないですか。そんなことないなんてわかつてますけどね。まあ」

ヒマキノが手を差し出した。

「勇者ならまだ戦えるはずです！　ここで不屈の闘志と共に絶望的な闘いに身を投じてこそ勇者です！　勇者とは勇気ある者のこと！　この場面こそ勇気を示す最良の舞台です！　敵の強さなんて関係ありません。敵が弱ければ闘い、強ければ尻尾を巻いて逃げ出しながら勇者のすることではありません。弱い敵を翻るなんてことはそこの十把一絡げの冒険者共にまかせておけばいいのです。勇者は本当の強者にこそ立ち向かうもの！　誰もが逃げ出す臣悪に立ち向かうもの！　この神の恩寵の行き届かない世界の端々まで救済の光を届ける世界の守護者です！　人類の救世主です！　まあ！　立ち上がるのです！」

フォグはマキノの手を取るとふらふらと立ち上がった。マキノの言葉がするりと心に入ってきて、なんだかまだ戦えるような気がしてきた。

「さあ、聖剣を手に取るのです。魔族に対抗するすべに乏しい人間に『えられた神の恩寵です。一振りすれば魔物の動きを止め、一振りすればその生命を止めると言われる斬魔の剣です！　その聖剣はあなたにしか使えません。そなあなたは聖剣に選ばれたのです！」

フォグは残った左手で聖剣を手に取る。ひしゃげた聖剣をもつた

「フォグはこれぞ敗残兵といった姿だった。

「さあ、戦うのです！ あなたには貴族の体と精霊の加護と聖剣があるのです！ 貴族の鋼の如し体は魔族如きの攻撃は物ともせず、精霊はあなたを癒し、守り、援護し、聖剣は國中の信仰を束ね神の敵を討つのです！」

フォグはふらふらと大魔王に向かつて歩いて行く。うつろな顔をしておりそこにまともな意思の影は見られなかつた。

「大丈夫ですか？」

これにはさすがに大魔王も少し可哀想に思つてしまつた。大魔王としては手加減の幅にぶれがあつたりはするが積極的に殺したいと云つわけでもない。このあたりで終わつてくれるのを望んでいた。

勇者が聖剣を振りかざす。信じがたいことにひしゃげた聖剣はそれでも輝きを失つてはいなかつた。

「ちょっと可哀想になつてきただのでとりあえずその聖剣、それはもうやめにしましちゃうね。ハルさん、聖剣のリンクを解除してください

い

『了解です。魔力供給ポートの拒否リストに聖剣のオブジェクトIDを追加しました』

大魔王がそう言つとレガリアが応えた。聖剣は次第に輝きを失い、鈍色のするただの鋼の剣になつてしまつた。

「そもそもこの国のレガリアを持つてゐる私には聖剣の魔力供給の

遮断が可能ですので聖剣で闘いを挑むのは不向きでしたね

大魔王はレガリアと聖剣のリンクを切り離した。レガリアはその莫大な能力を維持するために国民全てから魔力の徴収を行っている。これは誰にも気づかれることなく行われていることで、見えない税とも呼ばれていた。

聖遺物である聖剣は神聖魔法で動いており、その源は神への信仰だ。聖剣の能力は使用者の信仰が反映されるのだが、個人の信仰などたかが知れている。そこでレガリアと聖剣をリンクし、国民の信仰をまとめて聖剣に流しこみ使用者の信仰の代替とすることでその力を発揮していた。

「これで頼みの綱もなくなつたことですがどうしますか？」

フォグは意識を取り戻した。急速に覚めてきた頭で先ほどの自分が自分でないような状態はマキノによる軽い洗脳のようなものではないかと思い至りぞつとした。

聖剣との同調が解けた際に霧が晴れたように感じたので、聖剣を通じてなんらかの操作を行つていたのかも知れない。そう考えるとますますマキノが不気味に思えてきた。

「あ、いや、俺は、もつ……

マキノの方を振り向く。天使のような微笑をしたマキノがいた。あれは多分怒っている。さつきからずつと狂神官のままだ。

「俺はちょっと休憩する！ まだ負けてないが休憩だ！ マキノ！ しばらくなませた！」

苦しい言い訳だがどうだ？ 内心ビクビクしながらマキノを

見た。表情は変わらない。フォグは勝手に大丈夫だと判断してアイゼンの元に向かつた。

「おい、アイゼン。広場の端に行こう。ゲルンを担いでくれ

「ちょっと！ マキノを一人にして大丈夫ですか！」

「いけるだろ、大魔王にちょっとかい出さなきや大丈夫なはずだ」

「……わかりました。とりあえずゲルンさんをほうつておくわけにも行きませんし」

アイゼンはゲルンを抱き上げると、フォグと共に広場の端に向かつた。

広場の端に辿りついたフォグは地面に座り込んだ。アイゼンはゲルンをそつと地面に横たえる。

「フォグ、怪我は大丈夫なのですか？」

「ああ、水の精霊がどーにかしてくれたみたいで大分ましになつた。マキノに蹴られた方がよっぽど痛かった」

マキノの方を見ると大魔王と対峙していた。あれ、さつきまであんな感じじゃなかつたような？ と思うとゴロゴロという音が聞こえてきた。音のする方、広場の入口を見やるとマキノの聖堂が一人

で勝手に動いているのが見えた。今回は持つていなかつたはずだ。

「え、え？ どうなつてんの？ あれ聖堂だよね？」

「そうですね……呼び寄せたんでしょうか？」

「何のために？」

二人は顔を見合わせる。この状況で考えられることはそうない。まさか私の聖堂自慢を大魔王相手に始めるわけではあるまい。

「ちょっとかい出す氣だ！」

マキノの元までやつてきた聖堂が自動展開した。フォグ達の見慣れた、旅の間祈りを捧げていた見覚えのある形になる。

「なあ、前から思つてたんだけども……マキノつてたまにすぐ怖くね？」 マジキチじやね？」

「まさか！ 中央正教の12神官に選ばれ、街に出れば聖女と敬われ、『老人方には拝まれてしまい、お祈りマキノン』という愛称で広く親しまれている彼女が！」

「……いろいろツツコツはあるがあいつの他に11人も似たよつなのがいるとするなら中央正教つて怖いよ……」

「ちなみにあなたの想像は大体当たっています。中央正教においてそこの宗教団体にありがちな組織腐敗の類は皆無と言つていいでしょ。下の方はそれほどでもありませんが、組織上部の人間は似

たり寄つたりの狂信者です

「それがマジキチだらうが！」

「中央正教は他のおためじかしの宗教とは違い、現世利益がありますからね。神の存在を信じやすいのです。そのせいで修業が進み、神の存在を間近に感じるようになればなるほど、その信仰を深めていくわけで、トップの教皇となるとそれは凄まじいまでの信仰なのでしょう」

「げえ？……あれより上がいんのか？」

フォグはげんなりした。「いやつて話していくそれなりに体力は回復したようだ。それでも、もう一度戦えと言われると尻込みしてしまうだろう。

「で、マキノは何してんの？」
「お祈りはないと思つが、つてなんか取り出した？」

マキノは聖堂の中から持ち手の付いた薄く黒い板のようなものを取り出した。

「あ、あれは！」

「知つているのかアイゼン

「斬れない鋸！　聖遺物の一つです！　まさかマキノさんが持つているとは……いえ、レプリカでしようが」

「何だよそれ、わかるように言えよ

「中央正教の始まりの伝説に関わる聖遺物です。切れ味の悪い鋸で体を切断するという拷問に使用するのですが、あれは神の子を拷問するのに使われたという代物です。」

「で、凄い威力もあるのか？ だったら普段から使えばいいのに」

「いえ、そういう話は聞いたことがないのですが……」

その使い道はすぐに判明した。マキノは右手に持ったのこぎりをそつと左手首にあてた。何度も位置を微調整し満足のいく箇所を探しあてたのか、一切の躊躇なくのこぎりを引き始めた。

「ちよつ！ なにやつてんのマキノー！」

フォグは見たものをそのまま受け入れることが出来なかつた。意味が分からぬ。ここで自分の手首を拷問する意図が分からぬ。

「あれも祈祷の一種ですね、神の子の故事の再現です」

最初のうちは、ぞりぞりと音を立てていたが、次第にグシュグシュと血と肉を攪拌し、骨に達したのかゴリゴリと聞くものを不快にさせる音色を奏でた。

「痛い、痛い、見てるほつが痛い！ ねえなに、あれ何！？ ほんと、マジキチじやねーか、どーなつてんのよー」

「多分ですが、トランス状態だとすると本人は痛みを感じていらないのかも……」

「いやいや、そういう問題じゃねーだろ！」

ぱとりと音を立てて左手首が落ちた。斬れない鋸という割には案外早い。

マキノは左腕をふり聖堂に血を振りかけ詠唱を始めた。こんな悠長なことをやつていて大丈夫かとフォグは思ったが大魔王に動きはなかった。マキノは神の加護を信じているため何の迷いもない。何者も自分を傷つけることはないと硬く信じている。しばらくして聖堂に変化があらわれた。

「え？ 少し大きくなつた？」

気づいた後は劇的だった。あつという間に周囲の石畳やら噴水やらを取り込んで聖堂は大きくなりつけ見上げんばかりのサイズとなつた。これではもう教会そのものとすらいえる。

「はあああああー？ なんじゃそりや！ ねえ、なんであんなことできんのよー！」

「あ、あれはー！」

「また知つてんのか？ アイゼン」

「首の聖堂です！ 聖地の一つ、カルリー市にある神の子の頭を納めてあるという聖堂ですよ！ 捷径によりバラバラにされた頭が保管されているというのですが……まさかそれを召喚？ いえ複製でしょつか」

その聖堂を前にマキノが朗々と歌い出した。澄んだ声音が響き渡る。一枚の絵画のような光景だった。左手からは出血を続けていた

が、地面に広がるそれすらも彩りの一部となっていた。

光の柱が幾本も天から降つてきた。その光景はますます宗教画じみてきたが、それすら序の口だった。

その光のなか何かが降りてきた。翼を持つそれらは、悠然と羽ばたきゅつくりとあたりを睥睨しながら降りてくる。それが10体。

その姿は異形だ。それは一足歩行の白い鰐とも、手足の生えた蛇ともとれる姿だった。体長は3m程だ。尻尾まで含めた全長は5mを優に超える。全身は白い鱗に包まれているが、その下にうねる筋肉を隠そうともしていない。顔はほとんどが口で、巨大な顎から伸びる上下の歯は口内には収まらず貫通している。顔の側面におまけ程度にしか見えない小さな瞳がついていた。

巨大な4枚の翼が背から生えているがこれが物理的に意味のあるものかはわからない。羽ばたきと浮遊にあまり関連性は見えなかつた。

胴体の延長ともいえる極太の尻尾の先端は瘤を寄せ集めたひときわ大きなものになっており、それは顎と並びこの異形の主要な武器であることを想起させた。

武器はこの異形の肉体以外にもある。手に持つ槍がそれだ。それは槍と呼ばれる程複雑な構造ではなかつた。ただの鉄の棒の先端を尖らせただけのものだったが、その大きさから想像される用途は槍と同様のものだろう。

「あれは……」

「どうせ知つてんだろ？ アイゼン？」

「業天使と呼ばれる神の尖兵です。そしてマキノさんの祈祷は、見捨てられし神の子の歌！ 時の権力に捕まり衆人環視の元での拷問で死に追いやられた神の子が死の間際に歌つたという！ そして業天使の持つ槍は、神の子を貫きし槍！ 神の子が死ぬまで突き立て

られたところ聖遺物の一つです…」

「え？ その槍何本もあるよ！」見えるがレプリカなんかか？」

「槍は100本以上現存していますよ」

「どんだけひどい目にあつてんの神の子つて…？」

その天使達が歌い続けるマキノを囲むように地に降り立つた。異形ではあるが、その内から発する神気がただの魔獣の類ではないことを強く訴えかける。それらはマキノの前に頭を垂れた。

「なあ……アイゼン、勇者つていらなくね？」

「えーと……」

アイゼンは口を濁した。

「あれどう考えたつて一体でも俺より強いじyan！ 何あの数！ あいつらマキノ尊敬しちやつてるよ！ つーかあいつ神に溺愛されねーか？ 俺なんて精靈に好かれてるつっても、思春期になつた幼なじみがちょっと意識し始めちゃつた、ぐらいの好意しか受けてねーぞ…」

「またわかりにくい喩えを」

「あいつ一人で魔族でもなんでもやれるつて… もう全部あいつ一人でいいんじやないかな！」

「いや、やうは言こましてもマキノさん左手を犠牲にしますよ、

「これを何度も使うのはさすがに無理なのでは？」

「あいつならまた生えてきてもおかしくねーよ」

「それはないでしょが……。しかしこの後はどうなるのでしょうか？ 私もこの魔法が最終的にどのような現象を引き起しますのかまでは知らないのですが」

「準備は終わりましたか？ もう随分待っているんですが。そろそろお腹が空いてきました」

大魔王のお腹がくう、とちいさくなつた。大魔王はそつとお腹を抑える。そんな姿も愛らしかつた。

遠くから、お前はさつきまで肉ばっか食つてただろうが！ といふ声が聞こえてくる。

マキノは大魔王は無視して歌い続けている。

天使達は一斉に立ち上がり大魔王を睨みつけた。が、大魔王を視認した瞬間微妙に揺れた。何かに一瞬驚きそれを押さえ込んだような感じだ。

この天使達は戦力としてここにいるわけではない。単純に戦力として使用しても一騎当千を誇るだろうがここで役割は神力の補給にある。マキノの準備している神聖魔法に必要な量の神力を提供するため呼び出されたのだ。

「ん？ どこかでお会いしたことありましたでしょうか？」

大魔王が首をかしげながら天使たちを見た。思い出そうとした所、マキノが歌い終えたのか静寂が訪れる。マキノは右腕を伸ばし天を指さした。大魔王は思考を中断しマキノを見る。

「神雷」

鼓膜が破れるほどの轟音が鳴り響いた。発生した音圧だけで周囲の瓦礫をことごとく吹き飛ばし、閃光は大魔王に容赦なく打ち付けた。それは神の怒り。古来より神罰として知られるその雷霆は神に逆らいし民を、腐敗した街を、驕り高ぶる国を尽く塵の一片すら残さず消しさつてきた。神の最大級の怒りに触れた者は魂すら消し飛び一切を無へと帰順させる。

その雷霆はマキノの怒りに同調していた。すなわちここではマキノの怒りが神の怒りだ。雲ひとつない空から降り注ぐ光線にも似た雷はその全てが収束し大魔王を打ち続けた。この雷は自然に発生するものとはわけが違う、その全てに敵を打ち滅ぼし物質の最小単位まで撃ち碎くべく神意が込められていた。

それは何度も何度もマキノの気力が尽きるまで行われた。神力 자체は天使10体分、人間に比べれば無尽蔵といえる程の膨大な量を行使することが出来たがそれを使う側はあくまでも人間だ。やがて限界は訪れる。

マキノが天を指していた腕をそっと下ろす。

あたりには帶電し碎けた瓦礫が粉塵となつて舞っていた。マキノには大魔王が完全に塵ひとつ残さず消滅したという確信があつた。それが神罰の当然の結果であり疑う余地などない。それが信仰だ。だがその信仰は終わりを告げようとしていた。

「つるさすぎですよ、ちょっと腹が立つてきました」

大魔王が粉塵の中から悠然とあらわれ、マキノの方へと歩いてき

た。

無傷だ。無傷どころか粉塵の中から現われたというのに埃一つ付いていなかつた。

マキノの心にこの現実がゆっくりと染み渡つていくと、これまでの人生の中で初めて確信にゆらぎがあらわれた。口を開こうとしては、何度も閉ざした。何を言つていいのか、わからない。

大魔王が近づいていくと天使の半分が迎撃の様子を見せた。残りはマキノの守護に回る。

無造作に近づいていく大魔王の心臓に向けて天使の槍が5本同時に突き出された。大魔王はそれを手のひらで受ける。槍は天使と大魔王の力の衝突に耐えられず全てが蛇腹のように変形した。

意味をなくした槍を捨て天使はさらに同時に飛びかかつた。左右端の天使は尻尾を叩きつけるべく回転し、残りは顎を人が丸呑み出来るぐらい大きく開け食らいついた。

大魔王は右手で作った手刀を軽く、内から外へと振つた。それだけで5体の天使は上下に分かたれその場に崩れさつた。天使の鱗は人の作りし武器は一切通用しないとされているが、それは武器でない大魔王の手刀の一閃であつけなく両断された。

マキノはその光景を呆然と見ていた。そして槍が折れ曲がり、天使が倒されるごとに、信仰を揺らされた。

「あ、ああああ

マキノの口から意味のある言葉は出なかつた。ゆれて、ゆれて限界が訪れた。

守護にまわつていた天使が一斉にマキノを睨みつける。そこに敬愛の色は一切なかつた。侮蔑し見下すそれだつた。

信仰が一定値を下回つたと判断した天使の行動は素早かつた。ずぶり、とマキノの太ももに槍が刺さる。愕然と目を見開きマキノが見上げると、他の天使が槍を振りかぶつていた。

マキノは神聖魔法を除けば極普通の少女の体力と能力しか持っていない。人外の膂力で振るわれる槍を回避する手段は持ち合わせていなかつた。ぎゅつと田をつぶり槍に貫かれるその瞬間を待ち続ける。

さくつ、と音を立てて槍が地面を貫いた。

「マキノっ！」

フォグは飛び出した。おかしな成り行きにいつまでも呆然としているわけにもいかない。

風の精靈に頼み追い風を限界まで吹かせ、地を蹴つて加速した。天使の直前で手に持った聖剣を投げつける、一瞬ひるんだ隙に左腕でマキノを抱えさらに加速した。

限界を超えた急加速に韁帯が耐え切れず嫌な音を立てたが、構いはしない。そのまま広場の反対側まで走り去りしゃがみ込んだ。

「フォグさん……」

「おい、しつかりしる、なにやつてんだよー！」

「私は……」

「いいからとりあえず逃げるぞ！」

マキノを抱きしめたままフォグは立ち上がる。振り向くとそこには予想外の光景が合つた。

大魔王が残りの天使を潰していた。それは文字通りの意味で、上から頭部を押さえつけ、胴体にめり込ませ地面に叩きつけることで上下に押し潰していた。

そうやって一体ずつ潰されていくのを見る度にマキノがびくっと震えた。

残りが2体になった時点でのオグは大魔王に声をかけた。

「待ってくれ！ もうそれ以上そいつらは殺さないでくれ、これ以上はマキノが耐えられん！」

「いいですよ」

大魔王はその動きを止めた。そして天使に話しかける。

「そういうことです。大人しくしていてください」

天使は素直にその動きを止めた。大魔王を相手にこれ以上戦う気は無いらしい。それを確認すると大魔王はフォグ達の元にやつてきた。

「天使は中々面白いと思いましたよ。それでどうするんでしようか？ あなたは確か休憩されていたと思ったのですが？」

「ああ、降伏する。助けてくれ」

「わかりました。その変わりと言つてはなんですがこの広場は責任を持つて元通りになおしてくださいね」

「え？」

「だつてこの惨状はほとんどあなたたちのせいですよ？ 私は物が壊れるようには動いていません」

木つ端微塵になつた噴水、爆発し泥濘化した石畳、突如としてあらわれた教会、血まみれの地面、惨憺たる光景だつた。ただ、被害は全て広場の中で収まつており広場外への影響は一切なかつた。

「そもそも、勝負を挑まれたのもよく意味がわかりません。宿屋の子を虐めたのでちょっと腹が立つて受けてしましましたが」

「お前は大魔王だろうが！」

「ええ、ですが何故大魔王だと勝負を挑まれたり、殺そうとされたりしなければならないんですか？」

「お前が魔族の頭なんだろうが！」

「魔族？ なんですか？ それは？」

「はあ？ とぼけんな！ 魔族領を広げて次々に人間の領土を侵攻してゐるだろうが！」

大魔王は本氣でわからないと言つた様子になつた。

「魔族領？ 私は魔界17国全てを支配するという意味で大魔王を名乗つていますがその魔族領というのは何か関係があるのでしょうか？」

「え？ え？ なにそれ？ ちょっと待つて！ 何お前、魔族と関係ないの？」

「魔界の私と同じような者は魔人と呼んでいますがそれが魔族なんでしょうか？ でも魔人は魔界から出てこれませんよ？」

「待つて、待つて、ちょっと待つて！ なんかわからん！ 一旦整理させてくれ！」

「わかりました。私も勝負を挑まれば逃げることはありますけど、何かの誤解の末というのは困ります」

大魔王はフォグと抱きかかえられたままのマキノを見た。二人共かなりの大怪我をしている。

「もう一度聞きますけど、その怪我は生えたり、くつしたりして治ることはないんですね？」

「ああそうだよ！ レガリア、救済の王冠ならどんな怪我でも治る」と聞いたことはあるがあれは他所の国の話だ」

大魔王は少し考え込んだ。やがて答えが出たのかアイゼンの方を向いた。

「アイゼン……お前、いつも何か終わつた頃にそれとなくいるのな」

「仕方ないじゃないですか、闘いが始まつてしまつとあまり役に立たないんですし」

「魔法使いさん、アイボンさんですか、何か地面に書けるような道具をお持ちではないでしょうか？」

フォグは確信した。こいつは名前を間違えて覚えて以後絶対に訂正しないやつだと。

「あ、はい、石灰を固めたものならありますが」

アイゼンは上着の内側からチョークを取り出し大魔王に手渡した。大魔王は受け取ったチョークで石畳になにやら図形を書きだした。まず、大きく円を描きその内側に同心円状に何個も円を描いた。その円と円の間に文字のようなものを書きだす。魔法使いのアイゼンも見たことがない文字だつたが、何らかの儀式に使うものなのだろうとは推測した。

ひと通り書き終えると、満足そうにうなずきチョークをアイゼンに返す。そして

「アイボンさんはその円の前あたりにしばらく立っていてください。定期ポーリングに引っかかるて、連絡がいくはずです」

「ポーリング？ なんですか？」

大魔王はそれには答えなかつた。きつとめんどくさかつたのだろう。

しばらくすると円陣が揺れ始めた。ふるふると弾力を増し、揺れながら盛り上がりてくる。やがてそれは人程の大きさになつてその形を整え始めた。

醜い、猫背の小汚い男があらわれた。まぶたがないため眼球がむき出しながら生えているこれも大きな手だ。この男には計3本の腕があることになる。白いコック帽に白衣、両手に包丁、背中の手には大きな鍔が握られていた。

大魔王はこの男を知っているのか紹介を始めた。

「人間研究家のネルデフォウスという方です」

「人間料理研究家の間違いじゃないのか！」

「いえいえ、この方は普段から「人間大好き！」と

「それも違う意味にしか聞こえんな！」

「お医者さんみたいなものですよ。両手に持っているのはメスで背中のはコツヘルです」

「それは包丁と鍼だ！」

ネルデフォウスは眼球をぎょろりと動かしまわりを見渡した。そして大魔王に向き直り跪く。

「これはこれは、最近お見かけしないと思えばこのような所におられたのですか」

見た目とは違ひ意外にしつかりとした男らしい声が聞こえてきた。

「お久しぶりです。さつそくですが、こちらの方の怪我を治したいんですが可能でしょうか？」

「ふむ、欠損部位は残つておりますか？」

怪我の状況を軽くみてとり尋ねる。

「その辺に転がってると思いますよ」

「これですか。と、両手の包丁に突き刺さった、フォグの右腕と、マキノの左手首を見せてきた。フォグにはこの男がいつのまに動いて回収してきたのかまるで分からぬ」

「つて、粗末に扱うなよ！」

「これもツツコンでいる間に右腕が接合されていた。マキノを見ると同じように左手首が元に戻っている。他にも細かい傷や、切れた鞄帯、刺された太ももなど目に付く傷はほぼ修復されていた。信じがたい能力だった」

「ありがとうございます。ではまた」

と大魔王が言つとネルデフォウスの姿が崩れ落ちた。砂と化し広場にばらまかれる。これも片付けるのかよとフォグはうんざりした。

アレがヤバイ亭に戻ってきたのはお前一人つてことなんだな？」
をまとめていた。

「つまりだ、魔界から出てきたのはお前一人つてことなんだな？」

「はい、魔界は神が作つたとされる結界で囲われているため、一定以上の強さの者は出入りすることが出来ません、私は十分に強くなつてその結界を打ち破れるようになりましたので人間界に来てみた

のです。ですので私以上に強いが、『ミ』のよつに弱くないと結界を通ることは出来ませんので、我々が人間に直接干渉することはまずありえないでしょう」

「大魔王とか紛らわしいんだよ！ 魔族の奴らも魔王とか名乗つてる奴がいるんだ！」

「そう言われましても、魔界にも魔王はいますよ。17の国をそれぞれ支配しているのが魔王です」

「だったらそういう事情は先に言つとけよ！」

「聞かれませんでしたよ？ 魔族という方のことも知りませんでし
たし仕方ないじゃないですか」

大魔王はちょっと拗ねた。

そして思い出したようにマキノに言つた。

「マキノさん」

「は、はい」

マキノがびくっとしながらもおずおずと答える。大魔王に対してはかなりの苦手意識が発生していた。マキノはあれからずつとぼーつとしており、時折思い出したように涙を流していた。

「気を落とされることはあります。あれは人間であるあなたが使
用した結果ですからそれが直接神の能力に対する疑念にはなりませ
ん。人の身であれほどのが出来るというのはなかなかないと思
います」

「そりなんでしょうか……」

「それにあの天使の人たちには以前あつたことがあるのを思い出しました。その……神ですか。多分私は会つたことがあります。あまりあなたを責めないよう言つておきますので元気を出してください」

マキノは信じられないものを見るような目で大魔王を見た。確かに神に会つたことがあると言わても俄に信じる事はできない。マキノも今まで神が側にいる感覚を覚えることはあつたが、直接会うこと出来るなどと思つていなかつた。

大魔王はこれで話は終わりだといわんばかりに、料理を注文し始めた。

フォグ達は席を立つと再度広場へ向かつた。広場再建の見積もりをするためだ。修復のことを考えると頭が痛くなつた。

一匹の鳥が空を飛んでいた。それは昼夜をおかず飛び続け魔族領に必要なメッセージを伝えている魔族の通信網の一部だ。

マテウ国第3魔族領の魔王にメッセージを伝えたのもこの情報網の一部だ。

それは一定間隔で世界を巡り様々な情報を収集しているた。マテウ国のレガリア奪取劇そこには含まれる。

鳥達は一定の行路を巡回し、中継地点で別の鳥と情報伝達を行う。そしてその情報を各魔族領に伝えていく。情報としての即時性はそれほどでもないが、情報の複製と拡散による頑健な情報網を構築していた。

その鳥は情報網の終端の一つ、魔族国家エルシアへと辿り着いた。魔族国家エルシア。全ての魔族を牛耳る魔族の総本山だ。

その首都、王城の一室へと鳥は向かう。こちらの王城は森の中にある木造建築の魔王城などとは違ひ石造りの立派なものだ。もともと人間が建てたものだが遙か昔に攻め取つた後そのまま利用している。街も道路も全て人間が作ったものだ。もともと魔族には大した文化などなく人間のものを奪うことで成り立つていた。

鳥はある部屋の円卓の中央の止まり木に掴まると、一声鳴き帰還を報告した。

円卓の周りには7つの影があった。円卓であることから上下関係のない闇達な議論の場かと言えばそうでもない。これも人間の残したものを利用しているに過ぎなかつた。この中で一人だけが一際大きな玉座に座り6つの影を見下ろしている。この男こそが魔族を統べる王、大魔王だつた。

鳥はその場にいる全員に収集した情報のイメージを伝える。それは各自の脳内で映像、音声を伴い再生された。全員がその情報の咀嚼を行つたと見て取ると大魔王が言つた。

「ふふつ、面白いでは無いか。この私を差し置いて大魔王とはな。中々笑わせてくれる」

魔族の王が苦笑した。それほど面白そうでもない。一瞬で激昂するのもプライドの問題があるのかも知れない。

「これは、あの時の娘ではないか？ 我らを散々引っ搔き回した、ヤツの娘だ」

竜が言つた。竜といつてもここにいるのは本人の姿を投影した影だった。本体ならこの部屋には収まりきらないだろ？

「忌々しい。しかし、この娘が何故生きている？ 死んだと報告を受けたぞ、シオドア！」

獣が吠える。狼の獣人だ。足は狼そのものの足を一足歩行に適応させたかのように太く長くなっている。手は五指を揃え人間のよつな形態だ。全身は獣毛で包まれている。

「正確には魔界に落ちた、だな。死んだかまではわからんが魔界に落ちたなら死んだと見做していい。貴様も当時それで納得したはずだ」

シオドアと呼ばれた剣は応えた。その剣は円卓に突き刺さつている。一々こんな使い方をされては円卓を作った職人も可哀想だろう。

「ヤツはどうなつたのかな。俺その時まだここにいなかつたんだけど」

本が喋った。革製の装丁の大きめの本だ。それがひとりでにバラとめくれその音で会話をを行つてゐる。どこで音を捉えているのかはよくわからない。

「ヤツならここ地下に封印中だよ。さすが人類最強の勇者様だ。そう簡単には殺せない……って聞いたんだけどさ、ホントのことどうなのよ？ 殺せないってことはないだろ？ 生かしとく理由あんのか？」メレーヌ

石が「ロロロ」と唸つた。これはただの手のひら大の石だ。見た限りなんの特徴も感じられない。

「……どうだつていいでしょ」

メレーヌと呼ばれた人形が不機嫌につぶやいた。等身大の少女を模した人形だ。人形故の美しさを醸し出している。

この場にいる者達はその本当の姿を表してはいなかつた。この場にいるのは、影やら、使い魔やら、代理の者だ。それらが代わりにこの場で意思を伝えている。

「で、どうするのだ？ 大魔王よ。儂に戴ける天ではあるまい？ 消してくるかね？ 儂が出れば直ぐに終わると思うが」

竜が大魔王に具申する。許可さえあればいつでも出向くつもりなのだつ。

「面白い見物かもしけんが、たかが小娘、我らの敵ではあるまい。辺境でおままでことをやつてゐるつちは放つておけばよい」

「それよりどうすんだ！ アルベリクの奴死んじまつたぞ？ レガ

リアも壊されちまつた！」

獣が言つ。

「ふむ、レガリアは増えるとは言つても、そう簡単に次を産むわけではないからな。マテウ国の侵攻はどうするか」

大魔王が答える。

「マテウ国に侵入したレガリアは後2個だね。持つてるのはユーダンとグスマントだ。こいつらを動かすかい？ 周りの人間を蹴散らせば領域拡張が出来ると思うけど」

本が言つ。

「そうだな。それはそれで進めるとしよう。次に宝玉が増えればそれはその時に決めるとするか」

そう言つと大魔王は唐突にその姿を消した。話は終わりらしい。その場にいた者も次々に消えていく。最後に残つたのは人形だ。人形はゆらりと揺れたと思うとその場に崩れ落ちた。震えている。そして狂つたように笑い始めた。

それはある一点に思い至つてしまつたからだ。

「魔界から生きて返つてきた」

人形と剣はかつてあの娘を直に見ている。剣がどう思つたか知らないが、人形と他の者の見解はまるで違つた。

他の者は魔界に落ちたなら死ぬと思っていた。

人形は魔界に落とせば結界に阻まれこちらに戻ることはないと思

つていた。人形は知っていた。その時点の娘の力は結界に阻まれるほどであったことを。神の結界は一方通行だ。魔界に強者を封印し続ける事を最優先しているため魔界に入ること自体は誰にでも出来る。人間程度なら封印の対象外と見なされ出てくることも可能だろうが、一度銜え込んだ獲物を逃すほど魔界の環境は甘くない。

「はははははっ、馬鹿かあいつら！ 儂が出れば終わり？ 放つておけ？ わかつてない、まるでわかつてない！」

ならば、あの娘は神の結界に打ち勝つたということだ。どれほどの力があればそれが可能だというのだ。それとも神となんらかの交渉が出来たとでもいうのか？

人形はよろよろと部屋を抜け、バルコニーへと出た。夜だ。中天にはトカゲの形をした月が出ていた。

人形はトカゲの月を見上げて両手を天にかざした。

「ネルデフォウスよ！ メレーヌが求め訴えます！ その姿をお見せください！」

そのトカゲがメレーヌをぎょろりと見た。そのトカゲの月光がだんだんと凝り集まり人の姿を取る。
ぼんやりとしているがとても美しい姿の男だ。

「人形姫よ、いろいろと端折りすぎだ。陣もないし、生贊もない。まあそれで出てくる僕もどうかと思うけどね。君の魔力は強大で特だ。一目でわかるから、マーカーとしての陣はいらないんだが、生贊は欲しいな。あれは報酬の一部だよ」

「申し訳ありません。焦っていたのですから。生贊については後日必ず。新たな魔法の契約をして頂きたいのです」

「ふーん、言つてみてよ。どんな魔法が欲しいの？」

「マテウ国の大魔王の動向を常に監視する魔法です」

とたんネルデフォウスは大笑いを始めた。ばんやりとした姿が腰を折りこらえきれないというように体を振るわせる。まさかこんな反応をされるとは思つていなかつたメレーヌは戸惑つた。

「……そんなにおかしなことだつたのでしょつか」

メレーヌには意味がわからなかつたが、悪魔の行動にはさして意味のないことも多い。気にしていては魔法使いなどやつていられないと氣を持ち直した。

「いや、いい、君いいよ。願つてもないね。お詫え向きつてやつかな。いいよ！ それなら只でもいいよ」

只といつ言葉にメレーヌは警戒を深めた。悪魔は基本的には嘘を付かないとそれでいる。だが、只は怪しそうだ。なんだかんだと魔法契約に条件を付けてくるのが常であるからだ。

「いやいや、そんなに警戒しなくともいい。本当に只だよ。僕は大魔王様の御傍に侍る大義名分が手に入るならそれで十分だ。契約なしで人界にありつづけるのは難しいしね。君の魔力でそれがかなうなら素敵だ！」

メレーヌはいまのネルデフォウスの言葉に疑問を覚える。大魔王様？

「ん？ なにかしやべりすぎちゃったのかな？ でももう駄目だよ。今更この契約を取り消すなら、他の全ての魔法の契約を解除させてもらおう」

「な！」

メーラスは言葉を失う。何かとんでもない間違いを犯した気がした。

「監視するなんて言うんだ。大魔王様と敵対しているのかも知れないけど、大丈夫。契約は守るよ。そこは安心していい。ふふふ、この間なんて久しぶりに会えたと思ったらあつさり消されちゃったからね。悲しかったよ。僕も大魔王さまの前つてことで、ちょっとはりきつちゃったからなあ。もうちょっと時間をかけて治せばよかつた。せっかく居場所がわかつたけど、用もないのにのこのこと出て行けないし、いやあ、よかつた。本当に感謝しているよ。そうだ、君と契約している全ての魔法の魔力消費量を1割引いてあげよう。せめてものお礼だ。それと今回の魔法は実損分の魔力だけでいいよ」

「その……こちらのことを大魔王に伝えるとこいつよつなことは……」

それが一番の問題だつた。大魔王に脅威を感じ、その動向を監視しようとしているのだ。こちらの情報が筒抜けなどとこいつのことにはれば田も当てられない。

「大丈夫。わざわざそんなこと言わないよ。まあ大魔王様に聞かれてしまうと答えないわけにはいかないけど、接触しなければ気づかれることはないしね。もちろん僕程度が大魔王様に気づかれないなんてことはないんだけど、大魔王様は普段、周囲を殊更気にしておられないでの、余程目立つことをしない限り大丈夫だ」

メレーヌは大魔王を召喚する娘の力の一端を感じた。ネルデフォウスはメレーヌの契約している中でも最強の悪魔だ。これまでこの悪魔の魔法を使い縦横無尽の活躍を繰り広げてきた。

だがネルデフォウスは大魔王の臣下としか思えない言動をしている。

「まあ大魔王様に挑むなら挑むでいいよ。君がどんな華々しい散り方をするのか見せてもらおう」

ネルデフォウスは徐々にその姿を薄れさせてゆく。その姿が完全に消えてなくなつたときメレーヌは絶望に包まれた顔を上げた。

「いいだろう……こうなつたら人類最強の勇者でもなんでも……」

悲壯な決意を固めたメレーヌを月だけが見ていた。

1話 職安（前書き）

とつあえず書けた所まで投稿してみました。ちょっとの間は忙しそうなので平日は書けないかも。
お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。こんななんでも読んでもらえてると感動的です。嬉しいです。

「すいません、魔法使いになりたいんですが」

職業安定所の受付カウンターにやってきた少年はそう言った。
カウンターで頬杖を付き、暇そうにしていたベティは何かの冗談だろうかとそのままの姿勢で少年の顔をまじまじと見つめたが、何も分からぬ。人好きのする素直な笑顔だった。

栗色の髪に黒い瞳。身長は女性としては背の高めのベティと同じぐらいだった。服装はお世辞にも綺麗とは言えない様子でかなりくたびれている。

初っ端に突飛なことを言つて興味を惹きつけるつもりなのかとも思つたがそういう感じでもない。

いつまでも頬杖をつきっぱなしなのはいくら客があまりこないからと言つてもゆるみすぎだと思い直し背筋を伸ばした。

「エントリー・シートは『記入いただいていますか?』

営業スマイルを向けながらとりあえず通常業務を遂行することにしてみたがずっと圧迫され真っ赤になつてゐる頬はごまかせないし、ほとんど眠りかけている所をばつちりと見られていた。今更どう取り繕おうと遅い。

エントリー・シートは職安に用意してある定型書式の書類だ。少年は既に記入してあるエントリー・シートを差し出してきた。

白い。ほとんどなにも書いてない。名前と年齢しか書いていない。それによると名前はアル、年齢は15歳。このシートだけで職を紹介するのはさすがに厳しいだろう。

「聞き違ひだつたら申し訳ありませんが……魔法使いになりたいと

おっしゃられました?」

ベティは寝ぼけていたのかも知れないと聞き直してみた。

「はい、聞き違ひじゃないですよ」

キラキラした目が眩しい。

「あのー、ここ職業安定所なんですよ。大変申し訳ないんですけど魔法使いといった職業の斡旋は行つていないので……」

どう言つたものかよくわからなくなつてきてベティは多少口調が崩れてきた。怒つたり馬鹿にしたりしないだけえらいんじやないかなあ私、とベティは思つ。

「え、そなんですか? ここにくればいいとケインさんに聞いてきたんですが。ディーン開拓団のケインさん」存じないですか? 紹介状も書いてもらつたんですが」

「紹介状を見せてもらつてもいいですか?」

ベティは紹介状を受け取るとさつそく見てみた。

ディーン開拓団のケイン。この職安で紹介した者だ。開拓団は、勇者らが制圧した魔族領に一定期間住み着き領地の占有権を得る職業だ。特に職能がいらないといつことでそこそこの人気職だが、命の危険もそこそこある。

紹介状には「こいつ15歳だけど職についてないんだつてよ、なんか紹介してやれよ」といったことが大体そのまま書いてあつた。馬鹿にしてんのか!

「あのぉ、ケインさん、魔法使いにならない」へ行けと本当に言つたんですか？」

だとしたら今度蹴つてやるー。

「いえ、ケインさんは仕事を探すならまことにへ行けと。魔法使いになりたいところはここのに来るまでに思つた」として

はあ、とベティはため息をつぐ。このナリはまことに常識から外れんと説明しなくては駄目だ。

「UJの国は法律はござり存知ですか？」

「……いえ、全く知りません」

「15年UJの国で暮らしてゐるんですよね？」

「違いますよ？」

「だつたらなんでUJの国で職安に來てるんですかー？」

思わずツッコんでしまつた。サービス業はあるまじめことだ。

「ああ、つい先ほど国民になりました」

「移民してUJられたんですか？」

「せうこいつわけでもないんですけど」

ベティは首をかしげた。わざと要領を得ない。

「住所はまだわからぬんでしょつか」

セウ「え、Hントリーシートに書いてなかつた。

「Hの街に来たばかりなんです。元いた場所もまだ番地とかないみたいなんですよ」

「ますますわからぬ。区画整理でも最近あつただろつか?」

「まあいいです。とりえずはアルさんがマテウ国民であるという前提でお話させてもらいますと、この国には14歳で職につかなければならぬ」という法律があります。特に罰則はありませんが皆さんはこれを守つております」

「この国では14歳になつた時点で職に就かねばならない」という決まりがあった。普通は14歳になるまでに決まつてしまつ。ほとんどの者が家業を継ぐからだ。継がないにしても継ぐのが嫌だという確固たる意志があるのなら別の職業について自分なりに調べ道筋をつけてはいるはずだ。

だがこの少年は15歳にもかかわらず職についておらず、職安にやってきてそれも魔法使いになりたいといつ。それは魔法使いについても職安についても何も知らないことと表していた。

職安は魔法使いなどというエリートを斡旋するための場所ではないし、そもそも魔法が使える時点で引く手数多、職にあぶれるはずもない。

「つまり、アルさんがマテウ国民だといつのない、今すぐこでも職を決めていただく必要があるのです」

「では、魔法使いでお願ひします」

「だーかーらー！ 魔法使いはそもそも職業じゃないっーのー！」

思わず地が出たがむこいやと半ば開き直った。

「いいですか、まず魔法使いという職業はありません。魔法を使つて何かをする仕事ならわかりますが、魔法使い自体は職業じゃない、ここまではわかつていただけますか？」

「あ、はい、わかりました。では魔法を使つ職業といつのほどんなものがあるんでしょうか」

「ふつー！ やつとまともな話になつてきましたね！ そうですね、魔法は基本的に武力として扱われています。ですので警察、軍隊、警備会社などでしょうか」

「ああ、じゃそれを紹介してもうえー！」

「すとーつふー！ いいですか、紹介することは簡単です。実際これらの職なら常に人手不足ですので未経験も可です。けどその場合単純な労働力として雇われるだけです。魔法を一から教えてくれたりはしませんよ。魔法が必要な部署は最初から魔法を使える人を雇います」

「じゃ駄目じゃないですか」

アルはあからさまに落胆した様子を見せた。

「やうですよ。最初からひじりじやダメだつて言つてゐじやないです

か。で、他に魔法使い関係ですと、宫廷魔術師とか魔法学院の教師とかですね。宫廷魔術師は宫廷にいるんでしょうね。教師は魔法教えてるんでしょう？

「このあたりの説明は本人が良く知らないせいかな？」と投げやりだつた。

「後は強いていうなら、冒険者とか修練者とか。でもこれは職業と言えるほどのものじゃないですね。魔族領を探索したり、魔物を退治したり、遺跡を探検したりするらしいですけど、その日暮らしのヤクザ稼業つて感じでしょうか。定期収入がありませんしあまりお薦めは出来ません」

「冒険者って魔法を使うんですか？」

「ああ、これはですね、我々のような平民が冒険者をするなら魔法は必須のようですね。そもそも冒険者のほとんどは貴族です」

「そうなんですか？」

「ええ、貴族は我々平民の100倍近い身体能力を持つという話です。まあ本当に100倍かどうかは知りませんが、それぐらいすごい強いよ、ってことです。で、そんな身体能力がなくても冒険者をやるならそれを補うだけの能力、つまり魔法が必要になるというわけです」

「つまり、僕でも魔法が使えるなら冒険者になれるということでしょうか？」

なぜか冒険者に食いついてきた。これはあまりよくない流れだな

あと思いつつもやこには眞面目に説明する。

「なるのはなれると思いますよ。といつも、冒險者なんてのはみんな勝手に自称されてるだけです。国が認定している職業一覧で当てはめると曰雇い作業員となります。それに冒險者なんて言いながらもほとんどは、ならず者とかゴロッキとかそんな感じですよ。組合だか互助会だか作つて徒党を組んだりしてますけどマフィアと変わりないような……まあうちとも曰雇いの仕事なんかは融通し合つたりはしてるんですが……」

最後の一言は余計だつたがベティはそのあたり正直者だった。

「ええっと、冒險者は貴族がほとんどと並んでいますが「ゴロッキなんですか？」

「貴族といいましても、領地を持たない3等貴族がほとんどですね。」のあたりの人たちは意識は平民とそう変わらないです。」

「すいません、3等貴族つてなんですか？」

「えーと私もあまり詳しくはないんですが、1等が公爵で自治権のある領地を持つていい貴族ですね。2等が伯爵とか子爵とかで領地はあっても自治権が無い。3等は騎士で領地がないってことだったと思います。3等の場合は一応貴族の身体能力はあるといつだけで、

貴族様！ つて感じの雰囲気の方たちじゃないですねえ

騎士様！ で手を組み天井を見上げたベティを見てその年でそれはないんじやないかなとアルは思ったがそんなことはもちろん口に出れない。

「……要は下つ端の貴族とこいつとでこいんでしょつか」

途中でよくわからなくなつたアルは大雑把にまとめた。

「いいですか、貴族様にそんなこと絶対に言わないでくださいよ！ で、さつきの続きですが冒険者の組合はあることはあるんですが、入つてなくても冒険者自称してゐる人は結構います。あ、組合に入るはお勧めしませんよ！ 組合にも色々あるんですけど大抵はならず者の集まりですし、みかじめ料とか取るところとかもありますし、足洗うのも大変ですよー。」

「え、でもさつき付き合ことがあるよつな」ともおっしゃつたよつな……」

「ま、まあ色々あるんですよ。魔物相手の仕事とかは彼らに一田の長があるといいますか……どうしてもこう」としたら比較的穩当な組合を紹介することも可能ですが……と、いうか冒険者がどういひじやなくて魔法使いの話じやありませんでしたっけ？」

「わつですね。ではその、職業とかはおいておいて魔法を使えるようになるにはどうすればいいんだしょつか」

「それを……この私に聞きますか……つーん、正直わからないです。魔法学院なんてのがあるぐらいですから教えているんでしょつか、魔法学院なんて所に縁がないものですからどうやって入学するかもサッパリです。後やはりお金はかかると思いますよ。失礼ですが、アルさんお金はそんなに持つてないですね」

「やうですね……わかつました。ありがとうございます。世の中やんなに甘くなつてことですね。勉強になりました」

ヒューリカルはそのまま帰らうとした。

「ちゅう、ちゅうと待ってください！ 魔法使いはともかくとして、職の世ではあるんですか？ アルさん今無職ですよね？」

「あ、そうでした、すっかり忘れてました、明日の『』飯にも事欠く身でした」

忘れんなよ、餓死しちゃうだろ！ と、ベティは思った。

「どうあえずですね、日雇い作業員で登録しませんか？」

「ああ先ほどの話で出てきましたね」

「どうあえず、今のアルさんは住所不定無職という非常に危つい立場です」

「はい、そうですね、そう言わると危機感が募りますね

「で、どうあえず日雇い作業員でもなんでも職業につけば、就労者番号を発行できます。就労者番号があれば職安を通して身分証明が可能ですが、すぐには無理ですが眞面目に仕事をしていただければそのうち様々な保証も受けれるようになりますよ」

「わかりました。ではそれでお願いします」

ベティはさっそく就労者番号の発行手続きを行つた。未記入の就労者証明書には予め就労者番号が振つてある。就労者証明書にアルの名前を記入し、ヒントリーシートには就労者証明書に書いてある

就労者番号を書き写す。それぞれに職安の判断を押して出来上がりだ。後はこの番号で照会して管理する。

「お待たせしました」

出来上がった就労者証明書は名刺大のカードになっていた。それをベティはアルに手渡した。

「再発行は手数料がかかりますので無くさないようにお願いします。さつそくお仕事を探されるなら、入り口入ってすぐが日雇い、もう一つ奥が短期、長くて1ヶ月程度のお仕事が掲示板に貼り出されています。こちらのお仕事を希望であれば、募集用紙の右上の数字を控えて、就労者証明書と一緒に受付にお持ちください。壁面に並んでいるキャビネットの中には長期のお仕事が入っていますが、こちらは職業更新が必要になります。まあその場合もとにかく受付に来てください」

アルは礼をいい、さつそく掲示板を見に行つた。結構な時間を受付のベティと話をしていた気もするが、暇そつだつたのでいいのだろう。アルの他には誰も掲示板を見ているものはいなかつた。

明日のご飯もないというのは本当なのでとりあえずなんでもいいからやってみるかと適当に物色してみた。引越しの手伝いなんかがよさそうだと見ていると、受付から「アルさん！」と大きな声がかけられた。

「なんでしょう？」

受付に行くとベティが一枚の紙をぱらぱらと振つていた。

「これ！ これどうですか？」

募集用紙を見てみた。どうやらこれから貼り出す分らしい。内容は屋内清掃とあった。アルは掃除なら得意な方だな、ずっとやつてたしと思つも何故これを薦めるのかといぶかしく思つた。

「掃除ならやれると思いますけど、これがどうかしましたか？」

「この依頼者です。この方はキャシーさんと書いてますが魔法使いですよ。つまく話せば魔法について教えてくれるかもしれません」

アルはそれはいい、なんとか話してみよつとの仕事を請けることにした。

「どうだった？」

職業安定所と隣の建物の間の陰に隠れていた少女がアルに声をかけた。巨乳だ。

不思議な話だがまず目がそこに向かつてしまつのは仕方がない。顔立ちも平均以上の可愛さだし、金色の髪はさらさらと腰のあたりまで真っ直ぐ流れていってとても綺麗だ。胸を含めた全身のスタイルもよい。だがこの少女を一言で表すなら先の言葉になつてしまつ。本人としては常に劣情のまなざしを受けるこの特徴を疎んじてもいた。

だがこの少女の今の状態は酷い有様で胸がどうとかいつてる場合でもなかつた。元はエプロンドレスだったと思われる服が血と泥で

汚れており、所々すり切れ、破れ、千切れ、穴が開いている。扇情的にも見えるが、それよりも痛々しさを感じさせた。まるで襲われた後のような姿だが、本人はいたつて元気そうだ。

さすがにこの状態で天下の往来に身を晒す勇気はなかつたのでこうやつて建物の隙間に身を隠していた。

「日雇い作業員ていうのに登録した。これから屋内掃除の仕事に行くよ。リーリアはどうする？ 就労証は持つてるんだっけ？」

「私は侍女で登録しますよ。立派な勤労少女です」

リーリアと呼ばれた少女は懐から自分の就労証を取り出した。片手を腰に当て胸を張りアルに自慢気にに付き出す。胸ばつか見るなとかいう癖に無意識に強調しちゃうんだもんなあとアルは思つたが口に出すのは自重した。

「ふーん、じゃ一人で行つてもいいのかな。その場合は給金は一人分なんだろうか。募集は一人だつたし」

「確かにねえ。余分な報酬は用意してないかも」

「まあお金もいるんだけど、魔法について聞きたいんだ。これから行くのは魔法使いの家なんだよ」

「え？ 本当に職安で魔法の事聞けたの？」

「なんだよそれ、さてはわかつてたんだな。受付のお姉さんにすつごい変な顔されたよ」

「それより、私の服どうにかしてよ。いつまでもこんなの嫌だよ」

「僕お金持つてないし無理だよ。それにリーリアの服まで僕が用意するのか？ 出来れば自分でなんとかして欲しいんだけど」

「私もお金持つてないし、うちまで遠いしどうして言うのよー。」

「一人は一文無しだった。

アルはシンプルなズボンとシャツを着ている。手にはズタ袋を持っているが中に入っているのは、少量の食料と火起こしの道具、ナイフ、毛布が一枚ぐらいのものだつた。

リーリアはぼろぼろの服のみでポケットに入っているのは先ほど見せた就労証だけだつた。身分証明に使うことが多いのでこれだけは持ち歩いていたようだ。

「まあ余裕があればリーリアの服のことも考えてみるよ。これから街で生活するならとにかくお金はいるし、この仕事をしてみる。今更森に戻る気もないし」

「その仕事いくら貰えるの？」

アルは紹介状を確認した。

「えーと、一万リル。作業内容は屋内清掃としか書いてない。あまりお金に詳しくないんだけど、一万リルってどれぐらいの価値なの？」

「一万かあ、古着なら結構貰えるかな、そちらのお店でお昼食べるといたいみたい1000リルぐらい？ 宿屋素泊まりで3000リルかな」

「なんでもまあ服の話なんだよ。でもやつになると1万リルで一人が1田過」すのは厳しいのか？……ねえ、例えばだけども、ナヒラくんで野宿するなどどうなる？」

「巡回員に見つかったら街追い出されると困つよ。せつかく取つた就労証も取り消されるかも」

「うーん、あ、本で読んだんだけど、ナヒラ大きな街の周辺だと、貧民街みたいなのがあるんじゃな」の？

「ちよつとー、女の子をどこに連れてく気よー、なんでそんな危ない所！」

「あるの？」

「……確かベイヤー街だと、北側の壁の外側にあるつて聞いたけど、そんなどこ行くの絶対やだからね！」

「まあ、リーリアはともかく僕も荒事は得意じゃない。最悪街の外で野宿か」

「私も得意じゃないよー、え？ やつと街まで来たのにまた野宿するの？」

「まあ、1万リルでもいいからとにかく手に入れよう」

「はあ、ナヒラの格好で街を歩くの嫌だなあ……」

リーリアは自分の様子をあらためて確認してため息を付いた。これはひどすぎる。ナヒラの街までやつてくるのに2週間近くこの格好で

過ごしているが慣れるわけもない。

ここまででは道中出来るだけ人目につかないようにしてきただが、街

についた以上そういうわけにも行かない。

リーリアにとつてはご飯よりも泊まる所よりもまず服だった。

「毛布でも被る？」

アルの提案にリーリアは少し考えこんだが断念した。毛布を被つてうらうらするのも目立つて仕方がない。

一人は魔法使いの家に向かうことにした。

二人は散々迷った挙げ句ようやく魔法使いの家へたどり着いた。何しろ初めて来た街だし土地鑑もない。おまけに大きな街が物珍しいアルはキヨロキヨロと拳動不振だし、リーリアは格好を気にしてこそこそしている。

道を聞けばよかつたのだが、それは人前に出るのが億劫なリーリアが嫌がつた。紹介状には住所の補足として「アレがヤバイ亭のすぐそば」とあつたので最近有名なこの店の場所はそこらの人に聞けば簡単にわかつたことだろう。

結局、街路標識や案内板の地図を駆使して魔法使いの家に辿り着いたのは夕方になる頃だった。

「やつとついたね」

「アル君迷いすぎ」

「……リーリア、地図にある矢印と説明文を見て説明文の方に進んだ君に言われたくないよ。ああいう表記は矢印の先に目的地があると普通は思う」

リーリアは地図の読めない女だつた。

魔法使いの家はごく普通の佇まいの平凡なものだつた。石造りで道に面した側が狭く奥行きがあり2階建てになつていて、このあたりには似たような住宅が立ち並んでいた。

魔法使いの家と聞いて、怪しげな煙がもくもくと湧き出る不気味な森の奥の一軒家のような物を想像していたアルはその普通さに少し落胆した。

「魔法使いつて普通の家に住んでるんだね」

「私も魔法使いの知り合いはないけど、平民ならこんなものじゃないの？」

「なんかどの家も狭くない？ 何人も住めなさそうだけど」

「これはねえ、奥にびよーんと伸びてるのよ、だから中は結構広いらしいよ？ なんでも道に面してる広さで税金が変わるんだって」

リーリアは自慢気に言った。何かとアルに大して上位に立とうとする。

ふーん、そうなんだと頷きながらアルは魔法使い宅の扉の前に立ちノックを数回叩きつけた。

はーい、と気楽な感じの声が聞こえた。中でがたがたと音がする。声がしてからしばらく立つて扉が開かれた。いくら奥行きが長いといつても時間がかかりすぎだらうとアルが思つていると扉から顔を出した若い女性と目があつた。

女性はまずリーリアを見た。驚きが素直に顔に出ている。次にアルを見て、最後にもう一度リーリアを見ると何か納得したのか、静かに扉を開いた。

「え？」

二人は顔を見合せた。意味が分からない。

アルがノックをドンドンと叩く。

「すいません！ 職安の紹介で清掃の仕事をしに来たのですが！」

再び扉が開かれた。半開きだ。扉の隙間から女性が顔を出してい

る。

「いくつか言つていいかい？」

「なんなりと」

「確かに清掃の依頼はした。期限は3日以内だつたから今日来るのは別にいい。けど夕食時にくるのはどうだろ？ それと君らの格好。物乞いかと思ったよ。君の格好も酷いが、特にそつちの娘！ 熊にでも襲われたのか？ 私は掃除を頼んだんだが、君らがやると余計汚れるようにしか思えない！」

言い切つた。少し息が切れている。

アルの顔に理解の色が見えた。なるほどと頷き女性に話しかけた。

「仰る事はごもっともで言い訳のしようもないんですが何とか仕事をいただけないでしょうか？ こちらの勝手な都合で大変申し訳ないのですが今日の食べ物にも困る身の上でしてどうしてもお金がいるんです」

「なんだい、それじゃ本物の物乞いじゃないか」

そう言うと二人をじっくりと見る。アルは言い方こそ下手に出ているが立ち姿は堂々としたものだ。物怖じする様子がない。

一方、リーリアは服装の指摘で受けたショックから立ち直れず泣きそうな顔をしていた。

女性はリーリアを見つめた。憐憫が表情に出ている。同じ女として思う所があつたのだろう。しばらく考えこんだ後、ため息を付いてから言った。

「とりあえず風呂に入れてやる！ 服も貸してやるから元気だせ。あと男物はないから君は我慢しな」

女性は扉を全開にして一人を中へと誘つた。よつやく女性の姿がはつきりと見える。

威圧感のある美人だった。

肩の辺りまであるプラチナブロンドの髪は自然にうねり獅子を思わせる。肉感的な体を包む、胸元の大きく開いた赤いドレスは返り血を浴びたようでもあり、その攻めてくるような美貌に気圧されずに立ち向かえる男がいるとしたら余程の勇者だろう。背丈はアルより頭一つ分高く、スタイルの良さと合わせて圧倒的な美女を作り上げていた。

この女性こそがこの家の主、魔法使いで名をキャシーといった。

部屋に一步足を踏み入れたアルは、なるほどこれは掃除を頼みたくもなるはずだと思つた。

足の踏み場もないとは正にこの事だ。物が溢れかえつている。ゴミとそれ以外の区別がつかない。重要な物もそうでない物も一緒に渾然一体となっていた。

隣のリーリアはこの有様を見て呆然としている様に見えたが、先ほどのショックからまだ立ち直れていらないだけかも知れない。

「ここはどの部屋なんでしょうか」

「見てわかんない？ 居間だよ。応接室も兼ねている」

「「「「お密やん通すんじょつか?」」」」

「ん? 祭りは密じやないだ?」

「はい、それはわかつてますが」

「風呂は一一番奥だ」

「ありがとうござります、では早速」

アルは「「」」だかなんだかよくわからない物をかき分けて奥へ行こうとした。

「待て待て、「「」」は普通女の子が先じゃないのか?」

「はあ、やうこひものなんでしょうか。じゃあリーリア先に行つて

よ

と話を促すもリーリアは上の空だ。

「服は適当に見繕つて置いておく。終わったら寝室に来ててくれ。そこが一番ましな部屋だ」

「じゃあどうあえず寝室までは一緒に行きましょうか

「がせ」「」と荷物をよけながらアルたちは進んだ。よけてもよけても奥の何かがずり落ちてくるためちつとも前に進まない。これを片付けるとしたら1万リルは安いんじゃないかもアルは思つ。

居間を出ると長い廊下が続いている。廊下に面して部屋が4つあり一番奥の部屋が風呂だった。寝室はその隣だ。居間を含めて1階

には5部屋があることになる。2階も同じ様子なら全部で10部屋ということだ。外見の印象よりも居住空間は広かつた。

その廊下も居間程でもないが物に溢れていたため、アルたちは足で荷物をどかしながら寝室まで進んだ。

「風呂とトイレは隣だ。あ、そうだ。お湯がないな。少年よ、廊下の突き当たりから裏庭に出れる。マキが積んであるから風呂釜に突っ込んで火を起こしてくれ。少女はとりあえず風呂に行って水で体を洗い流せ」

「すいません、掃除に来たのにお風呂まで使わせてもらひて

呆然としていたリーリアがやつと口を開いた。

「ああ、さつきは部屋が汚れるなんて言つてすまなかつたな。見てのとおりこれ以上汚れようもない状態だ、あまり気にしてくれるな」

「じゃお湯をわかしてきます」

「じゃあ、一通り終わったら寝室にきてくれ」

と言つてキャシーは寝室に入つていった。リーリアも風呂に入つたので、アルは裏庭に出た。

裏庭まではさすがに「ヨミで溢れているようなことはなかつた。ハーブが植わった花壇もあり、手入れもされているようで、ここだけはキャシーの家の中でもまともな雰囲気だつた。アルはさつそく風呂釜の隣においてあつたまきを風呂釜に入れ、自前の火起こしの道具で火をつけた。

薪が燃え始めた所でアルは壁に背を預け、と裏庭を眺めた。風呂が沸いてリーリアが入浴をすませるまではそれなりに時間がか

かるだろ？。

裏庭は隣家の裏庭にもつながっているし、向かいの家の裏庭も見えている。それなりに開放感があった。

なるほど、他所に迷惑をかけないように外から見えるといひはちゃんとしているのか。

そう思つと、キャシーの人となりがなんとなくわかつたよつてアルは思つた。

夕焼けで赤くなつた空を見上げるとあちらこちらの家から煙があがつているのが見えた。そりいえば夕飯時だと黙つていていたなとアルは思つた。

アルが入浴を終え脱衣所に出てみるとキャシーが男物の服を持つて立つていた。

「よお！ 探したらあるもんだな。男物もあつたよ。なんだろな、賭けで身ぐるみを剥いだか、やつてきた男が忘れていつたかそんなもんだと思つが」

「それはありがとうござります」

アルは丁寧に頭を下げる。今までの服はずつと旅で着続けていたのでかなり汚れている。せつかく風呂に入つたのにあれをもう一度着るのは気が進まないと思つていたところだった。

「しかし、なんだな、君はまったくこうこうの場面で物怖じせんな。
少しは恥ずかしがるとかないのか？」

とキャシーは全裸のアルを上から下までゆっくりと見た。意外に
引き締まつた体をしている。

「恥ずかしいんでしょうか？」

「いや、立派なものだよ」

何が、とは言わなかつた。

アルはさつそく借りた服に着替えた。単純な作りの貫頭衣だ。穴
の開いた布に手と頭を通して、腰のあたりを紐でくくるだけだ。それ
だけのものだが、今までの薄汚れた服に比べるととても清潔で氣持
ちがいいものだつた。

「すつきつした氣分です。ありがと」「やれこます」

アルはもう一度お礼を言つた。

「まあいこや。そんなものでよければやるよ。使い道もないしな
じや、寝室に行こう。簡単なもので悪いが食事もある」

「何から何まですいません。そういうば夕食時とこいつでしたね

「ああ、まあたいしたもんじやない」

二人は連れ立つて隣の寝室へと移動した。

そこには見違えるように綺麗になつたリーリアがベッドに腰掛け
ていた。アルが入つてくるのをみて少し照れたような顔をする。

入念に梳かされた金髪は窓からの夕日を受けて輝いていた。服はキャシーのものを借りたのだろう、同じような胸元の開いた赤いドレスだった。こぼれ落ちそうな双丘の創り出す谷間がアルの視線を釘付にする。服の丈はキャシーに取っては際どいミニスカートになる所だが、リーリアにとつては膝上ぐらいまでを隠すぐらいになつていた。ちらりと見える白い太ももも艶かしい。

アルは黙つて隣のキャシーの胸を見た。そしてもう一度リーリアを見る。

大きさは同じぐらいか？ だが、リーリアには若さがある。内側から弾けるような瑞瑞しい弾力を感じさせる。一方キャシーの方はリーリアと比べれば少し垂れ気味な気もする。だが問題ない範囲だろう、それも艶熟を感じさせる彩りのひとつだ。どちらが上とも言いがたい、甲乙付けがたいな……。

「アル君！ 何考えてんの！」

リーリアは顔を真っ赤にして、両腕で胸を抱くように隠しながら叫んだ。

「要約するどどつちが大きいかな？ とこいつことを考えていた」

「あはははは！ 少年！ 君は素直でいいな！ 私は好きだぞ」

「ちょ！ 何言つてるんですがキャシーさん！ アル君もジロジロ見ないで！」

「そうだな、少年。私のならいくらいでも見ていて構わないが、常識的にはあまり不躾にジロジロと女性の胸元を見るものではないな」

「やうですか。勉強になります」

アルに反省の色はほとんど見られなかつた。

「キャシーさん！ 借りておいてこんなことを言つのもなんなのですが、もう少ししなない服はないんでしょうか！」

照れたり、真つ赤になつたり、怒つたり忙しいなあとアルは思つた。口には出さない。

「ああそんな感じのものしか持つていらないな。それより胸周りのサイズがあつことに驚いたよ。丈が違つるのは当たり前としても腰回りが余つているのは少し癪だな」

「はあ、それはどうも」

リーリアも褒められたのだからなんだかよくわからなくなつてとりあえず頭を下げる。

「やういや前の服はどうしたの？ 捨てたの？」

「捨てないよ！ あれ10万リルもしたの！ 私の一張羅！」

「いや、あれは直せないだるうへ、やうですよね？」

とキャシーに話を振る。

「やうだなあ。あれはもう一度買つたほうが早いんじやないか？ まあ、とりあえず夕食にしよう。パンとスープぐらいしかないんだがな。キッチンから持つてくる。キッチンもあまり片付いていなく

てな。最近はここに食べているんだ。折りたたみの椅子が隅にあるから3脚分用意しておいてくれ」

キャシーはそういうつて食事の準備をするために寝室を出でいった。

「アル君……掃除しに来て、飯食べさせてもらうのもなんだか悪い気がするんだけど……」

「まあそりだけ渡りに船つてやつだよ。お金もないし、残つてる食料は干し肉が一欠片だけだ。どうちにしろ今日をなんとか過ごさないと明日以降ますます困ることになる。貰えるものはもらつておけ」

「アル君は度胸あるよね……」

「やうかな?」

「……アル君も着替え貸してもらえたんだね。よかつたよ、私だけ貸してもらつのも気が引けるし……そーゆー格好も似合つてるよ」

「リーリアはどうひどい格好じゃなかつたけどね、まあリーリアもそういうの似合つてるとと思つよ。わかりやすいしね」

「何が!?」

リーリアは似合つてると言われて少し頬を赤くしたが続く言葉に落胆する。褒めるならちゃんと褒めて欲しい。

アルはそんな会話を続けながらも椅子の準備をしていた。ベッド脇にあるそろそろ大きくなつたテープルの周りに椅子を設置する。キッチンからキャシーがパンの入つた籠と、トレイに乗つた3人

分のスープを持ってきた。

「「Jんなもんしかなくて悪いね」

リーリアは食事の前の祈りを捧げ、残りの二人は黙つてそれを見ている。祈りが終わった所で3人で食事を始めた。

「ああ、パン！パンよ！おいしいよ！ねえ、アル君！パンだよ！」

「見りやわかるよ。悪かつたね、干し肉ばかりで」

「……どんな食料事情だったんだ？その……「Jの娘のはしゃぎつぱりは……」

「一日に干し肉を一かじりずつで過ぐしてきました」

「……パンぐらいなら遠慮するな、もつと食つていいぞ……」

「あの……「J」まで何から何までお世話になりっぱなしなのですが、僕達職安から紹介されて掃除の仕事に来たんですけど……」

「まあ食事やら何やらは報酬の一部とこうことでいい。給金も一人分出そう。もともと何日かに分けてやってもらつつもりだったから、二人なら早く終わるだろつじつちが払う分は変わらんと思つ」

「それはありがとうござります。それで仕事内容はどのよつな感じでしようか」

「やうだな、「J」の家の中を整理して「J」がやうでないものに分けて、

「ミはミ捨て場に持つて行つてもらつ。ミがどうかわからんものは聞いてくれ。一応捨てる前の最終確認はするから常識的に判断して分別してくれればいい。それで、仕事は明日からかな。今日は泊まつていけ。その様子だと泊まる所もないんだろう?」

「そのお申し出はありがたいんですが、本当にいいんでしょうか?自分で言うのもなんなのですが、こんなどこの誰ともわからないような一人を出会つていきなり家に泊めるというのは?」

「うーん、じゃあ、就労証を出しな」

二人は言われた通りに就労証を出してキャシーに見せた。

「うん、おっけ! 一応確認はした。後はまあ、私の人を見る目の問題だろ?。君なら大丈夫だ。アル君にリーリアちゃんだな、よろしくな! 私はキャシーだ」

キャシーは一人と順に握手をした。

「でだ、このうちには今使える部屋はここしかないのだな。幸いベッドが大きいしここで3人で寝ることになるが構わんよな?」

とキャシーは平民の常識で言った。この家には部屋もありベッドも複数あるため当てはまらないが、平民は普通家族で大きめのベッドを共有して一緒に使っている。家族でなかつたとしてもそれほど抵抗はない。

「はい、いいですよ」

アルの常識も似たようなものだつた。昔住んでいた場所では母親

と一緒に寝ていたのをいつのまにかと迷っていた。

「えー、ちゅうとー、なんでそいつがここになるんですかー。」

リーリアは少し違った。彼女の家は裕福で子供の頃から一人部屋を佔えられ、プライバシーの守られた空間で寝起きするのが当たり前だった。

「いや、もう言つてもな。使えるのせのベッドだけなんだが」

「リーリア、わがまま言つなよ……せっかく泊めてもりえの野宿は嫌だつてあんなに言つてたじやないか」

「え？ え？ わがままなの？ いやそれちうじや？ え？ おかしいですよ？」

「嫌ならリーリアは床で寝ればいいんじやないか？」

「ちゅうとー、それぢうこいつー、なんでキャシーさんと寝るの？」

「あー。」

「寝るつて……なんかいやらしくて言つ方だな」

「ちがーうー。」

リーリアの叫びが夕闇の街に響き渡った。

3話 掃除（前書き）

すいません、全然話進んできません。

「あなたはなぜ床で寝ていいのでしょうか？ お仕置きをされているのですか？」

そんな声でアルは目覚めた。

眼の前にはまだ夢を見ているのかと目を疑うような美しい少女の顔があつた。少女はアルの側にしゃがみ込み上から覗き込んでいる。え？ 誰？

キャシーから家族構成を聞いた覚えはないが勝手に一人暮らしだと思い込んでいたアルは混乱した。

昨日はどこで寝るかで散々揉め、結局アルが床で寝る以外の選択を頑なに拒否したリーリアのせいでこのような状況に至っていた。夕食後は特にすることもなく早めに寝たのだが、それまでの間に3人以外の気配を感じたことはなかつた。

「おはようござこます……君……キャシーさんの妹さん？」

「さて？ キャシーさんとはどなたのことでしょうか？」

黒衣の少女は可愛らしく首をかしげる。まだ寝起きで頭のはつきりしないアルもなんだかおかしな気がしてきた。

「……どこから来たの？」

家中でする質問じゃないなあ、とアルも思つたが思わず口をついた。

「そこの窓からです」

「泥棒！？」

「まさか盗んだりはしませんよ。私は朝の散歩をしていて家と家の間をまたま通った所、床で寝ているあなたをみかけて何故床で寝ているのか聞いてみたくて入ってきたのです」

「え？ 駄目だらう？ それは？」

「駄目なんでしょうが？」

会話がかみ合っていない。

「それあなたが床で寝てるのはどうしてなんですか？ ベッドが嫌いなんでしょうか。私もたまに外で寝転んだりするのでもその気持ちはわからなくもないですよ」

「あー、ベッドで寝ようと思つたんだけれど、その女の子と一緒に寝るのは嫌だと言わされて仕方なくだよ」

「言つてゐるうちになんだか負けたような気がしてきたアルは少し落ち込んだ。

「闇を共にするのを断られたといつことは……振られたのでしょうか？」

思わず、振られてないよー」と反論しようとしたが、それを抑えように少女の手が頭に伸びてきてなでられた。慰めているのだろう。

「勝手に人の家に入つてこないでよ

「ルルはあなたのお家ですか？」

「違うけど」

「ではあなたと私の立場は同じなのではないでしょうか？」

「僕はこのうちの主人のキャシーさん」泊めてもらつてゐる。勝手に入つたわけじゃない

「では私もキャシーさんに許可を得ればいいのですね。そちらの方ですか？」

少女は立ち上がりベッドの方に向かつ。そして、おお！ といふ声を上げた。口を丸くしている。

「大きいですよ！」

何が？ とアルが上体を起こしそちらを見ると少女はネグリジェ姿のリーリアを指さしていた。その先には仰向けながらも重力に逆らう見事な膨らみがある。普通彼女程の大きさでこの状態なら押し潰されるように広がるものだが彼女の胸はネグリジェを形よく押し上げていた。

ネグリジェもキャシーから借りたものだ。キャシーとおそろいで無闇に扇情的な作りになつてゐる。ベビードールと呼ばれるものに近い。ちなみにアルの格好はそのままだ。男物の寝間着はなかつたらしい。

「フルンフルンですよ！」

少女はあつせつとリーリアの胸に手を伸ばし胸を左右からせつと押さえ離した。反動でたゆん、と揺れる。少女はそれだけでは飽きたらず驚掴みになるとムニコムニコと動かし始めた。柔らかな塊が少女の小さな手の中には収まりきらす血在に形を変える。

なにやつてんのこの人！

と思つも田が離せない。

「んつ……アル君……やめて……んん……」

なんだか悩ましげな寝言まで言い始めた。

なんで僕がやつてることになつてるんだよ。

「せり！ 面白いですかよー！」

少女は嬉々としてリーリアの胸を弄んでいる。
僕この状況でビリしたらいいんだね！

「おはよつ少年。なんだ我慢しきれなくなつたのか？ こんな状況で勇氣があるな……つて誰だお前は？」

キャシーが目覚めてにやつきながら言つたのだが途端に表情を変えた。

「おはよつじやこます。あなたがキャシーさんでしようか。それともこのむこむにの方がキャシーさんでしようか？」

いい加減しつじよ。といつかリーリアもせつと起きるよ。少女はリーリアを揉みしだきながらキャシーに挨拶をしていた。

「私がキャシーだが……ああ、お前は大魔王か。私のつむぎまで来るのはな。うちにたかりにきても大したものはないぞ」

「大したものはさつきから触りますよ」

「……いい加減やめてやつてくれないか……おもちゃじゃないんだ、それは」

少女は素直に言つことを聞いた。たつぱり堪能したようどても満足そうだった。

「何しに来たんだ?」

「……揉みに?」

少女は自分でもよくわからないという態度を見せた。最初の理由はもうすっかりどこかへ行つている。

「なんか僕が床に寝てるのが気になつて聞きに来たそですが、お知り合いですか?」

「……間近で見るのはこれが初めてだが……」この国で一番えらい人間だ。いや、人間なのか? 大魔王様らしいぞ」

「大魔王様という割には存在な扱いですね。こんな口の聞き方でいいんでしょうか?」

本人の前で言つようなことではなかつたがキャシーの態度から許される気がしたアルは思つたことをそのまま言つた。

「ああ別に口の聞き方は気にしないという噂だな。実際本人も気にしない感じだしな」

「ええ好きなように話してくださいません」

「その……魔族なの？ そうは見えないんだけど」

大魔王などと言われてそのまま信じることは到底できない。アルの知る魔族は全員が黒い肌をしていたし、魔王も見たことがあつたがとても威圧感のある存在だった。とてもこのような少女がそれらの上に君臨しているものとは思えない。それに大魔王は魔族領の奥地へ、魔族国家エルシアからは滅多に出てこないはずだ。

「魔族じゃないですよ。多分あなた達が大魔王と聞いて想像する存在と私は異なるものです」

アルはそれを聞いて少し納得した。彼の知る魔族とはやはり違うと思ったからだ。

リーリアがようやく目覚めた。目を擦りながら上体を起こす。キヨロキヨロとあたりを見回し場の微妙な空気に戸惑った。

「おはよおひやこます。……おひぱーさん？」

大魔王の挨拶に、リーリアが泣きそうな顔でアルを見た。

「アル君……目が覚めたらよくわからない美人さんがいて、私のことをおっぱいって言つただけどどうしたらいいんだろう？」

「笑うしかないんじゃないかな？」

アルは投げやりに応えた。この状況をつまへ説明する解答を持ち合わせてはいなかつた。

朝の食卓。寝室に設けられたそれはせせこましいことになつていだ。本来ダイニングテーブルとしての用途など考えられていない小さなテーブルの上にパンがありそれを4人で囲んでいる。あれから、着替えるからとアルは廊下に追い出されついでにキッチンから食事を運ぶ役目を任せた。キッチンも散々な状態だったがなんとかパンを発掘すると寝室に戻つて来た。

「堅いですね」

大魔王がパンに文句を付ける。

「勝手に食べといて文句を言つんじやない。まあ賞味期限ぎりぎりではあるだろうな。いい加減部屋を片付けないと生活もままならなくなつてきた」

キャシーがぼやく。

「え？ パンおいしいですよ？」

リーリアはなんでもいいようだ。本来もつと豪華な朝食も食べていただろうつ裕福な家庭で過ごしてはいたはずだが、ここ最近の旅でなんでもおいしく食べれるようになつていた。

「今朝からせっかく掃除を始めればいいんでしょうか?」

「そうだな、じゃ朝食が終わったら早速やってもらおうか。ゴミと思われるものは一旦裏庭に出してくれ。ある程度たまつたらゴミ捨て場に持つて行ってもらおう」

「わかりました。ゴミ捨て場はどこなんでしょう?」

「ああ、忘れていた。困ったな。北壁の外だ。そっちがゴミ田舎でにかスラムが出来るからな。子供一人だと危ないかもしれん。少量のゴミなら業者が定期的に回収しているんだが、大量に出そうだからな。どうしても直接捨てに行く必要がある」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。僕……いや、リーリアはとても強いです」

「強くないよ!?」

リーリアが即座に言い返す。そんな理不尽なことを言われても困るといったところだ。

「まあ今日のところは一旦ゴミをまとめよ。運ぶのはそれからだな

掃除は一階の廊下から始めた。昨日はアル達も相当汚れて臭っているためあまり気にしなかったが結構生ごみの類もあるよつだ。生ごみであればわかりやすいのでそれらをまとめ裏庭に出す。

このあたりは侍女をやっていたというリーリアもできぱまとこんなしていった。

何故か大魔王もそのまま居座りゴミを運んでくる。何をどうじろ

とも言つていないので、何をするかはわかっているようだ。

掃除を始めるとそこら辺に転がっているものはもつ全てゴミと判断してもいいと思えてきたので途中からはペースがあがり、昼には廊下の片付けは終わった。

昼時になると大魔王は「飯を食べに行くと言つて窓から出でいった。まだ居間はゴミで溢れかえっているのでそのまま手つ取り早いのだろう。

アル達も昼食を食べると、居間に手をつけた。こちらは若干判断に困るものもあつたがやはりほとんどはゴミだ。アルとリーリアは協力して手早く裏庭にゴミを運んでいった。

夕方になる頃には居間にあつた荷物はほとんど運び出せていた。居間を整頓するにはもう少しかかりそつだが一山は超えたといつとこりだ。裏庭には大量のゴミが山と積まれていた。

「調子にのつて運びだしたのはいいけど、これを持っていくのは大変だな」

アルがゴミの山を見上げる。

「手押し車が何かで運べばいいのかな?」

リーリアも呆れたよつて裏庭を見渡す。ほぼ裏庭いっぱいになつていた。これ以上ゴミをここに集めるのは無理だろう。

「今日はここまでだね。お疲れ様」

「うん、アル君もお疲れ」

アルはそこで何かに気がついたような顔をした。

「どうしたの？ アル君？」

「……魔法のことをするつかり忘れていた！」

「で、あらためてなんだい？」

今日の掃除を終え、一風呂浴び、夕食を終えた所でアルがキャシーに相談があると話しかけた。

「実はキャシーさんの家の掃除依頼を引き受けたのには、お金に困っていたというのもあるんですがそれ以外にも理由があるんです」

「ふむ」

「キャシーさんは魔法使いなんですね？」

「ん？ どこで聞いた？ 隠してはいけないが、公言しているわけでもないんだがな」

「職安のベティさんから聞いたんですが

「ああ、あいつか。あいつは私の姪だよ。なるほどね」

姪と言われてアルは訝しげに思つた。どう見ても姪と叔母といつほど年齢が離れているように思えない。どちらかと言えばキャシーの方が若く見えるぐらいだ。

「まあ魔法使いではあるんだがな。そりゃえば私の職業を言つてなかつたかな？ 彫金細工をやつてこる。アクセサリー作りだ。世間一般的にはそれで通つている」

「魔法使いになりたいんです。職安では魔法使いのなりかたは教えてもらえませんでした。魔法使いの方なら何か教えていただけるんじゃないかと思つたんです」

「そりや、職安で魔法使いにはなれんだろう。んー、しかしどうかな、魔法か……。教えてもいいんだが、只というわけにもいかないんだ。魔法の知識はそう世間に広まつてゐるわけじゃない。そこそこ値が張るんだよ。秘伝だからね。多分君たちの今回の仕事の給金じや払いきれるかどうか。せつかくお金を得る機会を得たんだ。また無一文に戻るのもどうかと思つが」

「そりなんですか……」

「アル君、もうやめとこりよ。掃除でお金結構もらえたし。これが終わつたら私の街に行こりよ。私も実家に顔を出したいし。お金があつたら馬車で行けるよ」

「……何かお金以外で支払うことは出来ませんか？」

「ちよつ！ なに考へてんのアル君！」

リーリアが慌てた。アルは不思議そつたな顔をする。

「何つて……もしかして体で払つとか言つたども思ったのか？ そんなんわけないだろ？」

図星だったのかリーリアが顔を真赤にした。

「体か……悪くはないが……」

「キャシーさんも乗らないでください……」

「まあ半分冗談だ。しかし君の様子を見るに体以外で支払えそうなものもなさそうだが」

「半分だけなの！ とせりに纏わしそうなリーリアを押さえてアルが言った。

「そうですね……では、じうじうのはどうですか。僕達の身の上話です。なぜ僕達があんな格好で旅を続けてここにやつってきたのか？ 興味はありませんか？」

「ほう？」

キャシーの興味を引けたようだ。

「……確かに気になるところはあるな。これまで話を促してもそれとなくかわされてきた。出合つてすぐに言われても興味を持たなかつたかも知れないが……2日も一緒にいてそれなりお互いのことを知るようになると、そこに興味が行くのは確かだが……これは計算のうちかね？」

「そうですね、それもありましたが、あまりおおっぴらにすることでもないとも思つてました」

「ふむ……まあいいよ。魔法について教えてやる!」

「いいんですか!」

「ああは言ったが別に魔法の情報の値段なんて適当だしな。前に教えてやつた奴からそれぐらいぶんどつたといつだけのことだ。私の胸三寸とこやつだな。それにどじまで教えるかにもよる。とりあえずは基本的なことは教えてやる!」

「僕の話はいいんですか?」

「それは後でもいいよ。魔法講座の基本が終わったら聞かせてもらおうか」

アル達はそろつて居間へ移動した。ここの方が何かと都合がいいといつ話で、ここで魔法講座が始められた。

* * * * *

マテウ国側の命名によると第3魔族領と呼ばれていた森、その奥深く魔王城のあつたあたりから少し離れた川沿いに一件の小屋が立つていた。

そう大きいものでも無い。木造の小屋で平民なら4、5人が暮らせるぐらいのものだ。

中に入ると目につくのは一面を覆う本棚だ。そこには本がみつりと詰まっていた。どれもかなり読み込んだものか手垢に塗れている。内容は人間の文化や、戦争、戦闘に関するものが多くった。

他にあるのは大きめのベッドや、ダイニングテーブルなどありき

たりのものだ。

人が住んでいる気配はないが、住まなくなつてからそう時間が経つてないのかそれほど荒れてはいない。住人が出て行く前に整頓したのか整然とした室内だった。

そこに一人の男が立っていた。怜俐な美貌を持つ瘦身の青年だ。黒いマントを羽織り、右手には節くれだつた木の枝から作られた杖を持っている。左手に持つのは人間の子供だ。裸の赤ん坊の首根っこを掴んでいる。およそ人の情を持つものが出来る持ち方ではなかつた。

男は部屋の中を見回すと子供をゴミのように放り投げた。この男に取つて必要なくなつたということなのだろう。赤ん坊はまだ生きてはいるのだろうが、ほとんど動くことはなかつた。このままここに放置されるのならもう幾許の寿命も残されてはいないう。開け放された扉から一人の少女が入つてきた。まだ幼い少女は男に報告を行つた。

「この魔族領は既に崩壊しています。魔王アルベリクは勇者の手で倒されました。すでに人間による入植が行われています」

「人間風情に倒せる魔王か、不甲斐ないな」

「テオバルト様も人間では……」

途端、杖が振るわれた。男が容赦なく少女の顔を殴りつけると少女の口の端が切れ血が垂れ落ちた。

だがそれだけだ。貴族でない人間の全力などたかが知れている。少女にとつてそれは常のことであり特ににも感じないし、失言をしたとも思つていな。戯れに殴り飛ばそうが全く動じる所のないそれは男にとつて頑丈なおもちゃに過ぎなかつた。

「前のが失敗したからな、次を育てさせようと思つたが無駄足だつたか。前のはどうした？ 勇者とやらに殺されたか？」

「いえ、人間に保護されたようです。最初の勇者は一度帰還し、別の勇者が残党の殲滅にやつて来ました。その折に人間に保護されたようです。その後の消息は不明ですが、首都の施設を紹介したもののがありますので恐らくはそちらへ向かつたのでしきつ」

「生きているなら回収しよう。あれは中途半端だが、その状態で身体各部、特に脳がどうなつているか見ておくのは研究の一助になるだろつ」

「では首都ベイヤーへ向かいますか？」

「そうだな」

男は小屋を出た。しばらく往くと小屋が突如として炎に包まれた。男はそれを確認もせずにそのまま立ち去つた。

開拓団からの定期連絡が途絶えたとの報を受け急使が走つた。辺り着いた彼らが見たのは全てが焼き払われ一切が灰と化した荒野だつた。

彼らは魔族領全域の完全焼失と開拓団300名、勇者率いる第2、3遊撃隊の8名の全滅を報告した。

4話 講義（前書き）

今日は会話による説明ばかりです。すいません。
こんなひがいの読んでられるか！ といつ方もおいでいるかも…
…。

続きは読んでやってもいいが設定説明ばっか読むのもどうか。
とこつ方のために後書きに今回の説明をまとめておきましたのでそ
ちらだけでも御覧ください

多少は片付いた居間に3人は集まつた。応接室としても使つているということでソファーとローテーブルがある。そこにアルとリリアが並んで座り、向かいにキャシーが座つた。

テーブルには、いっぱいに満たした水差しとコップが用意してある。長い話になると思ったのかキャシーが運んできたものだ。

「まあこの後その辺についても話してもらひえるのかもしれんがまず聞いておひつか。何故魔法使いになりたい？」

「……力がいります」

「それは、剣や槍では駄目かね？ そちらの道場で教わればそこそこは強くなれると思うが」

「キャシーさん見て、僕が剣を習つたとしてどれぐらい強くなれると思ひますか？」

「ふむ、中々締まつた体付きをしていたな。それなりに鍛えていたのか。でもまあ、そう言われるとな、平民がどれだけ鍛えたとしても貴族には到底及ばんし……街の力自慢といった所がせいぜいだろうな」

リーリアは、え？ どーで見たの？ と言おうとしたが、アルの真剣な様子に押し黙つた。とても口を挟めるような雰囲気ではない。

「それでは駄目です。話にもならない」

「貴族にでも挑むつむりか？ それはやめておいたほうがいいと思うが……そういうわけでもないのか」

「貴族なら倒すのに力はいらないでしょう。肉体的に及ばなくとも策を弄すればどうどもなると思います。彼らは少々頑丈なだけのただの人間です」

「ほう、大きく出たな。まあ平民が力を得るには魔法が手っ取り早いだろうがな。しかしながら、ただの人間が覚悟もなしに身につけるようなものでもないな。魔法は確かにアル君が求めるような力だよ。それは剣や弓と同じ様な武装と言える。ただし、剣や弓と違つてその武装は目に見えない。想像してみてくれ、見えない剣を身につけて極普通の平民のふりをした奴が街に紛れ込んでいる。これがどれだけ危ないことかはわかるだろう？ こんな奴がほいほいってみろ。治安の維持なんて出きつこない。だから魔法使いにはそれなりの自制心やら克己心やらが求められるし、軽々しく魔法を使いやつを制裁する自浄作用も求められる」

「そういう簡単には魔法は教えないということでしょうか」

「そうだな、魔法を使えるかどうかは、知識の有無だけだ。誰にでも使える可能性はある。だからこそ魔法を教えていい相手は厳選する。……普通はな。まあ金があるなら魔法学院に行けばいい。あそこなら誰にでもとは言わないが、条件さえ合えば教えてくれる」

「僕では無理ですか？」

「無理つてことは無いんだが……私がアル君を魔法使いにするのは難しいな。こればかりは相性がな。普通は弟子にして様子を見たりする、魔法を伝授するに相応しい相手かをな。こう言つてはなんだ

が君とは出会つてまだ2日目だ。まだ判断は付きかねるね

「……僕に魔法を使う資格がないというならそれはそれで構いません。なら僕は魔法に打ち勝つ方法が知りたい。魔法使いを倒す方法が知りたい！」

今までのアルにはなかつた熱のこもつた口調だつた。目には奇妙な光を帯びている。様々な感情が垣間見えた。

「なるほど。だが別に魔法使いを倒すのは難しくはないぞ？ 例えば私とアル君が今からヨーデン！ で、戦いを始めればまず私が負けるな。けど知りたいのはそんなことじやないよな。まあいいさ、まずは基本的なことを教えようか」

「まずは魔法の種類から入るのがわかりやすいか。横軸に契約魔法、神聖魔法、精霊魔法の3種。これらの違いは魔法の考え方の違いだな。次に縦軸、因果魔法、奇跡魔法の2種。これはどういった原理で魔法現象を発生させるかの違い」

「まあ考え方の違いはそう重要じやないな。どれも魔法としては同じ原理だ。なので魔法の原理から教えるとしよう」

「因果魔法はこの世界のルールから外れない範囲で現象を起こす。奇跡魔法はこの世界のルールから外れたように見える現象でも起せる。まあこの2つも究極的には同じ原理だとされている。要は火のない所に煙を立たせるのが奇跡魔法だ。それに対して火のある所から出てきた煙が自分の都合のいいようにたまたま動くのが因果魔法といふところか」

アルとリーリア、二人が揃つて首を傾げる。よく分からぬらし

い。

「因果魔法てのは偶然こうなりましたってことだ。確率の操作といつてもいい。全体のエネルギーの総和は変わらんといつことなんだが……」

そりに首をかしげる一人。

「まあ絶対に起こりっこなことは起こせないってことだ」

「え？ それはおかしくないですか？ 物を燃やす魔法とか、怪我を治す魔法があると本で読んだことがあります。そんなことがたまたま起こるんですか？」

「起こるんだ。すこく低い確率でね。物が勝手に燃え出すことはある。例えばこの机だが、この机が勝手に燃え出すことは理論上はありえる。ただ一生この机を見張っていても燃え出すことはないだらうがね」

そう言つて目の前の机をキャシーは指をした。

「怪我にしてもそうだ。切り傷が出来たとしよう。別に魔法を使わなくても怪我は治る。何故だと思つ？」

そう言わるとアルには分からぬ。

「これも簡単に言つとだ、体を作つている細かい部品が傷口に集まつてきてその部分を作り直している。でだ、たまたま何故か傷口を作りなおす部品が集まってきた、というのもありえないことじやないだろ？ 魔法はそういう状態を作り出せる。でもこれも程度問

題だ。大怪我になればなるほど、魔法でも治療は難しくなる

「これらは物質の性質を知るとよくわかるんだが、その物質の性質を超える変化を起こすことは基本的には出来ない」

「例えばこの水だな」

そうこうしてキャシーはロップに口をつけた。

「水は冷たくなれば凍るし、沸騰させれば蒸発する、といった性質を持つがこの性質は因果魔法では変えられない

「え？ え？ どうこう」となんですか？ もう全然わからないんですね」

リーリアが混乱した。話についていけない。

「まあ、今のところは、簡単に起きそうな事は魔法で再現しやすい。起きなさそうなことは魔法で再現しにくい。という当たり前のことを言つていただけだな」

「で、次は奇跡魔法だが、こちらについてはあまり気にしなくてもいいな。普通は使わないし、使えない。先ほど説明した因果魔法で出来ない、正に奇跡を起こすことが出来る。これも、物質を非常に細かく分けていくと出てくる最小単位のふるまいに対する確率操作ということで、規模の違いらしいんだが、目に見える現象は全然違うな」

「魔法の種類についてはこんなものか。では次は魔力についてかな。魔法を使うには魔力を使う。この魔力というものは何にでもある。

この机にあるし、私にも、アル君にも、リーリアちゃんにも何にでもある」

「魔力は存在力とも我力とも呼ばれる。魔力の多寡はその存在の力強さそのものだ。存在感と言うやつだな。同じような体格の人間がいるとして、一方が武術の達人だというならその達人の方が魔力が多いな。ほらそーゆー達人には強者の気配というか物々しい雰囲気があるだろう？ 気の強いやつもそうだ。逆に気弱で自己主張に乏しい奴は魔力が少ないから魔法使いには向かない」

「だからまあ、アル君もリーリアちゃんも魔法使いに向いているな」

「え？ 私がですか？」

「顔が可愛くてスタイルがよくて胸も大きい。存在感はあるだろう？」

そう真っ直ぐ言われてリーリアは照れた。

「で、この魔力だが半分以上失うと存在が維持できなくなると言わっているな。人間なら死ぬし、石なんかだとボロボロと崩れて砂みたいになる」

「半分までなら大丈夫だ。自然に回復してそのうち元の状態に戻る」

「だからまあ最大限注意する必要があるんだが、この魔力量と言うのは客観的に定量化する方法が存在しない」

「魔力が減っている人を見ても、最近この人疲れてるのかなあ、と感じるぐらいのものだし、本人もそうだな。疲れたなあ、ぐらいの

ものだらう。減つてゐるのは存在感というか人間力というかそんな感じのものだ。人間そのものが希薄になる。ああ体が透明になつたりとかそういうことじやないぞ。気配とかそーゆーものだ」

「だから、「なんだこの強大な魔力は！」なんていうのはないな。別にどんな大魔法使いを見たつて魔力量なんてわからんよ」

急に演技がかつた大声を出されたリーリアはびくつとした。アルは特に変わりなく、なにやつてんのこの人、という生暖かい目で見つめていた。

「まあ、あまり魔法は使いすぎるなと言つことだ。限界はやつてゐるうちになんとなくわかるがギリギリまで使うもんじやないな」

「魔力がその存在を定義する。人間が人間でいられるのは人間であろうとする魔力が存在するからだな」

「その説明ですと、人間が死ぬというのはどういふことなんですか？」

「まあ生物と元生物のただの物体をわけるのが、生物の魔力ということだな。なので死体には当然、死体という存在の魔力が存在する。まあその死体も放つておけば土に帰るわけだ。それも死体という状態をだんだん維持できなくなるからだな、その際にも死体という存在の魔力が失われていつているわけだ」

「それは……この家があんな状態だつたというのと同じようなことでしょうか？」

「む？ そう言わると忸怩たるものがあるんだが、ま、そうだな、

誰も何もしなければあんな風にどんどん汚くなつていくが、このよう掃除をすれば綺麗になる。例えるならこの場合、アル君とリリアちゃんがこの部屋を元の状態に維持しようとすると魔力といつてなるな。この例えでいうなら、死ぬというのは、アル君とリリアちゃんがいなくなつて誰もこの部屋を片付けなくなつて、限界まで部屋が荒れる、という状態かな

「でも、普通はあんな状態にはならないよな」

アルはぼそりと誰にも聞こえないようにつぶやいた。

「まあ、このへんはなんとなくでいいんだがな。別にこのあたりのことを知っていた所で魔法を使うにはあまり関係がない。一応これで原理的な所と魔力については話したわけだが……えー、コホン。ここでお知らせがある」

キャシーはあらためて咳払いをし、イタズラでも思いついた子供のような、にやついた顔をして言った。

「実は人間には魔力を操る術がない、よつて人間に魔法は使えない

「へ？」

二人は間抜けな顔をして言った。多分このような顔を見たかつたのだろうキャシーはそれに十分満足した。

「うんうん、初めて聞いた奴は大抵そんな顔をする」

「まあ考えてみればあたりまえの話だ。リーリアちゃん、魔力を操つてみたまえ」

「え？ そんなこと言われても出来ませんよ…」

リーリアは戸惑った。急にそんなことを言われても出来ないものは出来ない。

「まあそうだな。実際私も魔力なんぞ操れんし、そう言われても困るな。アル君はどう思つ？ 魔力を操るとしてどうすればいいと思う？」

「何か強力にイメージするとか、精神集中するとか？」

「まあ世間的には魔法使いはそんな感じのことをやつているようだと思つてゐるのかな。でも心に思つたことで物理的に干渉するなど出来るはずもない。そんなことが出来るなら、思春期の少年の周りなど大変なことになるな」

キャシーはにやりと笑う。

「でだ、最初の話に戻るんだが魔法の横軸の3種。契約魔法、神聖魔法、精霊魔法だ。これらは全て他力本願だな。要は何かにお願いしてやつてもらつわけだ」

「精霊魔法は産まれついてのものだな。何故か精霊に好かれ、精霊と意思を通わせることの出来る存在がたまに生まれてくる。こいつらは精霊に命令して様々なことをやらせることが出来る。好かれ方

は様々だ。特定の精霊にのみ好かれる奴もいるし、複数の精霊に好かれる奴もいる。聖剣の勇者は4元素の精霊を使役できると聞いたな

「神聖魔法は中央正教の神職が使うものだ。神様にお願いして色々やつてもらうつてことだな。これは中央正教で司祭やらになる修行をすれば使えるようになる」

「そして契約魔法。普通は魔法使いとはこれの使い手を指す。これは悪魔と契約して力を貸してもらうという魔法だ。君らが使えるようになるとしてもこれだな。精霊魔法は生来のものだし、神聖魔法は子供の頃からの修行が必要だ。今更無理だろ。それらに比べれば契約魔法はまだ可能性がある」

「私は子供の頃から教会でお祈りしてますけど神聖魔法は駄目なんでしょうか」

「それはだな、神聖魔法をかけてもらつ側としてはいいんだが、使う側としては駄目だな。なんでも特殊な祈祷を長年続けて初めて神の力を借りれるようになるらしいしな。そんな修行はしていないだろう?」

「はい……普通のお祈りしかしてません」

「ちよつと残念そうだった。その心の内には怪我したアルを祈りで癒す神官服を来たリーリアがいたようだ。

「それはそうと神聖魔法は色々制限があるんだ。さつきも言つたように信者にしか有効では無いとかな。なので神聖魔法の癒しなんかは私には効かない。まあ悪魔と契約してる時点で信者じゃないから

な、当然なんだが

「アル君も食事の時にお祈りをしていなかつたから信者と言つわけでもないんだろう?」

「はい。では僕も神聖魔法では怪我を治してもらつたりは出来ないと言つ」としうづか

「そうだね。まあ今からでも入信して毎日お祈りを捧げればいいんだろうが今更だな」

「で、契約魔法だが、これは悪魔を呼び出す儀式をして契約をする。儀式の方法は一門の秘伝だな。門外不出だ。ぶつちやけこの契約の儀式さえ知つていれば魔法使いになれる。なのでそう簡単には教えない」

「でだ、魔法使いの実力とは即ち契約している悪魔の実力だ。本人の力は一切関係ない。まあ魔力は本人のものが使われるからそこは関係あるか」

「なので強力な魔法使いとは、強力な悪魔と契約しているものを指す。そのために必要なのは交渉力だな。そして悪魔は基本的にメンクイだ。なのでまとめる強い魔法使いとは、見目麗しく社交的な奴ということになる、私のようにな」

「え?」

「いやいや、そこで疑問を持たれると悲しくなるだろ」

「いえ、キャシーさんはお美しいとは思つんですが、なんだか思つ

ていたのと少し違いました

「魔法使いというのは精神修行をしたり、魔法の研究をしているわけじゃないんだ。日々コミュニケーション能力を鍛え美貌に磨きをかけている。魔法の研究なんてしたところで、自分で魔力を操れない以上興味本位の暇つぶしにしかならんよ」

「だからな、魔法学院なんて行ってみる、美少年、美少女のバーゲンセールだ。一山いぐりつてぐらいにうじやうじやいるぞ」

「悪魔と契約し、美貌でたぶらかして有利な条件で契約を結ぶ。契約は魔法一つずつというのもあるし、定期的に契約を更新する悪魔もいる。いろいろだな。何にしろ、悪魔の性格やら趣味嗜好を把握し交渉する実力。これがイコール魔法使いの実力だ」

「悪魔つてのも結構ややこしくてな、悪魔同士でも上下関係やら、交流関係やら、敵対関係やらがある。それらの把握も重要だ」

「で、私がアル君に魔法を教えるのが難しいと言つたのはつまりだ
な、私の契約している悪魔は全て男だ。私の知つている儀式を教え
たとしても、男の悪魔は普通男とは契約しないな。まあ、男色の悪
魔もいないことはないが、私は知らない」

「逆にリーリアちゃんなら向いてるな。あいつらおっぱい大好きだからな、リーリアちゃんなら一つ返事で契約するだろ?」

「え？ いや、その、それはなんかいやな感じがするんですけど」

リーリアは困った顔をした。 おっぱい見て大喜びで契約する悪魔なんか嫌過ぎる。

「だから、アル君が魔法を使いたいなら、女の悪魔を呼び出す儀式が必要だ。まあ、アルくんも中々の美少年だとは思つので見た目は問題ないと思うんだが」

「そ、その女の悪魔って響きがその、いやらしい感じがするんですけど……」

リーリアがおずおずと問う。頭の中では何故か全裸の女悪魔が悩ましげなポーズを取つていた。

「……何を考えたかはわかるがあいつら実体はこっち側に出てこれない。姿を表すときもなんだか、もやっとした影のような感じだな。まあ依り代を準備したりすればその限りでもないが。だからリーリアちゃんが心配するようなことはないよ」

キャシーはさもわかつてるとこいつように頷いた。リーリアもそれを聞いて安心したようだ。アルはそんな二人を見て不思議そうな顔をした。

「で、それとは別の話だが、私は何歳に見える？」

アルは少々困った。女性の年齢を当てるとこいつのは色々と考えてしまう。だが答えないことには話が進まないので若干低めに答えることにした。

「20歳ぐらいでしようか？」

「ハズレ。リーリアちゃんはどう思つ?」

「25歳ぐらいでしょうか」

リーリアは正直だった。

「それもハズレ。正解は今年で60歳だ。月の物もとつてあがつちまつてゐる」

「え？」

一人は同時に驚きの声をだした。見た目からはまったく想像出来る事ではない。

「これは悪魔契約の副産物だな。悪魔契約で悪魔好みの肉体年齢が維持されるようになる。ただこれは見た目だけでね。実際体力は衰えるし、老眼にもなる。寿命も伸びたりはしないので不老不死つてわけじゃない。まあそれもあって掃除を頼んだりもしてるわけだ。流石にこの年になると片付けるのも一苦労でね」

「それは……」

リーリアが物欲しそうな顔をした。女なら誰でも羨ましいと思つた。だろう。

アルは年齢だけの問題じゃ無い氣もするなあと思つた。
「だからあまり若いうちに悪魔契約をすると困つたことになる場合もある。見た目が子供のまま変わらなくなつたりな」

「さて次に具体的な魔法の使い方だ。アルくんの目的にも関係あるだろう。魔法使いと戦うならな」

「魔法は悪魔に具体的に何をしたいのか伝える必要がある」

「そのために必要なのが、魔器だ。魔器は様々な形態を持つ。私が持っているのは指輪だな」

キャシーは左手の甲を見せた。人差し指、中指、薬指にそれぞれ一つずつ大きめの宝石のついた指輪を付けていた。

「これは悪魔」と別の魔器を使っているんだが、複数の悪魔と一つの魔器で契約しているものもある。この辺は交渉次第だな。あまり多くなっても面倒だしな」

「Iの指輪の場合は音声を悪魔に伝えてくれる。これは魔器によつて異なる。何か図形を書いて魔器に見せるというやり方もあるし、匂いに反応する魔器や、温度に反応する魔器など様々だな。だから、魔法使いとの闘いで注意する点はまずはここだ。魔器はからず具体的な何かに反応して悪魔に伝達する。注意深く見れば必ず魔法を使う予兆は発見できるはずだ。心のなかで思つだけで発動する魔法なんてのはないからな」

「私の場合は呪文を唱える。だがここで一つ注意点だ。呪文を他者に知られるのは非常に不味い。なぜならこの魔器は単純に音声に反応するだけだ、私じゃなくてもいい。つまり目の前のアル君が何か呪文を唱えたとしても、私の魔力を使って魔法が発動される。この場合はアル君が魔法使いである必要はない。ただ該当する呪文を唱えればいい」

「ああ言い忘れていたな。魔法を使うのは悪魔だが、その際には魔法使いの魔力が使用される。なので凄い悪魔と契約したとしても、魔力量がないと宝の持ち腐れなんてこともある」

「呪文の話に戻ると、呪文の場合は普通暗号化する。他人が聞いてもわからないようにな」

「例え暗号化していても、全く同じように復唱すればいいんじゃないですか？」

「そうだな。だから暗号化にはめぐり暗号を使うことが多い。私の場合は使い捨ての暗号鍵を契約更新毎に100用意している。一回使う毎に暗号方式が変わるからな。理論的には解読不可能だ。まあ100ともなると全て覚えられなくてメモに取つてあるから、このメモを奪われてしまうとまずいことになるな。その場合もメモを失つたことに気づけば契約を更新してその暗号鍵を破棄すればいいんだが」

「まあその辺の工夫は人それぞれだ。呪文と手印を組み合わせたり、歌つたり踊つたりな」

「後、重要なのは悪魔は一度に一つしか魔法を使わない。これは魔法使い同士の戦いでは特に重要だ。魔法使いのアル君とリーリアちゃんがいるとしよう。この二人は同じ悪魔と契約している。この場合先にアルくんが魔法を使うと、リーリアちゃんはアル君の魔法が終わるまで魔法が使えない

「なのであまり人と契約していないレア悪魔は重要なだ。出来れば自分以外と契約していない悪魔が望ましい所だが、まあ普通は無理だな。なので普通の魔法使いは複数の悪魔と契約するな。魔法を使おうとしてその時たまたま他の人が使ってました、じゃ困るからな。保険が必要だ」

「どの悪魔と契約しているかという情報はかなり重要なだ。悪魔同士の人間関係というのか悪魔関係もあるしな。友達同士の悪魔なんてのもいる。防御魔法を使っていても、相手の悪魔に気をつかって防御を解除したなんて例もあるらしいぞ。それとは逆に敵対しての悪魔同士だと対抗意識のせいか必要以上に張り切つて威力が上がるなんてもあるな。そーいった悪魔同士の関係を熟知するのも魔法を効果的に発動するのに必要だな」

「そういえば先ほど話しに出た魔法学院、こここの魔法は少々特殊でな。学校として魔法を教える以上は全員がばらばらの魔法をそれぞれ覚えるということであればあまり教える意味が無いだろう？ そこでここでは悪魔のグループと契約をしている。悪魔側が同じ魔法体系を使用するグループを形成するように綿密な交渉をしたんだな。一度に一つしか悪魔が魔法を使わないなら授業もままならない。そこで、悪魔側も同じ魔法を使えるものを組織化したというわけだ。なので魔法学院に行けばそれなりの魔法をシステムチックに教わることが出来るようになっている」

「後はそうだな、魔法を使う方法がもう一つある。古代遺物の中には魔法が使える魔導具があるのでこれを使う。有名なところではレガリアがそうだな。各国の国王が持つてゐる。これは持つてるだけで特定の魔法が使える。こいつはかなり強力で個人が太刀打ち出来るようなレベルのもんじゃないな。レガリア以外でもあるらしいがそんなに世に出回るもんでもない。これを探すのは無謀だろうな」

「ふつ、結構喋ったな。魔法の基本的な所はこんなものか。まあこれで魔法が即座に使えるようになるものでもないが、結構貴重な情報だとは思うぞ。普通は知らんしな。こんなこと」

「ありがとうございます。参考になりました」

「そうか？ ならないんだが」

「その例えばなんですが、魔法使いと戦う場合、呪文使いなら大声で妨害するといつのはありなのでは？」

「少し厳しいな。よっぽど大きな音を立て続けないと妨害は無理な気がするが」

「魔器を破壊するといつのはどうでしょ？」

「魔法使いと戦うなら常套手段だが、それは相手も気をつけるだろう。それに隠し持っていることもあるだろ？ 壊したと思って油断したらドカン！ なんてのもあるかもな」

「魔法を使う前に倒すのは」

「結局それが一番だとは思う。魔法を使うにはどうしてもタイムラグがあるからな。まあその辺も戦闘専門の魔法使いなら対策は考えてこると思つが」

「魔法使いとはどれぐらいの魔力と契約しているものでしょうか？」

「うーん、普通は2・3体と言つたといふじゃないか？ あまり多くても扱いきれないしな」

「一体の魔力はどれぐらいの魔力を使えるんでしょうか？」

「それも魔力によるが……10程度かな。魔力は大体専門にわかっている。炎の魔力なら炎を操るのが得意で炎の魔力で契約する。炎

の魔法とか言つてもそんなにバリエーションはなかつたりするしない。一体あたりが扱う魔法はそう多くはないな

そこまでを聞いてアルは黙考し、少し経つた後更なる質問を口にした。

「……万の魔法を使つとこいつのはありえるんでしょうが……

「ン？ 万つて一万つてことか？ いやそれはないな、そんなもの扱いきれるわけがない。ああ、待てよ何かで聞いたな。……ああ、あれか！ 『テオバルトと千柱の悪魔』そういう童話だかお伽話だかに出てくる奴が確かにそんな感じだつたな。あらゆる悪魔と契約し万の魔法を使いこなすとか。まあお伽話のことだしな、実在の人物だとしてもとつぐの昔に死んでるだろうわ」

「……テオバルト……」

「おいおい、真に受けるなよ。そんな奴がいるわけがない。そんなことを吹いてる奴がアル君の敵だとしてもだ、そりやハッタリだ。断言してもいいよ」

「……そうですね。わかりました。色々ありがとござります。結局僕が魔法を使うのはすぐには難しいとおっしゃですね」

「そうだな。地道に系統の似た魔法使いを探して師事するしかないだろうな。悪魔の好みの傾向はわかりやすいからな。アル君に似た姿の魔法使いを探すのが早いかもしれない。後は魔法学院か。あそこは容姿選考があるが、アル君ならいけるだろう。ただ金がいるから無理だろうな。授業料は馬鹿高い。平民じゃまず無理だ」

「まあ直ぐに魔法使いになれないとして、対魔法使いのアドバイスなんだが……気をしつかりもて」

「はい？」

「魔力は存在力とも言つたよな。だから魔法を食らつても諦めるな。結局最後にモノを言つるのは根性だ。魔法に対抗するのは気合いだよ。直接魔法をかけられたとしてもだ、強力な自我を保つていればなんとかなる場合もある」

「はいありがとうございます」

そこで一旦の区切りが付いたのかキャシーがコップに手を伸ばす。アルとリーリアも同じように水を口にした。

そしてアルが姿勢を改めてキャシーをまつすぐに見た。

「それでは僕達の話をしてもいいでしょうか？」

「ああそういう話だつたしな。じゃあ聞かせてもらおうか、二人のボーカミーツガールストーリーをな！」

「いえ、そんな大げさなもんじやないので拍子抜けされるかもしぬませんが……」

無闇に大きくなっている期待を前に若干押され気味ではあつたが、アルがこれまでの話を語り始めた。

この世界の魔法の簡単な説明

- ・魔法を使うには悪魔と契約する必要がある。
- ・魔法の威力は契約する悪魔の実力に依存。魔法使いの能力は無関係。
- ・ただし魔法に使用する「魔力」は魔法使いのものが使用される。
- ・使える魔法の種類は悪魔による。悪魔はそれぞれ得意系統がある。
- ・悪魔は美人が好き。ブサイクとは契約してくれない。
- ・悪魔は一度に一つの魔法しか使えない。一柱の悪魔が複数人と契約している場合は順番待ちが発生することもある。
- ・魔法を使うには悪魔へ使いたい魔法を伝達する必要がある。それに使用するのが魔器。
- ・魔器は様々な形態を取る。今回の話の例で出てきたのは指輪。
- ・魔力は半分失うと死んでしまう。

月明かりの元、少女が穴を掘っていた。

乾燥し堅くなつた地面はそう簡単に掘れるものではないが、少女は指先を鉤のように曲げ安々と大地を抉つていく。

森の中は樹木の密集度が高く穴を掘れる広さを確保するのは難しかつたが、そこは切り立つた崖の側のためか樹木はまばらで平らな地面が露出している。

少女は一心不乱に機械的に同じ動作を繰り返す。穴は徐々に広がつていき、やがて人が入れる程の大きさになつた。

成人男性が横たわるには少し窮屈なそれは見るものにその用途を簡単に想像させるだろ。これは墓穴だ。

中天に達した月が優しく少女を照らす。

無表情だがとても綺麗な少女だつた。その無表情もいつかその笑顔を見てみたいと思わせる愛らしいものだ。

目的の大きさの穴が掘れたのか少女は動きを止めた。その様子はひどい有様だ。

ボロボロと言つていい。エプロンドレスと思われるものを着ているが、そこら中が血と泥で汚れているし、千切れ、破れ、穴だらけだ。そんな状態ではあるが腰まである金髪だけは汚れもなく月の光を受け輝いていた。

どうすればこんな状態になるのかといえば、その答えはすぐそこにある。切り立つた崖だ。崖には何かが何度もぶつかりながら落ちてきた後があつたし、所々血が跡を引いていた。この崖から落ちてきたのだということは容易に想像が付く。

少女はゆつくりと土まみれの、爪の隙間にまでびっしりと土の詰まつた手を顔の前に持ってきて呆然と見つめた。その目には光が取り戻りつつある。

しゃがみ込んだままの少女の隣で栗色の髪の少年が腕を組んで墓

穴を見下ろしていた。簡素なくたびれた服を着た少年は墓穴を見て、まだ浅いかなと考えていた。

手を突っ込めば肘までが入る深さだ。人を横たえるには十分だが、ここは森の中で、あまり浅いと野生の獣に掘り返されてしまうだろう。それではわざわざ墓穴を掘る意味が無い。

さてどうしたものか、もう少し掘つてみよつかと考えていると少女の方から音がした。少女を見るとふるふると震えゆつくりと口を開こうとしていた。

「あ……っ……私は……何を……ここは……」

不明瞭な小さな声だったが、少女が声を出したことに少年はひどく驚いた。だがすぐに冷静さを取り戻すと「困ったな」と対して困つているよつには聞こえない声でつぶやいた。

少女は混乱の極みにあつた。何がなんだか全くわからない。しゃがみ込み、ただ呆然と土だらけの手を見つめ、先ほど少年から聞いた話を何度も何度も思い返している。

ひと通りの説明を終え、自分の役目は終わったと言わんばかりの少年は墓穴をどうするかを考えていた。さらに倍も掘れば十分だろうか。1mも掘ればさすがにそちらの獣は手を出さまい。方針が決まったのでさつそく続きをやってもらおうと少年はいまだに呆けた状態の少女を見た。

「もつ一度説明しようか?」

あまりにも反応がないため先ほどの話をよく理解してくれなかつたのかと不安になつた少年は訊ねた。

「……待つて、私に話させて。順を追つて整理していくから…」

少女が少年を見上げて言つと、やつと口を開いてくれた事に少年はほつとした。少しほまともに物を言える状態になつたらしい。

「いいよ」

「君は森の中を歩いていた。すると崖の下に倒れている女の子を見かけた。近寄つて確認してみるとその女の子は死んでいた。君はその少女を可哀想だと思った」

「うん」

「君はその女の子をそのまま放つて置けなくなつた。可哀想な少女を葬つてあげようと思つた。田舎育ちで弔い方なんてろくにしらないけどその少年はお墓を作つてあげようと思つた」

「うん」

「「」まではわかるの。」までは…」

少女は立ち上がつた。本人は凄い剣幕で必死に訴えているつもりだが、そんな表情も可憐らしくあまり切羽つまつたようには見えない。

「でも少年は自分で墓穴を掘るのが面倒だつた。それに土を掘るような道具もない。そうだ、本人にやらせればいい。少年はそう考へ

ると、少女を動けるようにした。そして少女に命じ穴を掘らせた。少女は穴を必死で掘り続け人が入れる程の穴を掘つた所で気づいた。私はなんでこんなコトしてるの…」

「うん、わかってるじゃないか。どこがわからなかつたの?」

「わかつたけどわからない! 問題はその少女が私つてことよーえ? なに? 私死んでたの?」

「死んでたっていうか今でも死んでるんだけど」

「はい?」

「僕死体を操れるんだよ。何故かはわからないんだけど。人間にこの力を使つたのは初めてだつたんだけどこんなことになるとは思わなかつた」

「はい?」

「今まで僕が操つた死体は簡単な命令に従つてくれるぐらいで自意識なんてなかつた。だから穴を掘つてた君が急に喋りかけてきた時はびっくりしたよ」

「なんなのそれ! 全然わかんない!」

「……うーん、今思うと試したことがあるのは、動物ばかりだつたから自意識があつたとしてもそんなのわかんなかつたか。何でも試してみないと駄目だな」

「……私どうしたらいいのよ! ねえ、なんにもわかんない! ね

えどつしたらここの一！」

少女は混乱のあまり叫び始めた。じわじわと不安が押し寄せてくる。この少年の言つことが本當なら自分は動く死体だ。周りの状況を見るに自分が死ぬほどの大怪我をしたようにも見える。しかし服はボロボロだが体には傷一つない。それはこの混乱の中、一筋の光明に思えた。

「ねえ、私怪我していないんだけど！ ほら！ 服は凄い汚れちゃってるけど！ だから私崖から落ちたのかも知れないけど、奇跡的に無傷で助かつたんじやないの！」

「……僕の力は死体を操ることなんだけど、その際には死体はちゃんと動けるように再生するんだ。ほら、腐乱死体を動かそうつたつて筋肉が腐つてたら動きようがないだろう？」

腐乱死体。その言葉に少女がビクッとした。自分は腐っていたのだろうか。

「私……どんな状態だったの？」

「聞かないほうがいいと思つたけど？」

「いいから」

「死後そんなに経つては見えなかつたな。全身骨折していたのか、そいら中がぐにゃぐにゃだった。頭蓋が陥没して、顔は

……」

「もういい！ やめて！」

「自分が聞かせろつていつたんじゃないか」

少年は不満気に言った。

「顔……顔も怪我してたの？」

「うん、元の顔がどんなかわからぬ状態だつたけど……可愛くてよかつたよ。ん？ でも僕は君の怪我をする前の顔を知らないんだから、本当に元に戻つていいのかはわからないのか？」

少年の自問自答を聞き少女は焦つた。

「鏡！ 鏡はないの！」

「そんなの持つてないよ」

「じゃ、水！ 川とかないの！」

「あつちに……つて、月明かりしかないのに走るなよ……危ないだる」

少女は少年の言葉を最後まで聞かずに走りだした。少年も慌てて後を追う。森の中に突入するというのに何も考えていない速度だ。足を引っ掛けなかつたのは運が良かつたのだろう。少女はあつさりと川に辿り付いていた。少年も少し遅れて少女のそばにやつてくる。

「今日は天氣がいいのか特に明るいな。で、どう？」

少女は河縁にしゃがみ込み川を覗き込んでいた。月明かりが反射

する穏やかな川面がなんとか鏡の代わりになっている。そこにあるのは少女が毎日のように見ていた、平均よりは上なんじゃないかと密かに自惚れている顔だった。少しそうとして息を吐く。

「大丈夫……おかしくなつてない……」

「それは良かつたけど、あんまり勝手に動かないでよ。離れすぎると困ることになる。……いや、僕からしたその方が良かつたのか？ まあいいや。じゃ戻るつか」

「……なんで？」

「なんでつてこなんとこですつじほーつとじてるつもりか？ これからじぶつあるんだよ」

「どうしたらいいの？」

「知らないよ。わからないなら当初の予定通り君があの穴に横になつてくれればいいよ。土は僕がかけてあげるから」

「なんで！ なんで私がお墓に入んなきやならないの！」

「そう言われても、僕は親切で言つてるんだ。あんな所にほつたらかしておいたら獸に食い散らかされると思つたからせめて埋めてあげよつと思つたのに」

「私生きてる！ 生きてるよ！」

「うーん、確かに意識のある君を無理やり埋めてしまうのは抵抗がある。だからここは君が自ら埋まつてくれれば問題ないんだけど」

「問題あるー。」

「困ったな。君死んでるの？」

先程から何度も死んでると主張され少女は不安になつた。もしかしたら本当にもう死んで少年の言つように生きた屍なんていう魔物のような存在になつてしまつたのかも知れない。少女は自らの胸をそつと抑えた。確認する。そこには確かにいつものように脈打つ鼓動があつた。

少女は勢い良く立ち上がつた。

「ねえ！ 私の心臓動いてるー。はら、ドクンドクンって！ 元気いっぱいだよ！ 頑張ってるよー。これ！ 死んでないよー。ほら！ ほらー！」

そう言つて少女は少年の手を取るとふくやかな胸に押し当つた。

「ねえ！ 動いてるよねー。私死んでないよねー。」

「……えーと、やわらかいね」

少女は困り顔の少年をまじまじと見た。両手でしっかりと少年の手をつかみぎゅっと自分の胸に押し当つているのに気がつくと大慌てでその手を放り出し離れた。

「あやーー。変態ー。H口ー。痴漢ー！」

少年に背を向け、胸をかき抱き大声で叫ぶ。

「自分で触らせておいてそれは無いと思つたなあ」

「もつ嫌！ 私帰る！」

少女はそのまま少年の方を見もせずにどこかへ行こうとする。

「帰るのはいいけど君はどこから来たんだ？」

「え？」

「崖から落ちたみたいだけどその辺の事は覚えているの」

言われた瞬間目の前が真っ白になった。そして思い出した。

少女は水をくみに出かけた。一人では危ないと言われ一人で出かけ、帰り道で崖から足を踏み外した。もう一人に押されたのだ。重い水桶を持っていた少女は簡単にバランスを崩し崖に落ちた。最後に見えたのは自分と同じようなエプロンドレスを着た少女の微笑だつた。

「え？ アレ？ 私崖から……」

確かに落ちていた。それをはつきりと思い出した。足を踏み外した瞬間に死んだと思い氣を失った。その後氣づけば土を掘っていたのだ。氣を失ったのは不幸中の幸いだったのだろうか、痛みに苦しんだ記憶はなかった。

「そもそも君は誰で、なんでこんな森の奥深くにいたんだ？」

「え……私は……」

第3魔族領開拓団。それを率いるのは第2遊撃隊と出発直前になつて割り込んできた第3遊撃隊だ。第3遊撃隊は開拓団とは別に自分達専属の従者を求めた。

募集人員は10名。仕事内容は第3遊撃隊隊員の身の回りの世話ということで特に難しくもないし、勇者の従者ともなれば箔が付く、魔族領が危険とはいえ勇者の側なら安全だと思われる。応募は殺到了した。

厳正な面接が行われ最終的に見田麗しい10名の少女達が選出された。少女もその一人だ。

「えっと、私は勇者様の従者で……」

道中は何台もの大型の馬車を連ね、まるでパレードのようだつた。それなりに裕福だつた少女にとつても見たこともないような豪華な内装の馬車はとてもゆっくりと進む。少女はその間ほとんど何もしなかつた。遊撃隊員1名ごとに馬車が用意されそれぞれ二人の従者が付く。隊員は4人なので、従者は一人あぶれることになる。少女はその二名のうちの一人だつた。あぶれた彼女ら一人にも専用の馬車が用意され特に何をすることもなく過ごした。

何日もかけてやつと森に辿り着くとそこからは徒歩だ。従者といふことで大量に持つてきている荷物を運んだりするのかと思えばそれは開拓団の人間が行う。従者は勇者達の後をぞろぞろと付いて歩くだけだつた。

勇者はさすがに強く、時折現われた魔族の残党を苦もなく倒していつた。魔王城とされる館のある集落に辿りつくとそこを拠点とすることになった。

畠が仕掛けられていないか入念に調べたあと、使えそうな建物はそのまま使い、後は天幕などを設置し生活環境を整える。簡単な柵や鳴子なども用意し敵の襲撃に備えた。

「私何の役にも立つてなかつたから……」

それまで特に従者としてこれといった活躍をしていない少女は、勇者様になんとか尽くそつと料理をふるまうこととした。開拓団の中にも料理の担当者はいたがとりあえず食べればいいというものだった。これまでの道中では難しかつたが拠点を構え落ち着いた今なら遊撃隊員の分だけでももう少し凝つた料理を作れるはずだし、少女にはその自負があつた。

その旨を申し出ると料理に不満のあつた遊撃隊員達は一つ返事で了承した。

少女は料理の準備を始める。食材はふんだんに持ち込まれていたし、調理器具もそれなりのものがあった。ただ、料理をするには肝心の水がない。この集落には井戸の類がなく近場の川まで水をくみに行つていたらしい。水をくみにでかけようとすると従者仲間の少女が声を掛けてきた。森の中は一人では危ない、それに一人の方が効率がいい。そう言わると断る理由もなく同行することになった。

「なんで……」

なんで突き落とされたんだろう。事故などではなかつた。今思えばわざと崖の方に誘導した節も感じられる。明確な殺意とともに体を押されたことをはつきりと思い出すと少女の体は震え始めた。

「もういや！」

少女は取り乱しそのまま駆け出した。また森の中へと入つていく。今度は少年も追わなかつた。

どれだけ走り続けたのか少女は森の更なる奥へと足を踏み入れていた。いつまでも走り続けられるわけもなく少女は全力疾走をやめとぼとぼと歩いている。無闇に走り��けてもどこに行くあってもなし自分がどこにいるのかも分からぬ。

行くとすれば開拓団の拠点ぐらいしか思いつかないが崖から落ちてしまつた今、どうやつて戻ればいいのか分からぬ。

あの崖を登ればすぐなくとも水をくみに出かけた道のどこかには戻れるはずだがとても登れそうには無い。それならば崖沿いに歩いてなんとか崖上に戻る方法を模索するべきだつたが時既に遅い。完全に迷子だ。

自然に涙があふれ出でてくる。止まらない。

明らかな殺意を向けられそして殺された。何故なんだろう。そんなに嫌われるようなことをしたんだろうか。少女は考え続ける。

あの少女は名はなんといったのか。それも覚えていない。ほどんど接点はなかつた。最初から遊撃隊の側に仕えていたはずだ。彼女ら従者の間には仕える隊員に応じて序列が出来始めていた。筆頭はやはり聖棍の勇者、ヴァルターに仕える一人だ。後は順に魔法使いセルジュー、短槍使いのエーヴェルト、司祭ギヤリの従者と続く。その例で言えば少女は専任の担当者がおらず最下位に位置するだろう。あの少女は勇者に仕えていた。なので嫌われるほどの接触はなかつたはずだ。水をくみに向かう道中そんなそぶりはまるでなかつた。普通に会話をしていたし、これから仲良くなれるのだと思つていた。どこかで獣の遠吠えが響いた。少女は身をくめる。ここは最近まで魔族が支配していた土地だ。レガリアの破壊により魔獣の類は自然といなくなると聞いていたが、完全にいなくなるにはまだ時間がかかるだろう。魔獣でなくてもただの獣に襲われても少女には対抗する術はない。

少女は半ばやけになつていた。もうどうでもいい。死んでいると

いうのだ。何に襲われようともう一度死ぬだけなんだらう。だがそんな考えはあつさりと翻つてしまつた。

少女の体がくらりと揺れた。立つていられなくなり樹木に身を預けた。体に力が入らない。

「え？」

樹にもたれかかつたままずり落ちると意図せずしゃがみ込んでしまつた。立ち上がれない。まるで足がなくなつたかのようだ。

慌てて手を伸ばそうとするもそのまま地面に倒れこんでしまつた。少女は慌てた。だんだんと力が入らなくなつていぐ。なんとか手を胸に伸ばし鼓動を確認するとひどく弱々しく、先ほど心臓の頑張り具合を讃めたたえていたのが嘘のようだつた。

嫌だ死にたくない！

泣き続けぐしゃぐしゃになつた顔をさうに歪め必死に土をかく。それしか出来なかつた。

もう指先ぐらいしか動かない。呼吸もその頻度を緩めていく。体は酸素を熱烈に求めているが呼吸器系の麻痺が進みそれもままならない。

叫ぶことも出来ずそのまま息絶えようとしたその時声がかかつた。

「！」のまま放つといふかと思つたんだけ、さすがにそれは寝覚めが悪くなりそうだ

少年が少女を見下ろしていた。しゃがみ込むと少女と目線をあわせる。泣きはらした少女の顔を見、少年は少しどキリとした。

「落ち着いてよ。大丈夫。僕が側にいれば元に戻る」

「ほんと？」

ぐずりながらも声が出た。呼吸が元に戻っている。

「ああ、大丈夫だよ。すぐに戻る。だから安心して」

程なくして少女の鼓動は力を取り戻す。ぐにやりとして力の入らなかつた手足の感覚も戻つてきた。

「僕の能力には有効範囲がある。正確な所はわからないが、1kmぐらい離れた所でこうなったのかな」

少女はゆっくりと上体を起こした。もうほとんど回復したらしい。少女は樹にもたれかかると大声で泣いた。号泣だ。先程から泣き続けていたがさらに涙が溢れてくる。死の恐怖とそこからの回復による安堵。わけのわからない状況、知り合いに向けられた明確な殺意。色んな思いがごちゃまぜになり心のなかを吹き荒れる。

その姿は少年の心を打つた。飄々とした体の少年ではあるがほぼ初めて見る女の子の涙に動搖した。多少泣いたぐらいでは動じないだろうがこの慟哭といつていい少女の姿には参つた。

少年はおずおずと手を伸ばし少女の肩にそつと置いた。

「なあ……悪かった。君の境遇は僕のせいだ。出来る限り君に協力すると約束する。勝手に骸に戻すようなこともしないし、君の望むようになるよう努力しよう。だから泣かないでくれ。大丈夫だ。僕が側にいればこんなことはもう起こらない」

少女は泣き続けた。少年は優しく声をかけ、辛抱強く泣きやむのを待つた。

やがて氣力が尽きたのか少女は泣き止む。泣いたおかげでかかる程度の心の整理はついたようで少し落ち着きを取り戻しつつあった。

「せういえば自己紹介をしていなかつたな。僕はアルだ。この森を出て旅に出るつもりだつたんだけど、いきなり君を見つけてこんなことになってしまったわけだ。それで君の名前は？」

「……リーリア……」

「やうか女の子らしい、いい名前だね」

アルはあまり常識的なことは知らなかつたが、本をよく読んでいたので女の子の名前の末尾がリアになることが多いことを知つていた。

「とりあえずさつきの穴の所まで戻ろうか。大したものじやないけど荷物が置きつぱなしなんだ」

少年は立ち上がつた。リーリアに手を差し出す。リーリアは手をとろつとして直前でためらつた。そういうて墓穴に埋めるつもりなのではないかと少し思つてしまつた。

「ん？ ああ、さつきも言つたようにもう君を屍に戻すようなことはしない。元々は君のためと思ってやつたことだ。君の意に沿わないことはしないよ。いきなり信用はできないかもしけないが、僕がその気ならいつでも能力を解除して君を屍に戻すことが出来るんだ。それをしていないんだから、とりあえずそこは信用してくれてもいいだろ？」

つまり面倒になつてリーリアを屍に戻すならわざわざ墓穴に埋める必要などないということだ。それは理解できたので、少女は少年の手を取り立ち上がつた。

「じゃあこれからどうするかまだ決めてないけど、ようじへ

つないだ手はそのまま握手となつた。

「……ようじへ……」

リーリアは泣き声で枯れた声でぼそぼそと返した。まだ何がどうなつてゐるのか全然理解していない。そもそもこのアルという少年が謎だつた。森から旅立つとか死体を操るとかわけが分からぬ。ただ、それでも泣き続けるリーリアに優しくしてくれたアルのことは少しだけ信用してもいいと思つた。

かなりの距離を移動していたのか、墓穴のある崖下に辿り着くには時間がかかった。途中川に寄り手と顔を洗った事もあるが、月が常に無いほど明るいとはいえ鬱蒼とした森の中を移動するのに手間がかかつたせいで。リーリアのように勢いに任せて駆けるわけにもいかない。

リーリアは自分がどこにいるのやら見当もついていなかつたが、アルはこの森には詳しいらしく特に迷つこともなかつた。

「よかつた。荷物は置いたままだ」

アルが荷物を前にいう。只のズタ袋だ。中には数日分の食料として干し肉が入つていて。匂いを嗅ぎつかれれば獸に奪われている可能性もあつた。

「さてどうしようかな。今夜はとりあえずここで野営するしかないんだけど。困ったことにそんな装備の持ち合わせがない」

そのアルの言いようにリーリアは訝しく思った。リーリアは森に入つてから拠点まで2日はかかった。なのでその間に野営は経験している。アルがどこから来たのかは聞いていないが、今ここにいるということから考えるとアルも森を出るには何度も夜を迎えるはずだ。野営のことを考えていないはずがない。

「野営のこと考えてなかつたの？」

「ああ、僕一人ならなんとかなるんだ。でも今は君がいるからね」

セツナヒツヒツと荷物から一枚の毛布を取り出した。

「「」んなものしかない」

「えーと、一人で野営つて危険じゃないの？ その……普通は不寝番みたいな人がいると思つんだけど」

一人で夜の森で寝るなど自殺行為にしか思えない。

「ああ、それも君を見つけるまでは問題なかつたんだ」

と、アルは少し離れた場所を指した。リーリアがそちらを見る
と何かの塊のようなものがある。よく見てみるとそれは一匹の狼の
死骸が重なりあつたものだつた。

「元はアレを操つて護衛にしてたんだ。何かあれば起こしてくれる
し、野生の獣ならまずあれにわざわざ近づいてくることはないよ」

「狼も操れるの？」

「うん、動物なら大抵大丈夫。でも脳があまりにも小さいのは言つ
こと聞かないけどね。あまり原始的なのは駄目みたいだ」

しかし狼は今のところ動く気配がない。見たままの通りあれは死
骸だ。

「なんで今は動いてないの？ まさか時間がくると死んじやうとか

……」

リーリアは先ほどの息苦しさが脳裏に蘇つてきて嫌な気分になつ

た。

「僕が一度に操作出来るのは大きめの成人男性ぐらいのサイズまでだ。だからリーリアを操るのに狼一匹に対しての能力は解除するしかなかつたんだ。だから解除しない限りはリーリアは大丈夫だ」

と言つて狼の元に歩いて行く。アルが手を触れると狼が動き始めた。

しかし、操るとは言つがそつは見えなかつた。リーリアも別に操られているような気はまるでしていない。狼もその動作をいちいち操つてゐるわけではなく勝手に動いているように見えた。

「リーリアと狼一匹ならギリギリでいけるみたいだな」

狼に一言一言話しかけ、連れて戻ってきたアルは毛布を地面にひいた。幸い現在は中立地帯となつてゐるこの森にも、マテウ国 normalspringの余波があり気温はあまり下がらことはない。周囲の環境さえ許せばそこいらに寝転がつて眠ることも可能だ。

「じゃあこれから的事は明日考えるとして、とりあえず今日は寝よう。もうかなり夜も遅いし」

そう言つてアルは毛布の上に横たわつた。狼は少し離れた位置で寝そべつてゐる。

「えーと……私はどうしたら……」

リーリアは困つた。寝る場所がない。

「毛布はこれしかないよ?」

リーリアは大きく息を吐いた。特大サイズのため息だ。見ず知らずの男の側で眠るなんて耐えられそうになかったがここで毛布を譲れとまで囁々しことも言い出せない。仕方なくリーリアはアルの隣に寝そべった。背を向けて横になる。毛布の下のじつじつした地面が直接感じられるようであまり意味がないようだが、何もないうちはましといったところだつ。

こんな状態で眠れるのかとリーリアは心配したがそれは杞憂に終わる。すぐにまどろみ始めた。

翌朝二人はこれからのことについて話しあつこととした。毛布の上に座つたまま向き合つている。

「さて今後どうするかなんだけど、リーリアはどうしたい？」

「え？ 私？」

「うん、まず君がどうしたいかから考えよう。僕のことは後回しでもいい。現状僕から離れると君は骸に戻る。僕が好き勝手にやれば君はそれに振り回されることになるしね。僕も反省はしてるんだ。だから君がしたいように言つてくれればいい」

「その……私も昨日は混乱して……でもこうやって生きて話してられるのもアル君のおかげだから、別にアル君が悪いってわけじゃないと思うんだ。その、昨日はいろいろと……『めんね』

「いいよ。気にしなくて」

「それで……私勇者様の従者をやつてるんだ。崖から落ちたのも水をくみに行つた帰りで……みんな心配してるんじゃないかな……」

「勇者と云ひと今、魔王の館のある集落にいるのか……そこから来たの？」

「うん」

「じゃあどりあえずそこにに向かうか。まあ、旅立つてすぐに戻るのもなんだけどね。ちょっと間抜けだな」

アルは頬をかいた。少しばつが悪そうだ

「いいの？ でもそうしたら、アル君旅はどうするの？」

「もともと母さんだけの事だつたんだ。母さんが死んだ今あそこに留まる意味がないと思つたから旅立つと思つた。けど、別に今すぐじやなくてもいい」

リーリアには少し意味がわからなかつた。けれど死んだといつ言葉にすこしひがくつともわかられる。

「その……お母さんつて……」

「勇者に殺された」

リーリアが衝撃に目を見張つた。まさか勇者様が人殺しを。俄には信じられない。

「ああ違つんだ。母さんは魔族なんだよ。だから仕方ないんだ。勇者は……それが使命なんだろ？」

アルの口には諦めがあった。本当にどうしようもない思つてているようだ。

リーリアは座つたままの姿勢で思わず後ずさる。魔族。最初からおかしいとは思つていた。つい最近まで魔族が支配していた深い森の中を一人で旅をする少年。しかも死体を操るなどという謎の能力を持つている。疑つてしかるべき状況だ。素直に考えればこの少年が魔族だと簡単に答えが出る。

「おーい。何か誤解してるだろ。僕は魔族じやないぞ。人間だ。ほら肌が白いだろ？ この森の魔族の肌は黒い。見たことないか？」

そういうえば、と思い出す。森の中を勇者一行は魔族を倒しながらやつてきた。その際に見かけた魔族は全員真っ黒な肌をしていた。だがそれだけで警戒を解くことはできない。この少年は確かに怪しい。

「どう思われようといいんだけどさ。僕は物心ついたころにはもうここにいたんだ。そして魔族の母さんに育てられた。事情はわからぬ。多分攫われてきたんだろ？」

あの男に。最後にそいつ言ったよつとも聞こえたがはつきりとはしなかつた。

「でも、今君に危害を加えてるわけでも無いんだ。そういうのないでくれよ」

「それは……わかるけど」

「もう少し僕のことを言つておくと、魔族に育てられたと言つても関係のあったのはほとんど母さんだけだ。他の魔族には無視されるかいじめられるかそんな感じだった。だから魔族のことも実はよく知らないんだ。まあそれ以上に人間についても知らないんだけど。人間については本で読んだぐらいだな」

「お母さんは優しくしてくれたの？ その……魔族なのに？」

「優しかったよ。いつかは人間の世界に戻るべきだと思つてくれたのかな、人間の言葉の読み書きも教えてくれたし。他の魔族とも僕のことでしょうちゅうもめてたけどいつもかばつてくれた。いじめ殺されるようなことがなかつたのも母さんがいてくれたからだし」

「お母さんを生き返らせてみたとは思わなかつたの？」

思わず口をついたがリーリアは後悔した。そこまで踏み込んでいいとは思えない。

「うん。そもそも僕の能力が生き返らせるとかいうものじゃないしね。リーリアみたいになるなんてわかったのは今回が初めてなんだ。これがリーリアだけに起こることなのか人間なら誰でもこうなるのかも分からぬ。まあ今後人間に使うことはないと思うけどね」

「『めん、変なこと聞いて』

「いいよ。でもどうだうつな、もし自意識を持つた状態で復活するつてわかつてたなら。……それでも使わなかつたと思つ。やつと母さんは休めたんだ。このまま眠らせてあげたい」

しんみりとした雰囲気になってしまった。それを破るよつにアルが慌てて言つ。

「ああ、話がずれたな。で、どうする。開拓団に行くかい？」

「ほんとこいいの？ 私が開拓団に戻つたらアル君どこにも行けなくなつちやう

「構わないよ。別にあそこにはずっといるわけじゃないだろ？」

「うん、出発前に聞いた話だと最短で一ヶ月、長くても半年って話だつたよ。それで中立地帯はマテウ国領地になるつて

「そりが、なら全然問題ないよ。それからほんとあるんだ？」

「街に戻るかな。実家に帰ると困つちやう……」

本来の目的は勇者様にお近づきになり、そのまま仕えることだったがそのまま言つのは何故か躊躇われた。

「うん、僕も街に行きたいと思っていたんだ。リーリアが一緒なら都合もいい。僕は人間社会の事は本で読んだだけなんだ。色々常識的なことを教えてもらえると助かるし

「でもアル君から離れられないつていうのはどうゆうの？」

それが問題だった。四六時中一緒にいるわけにも行かないだろう。有効範囲は1kmというが何かのおりに離れ離れになつてしまつてがないとも限らない。

「そうだな。しばらくな一緒にいるしかないね。でもそれはある程度時間が解決してくれると思う。僕のこの能力は少しづつ成長している。最初は10mも有効範囲はなかつたんだ。だから有効範囲はそのうちもっと広がると思う。まあ先の事はわからないし、まずは開拓団だな」

そう言つとアルは立ち上がりリーリアに手を差し出した。こういう所作はじく自然で気遣いに溢れている。アルの先ほどの言葉からすると母親から学んだものなのだろう。リーリアも素直に手を握つて立ち上がつた。

撤収はすぐに終わつた。毛布をズタ袋に突つ込んだぐらいのものだ。墓穴は放置することになつた。埋め戻すのも面倒だしこんなとこりに穴があつた所で誰に迷惑を掛けるものでもない。

一人が崖沿いに歩き始めると、今まで彫像のようにはくくりとも動かなかつた狼がその身を起こし、後をついて歩き始めた。

まず一人は崖の上へ移動する必要があつた。この森は緩やかではあるが全体で高低差が100mほどあり裾野が広い山のようになつていた。そのため崖のようになつてゐる箇所が結構あり直線的に移動するのが難しい。開拓団の拠点はほぼ森の中央、山頂部分に位置している。

崖を登るのは無理なのでかなりの距離を歩くことになる。

「すぐそこだと思ったんだけど結構かかるね」

「リーリアはかなり落ちてきたんだ。戻るのは大分かかるね」

朝出発し既に昼を過ぎているが、まだ崖の上までも辿りついていない。

二人はとりとめもない会話をしながらゆっくりと歩く。リーリアはあまり体力には自信がない方だったのだが、特に疲れることもなく不思議に思っていた。

「それは僕の能力のせいだな。最適な状態で動くように体を再生するみたいだし」

リーリアは少し複雑な気分にはなつたが現状の疲れ知らずな状態は便利でありそれは受け入れた。

「アル君てさあ何歳なの？」

不思議に思つていたことを他にも聞いてみた。見た目は自分とそう変わらないように思えるが童顔なだけかもしない。それに喋り方があまり子供っぽくないようにも感じる。

「15歳ぐらいだと思つ」

「私16歳！」

「なんでそれだけで微妙に年齢なんだ？ 1歳しか違わないじゃないか」

「1歳だろうとなんだろうと私の方がお姉さんといふことです！」

そんなことで向きになるのがお姉さんなのか？ と思つたが口に

は出でない。それに15歳というのも大体これぐらいだらうと言つことだ。誕生日も知らないし本当の所何歳なのかは分からぬ。だがそれを言つとリーリアはまた失敗したと思つてしまつだらう。

「そのお姉さんはなんでこんな森にやつてきたんだ？　開拓団なんてつまらないだらう？」

開拓団などと云つ名前だが別に開拓は行わない。ただ周続けるだけだ。リーリアのような少女が好む職業とも思えない。

「えーとね……勇者様なの」

リーリアが少し照れたよつて言つ。

「ああ、そういうえば勇者の従者だとか言つてたね。何？　その勇者のが好きなの？」

「違うのー。本当はね、第一遊撃隊のフオグ様なのー。」

バタバタと手を振りながら慌てて言つ。

「何が違うんだ？　そのフオグってのが勇者なんだろ？」

「えとね、今この森に来るのは第一遊撃隊と第三遊撃隊なの。でね私は第三遊撃隊の従者なの」

「ん？　よく分からぬ。第一遊撃隊つてのは来てないんだろ？」

「そつなんだけどね、とにかく勇者様にお近づきになれば、そこから第一遊撃隊のフオグ様にもつながるんじやないかと思つてね、そ

の……」「

「はあ……何だそれ？ えらく遠回りだな。そのフォグってのが好きなら、そつちに直接行けばいいじゃないか

「い、いきなりは無理！ そ、それにフォグ様に会える機会なんて滅多に無いし。だから他の勇者様の従者でも、なればお見かけする機会も増えるんじゃないかなあって。第一遊撃隊では従者の募集なんてしてなかつたし……」

「まあリーリアがそうしたいんならそれでいいよ。何か手伝えることがあるなら僕も協力するよ。フォグつてのと仲良くなればいいんだがひっ？」

「ほんとこー？」

「ああ、別に急ぐ目的もないしね。最終的には結婚出来ればいいのか？」

「け、けけけ結婚て！ そのそりや最終的にはそうなのかもしれないけど、その、まずは自然に話せる感じからですね、そのお友達つてゆーか……その……」

リーリアが顔を真赤にしてすじい勢いで話しているがアルは途中から聞き流している。

そんな話をしながらも歩き続け崖の上へと辿り着く頃には陽が落ちようとしていた。

「ソルジャーまで来ればもう一息つてといひだな

「夜になるまえにこれでよかつたね」

後は道なりに進めば開拓団の拠点に行ける。そう一人が思った時前方に人影が現われた。

5人だ。道を塞ぐように扇形に展開している。アルが後方を確認するとそちらには3人。囮まれていた。

全員が同じような格好をしている。胴を覆う革鎧と手足を部分的に覆う装甲、機動性を重視した装備だった。アルとリーリアが大した武装をしていないのを見て舐めているのか武器は手にしていない。剣は腰や背に帯びたままだ。

下卑た面をしている。アルはそう思った。

「リーリア、念の為に聞くけど、開拓団の知り合いか？」

「わ、わかんない。けど開拓団の人たちはこんな感じじゃないよ」

しかし開拓団以外の人間がここにいる筈もない。まだここは魔獸がうろつくような魔境だ。盗賊の類もわざわざこんな所へはこないだろう。

「何か用かな？ あなたたちに見覚えは無いんだけど」

とりあえず声をかけてみた。

「はつ！ 見覚えなんかあるわきやねーだろーが！」

前方の5人の中央の男が一步踏み出し脅すように喚いた。リーリアは驚きアルの腕にしがみつく。柔らかい胸がアルの腕に押し付けられ形を変えた。

「見た感じ盗賊の類か？ 見ての通り僕らは大したものは持つてない。一番価値のあるもので乾し肉の塊ぐらいだけどこんなものが欲しいのか？ それで良ければ譲るからここを通してくくれないか？」

「ガキが！ 犯めてんじゃねーぞ！」

まあ そうだろうな。とアルは思う。そんなものが目的のはずもない。まず盗賊がわざわざこんな所で獲物を物色しているはずがない。盗賊がこんな所までやつてくる理由としてまずあげられるのは開拓団の存在だろう。開拓団は勇者を除けば戦力は無いに等しい。陽動等で勇者をおびき出すことが出来れば勝算は十分にある。最長半年をここで過ごすつもりでやつてきている開拓団だ。物資を全て奪うことが出来るなら相当な利益になるだろう。だがそれならその盗賊団はかなりの規模になるはずだ。この程度の少人数ということはない。ならばこいつらは、別働隊か偵察隊、見張りというような役割の小集団だ。この行動はこいつらの独断だろう。僕達がここに来たのは偶然が重なってのことだ。なら目的は……。

そこまで思索を進めた所で鈍い音が大地を揺らした。

中央の男が剣を抜き大地に斬りつけたのだ。その剣は刀身を全て大地にめり込ませている。ずっと無視している体のアルに業を煮やしての行動だ。その膂力は人間業ではない。

「貴族か？」

「ア、アル君、野族だよ。どうしよう……」

野族とはその身を犯罪者へと墮とした貴族の蔑称だ。世界中のどの国でも魔族以上に恐れられていた。貴族の身体能力を持ち、人の欲望で襲いかかってくる。魔族も恐れられてはいるが基本的には魔族領から出てこない。しかし野族はどこにでも現れ思つがままに暴

れた。

リーリアはすでに絶望していた。ただの盗賊相手でも勝てるとは思えないが、野族を相手にどうにかなるとは全く思えない。

「隊長、遊んでないでさつとやりましょうぜ」

部下と思しき男が欲望にぎらついた目でリーリアを見て言つ。中央の男が隊長か。アルは全員を見渡した。武器は全員剣だ。野族なら当然なのだろう。貴族や野族は基本的には飛び道具を用いない。彼らの移動速度では飛び道具などまどろつこしげだけだからだ。弓を引いて放つ暇があるなら、敵に突っ込んで武器を振り回せばそれで済む。

「目的はリーリアか、けどこんな臭い女でいいのか？」

「ぐ、臭くないよ！ え、もしかして腐つてゐの…？」

「服が臭つよ。血肉が付着したまま乾いてるし」

「え、嘘！ わかんないんだけど…」

「慣れちゃつたんじやないか？」

野族の隊長が地面に埋まつた剣を抜き、アルに突きつけた。

「黙れガキ、てめえは黙つて女をよこせばそれでいいんだよ…」

アルはその剣先を見つめながら冷静に語りかけた。

「何故僕を殺さない？ その剣で僕を貫けば終わりだ。その後女を

連れていけばいい

「お前は人質だよ、その女を手懐ける為のな！ 女に抵抗されるとむかついて、つい殺しちちまうしな。おい、女！ お前は今から俺ら全員の相手をするんだ。逆らつならその男を殺す！」

「アル君……」

リーリアは不安にかられアルを見つめた。もうおしまいだ。どうしようもないと思いアルを見たのだがアルはいつも生意気な顔のままだ。怯えている様子はまるでない。

「大丈夫だよ」

そう言われてもリーリアには全くそのようには思えない。

「早くしろ、腕の一本も落としてやろうか、ああ！」

野族が焦れて叫ぶ。

リーリアは観念してアルの腕を放した。どんなひどい目にあうのかは想像もつかなかつたが、アルが怪我をするのを見過ごすことは出来なかつた。短い付き合いだつたがそれでも今まで十分自分を気遣い優しくしてくれたと思つていて。

リーリアは野族に向け足を踏み出した。

隊長の淫靡な期待に満ちた左手がリーリアの胸に伸びる。触れようとした瞬間にそれは起こつた。

リーリアの右手が隊長の左手首に上から絡みつき、左の掌が下から隊長の肘を押さえた。そのまま強く引いてテ「コの要領で肘を碎き、同時に隊長の左膝を右足で蹴り折る。ここまで正に一瞬の出来事だ。簡単に言うと伸ばしてきた腕を掴んで引っ張り、体重が一方の

足にかかっただ瞬間に膝を蹴り、ついでに肘を折ったということだ。

膝を碎いた時点で勝負は決していたが攻撃はまだ終わらなかつた。右足を戻すと同時にリーリアの左膝が跳ね上がる。膝を折られ前めりに倒れてきた隊長の顎を粉碎した。舌が血の糸を引いて飛び、だらし無く開いた口からは碎けた歯がぼろぼろとこぼれ落ちる。止めとばかりに右肘を側頭部に叩きつけると頭蓋の碎ける音がし隊長は森の中に吹つ飛んでいった。何かが潰れる音と、木がへし折れる音、木が倒れ森を揺らす音が続けて聞こえた。

「え？」

アルを除いて全員が驚愕に動きを止めていた。中でも一番驚いているのはリーリアだろう。体が勝手に動いて野族の隊長を粉碎し、何がなんだかわからないうちに右肘を振り切つた止めのポーズを取つていた。その動きについていけず乱れ浮いていた金髪がふわりと下りてくる。

「リーリア、僕が常識に疎いって話をしたと思うけど、じついう場合はどうしたらいい？ 殺しちゃつていいよな？」

「う、うん盗賊は死罪だし、殺してもお咎めはないけど……」

リーリアはぼーっとしたまま聞かれたままに応えた。

「よしやひつ」

狩られる側にまわつた野族達はもろかつた。普段その圧倒的な身体能力で敵を蹂躪する戦い方しか知らない彼らにとつてそれ以上の力を振るい、術技を使用する相手を前に為す術がなかつた。

単純に振り回した剣は簡単にそらされ、懷に入れられ、そのまま投

げ飛ばされる。地に投げ倒された彼らを待つ運命は、全力の踏み下ろしでの顔面の破壊だ。

突き込んだ剣は手首を打たれ簡単に落とされた。落とした剣は馬鹿みたいな力で蹴られて彼らの胸に突き刺さる。革鎧など何の役にも立たない。

背を見せ逃げようとした者はたちまち追いつかれた。後ろから眼窩に指を引っ掛けられ、そのまま引き倒される。これも踏み下ろしの餌食だ。

終わつてみれば圧勝だった。1分もかかつていない。この結果にリーリアはますます呆けた。

「え？ なにこれ？」

リーリアは悲壮な決意を固め、野族に身を任せようとしていた。それがいつの間にか死屍累々といった有様だ。わけがわからない。

「ちょっと複雑な気分だな。僕がやるよりずっとうまい。これはあれかな、外から見てるから体重のかけ方やら、姿勢が本で見たイメージ通りに出来るからかな。思つてた以上だ」

「へ？ どうこうこと？」

「ああ、『ごめん。今のは僕が直接リーリアを動かしたんだ』

「ほえ？」

変な声が出た。

「言つただろう？ 死体を操れるつて。今のがそうだよ」

「はい？」

「今までは、狼とか猿とか動物しか動かしたことがなかつたんだけ
ど、やつぱり人間はいいね。自分の体と同じ感覚で動かせる」

そういうとアルは森の中へ入つていつた。そして男を一人ずるず
ると引きずつてくる。最初に吹つ飛ばした野族の隊長だ。

「さすが隊長つて所かな？ 殺したつもりだつたんだけど」

「えつと……生きてるの？」

見るも無残な状態だつた。ぴくぴくと痙攣している。生きている
のかもしないが、死んでいないだけとこつよつて見えた。

「こいつどうしたらいいと思つ？」

「わかんないよ、そんなのー！」

「生きてるなら話を聞こつと思つたんだけど、ここの状態じゃ無理だ
な。僕が想像するにここつらはもつと大規模な盗賊団の一部だ。多
分開拓団を狙つてこいるんだが」

「え？ それまずいんじやないの？」

「うん、開拓団に呑えないとな。とりあえずここつらは開拓団に引き
渡そつか」

「のまま引きずつて連れていくんだろつか？ リーリアが疑問に
思つとこつらのまにか側に狼が現れていた。

狼は野族の隊長の襟首を咥えるとそのまま引きずり始めた。ついでばずつと付いてきてたんだつた、トリーリアは今まで田立つことのなかつた狼を見た。いつもやつて忠実に言つてことを聞いてくるのをみるとなんだか可愛く見えてくる。

「じゃ行こうか」

そう言つてアルは歩きだした。

リーリアはそのままつこつこつこつしたがある疑問からその歩みを止めた。

なんだかすゞへ重要なことを適当に流された気がする。

「アル君」

「なに?」

「私を……直接操れるつことつことつこと?」

「そのままの意味だけど、より詳しく言つと感覚の同調と筋肉の操作が出来る」

「感覚の同調つて……」

「リーリアが何か触つた感じがわかつたりとか、何かを殴つたらその反動を感じたりとか」

「操作つて……」

「全身を自由に動かすことが出来る。感覚の同調と合わせればかなりの事が出来るね。まあ男女の違いがあるから誤差はあるんだけど

人間同士だと余計な事を考えなくていいから楽だ。そーいや胸の感じはすごいね。すつごい揺れてた。びっくりしたよ」

「あ、あああああ

リーリアにはそれを大したことのないよう口に言うアルが信じられなかつた。全身の感覚を隅々まで探られ、自由に操作される。アルがその気になればリーリアには抵抗する術がない。健康な15歳の少年に思うがままに操られてしまつという状況からは卑猥な想像しか出来なかつた。

「ア、アル君……へ、変なことしないよね？」

リーリアは自分を抱きしめる。身を守りつゝ全身をすくめた。

「ん？ ああ何を心配してるとと思つたらそんなことか」

アルはリーリアの心情を察した。確かに全身の自由を奪われたりするのは年頃の少女としては不安なことだろつ。

アルはリーリアを安心させるために爽やかな笑顔を浮かべて言った。

「大丈夫だよ！ 僕、死姦には興味ないから！」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。しかん、シカン、死姦？

「えええええーーー？」

乙女としてはかなり複雑な心境になつてリーリアが叫んだ。夕闇に沈む森にその声は反響した。

6話 野族（後書き）

とつあえず「」んな感じでしばらく続けます。展開に関して「」意見があれば感想欄にでもお願いします

暗い森の中、アルとリーリアが歩いている。

既に陽は落ち、残照がかるうじて地平の端をぼんやりと赤く染めている程度だ。森の中は夜と言つてもいい。まだ月も出ていないためこの時間帯の方が深夜よりも暗い程だろう。

リーリアは闇におびえ、アルの腕にしがみついておつかなびっくり歩いていた。

アルはというとこんな状況でも夜目が効くのか迷う所がない。目的地である開拓団のある集落をまっすぐに目指していた。

「ねえアル君。何か明かりとかないのかな？」

リーリアは少し落ち着きを取り戻していた。先ほどの発言は安心させるための冗談だと無理やり自分に言い聞かせていく。すつごい爽やかに言われたのがむかつくけど。

「ないよ。元々暗くなつたら適当に寝ればいいと思ってたからね。そんな用意はない」

一人の後ろを大きな塊を咥えて引きずる狼が黙つてついてくる。その大きな塊は時折耳障りな唸りを上げた。

「ねえアル君。薄情なよつなんだけど……この人置いて行かない？」

「なんで？」

「怖いよ！ なんでこんな森の中、明かりもなしで、うーうー、唸つてる人引きずりながら行かなきやならないの！」

「でもなあ、こいつらが開拓団を襲うかもしけないって説明するなら、連れていくのが手つ取り早いだろう？」

「そんなのなくとも話せばわかってくれるよー、勇者様だし」

本心ではまったくそんなことは思つていなかつたが、この状況が嫌だつたのでリーリアは適当なことを言つた。

「まあ説明の役にはあまり立たないかもな。喋れる状態じゃないし」

そういうつて狼がずるずると引きずつてゐる塊を見る。野族の成れの果てだ。頭蓋が陥没し、顎が砕け、全身の骨が折れている。引きずられたせいで露出してゐる肌は地面にすりおろされ赤い肉が剥き出でていた。赤くないところは紫だ。呼吸がうまく出来ていらないせいだろう。

死んでいるように見える状態だが、喉のあたりからヒューヒューといふ甲高い喘鳴が聞こえ、時折唸りをあげることから生きているのだろう。平民ならとつこの昔に死んでいるはずだが、貴族の身体が無理やり命を繋ぎ止めていた。

アルは返り討ちにしたことにについてはなんとも思つていない。

リーリアも野族については同情する気にはなれなかつた。各地での暴虐無人な振る舞いは事実として広く伝えられている。ただの盜賊ならまだ同情の余地はあるのかもしれない。だが、彼らは貴族として平民を守る義務を捨て、身勝手に己の欲望を満たすだけのためにその生まれついての強靭な肉体を使ひしている。平穏な暮らしを望み嘗む者から彼らは敵視されていた。

「そうだな。あまり時間をかけるとその間に襲撃されていたら意味ないし……どうした？」

狼がくわえていた野族を放し喰りをあげていた。見ているのは森の奥だ。警戒しているように見える。

「どうしたの、ベアくまちやん」

「わよつと待て！　名前をつけたのかー…？」

森の奥を見ようとしたアルは、即座にリーリアの方を見た。

「え？　可愛いでしょ？」

アルはため息をついた。

「ちゃんと説明しどけば良かつたのか？　いや、でもこいつが最終的にどうなるかなんて僕の今までの話を聞いていれば分かりそうなんだけどな。」

「いわいわ言いたい」とはあるが、まずはその名前はなんだ？

「うちで飼つてる犬の名前」

「……せめて、ウルフおおかみ、じゃないのか、セコは？　それに飼つてる犬と同じ名前にするなよ、区別がつかないだろ」「うちには、ベアくま以外にも、とりバードが3匹いるけど特に困つてないよ？」

「どうやって呼びわてるんだよ

「念のため聞くけど、そのとりバードとやうは鳥か？」

「猫」

「なんでだよ！」

「べあくまちやん、アルくんが人のペットの名前に文句つけるよ。センスないよねー」

「ああ、もう。というかね。その狼は使い捨てなんだよ。いちいち名前なんてつけるもんじやない」

リーリアは信じられないものを見るような目でアルを見た。

「ちょっと！ 可哀想なこと言わないで！」

「そう言われてもな。そもそも一匹いたうちの一匹しか再利用しないんだ。残してきた一匹は可哀想じゃないのか？ それに森を出る時には連れていけない。街には狼なんていないだろ？」「……犬だって言つとか？」

「一目でバレるよ……」

ベアくまと呼ばれた狼は言い合つ二人を交互に見ていた。困つているようだ。先ほどの警戒行動も忘れている。

「ああ、こんなことを言つている場合じやない。さつき何かに反応してたよな？ なんだつたんだ？」

思い出したよつにアルは狼を見た。狼もそれに応じ再度森の奥を見る。

「何かいるのか？」

「ねえ、アル君！ アル君は操つてる人の感覚がわかるんだよね？ だつたらさ、ベアくまちゃんの耳の感覚つてわからないの？」

「そうだな、一応やつてみるか」

そういうとアルは森の奥を見て精神を集中させる。

だがこの試みはうまく行かなかつた。これは人間と狼の耳の構造が違すぎるからだ。聴覚に特化した犬型の獣と人間ではそもそも耳の筋肉の数すら違う。それに音を分解して解釈するのは狼の脳の機能だ。鼓膜の振動を同調したとしてそれを分析出来る能力が人間にはない。

「駄目だな。雑音しか聞こえない…… そうだ、リーリアでも試してみよう。いいかな？」

「え？ いいけど、耳だけだよ。変なことはしないでね」

再度聴覚に集中する。人間同士のせいいか相性がよかつたのか音は普通に聞こえてきた。それならばと戦闘中のように能力の強化を行う。

風に揺れる草木、虫の音色、地をゆく獣の足音、鳥の風切り音、夜行性の動物のかすかな鳴き声、森の中には様々な音が満ちていた。それら一定のパターンで奏でられる森の音色はノイズとして全て無視する。

すると静寂の中、人の気配が感じられた。それらは最大限隠密性を維持するべく身動き一つしていないが、微かな衣擦れ、呼吸、心音をリーリアの耳は捉えていた。

2人。狼が見ていた方に一人。反対側の森に一人。感覚を強化された聴覚はその位置を正確に捉えた。

さらに感覚を広げていくと驚くべき情景が脳裏に描かれた。

「え？ え？ なに？」

リーリアはその感覚に戸惑った。人の群れだ。開拓団を窺える位置にかなりの数の人間がいた。数が多くすぎてその全貌が捉えられない。それは開拓団を囲むように布陣していた。それらは今アル達を見張っている一人ほどの隠密性を持つた集団ではなかつたが、それでもこのまま近づいていたとしたら気付けなかつただろう。

「遅かつたかな。開拓団が囮まれてるよ」

「それって……野族？」

「多分そうだろう。遠巻きに見てるって感じか。開拓団つてかな

り追い詰められてないか？」「

アルは少し考え込んだ。かなりの数の野族がいた。現在地と開拓団の間しか感覚は捉えていなかつたがわかる範囲で野族は密集していた。この調子なら開拓団の周囲はどこも似たようなものだろ。開拓団の包囲は既に完成してゐる。そこには勇者もろとも完全に殲滅するという意思が感じられた。もう終わつてゐるとしか思えない。ただの盗賊ならともかく野族ならある程度の数であたれば勇者といえど押ししつぶせるだろ。

「リーリア。開拓団は放つといて森を出ないか？ 集落に行つて巻き込まれるとまずいと思うんだけど」

「……駄目だよ！ 行つて教えてあげなきや…」

リーリアは逡巡した後そう言つた。野族は怖いがそれでも開拓団を見捨てる事は出来なかつた。短い間とはいえ旅を共にしてきた仲間たちだ。

「教えても教えなくともさほど状況に変わりはないと思うんだけど……逆にそれがきっかけになつて一気に攻めてくるなんてこともあります」

「でも！ 勇者様は強いからなんとかしてくれるよ……」

あまり自信がないのかリーリアの声はだんだん小さくなり、語尾などほとんど聞こえなかつた。勇者が魔族を圧倒するのは知つてゐるが野族が相手となるとどうなるのかはわからない。

「勇者……ねえ。まあいいや。よし、じゃあこの野族はここに置いていこう。もしかしたら今見張つてゐる人が回収に来て、僕らを追わないかもしれない。この一人が本隊と連絡して、僕らに目を向

けるとさすがにやつかいだらう」

まあそんな間抜けじゃなさそうだけだ。

口にはしなかつた。気休めでも言っておけばリーリアも安心するだらうという単純な考えだ。

「いいの?」

リーリアが不安そうにアルを見た。勢いで開拓団に向かうべきだとは言つたが、同じ感覚を共有していたのだ。開拓団を包むように布陣した無数の野族の脅威は肌で感じていた。

「いいよ、リーリアが行きたいつていうなら付き合ひ。そう言つただらう?」

「……ありがと」

一人は開拓団の拠点、魔王の集落に向けて歩き出した。

何の妨害もなく集落の入口まで一人は辿り着いた。

集落の周りは1m程の感覚を空けて杭が打ち込まれていた。柵のつもりだとしたらあまり意味はないが、杭の間は細い糸で結ばれており、間には木の板が何枚か通してあつた。触るとぶつかり合い音がなる仕掛けだ。

それでもあんまり意味はないよな。飛び越えるかぐぐるかすればいいし。こんな程度のものならなくてもいいのに。

アルが馬鹿にしたようにその柵もどきを見ていると、カラソカラソと音がして、どつと何かが倒れる音がした。ちらりと横を見る
と無様な格好でリーリアが転がっている。

「何をやっているんだ？ 確か水をくみにこいを出たんだよな？」

「暗くて見えないよ！」

「見えなくたつてそれぐらい覚えてないか？ それに何勝手に行こうとしてるんだよ」

「え？ だつて早く伝えないと…」

アルは鳴子の仕掛けを軽々と飛び越えた。

「わかったよ。ほり立つて。一緒に行こい！」

リーリアの手を取り立ち上がらせる。

「しかし誰も様子を見に来ないな。ますますこの仕掛けの意味がない
と思うんだけど」

「どうなんだろ？ 私もこの仕掛けが鳴ったの初めて見たんだけど…」

「…」

実際は自分で鳴らしたわけなので少々バッが悪そつにリーリアは

「…」

「で、伝えるといつのは勇者でいいのか？ 開拓団の団長とかでな
くて」

「うそ、ティーンさんはおじいちゃんで戦うとか無理だし、野族が
くるつて言つてもどうにもならないと思つ」

「そつか。所でリーリアは服の替えはないの？ 勇者の所に行く前に着替えるとか」

「いいよ。まずは勇者様の所に行こうよ、あつち。あの大きい天幕の所」

そういうてリーリアが先導する。周囲ではいたるところで篝火が焚かれ、大小様々な天幕を照らしていた。既に寝ているのか人の気配は特に感じられない。

勇者がいるという天幕は確かに大きく豪華だつた。周辺の小屋を圧倒するサイズだ。天幕とはいもののしつかりと大きな柱が立てられており分厚い布で全体を覆つてている。布には所々に紋章や風景、人物などが描かれている。芸術作品の一種にも見えた。

「これは凄いな。そこの魔王の館より豪華なんじゃないのか？」

アルが2階建ての粗末な建物を指さす。

「うん、勇者様は1等貴族で凄いお金持ちらしいよ。凄く内装が凝つてるんだって。見たことはないんだけど」

そう言つた時かすかに心が傷んだ。勇者様の天幕の内装が凝つているといつのは一緒に水汲みに言つた従者仲間からの情報だつたからだ。

「こんなものを持つて来たのならそりや、こっちに住むよな」「でも、ギャリさんとセルジューさんはあつちの2階建ての館に住むつて聞いたよ」

「魔王の館か。そいつらは勇者の仲間？」

「うん、第三遊撃隊の隊員で司祭さんと魔法使いさん」

「そもそも遊撃隊つてのがなんなのか聞いてないんだけど」

「王様直属の部隊で4人組なんだよ。すごく強くて魔族領を取り返しにいくの」

「なんで4人なんだ？ もつと大勢で行けばいいだろ？」「

もつともな疑問だ。一応理由としては最小単位の一人編成を一組束ねて可用性を上げたということになっている。遊撃隊の主な任務は少数精鋭による魔王の暗殺。5人以上では隠密性に劣り、指揮統制も若干ながら乱れやすい。

もつともらしくそう言わわれてはいるが、実際の所は伝統的に勇者は4人組ということになつており、それが踏襲されているだけだつた。

「よくわかんないけど、普通の貴族が魔族と戦つても負けちゃうから少数精鋭だつて聞いたことあるよ」

「そういうものか。じゃあ行こう。とりあえずリーリアが説明してくれ。僕もここの人たちと多少の面識はあるけど勇者とは会つたことが無い」

「う、うん」

二人は天幕へと近づく。だが近づくと共にリーリアの足取りは重くなりやがて止まつてしまつた。最初はかすかに聞こえたその音が近づくに連れはつきりとしてきた為だ。

嬌声が聞こえる。あたりをはばからぬ艶めいた女の喘ぎ声が天幕の中から漏れていた。

リーリアは顔を真っ赤にしてアルを見た。

「ア、アル君！ ここここ、これって……」

「邪魔しないほうがいいんじゃないか？」

「ど、どうしよう。早く伝えないと行けないのに！」

「だったら入れば？ 緊急事態なんだしちゃんと説明すれば問題ないんじゃないかな？」

「む、無理！ だつて、中でその……」

「なら終わるまで待つしかないだろ？」「

そんなことを言い合つ内に一際高い声が響き渡り、あたりが静まり返つた。中で「じそ」「じそ」と音がしたかと思つと天幕の中から上半身が裸の男が姿を表す。

女のような顔をした男だつた。肩まである金髪と合わせると顔だけを見て男だと判別するのは難しいだろ。だがその鍛えられ引き締まつた上半身が男であることを強烈に主張する。その顔に不釣合なような鍛えられた身体も全体としてみれば調和がとれていた。とても美しい貴族の戦士だ。

外で騒いでいる者達を不審に思い、様子を見に出てきたといった風だった。

「あ、あの勇者様」

リーリアが顔を伏せながら言つ。勇者の汗だらけの上半身が天幕の中での事を想像させた。

「リーリア！ 無事だつたのか！ 崖から落ちて死んだと聞いたぞ！」

勇者は驚きの声を上げ、そして微笑みかけた。安否を気遣う様が感じられる。

「え、と、落ちたんですけど、あまり怪我をせずに無事でした。戻つてくるのに時間がかかるつてしません」

本当の事は言えないのでは死んでいたなどといつことは伏せた。それ以外は本当なのでそれほど疑われる事はないだろ？とリーリアは考える。

「いや、よかつたよ！ ん、そここの君は？」

「崖の下にいたリーリアを保護したものだ」

アルがぶつきらぼうに答えた。

「そうか、連れてきてくれてありがとう。心配していたんだよ」

アルはその爽やかな笑顔にすこしいらついた。心配していたという割には探そうとしていた風には見えない。すこく軽い感じが癪に障つた。

「でも、そつならヘルミーネの報告はおかしいな？ おい、ヘルミーネ！」

勇者が天幕に呼びかける。少しして女が出てきた。裸の上に薄い布をかぶり、くるまつただけの姿だ。あまり隠れていない上気した肌と、整っていない息遣いが生々しく情事の後を感じさせる。

その後からもう一人。こちらは男だ。筋骨隆々の大男。この男も上半身は裸で体液に塗っていた。リーリアはそれまで名前も知らなかつたヘルミーネという女と目を合わせた。

ヘルミーネの目に浮かんだのは怯えと怒りが混ざつたものだつた。ヘルミーネが少し後ずさつた。

「ヘルミーネ。崖から落ちて死んだリーリアを見たと言つたな？」

勇者がヘルミーネを問い合わせる。

「はい！ 確かにそうです！ 確実に死んでいました！ あんぐちやぐちやの状態で生きているわけがありません！ あの高さから落ちて死はないわけがないです！ なんで……なんであなたが生きてんの！ おかしいでしょ！ ねえ！ ビうして！ 化けてでてこないでよ！ あたしの邪魔をしないで！ ねえ！ 死んでないならちゃんと死んでよ！ ふざけないで！ あたしの居場所はここなの！ あんたなんかに奪われるわけには行かないのよ…」

ヘルミーネは必死に言い募つた。興奮のあまり早口になつてている。彼女は確かに崖から落ちたリーリアを見ている。そして崖下で血の花を咲かせ、動かなくなつたところまで確実に視認していた。側に寄つて生死を確認したわけではないが、誰が見てもこの状況で生きているとは言わぬはずだ。

勇者への返答は途中からリーリアに対する罵倒へと変化していた。混乱のあまり周りが見えなくなつていて。

「おい、おひつけヘルミーナ。生きてたつてんだから、それでいいじゃねーか。それとも何か？ 死んでた方がいいってことか？ ああ？」

大男がヘルミーナを齧るように諭した。ヘルミーナも自分が言ってはならないことを喚いたことに気づき口を閉ざす。

「ちょうどいい！ おい巨乳！ 今から2回戦田だ。次はお前の相手をしてやる。それしか能がないんだからよ、せいぜい楽しめよ

何を言われたのかリーリアには解らなかつた。なんでエーヴェルト様に巨乳呼ばわりされているんだろう？ 相手つて？

「エーヴェルト。初物は私が頂くと決まつていいでしょう。いつからあなたにそんな権利が？」

勇者がエーヴェルトと呼ばれた男を、底冷えのするような座つた。目付きで見た。

「す、すまねえ。つい、調子に乗つちました。許せよ。そいつはお前のもんだ。取つたりしねーよ」

エーヴェルトは即座に口のうかつさに気がついた。勇者にこの手の冗談は通用しない。それを身をもつて知つていてるエーヴェルトの変わり身は早かつた。

リーリアは自分が話題になつてこることがうまく頭の中でつながらなかつた。まったく想定外の状況だ。

「あまりふざけないほうが身のためですよ。さあ、リーリア。行きましょう。随分と汚い格好ですが、脱いでしまえば関係ありませんしね。服ならヘルミーナの予備がありますし後でそれを着てください」

そう言つて勇者は手を差し出し一歩近づいた。リーリアは後退り同じ距離を保つ。

「ちょ、ちょっと待つてください！ なんの話か知りませんがそんな場合じゃないです！ 野族が！ すぐそこまで野族が来てるんです。それを伝えに急いで戻ってきたんです！」

「ああ、彼らですか。知つてますよ」

「へ？」

リーリアは間抜けな声をあげた。既に知っていると言われるとは思つていなかつた。

「この場にいるのは我々だけです。開拓団の皆さんは物資と共に安全な場所で待機していますよ。第一遊撃隊が守っています」

なるほど。これは罷なのか。そして、勇者はあの野族の群れを遊撃隊4人で撃破出来ると思っている。勇者とはそこまでのものなのか？

「なので我々は彼らが襲いかかってくるまで十分楽しんでいればいいのですよ。リーリア、あなたを一日見た時に思いました。なんて美味しそうなんだろうって！ あなたが死んだと聞いた時はとても落胆しましたが……失つたと思っていたものがこの手に戻ってきたんです。期待も最高潮というものですよ！ もう我慢できない！ さあ！」

ようやくリーリアの頭の中がまとまつた。そして馬鹿みたいだと思った。従者など名ばかりで彼らが求めていたのは慰安婦だつたのだ。身の回りの世話をさせたいだけなら開拓団の中からいぐらでも集めればいい。彼らはわざわざ自分たちの好みに合つ女性を選別して連れてきたのだ。

リーリアともう一人、道中で別の馬車にいた二人は特にお気に入りということだつたのだろう。勇者の言動から察するにおいしい物は最後に味わう性質らしかつた。

リーリアとて子供ではない。慰安婦そのものを否定はしないが従者として集めたというのでは話が違う。騙し討ちに等しい。

「違います！ そんなつもりじゃ！」

リーリアは大声を上げた。自分が馬鹿だとは思つたが、こんなことを当たり前のようと言つた勇者達も馬鹿だとしか思えなかつた。

「そんなつもりも何もここまで来て何を言つておるんです？ 皆それはわかつて来ているんですよ？」

そんなことはない。そう言おうとしたが口がうまく動かない。詰め寄る勇者の情欲に濡れた目を前にして足がすくむ。射すくめられ身動きの取れないリーリアが取り乱しそうになつた時、リーリアと勇者の間にアルが割り込んだ。

その存在などすっかり忘れていた勇者はアルを訝しげに見た。勇者の頭の中にはもうこの後のリーリアとの睦み合いしかない。それを邪魔された勇者はいらだたしげに言つた。

「おや、あなたまだいたんですか？ セツセツどこかへ行つてください。目障りです。それとも何か報酬でも期待しておるんですか？ そんなものあるわけないでしょ？」

アルを馬鹿にし見下す。アルは勇者とか言つた所でセツセツの野族と変わらないと思つた。

「リーリアは嫌だと言つてるんだ。振られたんだよ、色男」

アルは侮蔑を隠そつともせず言つた。無性に腹が立つ。

勇者は無言だった。表情を無くして呆然と立つてゐる。何か言い返してくるかと待ち構えていたが、特に動きが見られないと見てアルは行動を起こした。

リーリアの方に振り向き手を取るとそのまま森へと向かい始めた。

「行こう。リーリア。こんな奴らほつとけばいい。開拓団も逃げるなら大したことにはならない」

「う、うん」

少し戸惑いながらリーリアはそれを受け入れた。このままここにいて勇者達の玩具になるつもりはない。

「聖棍よー。」

勇者が聖棍の名を叫ぶと同時に突風が吹き荒れた。

思わず突風に身をすくめ、顔を伏せると前方で何かの降り立つ音がした。アル達が顔を上げるとそこにあつたのは半ば予想通り、勇者の姿だ。

その右手には白い棍が握られている。棍などといつと大層なものと思われるかもしれないが実質それはただの棒だ。長さは勇者の身長を少し上回る程度、2mほどだった。

「随分と大人気ないな。それ勇者の武器ってやつだらう？ いきり立つてるようだけど平民相手にむきになるつてのはどうなんだ？」
「そ、そりですよ。貴族には、勇者には国民を守る義務があるはずですよー。」

「ええ、そして守るからには国民は勇者に死すべしだと思いますよ？ なのでリーリア。あなたが戻り我々に尽くせばそれで問題ありません。その身の程知らずは叩き潰しますがそれも勇者の娯楽として許容される範囲でしきつ。我々はそれが許される程度には国

民に近くしているのですから」

アルは勇者が本気で言っていると感じた。宣言通り確實に攻撃を加えてくることだらう。

視線を一瞬後ろにやる。天幕の前の男女は動いていない。今のところ様子を見ているようだ。ならば勇者を打ち破りそのまま森へ突っ込めば逃げられるかも知れない。

勇者は余裕なのか一瞬視線を切つたアルを見下すように見ていた。棍を手慰みにか指先でくるくると回転させていた。

「お前のぐだらない思想なんてどうでもいい。リーリア。前に言ったよな。母さんの事は仕方ないって。あれは撤回する。こんな奴らが仇だと思つと我慢出来ない。ぶつ飛ばしていいか？」

「う、うん、やつちやえ！ こんな人勇者の資格ないよ！」

勇者がアルの母親を殺した。それは仕方ないことだとリーリアも思つていた。しかしこんな勇者としておかしい人間に殺されたのが仕方ないなんて思えなくなつた。それはアルも同じ気持ちだらうと思つ。

「平民」ときに勇者の資格を問われたくはありませんが……」

勇者が言い終わる前にアルがわずかに前傾姿勢を取つた。攻撃の前兆と捉えた勇者が棍の先を僅かに下げ迎撃の態勢をとらうとする。その一瞬にリーリアが動いた。

勇者の視界からはまるでリーリアが消えたように見えた。リーリアを全く警戒していなかつたこともあるがその速度は貴族の目を持つても捉えきれないものだつた。

リーリアは間合いを詰めながら両手を地に付けしゃがみ込み、右足を外から回すようにして足払いを放つていた。

さすがに勇者ともあらうものが両足もろとも刈られるようなことはなかつたが、前に出していた左足を弾き飛ばされた。まるで鉄塊でもぶつけられたような感触に勇者の意識が足元へと集中する。この時点でほぼ勝負は決まつていた。

リーリアは足払いの勢いそのままに回転して右足で踏み切り、そのまま飛び上がつた。回転の勢いを殺さずに威力をのせた左足の蹴りが勇者の顔面を捉える。

勇者はその間、棍で蹴りを受けようと動き出していたが間にあわなかつた。上下の揺さぶりに全く対応出来ていない。

顔面を蹴り飛ばされ勇者の足が地を離れた。それでも勇者はなんとか反撃しようとした。だがそれも失敗に終わる。リーリアの足払いから続いた攻撃は終わつていなかつたのだ。回転の勢いを余すことなく利用するための右足の蹴りだ。左足が宙にある間にすでに右足は左足を追いかけるように跳ね上がつていた。水平に振られた右足が棍を弾き飛ばす。

勇者の顔が絶望に歪んだ。彼の闘法は棍に依存している。攻撃も防御も棍を中心には組み立てられているため棍を失えば為す術がない。左足から着地したリーリアはまだ宙に浮いている勇者に接近する。このまま攻撃してもはじき飛ばしてしまっただけでさほどダメージが与えられない所だがその解決法は簡単だつた。

右腕で背を抱くように抱え、左の掌を腹部に叩きつけた。挟み撃ちだ。逃げ場のない衝撃が身体の中心で弾ける。十分に威力が浸透したことを確信すると、リーリアは勇者を天幕の方に投げ捨てた。天幕がその場にいた男女を巻き込んで崩れ落ちる。

アルとリーリアのその後の行動は迅速だつた。勇者がどうなつたかは見もしない。

リーリアは落ちた聖棍を手にして、アルを背におぶると一心不乱に森へと駆け出した。

「おい！ 野族共！ 勇者は丸腰だ！ 襲うなら今だ！」

アルはそう叫んだ。次にリーリアに言ひ。

「すまないが」のまま森を抜けたまで全力疾走だ。一気に行く

闇の森をアルを背負つたリーリアが一気に駆け抜けた。夜目の効くアルが補助するため暗闇はさほど問題ではない。野族の間を途中通り抜けたが相手も何がなんだかわからなかつたのかぽかんとした顔をして二人を黙つて見送つた。

一人は一直線に移動する。崖も川も勢いにまかせて飛び越えた。リーリア自身はめまぐるしく変わつていく風景にあわてふためき、混乱したままだつたが、身体はそんなリーリアを無視して限界までその能力を使用する。

あつと並ぶ間に森を抜けそこでリーリアはやつと止まつた。

「なんていうのか、その……」んだけ無茶苦茶やつてゐるのに全然疲れてないんだけど……」「

リーリアがぼやいて森の方に振り返つた。アルもようやくリーリアの背から降りる。

「まだ油断するな」

リーリアが「なんで?」と聞こうとした時、聖棍がかたかたと揺れだした。勇者の叫び声が聞こえたよつた気もしたが、かなりの距離だ。聞こえるはずもない。

「そいつは呼ばれたら飛んでいくみたいだ。そのまま抑えてて」

リーリアは手をすり抜け飛んでいくつする聖棍を必死に抑えた。

かなりの力でリーリアの手を逃れようと蠢くが、握り続けているうちに次第に弱まっていきやがて沈黙した。

「よし、終わつたみたいだな」

「え？」

田論見通り野族は勇者に襲いかかったのだろう。あの場にいたのは勇者を含めて3人。あの状態の勇者を中心に戦つても勝ち目はなかつただろう。天幕の中や、他の建物に従者や勇者の仲間がいたのかも知れないがそれでも結果はそう変わらないと思われる。彼らがどうなつたのかアルは特に興味もなく、その事をわざわざリーリアに説明する気もなかつた。

「とりあえず難は逃れたということだよ、じゃあ行こうか。ここからは普通に歩いて行こう。あれを人に見られるのも困るしね」「これどうしたらいいの？」

リーリアは手にした聖棍を振つた。

「持つていいくのも面倒なことになりそつだな。その辺に捨てていこう」

「え？ 大丈夫？ これ一応国宝みたいなものだつたと思つんだけど」

「見た目ただの棒だしいいだろ。それに多分勇者が呼んだら飛んでいくし」

「多分死んでるから呼ばれることはないと思つナビ」

「それはリーリアには言わなかつた。

「そ、そう？ だつたらいいけど」

リーリアはあっさりとその場に投げ捨てた。

「それよりリーリアの服をびりするかだな。今更取りに戻るわけにも行かないし」

「もういいよ……なんとか街に行ければ……」

「お金は？」

「え？」

リーリアは着の身着のままため金品の類は身につけていない。アルも魔族の集落では人間の金は必要なかつたので持つていなかつた。

「まあいいや。とりあえず街に行こう。ベイヤーってどこに行きたいんだけど行き方わかる？」

「うん。ここからだと東だから真っ直ぐ道に沿つて行けばいいと思う」

「じゃあ行こう」

「あれ？ 何か忘れてない？」

「ん？ なんだ？」

リーリアの疑問に応えるかのよつこ、森からすゞい勢いで何かが飛び出してきた。

「ベアくま！」

「ああ、お前か……」

それはアルが使役していた狼だ。全力で追いかけてきたのかかなり息が上がっている。

「一緒にくる?」

「街までは無理だろ?」

「街の外にいればいいじゃない、ねえ一緒にいこうよ」

アルはこゝなことで押し問答するのも馬鹿らしくなったのか黙つて歩き始めた。リーリアもそれを肯定と見て取つて狼を引き連れアルの後を追つ。

一人と一匹は明るい月の照らす中、東へと歩き始めた。

「と、まあこんな感じの事があったわけなんですが

アルは「」の街までやつてへるまでの事をキャシーに話し終えた。

「なんとこうのか……つまらん」

「え?」

まさかつまらないと言われるとは思わなかつた。ここの話は

リーリアにしてみれば大冒険だったのだ。

「私の想像していたのはこゝだ。性欲を持てあます健康な少年のアルはある日、男好きのする魅惑的な肢体を持つた美少女リーリアを見かけ、辛抱たまらなくなり、その獸欲を迸らせて思わず襲いかかってしまった。リーリアがボロボロになるまでその身体を貪り尽くした後、我に返つたアル少年はとても反省し、なんとかその罪を償おうとリーリアと……」

「うふふふふ、何言つてゐるんですかー。」

リーリアが慌てて口をはむ。

「お気に召しませんでしたか」

アルはいつも通り冷静に返す。

「ああ、いや半分冗談だよ。概ねは理解できた。しかしながら、その能力か？ それは私の知る魔法にはないものだな。どちらかといふと悪魔そのものが行使する能力に近いように思う。アル君は人間だよな？」

「はい。悪魔というのがどのようなものか知りませんが、魔族ではありません」

「ふむ。魔族がそのような力を使うといったことも聞いたことがないな」

「そうですか」

「その能力はあまりおおっぴらにはしないほうがいいな。わかるだろ？」

「そうですね。死者が蘇ったように見えるというのが、とてもまずいということは、常識に疎い僕でもわかります」

「さて、しかしこうなると先ほどの魔法講義と釣り合つ話かといふと微妙な感じだな。どちらかと言えばもういすぎな気もする」

「そう思つてくださるなら、掃除の報酬に多少色をつけていただければ」

「そうかね。ではそうするとするか。じゃあ明日からもよろしく頼むよ」

キャシーはそう言つて話を切り上げようとした。話をしてくるうちに夜も更けてくる。そろそろ寝ようと言つことだらう。

「あ、あの！ 私の事なんですけど……その、元に戻ることとは出来ませんか？」

リーリアがずっと気になつていたことについて訊ねた。ずっとこのままなのか？ というのは意識を取り戻して以来、常に頭のどこにある不安だつた。

「ふむ。アル君の話が本当なら、元に戻るといつのは骸に戻るということだが……。そうだな、先ほどの話で言えば、今のリーリアちゃんはリーリアという存在の魔力が失われた状態だな。そしてアル君が操作するリーリアという存在の魔力で生きていることになる。これをなんとかリーリアの存在として定着させる事が出来ればいいは。とは思うがその方法は見当もつかないな

「そうですか……」

そんな簡単に答えが見つかるとも思つていなかつたためリーリアの落胆はそれほどでもなかつた。何か方法があるのかも知れないと前向きに考える。アルが一緒にいてくれるなら今までもそれほど問題ではないのだ。それに完全に元に戻つたのならアルと一緒にいる理由も特になくなつてしまつ。そう考えるとリーリアは少し複雑な気分になつた。

お気に入り登録が100件超えました。ありがとうございます。
2章の話としては多分折り返しに入つたぐらいだと思います。
文章量的にはどうなるかはわかりませんが……。
これからもよろしくお願ひします。

これは夢だ。

母さんが愛おしげに僕を見詰めている。

母さんが優しく僕に微笑みかけている。

母さんが僕の頭に柔らかい手をのせて撫でてくれる。

母さんの優しく甘い匂いに包まれて僕はとても幸せな気分になる。

だからこれは夢だ。

最近の母さんはとても遠い所を見ている。僕が側にいても見向きもせずに虚ろな瞳を宙へ向けている。

たまに僕の方をとろんとした目でみて「テオ様」と呼び掛ける。そんな母さんは少し嫌だつたけど、それでも僕は話しかけてくれたことに嬉しくなつて「違うよ、僕はアルだよ」と返事をする。すると母さんは何かに気づいたような風で、よそむきの顔をつくりつて「あら、アルのお友達かしら?」と言ひ。僕は悲しくなるけど、それはもう二つものことだから何も言ひ返さない。

だから母さんが僕の手を優しく握り外へ連れていってくれるなんて夢でしかない。

僕は母さんの優しい顔を黙つて見上げる。

僕は母さんの腰のあたりまでしか背がなくて、だからこれはとても昔の夢だ。

母さんは僕の手を引いて森の奥へ歩いて行く。

一人で行つてはいけないといつも言われていて、僕はいいつけをちゃんと守つていたから、初めて行くそこに何があるかなんて知らなかつた。

段々まわりが明るくなつていって、木が光るなんて珍しくてはしやぐ僕を母さんは黙つて見つめていた。

でもそんな楽しい気分もすぐになくなつてしまつ。光る木に囲ま

れてぽつかりと空いた空間にあの男がいるのを見てしまったから。まぶしいぐらいに輝く広場の中でその男の周りだけが闇に沈み込んでいるようだつたけど、母さんは遠くから見えた時から早足になつて僕をひっぱるように連れて行く。

「テオ様！」

母さんがさつきまでの僕よりもはしゃいだような声を出す。ひどくいやな気分になる。

男を見上げると目が会つた。とても冷たい目で僕を見ているようだつたけど、僕自身じやない何かを見ているようで心が通じあつ気がまるでしなかつた。

「始める」

母さんはそんなどうでもよさそうに声をかけられてもとても嬉しそうで、それが逆に心を感じさせなくて怖くなる。

母さんは地面に作られたいびつな図形の前に立つ。光る石がいっぱい並べてあつてそれが大きな円を作つてゐる。中には大小様々な石が文字の様な形に置いてあるけれど、それは僕が今までに読んだ本には出てこないものだつたから、本当に文字かはわからなかつた。中心には人のかたちをした何かが積まれてゐる。人間なのか魔族なのかはわからないけどとも生きているようには見えなかつた。ゴミのようにおかれた、黒や紫や灰色でまだらになつた腐つた肉には蛆がたかつていて、そいつらだけが眩しいぐらいに白かつた。見ていると気分が悪くなつてきて、僕は母さんに「もう帰ろう、こんなところいやだよ」と言つたけど母さんはぶつぶつと何かを言うだけで僕の方を見てもくれなかつた。

母さんの視線がだんだんと上に向いていつて空を見上げた。僕もつられるように天を見上げる。そこには金色に光る細長い龍がいた。

そういうえば今月は龍の月だ。その龍がこちらを見ているような気がした。天高くにいるそれがどれくらい遠いところにいるのかはわからぬけれどにらみつけるような田が「」の広場をじっと見ていると思えた。

「姉さん！ 私よ！ デリアよ！ お願ひ！ 出てきてちょうだい！」

母さんがまるで空の龍に語りかけるように訴える。その声は龍に届いたんだろうか。円の中で何かが変わったように思えた。

僕はその光景を呆然と見つめていた。死体が段々と茶色くなつていく。死体を食り尽くすように蠢いていた蛆たちが次から次へと茶色い蛹になつていく。やがて腐った肌は蛹で埋め尽くされた。

ピチッという小さな、何かが破れるような音がする。蛹が割れる音だ。まばらに聞こえてきたその音は、だんだんと切れ間がなくなつていつて一つの鳴り続ける大きな音になつた。

ここまでくると僕にも次にどうなるかはわかつた。

蠅だ。

一斉に羽化した蠅が飛びたつて広場の対して大きくない空間をまづくろにした。蠅はしばらく飛び回つたあと円の中心、積み上げられた死体の上にあつまと人形になる。

一目見た僕にはそれが死そのものに思えた。蠅がよせ集まつたそれはとてもみにくくて、でも悩ましげに身をくねらせるその姿態から僕は田を離せなくなつた。それは真つ黒な蠅の集まりで濃淡のない影のようだつたけど、どこか母さんに似ていた。

蠅の羽音が声になつて広場を震わせる。そいつは母さんの呼びかけで出てきたようだつたけど、母さんの方を見ずに不吉な男の方を見ていた。

「テオバルト！ 貴様！ まだ繰り返すというのか！」

蠅は怒っていた。僕はその炎のような怒りに身をすくませたけど、男は何も感じていな「よつ」だった。

「出来るまでやる」

なんの話なのか僕にはわからなかつたけど、男にとつてはそれはあたりまえのことのようだつた。

「姉さん、何を怒つているの？ ほらテオ様と私の子、アルよ！ こんなに大きくなつたの」

母さんは僕の後ろにやつてきてそつと手を僕の両肩に置いて蠅に紹介する。

「何を……何を言つている！ わからないのか？ それは5人目だ！ お前の子なんかじやない！」

蠅の羽音ではとても人の声には聞こえなかつたけど、それでもそこには悲しみがあつたような気がした。

「ふふつ、姉さん」おかしいわ。どこから見ても私とテオ様の子供じやない。ほら、目元なんてテオ様そつくり！ 鼻は私似かしら？ 肌は私と同じで、青みがかつた艶のある黒よ、これならいざれ氏族の元に帰つてもおかしくなんてないわ！」

僕は母さんを見上げた。母さんは僕に微笑みかける。僕は僕が母さんの本当の子供じやないなんてことは知つてはいる。だからそんなことは言つてほしくなかつた。

「テオバルト！ デリアを解放しろ！」「成功すれば解放する」

男はまったく動じず、すぐに返事を返した。それ以上何も言つ気がないようだつた。

蠅が怒りのあまり激しくふるえた。そして僕の方を初めて見た。蠅で出来たうつろな目が僕を捉える。僕の足が勝手にガタガタとふるえだした。

「どこから攫われて来たかは知らんが……恨むならその男を恨むがいい！ 死靈の王の力！ くれてやろう！」

蠅が人の形を無くして一気に弾けた。蠅の群れが一斉に僕に襲いかかってきて目の前が真っ暗になる。

何もわからないまま僕は蠅にたかられる。蠅が口の中に入つくる。鼻に、耳に、目に入つくる。蠅が身体中を這いまわり、穴という穴から入つてくる。

僕は手を振り回した。立つていられなくなつて地面を転がり回つた。叫ぼうとして開けた口にはさらに蠅が入つてこようとする。僕は……。

そこで目が覚めた。

アルは一瞬どこにいるのかわからなくなつたが、すぐにここがキヤシーの家の寝室で昨日と同じく床に寝ているのだと思いだした。叫んだりはしなかつたが、かなりうなされていて体中汗まみれになつてゐる。

上体を起こし大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出す。さすがにすぐには無理だつたが、何度も深呼吸を繰り返すことでなんとか落ち着きを取り戻すことが出来た。

嫌な夢だつた。5年ほど前のことだらうか。妙にはつきりとした夢だつた。

「テオバルト、どこかで聞いたと思ったがやはりあいつか……。

テオバルトと千柱の悪魔。キャシーに聞いたとき微かに記憶を刺激されたがようやく思い出した。

ならばあの蠅は悪魔で、あれは悪魔契約の儀式だつたといふことか、とアルは思い至る。

死靈の王か……。この能力はやはりあいつが……。

あの後どうなつたのかは覚えていなかつた。気がつけばアルは自宅に戻りベッドで寝ていたし、母親もいつものように朦朧とした状態だつたのでそんな儀式があつたようには思えなかつた。

その後しばらくは声が聞こえていた。それは能力のありかたについてアルに何度も質問を繰り返し、辟易しながらもアルはそれに応え続けた。

声が聽こえなくなつた時アルは能力を把握していた。

夢の内容がだんだんとぼやけていく。結局何があつたのか詳細は思い出せなかつたが、テオバルトの名だけはしつかりと心に刻み込んだ。

アルは窓の外を見る。夜明け前だ。わずかに明るくなりつつある。立ち上がると寝具を畳んで部屋の外へ出た。そのまま廊下を進み裏庭に出る。

今更寝る気になれなかつたアルは軽く身体を動かすこととした。旅にでる前は日課のようにしていた練習だ。

裏庭には「ミのコ」があつたが、真つ直ぐ進めるほどの大さがあればよかつた。

呼吸を整えると右足を前に出し腰を落とした。体重は後ろ足にためにかける。左手は拳を作り甲を下にして前に突き出す。右拳は腰のあたりだ。

フツ、と息を吐きながら左足を前に進め、右拳を左腕の上をこするようにしながら前に打ち出す。左手は同じ勢いで腰まで引いた。拳は縦拳と呼ばれる手の甲が横を向く形だ。

その状態から右手を胸の前を通して回転させ右甲を下にする。最初の構えと逆の形になつた。

アルはこの動作を左右交互に続けた。真つ直ぐに進んで行き、庭の端にたどりつくと両手を交差させて頭の上にやり、その状態で振り向いて最初の構えに戻る。このただ振り向くという動作にも意味は込められており、一つの動きで受けや投げとして応用が利くようになつっていた。

今度は庭を逆方向に進む。アルは庭の端を何度も往復した。打ち出す度に角度を調整し、体内の感覚に注意を払う。足元から伝わる力が途切れない動きを求めて何度も愚直に型を繰り返す。

汗だくになつてきたため少し休もうと、両足をそろえ終了の型を取ろうとしたときアルは視界の端に黒い影を捉えた。

裏庭にやつてきた時にはなかつたそれが気になり振り向くとそこには黒衣の少女、大魔王がいた。

「懐かしいですね。久しぶりにその動きを見ました」

「なんで毎朝ここにいるんだ?」

アルは大魔王だというのだから敬意を払うべきと最初は思つてたのだが、昨日しばらく一緒に過ごすうちにそんな気はなくなつていた。

「最近はこのあたりが私の朝のお散歩コースです」

「そう言いながら大魔王は近づいてくる。

「私のお父さんがその技を得意としていました」

お父さんと言われても面識もないし、そもそも大魔王のことがまだよくわかつていない。

「大魔王の父親というと先代大魔王とか？」

「お父さんは人間ですよ？」

「いや、そんなあたりまえみたいに言われてもこっちは何もしらないんだけど」

「それは独学ですか？」

話しの流れをぶちきつて大魔王は次の話題を振つてくる。大魔王は自分がしたい話を勝手にしてくるだけだった。

「本で読んだんだ。それで見よつ見まねでやつてる」

「それなら大したものですよ。大きな破綻はありませんでした」「あなたはこの技を知つているのか？」

「知つてはいますよ。ただ習つたことはありません。お父さんは女の子は拳を使うもんじゃないと言つて手刀や掌の技しか教えてはくれませんでしたが……盗み見て勝手に覚えました」

大魔王は照れるよう舌を出して言つた。アルには今の話しどこに照れる要素があつたのかわからなかつたが、大魔王はこういうものだと大体わかつてきていたのでそれは気にしないことにした。

「その私から見てあなたの場合は、少し腰を落す事を意識しすぎで

すね。それでは居着いてしまいますよ」

そう言つて大魔王は先程アルが行なつていたのと同じ構えを取つた。黒いドレスのスカート部分が足元を完全に隠しているためよくわからないが、腰を落とし、左手を前に出し、右手を腰だめにしたその構えはとても様になつてゐる。

アルは自分の構えて比べてどうなのか考えてみたがよくわからなかつた。確かに構えだけを見ても何んまいから大魔王が自分の何歩も先にいるのはわかる。

だが自分がどう駄目なのか客観的にわからなかつた。

大魔王は考えこむアルを見て微笑を浮かべた。

「では、大サービスです」

そういうと、大魔王はスカートをたくし上げた。すそからくるくると巻きあげていき腰のあたりでうまく挟み込んで固定する。

黒い下着と肉感的な白い太ももとの対照が眩しかつた。

「なんで黒なんだ！」

アルは混乱して突つ込みどころを少し間違えた。

「これは闇の下着です。ちなみに私の着ているドレスは闇の衣といいまして、合わせて大魔王の正装らしいです。ふふつ、光の玉があれば闇の衣をはぎとることができますよ。挑戦してみますか？」

「いや、じゃなくて何してんだよ！」

「だから大サービスです」

「いや、サービスなのかも知れないけども！」

「ん？ ああ、なるほど。なにを考えられたのかはわかりましたが、私のサービスは特別に足元を見せてあげようということです。特に

股関節の角度が重要ですのでよく確認してください」

「えーと、いいのか？」

「はい、近づいてよく見てください」

そう言われると確かに好奇心を刺激されたアルは大魔王の足元に近づき黒い下着を間近で見た。近くで見ると細かな意匠がレースで施されており、薄つすらと素肌が透けて見えている。これ大事なところも見えるんじゃないか？ などと目的を見失いそうになつたが、大事なのは股関節の角度だ。だがそれは太ももと股の境目を必然的に見てしまうし、そうなると下着の中心部分も目に入る。

いや、これで見えても僕が悪いわけじゃ……。

「アアアア、アル君！ なにしてんの！」

裏口の扉の前でネグリジェ姿のリーリアが裏声で叫んでいた。リーリアは今信じられないものを目の当たりにしている。アルがスカートをたくしあげた大魔王の側にしゃがみ込み下着を凝視しているといつ、どうしてそうなるのかわからない光景だ。

「大魔王の股間を見ていた」

アルがリーリアの方を振り向いてひどく真面目な顔で答えた。

「なんで！」

見たままの光景をアルが説明した。その通りだがそれはリーリアの求める答えではない。

リーリアは大魔王に早足で近づくとたくしあげられたスカート部分を引っ張り出し元の状態に戻した。

「大魔王さん！ 何があつたか知りませんけどアル君は多分悪気はないんです！ 許してあげてください」

「ちょっと待てリーリア。それじゃ僕が悪いように聞こえるんだが」「悪い！ どんないきさつがあつたって今のはアル君が完全に悪いよ！」

「なんか納得がいかないんだけど」

アルがぶつくさ言いながら立ち上がった。

「おはよう」わざとまく。お、リーリアさん

「今おっぱいって言おうとした……」

リーリアが半閉じの目で大魔王を見る。

「えーと大魔王さん。というかですね、お名前はなんとおっしゃるんですか？ 自然に大魔王さんと読んでもましたが、それもどうかと思つたんですけど」

「私の名前はすゞく長いので誰も覚えられないと思つのですが」

そう聞いたリーリアは確かに王族なんかはすゞく長い名前が付いてたなあと思いだした。だが、それはそれで別に問題ないはずだ。

「あの、名前が長くても、ファーストネームとか愛称とかあると思うんですけど……」

すこし自信がない感じでリーリアが言つと、大魔王は驚いた顔をした。

「ああ！ 名前を聞かれると教えるのが面倒くさいので大魔王と名乗つていたんですが、それでよかつたんですね！」

「そんなに嬉しそうに」されると「こ」ことを言つたつもつもなかつたんですが」

大魔王は満面の笑みを浮かべてゐる。

「そうですね、では。私のファーストネームは、パエリアと言います」

「え？」

リーリアは何かの聞き間違いだらうかと思った。そんな名前の料理があつたような。確かに海沿いの街の名物料理だつたはずだ。

「パエリアさん、ですか？」

「はい。お父さんが付けてくれました」

「その……お前の由来なんかはあるんでしょうか？」

「はい。お父さんが好きな料理の名前ですー。」

大魔王が滲刺と応える。父親の話題をするのは嬉しそうだつた。

やつぱり……お父さん適當すぎますよ……。

「この街ではパエリアと言う料理を出しているお店はないようでしたので、いつかは食べに行きたいと思つてます。どんな料理か楽しみにしているんですよ？」

「や、ですか、食べるといいですね……」

そんな会話をアルは黙つて聞いていた。確かに女性の下着を穴が開くように見つめている所を見られたのはバツが悪い。このままそれは忘れてくれないかと思つていた。

「それはさておきアルさんは悪くないのですよ。私が技について教えていたのです」

軌道修正されてしまい、アルは苦々しく思った。

なんでだー。」の流れならパエリアとかいつ料理の話だひつ。

「技って？」

「リーリアがたまにやるやつだよ、ほら、膝折つたり、投げ飛ばしたり」

「私はやつてないよ！ あれアル君のせいだよ！」

「いやね、僕が練習してたら、大魔王がその技に詳しつていうから教えてもらつてたんだよ」

「だつたらなんでパンツ見てるの？」

リーリアが疑いの目でアルを見る。論理が大跳躍しているように思えた。

「立ち方を教えてもらつてたんだ。それには股関節の角度とかが重要なんだよ」

「……それ、アル君の立ち方を大魔王さんが見てアドバイスしたらいいんじゃないの？」

「あ！」

「なるほど。そうすると私は下着の見せ損ということですね」

何かを納得した大魔王はぽんと手を打つた。

損とか得とか関係無く、のりのりで見せつけてたくせに……。

「では、損した分はそうですね、ちょっとだけ遊んでもらいましょ

うか

「あ、遊ぶつて？」

リーリアがまた余計な方面に先走る前にアルが遮る。短い付き合いだがこういう場合に、どういう反応を返すかは大体わかつていていた。

「それはいいけど、大魔王つてのはすぐ強いつて聞いた。僕じゃどうしようもないんじゃないかな？」

「ああ、それなら心配いりませんよ。はい。力を抑えました。これで私はそこらの町娘と同様の力しか持ちあわせていない状態です。ふふふ、私を押し倒してしまうチャンスですよ？ どこからでもかかつて来てください」

なんでパエリアさんはアル君に対してもう、挑発的なんだろう

：

アルは大魔王を戦うつもりで観た。普通に立っている。隙だらけだ。どこに打ち込んでもあたりそうな気がする。ならとりあえず攻撃してみる。

そう決めたアルは先程まで練習していた技を繰り出していた。左足を踏み込み右拳を突き出す。

大魔王はその拳が伸びきる前に動いていた。左の手刀がアルの手首に上から軽く落とされる。ただの手刀がからみつくようにくついて拳の起動をそらした。大魔王は一步前進しアルの空いた胸に右掌を軽く当てた。同時に大魔王の右足はアルの左足首の後ろに回り込んでいる。勝負としてはここで終わりだ。

「飛んでみましょーか」

そういうと大魔王は胸に当てていた右掌を下に滑らした。そのま

まアルの足の間に右手を挿しれると全身を使って右手を振り上げた。アルの身体がふわりと浮く。そう大した勢いでもないがそれでも空中にいる間は身動きがとれない。泡を食っている間にアルは「ゴミ」の山に突っ込んでいた。

「ええ！？ ちょっと待つてください…… わき普通の女の子の力だつて言つてませんでしたか？」

リーリアが疑問を呈した。普通の女の子だというなら自分が正にそうだと思つてゐるが、あんなことが出来るとはとても思えない。

「そうですよ。今のは技ですね。うまく身体を使つことで今のでの力は發揮できます」

アルが「ゴミ」の山から出でてきた。そつダメージはない。軽く浮かされただけだった。

「私への攻撃で今の選択は間違つてはいません。どうするか迷つたならまず一番自信のある技で挑むべきです」

「でも簡単に逸らされ懐に入られた」

実力差があるとはわかつていただがここまで簡単にあしらわれるとは思つていなかつた。アルは少し悔しかつた。

「それは練度の問題ですね。ちゃんと習得すれば今ぐらいの邪魔は無視して攻撃を入れる事ができます。あの技の特徴は愚直なまでの直進性です。ちょっとやせつとで逸らされるようなもんじゃ本来ないですよ？」

「どうすればいいんだ？」

「型の反復練習しかないでしょ。完全な型があるとして、それに

いかに近づけるかがポイントです。それさえ出来るなら他の技は一切必要ないとすらいえますよ。私のお父さんなんかはいろいろな技を習得していましたが、ほとんどこの技で片付けていました。まあ普通はそれができないから様々な技があり、それを連携し、晦まして、不意を討つわけです。ですが私のお薦めはやはり一つの技を中心にして極めることですね。極めるとはいからくともこれという技が一つあれば、他の技もそれなりに出来るようになつていきますよ」「なるほど、勉強になつたよ」

武術の本は繰り返しくり切れるほど読み頭に入れてある。自分で何度も繰り返し様々な技を練習していた。だが自分の身体をイメージ通りに動かすのは難しい。その為伝統ある武術の独習はまず無理だ。師による外から見た矯正が必要になる。

それが、リーリアを外から見ながら操作することでのまく噛みあつてしまつた。自分のイメージしたとおりに自分の身体を動かすのは難しいが、自分のイメージしたとおりに他者を直接動かし、外部からの視点で動作を修正しイメージにあわせる。これがリーリアの強さの根底にあつた。

だが、これでは常にリーリアを戦わせることになつてしまふし、それはアルの本意ではなかつた。自分自身がもつと強くなる必要があると決意を新たにする。

「……リーリアにもわつきの技の型を教えてやつてくれないか?」

アルがしばらく考えた後に大魔王に教えをこつ。

「え? なんで?」

「もちろん、僕も教えてもらつよ。でも、やはり外からどんな姿勢になつているのか確認するのも重要だ。大魔王を見てて文句言われるなら、リーリアならいいだろ?」「

「なんで私ならいいのー。」

リーリアが文句を言つてゐる間に、大魔王はいつのまにかリーリアの後ろの回りこんで腰を両手で掴んでいた。

「左足を一步前に出してください」

「え？」

リーリアは少し考えて言われたとおりに足を前に出した。先ほど光景は衝撃的だった。いくらなんでも女性の股間にあれほど顔を近づけるというのはありえない。しかも話を聞いてみれば大魔王が自らあの状況に持つていつたと言つ。また同じことになるんじゃないかと思うと、ただ断るのも躊躇われた。

大魔王は掴んだ腰を下に押し下げ落とさせる。右足を外側に捻り、腕の角度を調整した。随分と窮屈な姿勢だった。

「こんなところでしようが。では最初の話しの続きなんですが、ここです。後ろ足の付け根。腰を落としているつもりでもこの部分の折りたたみが甘くなっていますね。これでは後ろ足をつっぱらせて体重を支えているだけですので移動に制限が出てしまいます。体重は全体の構造で支えて分散させる必要があります」

大魔王とアルはしゃがみ込みリーリアの股関節を注視している。ネグリジェはかなり透けているため大魔王のようにたくしあげる必要はなかつたが、リーリアは顔を真っ赤にしてうつむいた。下着も透けているのだが、ネグリジェの上から見ると重なりあつてモアレ状になり微妙に陰影がわかるかどうかという程度になつてゐる。

「あれ？ 私、朝起きたらアル君がいないから探しに来ただけだつたのになんでこんなことしてるんだろう？」

「お前ら何やつてるんだ？」

キャシーが裏口の扉にもたれかかり腕を組みながら、呆れたように言った。

朝食の準備が出来たと言いに来たのだが、そこにあつたのは妙な態勢でふるふると震えるリーリアの下半身を見つめ続ける一人の男女が、股間を指さしながらうなずいたりしている姿だ。しかも一方はこの国の最高権力者である所の大魔王。

どんなプレイだと呆れるのも無理はなかつたがそういうキャシーも扇情的な寝間着姿だったので、裏庭の「ゴミの山と4人を合わせて傍から見るとますますよくわからない光景と化していた。

中天を少し過ぎた陽が照らす中、ガタガタと妙な震えかたをする馬車が走っている。大型の屋根の付いた馬車だ。2頭のこれも大型の分厚い筋肉に覆われた力強い馬に牽引されている。

第3魔族領と首都ベイヤー間には大して重要な土地もなく道はあまり整備されていないが、それでもある程度踏み固められ道として機能しているためそうひどい状態でもない。もつとも馬車などは元々揺れるものだが、それでもこの馬車の状態は異常だった。

4輪のうち右前方の車輪が歪んでおり一回転する間にかなりの上下動がある。それに加えて左後方には車輪そのものが無かつた。そこは妙な生き物が支えている。

墓蛙だ。大人が一抱えに出来るかどうかとういうサイズの大型の蛙が馬車を支えていた。それは馬車とどう結合しているものか、半ば引きずられており、時折思い出したように低く跳ねる。それもこ

の馬車の妙な挙動に一役買つていた。何をどう考えればこのような利用法を考えるのかはわからないが狂気の沙汰としか思えない。

馬車はボロボロで今直ぐにでも瓦解しそうだつた。

近くで見るとボロボロなのは馬車だけではなく、御者や肝心の馬もそうであることがわかる。

体中に穴を開けた御者が、腐肉と血を滴らせる馬に機械的に鞭をくれている。打たれる度にじす黒い血と肉片が撒き散つていた。

とても生きているようには見えない。事実彼らは動く死体でしかなかつた。生前に行なつていた動作を馬鹿みたいに繰り返している。御者は鞭を打ち続け、馬は前へと駆け続けた。

それは馬車の中でもそつだ。眼窩から眼球を溢れ落とした商人が、計数器を何度も操作する。傭兵と思しき戦士は欠けた身体で無様に剣を振り回していた。おかげで馬車の中は無残なものだ。商人の扱う商品だつたものか、荷箱や粉類の入つた袋などが切り刻まれ内容物を散乱させている。

だがそれを咎めるものは誰もいない。激しく揺れる馬車の中で死者による奇妙な踊りは延々と繰り返されていた。

「テオバルト様。馬車はもう限界です。後1時間も持たないかと」

動き続ける死体から少し離れた席にまだ幼い少女とテオバルトと呼ばれた男が座つたいた。

「構わん。首都にはもう着く」

テオバルトは言葉少なに答えた。彼らは魔族領からベイヤーへと向かうため、たまたま田についた馬車を奪い取りこうやって利用している。

魔法による安全な高速移動の手段というのは案外少ないためだ。それは悪魔が提供する能力のほとんどが攻撃的なものだからに他

ならない。悪魔がどういった思惑で人間に力を与えているのかは定かではないが、ほんとが破壊や殺戮のための力をさすける。

そのため高速で物体を移動させること自体は出来ても、安全性には疑問が残る。高速で物を飛ばすとしてもそれは攻撃の手段だ。自らを砲弾にしても待ち受けの運命は自滅しかない。

空間跳躍と行つた高度な魔法もあるにはあるが、これは通常の物理的手段では再現出来ず奇跡と呼ばれる部類に入る。そう簡単に使えるものではなかつた。

「見えてきたようです」

馬車の行く先に一際高い塔がいくつか見えてきた。城壁都市であるベイマーの城壁に等間隔で配置されている監視塔だ。

少女の発言と同時に馬車ががくんと一気に傾いた。轂がとうとう耐えられなくなつてへしゃげて潰れ、負担の増えた左前方の車輪もはじけ飛んだからだ。

馬車の胴体が斜めになり地面を削る。一気に負荷が増えたため馬車はみるみるうちに速度を落としていった。

「これではすぐに馬がつぶれてしまいますが?」

斜めになつた車内で少女は平然と言つた。そこには轂を支えに使うなどという発想に対する疑問ものせられてくる。

テオバルトは少女の言葉に杖で殴りつけることで答えた。適当に振り抜いた杖が少女の頬を打つ。

「お前が支える」

少女は切れた口の端を拭い、何も答えずに馬車から飛び降りた。

馬車に並走し車体に近づくと軽々と馬車を持ち上げそのまま支え

る。

持ち直した馬車はそのまま走り続けた。

首都までは後わずかの距離だ。少女の見据える先には街道の交差する辻が見えた。そこにはこれから夕方までになんとか首都に辿り着こうとする人々が集まつて来ていた。

9話 買い物（前書き）

すいません、なんとか週一ぐらいで更新したいと思つて無理やり間に合わせた感じもあります。あまり推敲出来てない状態なので細かい部分は治すかもしません。

「大型」みの廃棄許可を取つてくるが君たちはどうする?」

朝の食卓でキャシーがアル達に聞いてきた。

大魔王はひとしきリアル達に技を教えたたら満足したのか、散歩の続きに出かけたので既にここにはいない。

「そうですね。一旦裏庭のゴミを捨ててしまわないと、これ以上掃除も出来ませんし……とりあえずうちの中でやれるだけやってまとめておくというぐらいでしようか?」

「まあそうだが別にそんなに焦らなくていい。昼には帰つてくるからそれまでは街にでも遊びに行くというのはどうだ?」

「それいいよ! こないだは格好ばかり気になつてろくに街なんて見れなかつたから!」

リーリアは乗り気だつたが、アルは若干顔をしかめた。

「その格好ならいいのか? ボロ布を着てるような状態よりはまだとは思うけど」

そうじつてリーリアを見る。リーリアはキャシーから貸してもらった胸元の大きく開いた真つ赤なドレスを来ていた。街に出れば注目の的だろう。

「うう、これはこれで……嫌かも……」

リーリアはキャシーを恨めしそうに見た。

なんでこんな挑発的な服しか持つてないんだろう。

「でだ、2日分の給金を先に渡しておこう。リーリアはさぞつも私の服が気に入らないようだからな。一人で4万リル。服を買つぐらいならなんとかなるだろ?」

「いいんですか?」

とアル。まだ1日しか働いていない。金だけ持つて逃げるつもりはないが、先にもらつてしまふのも気が引ける。

「いいよ。別に。全部やつてもらおうと思つとまだまだかかりそうだしな。後か先かだけの話だ」

そういうてキャシーは胸元から財布を取り出した。

「なんでそこから出でくるんですか!」

「リーリアちゃんもやつてみるといい。そこらの親父ならほいほい負けてくれるぞ? ポイントは見えそうで見えない感じだな。相手が乗り出すようにしてきたりまづ成功だ」

キャシーは財布から紙幣を4枚取り出すとアルに手渡したが、渡されたアルは戸惑つた。

「ん? どうした?」

「いえ……お金を見るのが初めてだったもので。こいついたものだつたんですね」

アルの知識は殆どが本で得たものだ。お金と言わされて想像するは絵本か何かで見た、宝箱からあふれるような金貨の山だった。

「ああ、それは1万リル紙幣だ。他には5千リル紙幣や、2千リル

紙幣なんてのもあるな

「これただの紙切れじゃないんですか？」

アルが疑うように言つ。こんな紙に価値があると言わても俄には信じがたい。

「そうだな、それを窓の外、明るい所に向けてみてくれ。何か見えないか？」

言われたようにしてみた。すると紙幣の中央部分の空白に薄つすらと人の顔が見える。

「これは……」

「透かしだよ。そんな感じで明かりに透かしてみると模様が浮かぶ。それは今の王様の顔だな。というわけでそれはただの紙つてわけでもない。簡単に偽造されないようになんか仕組みが施してあるんだな。ちなみにその透かしの技術は非公開でな、作り方を漏らしたり勝手に透かしを入れた紙を作つたりすれば極刑になる」

「あの……金貨とか銀貨とかは使わないんですか？」

「ああ、一応流通はしているんだがな、都市部では紙幣が多いな。田舎では、今のアル君のような気持ちの人が多いのかな、紙幣は信用されないことが多いが」

田舎者扱いは少々癪に感じはしたが、アルは納得するとズタ袋に紙幣をしまい込んだ。

「他にも細かい単位の硬貨なんかがあるんだが、その辺は実際に買いたい物するときにでもリーリアちゃんに聞いてくれ」

「わかりました」

「買い物ならまかせておいて！ これでも商人の娘だからね！」

リーリアが豊かな胸を張り自慢気に言つ。それをアルは不安気に見つめた。

「あーそりそり、リーリアちゃん。値段を聞かれたらほりきつと断るんだぞ」

キャシーが思い出したように言つ。

「キャシーさん……やっぱりこの格好はそーゆー風に見えるんですね……」

リーリアがじろりとキャシーを睨む。キャシーはとぼけるようにアルに声をかけた。

「いや、格好もそりだがこの場合問題は中身だらう。なあアル君？」

「そりなんですかね」

「いやいや……ちょっと前から思つていたんだが蛋白が過ぎないか？ 女の私から見てもリーリアはなんかすごいぞ。これまで一人きりだったんだろう？ どうにかしてやるうとは思わなかつたのか？」

「まさか、そんなこと思わないですよ」

そう言われてリーリアは少し心が沈んだ。確かにアルからは、大抵の男から受けるような邪な視線を感じることはなかつた。だからと言つて邪険に扱われたわけでもなく十分優しく紳士的でもあつた。だが、こつまで女として無視されているような状況はどうだらうかとも思つ。自分でもそれなりに可愛い方だとは自負していたので全く相手にされていないというは、やはり自分が死んでいるというのが原因なんだろうかと漠然と不安になる。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

物思いに耽っていたリーリアが視線を上げると、田の前に心配そうに見ているアルの顔がある。

「ううん、大丈夫。なんでもないよ」

「キャシーさん、せめて上に何か羽織るものでもないですか？」

アルが気を回してキャシーに求める。キャシーも少しからかい過ぎたと思ったのか素直に羽織れるものを持ってきた。黒い薄手のストールだ。

「キャシーさん、一応これも借りますけど、あんまり変わらないような気もします……」

リーリアは早速羽織つてみた。胸元のあたりが隠れるように軽く結ぶ。だが結局はその見えない部分をなんとか見てみたいと思わせる演出にしかなっていなかつた。

* * * * *

アルとリーリアはまず広場に向かうことにした。キャシーに服屋などいくつかの店の地図を書いてもらつたのだが、どこに行くにしてもまず街の中心である広場に行くのが早い。

この街は大雑把に言つと中心を南東にずらした3重の同心円状になつてゐる。一番外側に城壁がありその周りを川を利用して作られた水堀が囲んでゐる。

そのまま内側にもう一つ城壁があり、次は街の中心部から少し南東にいった丘の上の王城でその周りも城壁と掘に囲まれている。

広場は街の中心にあり、ここから大通りが放射状に伸びて各城門につながっている。広場は普段は街の憩いの場として、時には大規模な宗教儀式や公開処刑などにも使われることがあった。

「僕は魔法使いに付いては大体わかつたから、この街には特に用はないくなつたんだけど、リーリアは何かあるか？」

アルが広場へと歩きながらリーリアに話しかける。

「私も特にはないよ」

「じゃあこの後どうする？ リーリアの住んでた街へ行く？ どこにあるんだっけ？」

「ここからだと、さらに東。そんなに遠くないよ。駅馬車で半日つてところかな」

「駅馬車って？」

「街の間を行つたり来たりして馬車。一人5千リルぐらいかな」「結構するんだな、いや、それが妥当かはわかんないんだけどね。なんとなく」

「どうなんだろ、護衛の人とかもいて、盗賊とか魔獣とかから守つてくれたりとかもあるんだけど」

「街に帰つたらリーリアはどうするんだ？ 勇者の従者はもう無理だろう？ 侍女をやつてたんだつたらそれをまたやるの？」

「……侍女つてあんまりやつてないんだよね……」

リーリアは少し言い淀んだ。アルは訝しげな様子でリーリアを見る。

「え？ 前に、侍女だ！ つて自慢してなかつたか？」

「あはは、実は実家で侍女つてことにしてただけだつたり……。結構あるの、14歳で職につかないといけないからそういうことにしておくつてのが。一応花嫁修業つてことで家の手伝いみたいなことしてただけで……」

「実家に帰つてそれをまたするの？」

「多分。でも、もう家を出してもえなくなるかも。勇者の従者になるつてのも結構反対されてたのを無理に押し切るような形で出ていつたから……。あ、アル君はどうするの？ 魔法使いになりたいって言つてたんだから魔法で何かしたかつたんでしょ？」

「魔法使いの師匠を探すつて言つても漠然としそぎてどうしようもないし、しばらくはリーリアの街にでも住むよ、田雇いの仕事でもしながらね。僕の目的は焦るようなものじゃない」

「私のお父さん交易やつてる商人だし顔も広いからどこかで魔法使いの話を聞いてるかもしれないよ。家に帰つたらちょっと相談してみる！」

「うん、なんの当てもないからね。お願ひするよ」

大通りを歩いているため元々賑やかではあったが、広場に行くにつれさらに騒々しくなつていいく。

派手な格好をした美少女のリーリアはもちろん注目を浴びているのだが、不安感よりもアルが隣にいることによる安心感が勝つていたためあまり不快に感じることはなかつた。

アルは殺意にも似た嫉妬と羨望の入り混じつた視線を受けていたが、いつも通りだ。全く動じる所がない。

広場は円形の広大な空間で中心には噴水があつたのだが今は修復中だ。噴水以外も大魔王との戦闘でひどい有様だつたがほぼ修復は終わつていた。

その修復中の噴水のあたりに人だかりが出来ていた。何かを大勢の観客が取り巻いている様子だ。

「アル君、あれなんだろう」

「気になるならちょっと見ていい?」

二人は人だかりを押しのけ中が見える所まで進んだ。アルはなんとなくそんな気がしていたので見た瞬間ため息がもれた。そこに居たのは大魔王だった。

大魔王はぼーっとつたつており、その隣には男が一人両膝をついて座っている。いわゆる正座なのだが、リーリアにはそれが拷問でも受けているかのように見えた。その二人の対面には職人のような格好の男が仁王立ちしている。

「アル君！」

「どうした？ 知り合いか？」

「勇者様……フォグ様とアイゼン様だよ！」

「あれがか？」

アルの目からみてそれは随分と情けない姿に映った。両膝を付き、両手は膝に置いてうつむいている。先程から、正面の男に罵倒されていた。

「で、あっちの怒ってる人がドレイクさん。私の住んでる街で有名な芸術家さん」

「なんで怒られてるんだ？ ……まあリーリアに聞いてもしようがないか」

「うん。わかんない」

様子を見るにこの噴水を壊したのがこの一人だということらしい。

「おい、聞いてんのか！ お前らが壊したこれはな！ 三人の女神が柱となって天盤と呼ばれるこの、俺達の世界、大地を支えている

姿を表したものだ！ 俺様の一大傑作よ！ それをだな壊したつことは、ええ！ 世界全体を壊したにも等しいってことだよ！ わかつてんのか！」

この広場にあつた噴水は一般的な、中心部から水が吹き上がるものではない。柱に支えられた大きな円盤が上にあり、その円盤の縁から水が流れ落ちてくるというものだつた。

この円盤が大地で、円盤の端が世界の果て、水が海を表していた。勇者たちは黙つて耐えている。壊したのには大魔王も関わつていた氣もするが責任の一端は確かにあるため言い返すことが出来ない。

「三人の女神という方はいませんでしたよ」

「ああ？」

大魔王が空気をよまずに口を挟んだ。

「天盤の下を見たことはありますか女神という方はいませんでした。天盤は天軸という柱が貫いているんですよ。ですので天盤の上も下もあるのは天軸です」

ドレイクは大魔王のホラとは思えない妙な自身に満ちあふれた発言に気圧された。ここまで真つ向から見たと言われてしまえば反論できない。

「おめえ、見たつてどうじうじよ、どうやつて天盤の下に行くつてんだ？」

「天軸の周りは巨大な穴になつてているのです。その穴を落ちてもいいですし、天軸は内部が空洞になつていて出入りできまして、中には昇降施設がありますのでそれを使えば簡単に行けますよ」

「天軸つてどこにあんのよ？」

「中央大陸の真ん中ですね。ここからでは遠すぎてその姿を確認出来ませんが、近づけばすぐわかりますよ」

話がすっかりそれてしまつた。世界の真の姿という話題は、芸術家としての好奇心を疼かせたようだ。

見向きもされなくなつた勇者たちは、そりと立ち上がり人の輪を抜けだそうとしている。

「なあ、リーリア。憧れてる勇者ってのはあいつだろ？ いいのか？ 今なら話しかけたり出来るんじゃないか？」

「え、いいよ別に」

アルが思つたより、リーリアの態度はそつけないものだつた。

「直接声をかけるのが恥ずかしいなら僕が呼んできてやるよ」

アルはリーリアがかなり遠回りな方法で勇者に近づいていたのを思い出す。それをまじめにじつじつ感じていたので、ここは一つ協力してやるひつと思つた。

「いいつて！ もう行こう！ 早く買い物して帰らないと、キャシーさん戻つてきちゃうよー」

リーリアは慌てて、今にも勇者に声をかけに行きそつたアルの手を取り入ごみを抜けだした。

アルはリーリアに黙つて従つた。少し怒つているようにも見えたし、ただの照れ隠しなのかもしれないとも思ったアルは無理強いするのをやめておいた。

リーリアは店につくまでその手を掴んだままだつた。

その店は古着を中心扱う古物商といった店だった。そう大きくもない店内には古着が山のように積まれている。店主が面倒くさがりなのかはわからないが、この店では商品の品質は関係なく重量で価格が決められていた。

どこで仕入れてきたのか、汚れたままのものがほとんどだ。洗濯をするのも面倒らしい。だが玉石混交とはこのことで、中には掘り出し物もあるようだつた。

アルは様々な商品があふれる店内を物色し、比較的ましな状態の麻で出来た上下と、靴、マントなどを選んだ。次の街までは馬車で移動すると決めていたが、何があるか分からぬので予備も考えてそれぞれ何着か余分に籠に入れる。

「アル君、マントなんているの？」

「便利じゃないか？ ここに来るまでだけでもそう思うことはあつたじやないか。厚手のマントなら毛布がわりにもなるだろ？」

「別に次の街まですぐだから、野宿とか考えなくてもいいと思つけど？」

「近いって言つても街の外に出るんだ。魔獸が出ることもあるって話だろ？」

魔獸は基本的には彼らにとつて居心地のいい魔族領から出でてくることをあまりない。だが、人肉を好む類の魔獸は越境してやつくるものも多かつた。

それ以外にも旅の危険としては、盗賊や、野族の襲撃もある。

アルは自分たちだけならなんとか逃げ延びることも可能だと思っているが、そうなるとやはり徒步で移動するはめになることもある。

そういうふた可能性を考えるとあまり呑気にしているのもやがてかと考えていた。

「リーリアはそれでいいの？」

リーリアの手には服の山をひっくり返してひっぱり出してきた女物の服が1着だけあつた。

「アル君は適当すぎると思つ」

「別にそこそこ丈夫そうでもあまり汚れてなかつたらなんでもいいよ」

「試着もしないの？」

「大体サイズがあつてるならいいよ」

「そう、じゃ私はこれを試着してくる」

そう言つとリーリアは一室しかない試着室へと入つていった。アルは服以外にも、古くなつたズタ袋の代わりになるような大きめの鞄も探して籠に入れる。

「なあ、にいちゃんよ」

「はい？」

店主がアルに声をかけてきた。だらしない感じの服装に、無精髭、髪も整つていない小太りの中年だ。この店の店主として相応しいとも言える。

「あの子は貴族か？」

「いえ、そんなことはないですがなにか？」

「いや、あの子に似合いそうなもんはつむにはないんじゃねーかと思つてよ、もつといいもん買つてやつたらどうだ？」

「そう言われましてもね、お金ないです。その、そんなに田立つ

てましたか？」

「ああ、いや。こんな店に来るような子じゃなしちだつたからな、びっくりしちまつただけだよ。ま、せいぜいましなもんでも探してくれ」

店主はやうに奥に引つ込む。変わりにリーリアが試着室から出てきた。

ゆつたつとした白いワンピースを着ている。

「どう?」「

「リーリア、僕が言つのもなんだけ、ずいぶんとやぼつたくないか?」

身体のサイズに全くあつていらないぶかぶかの服に見えた。身体のラインが出ないことを優先したのだろう。

「い、いいの!」これで! これぐらいで丁度いいの!えつと.....アル君はさつきのみみたいな方がよかつたの?」

最初は威勢がよかつたが、段々自信がなくなつてきたようだつた。上目遣いにアルを見る。

先ほどまでの身体にフィットし胸元の開いたドレスがよほどいやだつたのか、反動でこんな服を選んだとアルは解釈した。

まあ、本人がいいつて言つてるならそれでいいか。

「いや、別にそれでいいんじゃないか

「そ、そう.....」

なんだか元気がなくなつたようにも見えた。

他にも似たようなサイズの衣物の服を選び会計を済ませる。全部

で10kほどのなつた。1kが千リルといふ価格付けだつたので1万リルを支払う。

リーリアは先ほどのワンピースにその場で着替えて帰ることにした。他にも深めの麦わら帽子を被りあまり顔が目立たないようになる。

アルも同じく着替えた。麻のシャツとズボンだ。これで街の住民と比較しても違和感はなくなつた。貫頭衣を着ているような人間はあまり見かけなかつたので、アルもそれなりに目立つてゐることは自覚していた。

当初の目的は達成出来たので一人はキャシーの家に帰ることにして広場を目指して歩き始めた。

「後は食料品……は旅にでる前でいいか

「なんか慎重だよね。馬車で半日だつて言つてゐるのに

「あつて困るもんでもないだろ」

「で、また乾し肉なの？ もう本当に飽きたんだけど」

リーリアが憎々しげに言つ。心底嫌になつたらしい。

「すぐ齧れるから楽だと思つんだけどな。保存食つて他になにかある？」

「ドライフルーツとかいいよー。」

「それはお菓子だろ？」

「ええ！ いいと思うけどなあ。他だと、豆煎餅とか？ 豆を押しつぶして固めたやつなんだけど結構おいしいよ」

そんないい会話をしながら広場を通りかかる。先ほどの人ばかりはすでなく、ドレイクにこき使われている勇者たちの姿がそこにはあつた。

首都ベイヤーには主要な門が7つある。それは街の中心の広場から、大通りが放射状に伸び城壁に至る部分に存在する。8方位に対応した名称がついているのだが、南東門は存在しない。広場から南東に進むと王城があるためだ。

この門のうち北側だけは他のものと比べて少々特殊な位置づけとなってしまっていた。北門の外側にはバラックが立ち並び、瓦礫とゴミと糞尿が散乱している。スラム街と化していた。

本来この国ではこのような状況はありえないことだった。マテウ国は他の国と比べても特にレガリアの恩恵が大きい。気象の完全制御により旱魃は発生しないし、大規模な自然災害も起こらない。そのため農業による食料生産はかなりの規模で安定しており、国全体がとても裕福な状態だ。

どんな仕事でもよければ働く口はあるし、例え働けないとしても社会保障、福祉が充実しているためある程度の保証は受けられる。だがスラムは発生する。住人がこのような環境に甘んじる理由は様々だ。難民もいれば、ただまつとうな社会生活に背を向けた者、業病により街中にいられなくなつた者、ここで産まれ育つたため外の世界を知らない者。

生活環境があまりに異なるため今更単純に街へと受け入れることも出来なくなつていて。この国が抱える大きな問題の一つだつた。そんなスラムの中をアルはゴミを山積みにした台車を引きながら歩いていた。リーリアはいない。北門の詰所で廃棄許可証を示し通行しようとした際に女が行くのは危険だと諭されたためだ。リーリアは詰所でアルが戻るまで待機することとなつた。

迷うことなくまっすぐと進むアルをみすぼらしい格好のスラムの住人が遠巻きに見ている。

アルの行く先には大きな穴があつた。この街がここに出来るまえからあるという巨大な穴だ。底なしというわけではないが、覗き込んであまりに深くその全貌を知ることは出来ない。

この穴の中心には塔が立つていて、塔の最上部には入り口があり、不安定で心もとない吊り橋がかけられていた。

この塔は古代の遺跡とされているが踏破したものはいないため、なんの為の施設かは判明していない。ただ勇者の武具がここから発見されているため神域の類と思われていた。

特に侵入は制限されていないため命知らずの冒険者がたまに挑むことはあるがほとんどは戻つてこない。生きて聖なる武具を持ち帰れるものこそが勇者ということなのだろう。

アルは穴の縁まで進むと台車を傾げゴミをばら撒いた。危ないのあまり近づかずに周辺に置いていけばいいと言われていた。

引き返すアルの後ろでは、スラムの住人たちによる争奪戦が始まっている。彼らがどうにかするのでこの様な段取りになつていて、必要なものを奪つた後はいらないものは穴の底へと蹴落とすのだろう。

本来神域と目されていた塔の周囲をゴミ処理施設として利用しようとしたのは、数代前の国王だという。街の発展と共にふくれ上がりしていくゴミの処理方法として塔の周囲の穴に目を付けた。今のところこの穴があふれるような自体には至っていないが、それも時間の問題だろう。それは次代への課題として後回しにされていた。

アルは背後の様子にはまったく目もくれなかつた。この程度の距離なら問題ないとはわかつてはいたが、リーリアと離れたことには不安を覚える。軽くなつた台車を足早に引いていた。

リーリアは詰所でお茶を飲んでいた。

北側の門は周囲の状況からゴミ処理場への通用門としてしか利用されておらず、検問所としては機能していない。通行税の徴収も行なっておらず、基本的には暇な部署だった。

リーリアの前にはお菓子が山積みになつていて。お茶うけとして出されたものだが少し張り切り過ぎなんじやないかとリーリアは思つていた。

テーブルの対面には暇そうにしているまだ若い門番が鼻の下を伸ばしてリーリアを見つめている。

「アル君早く戻つてこないかなあ。

当初はついていくつもりだったが、女が行くのは危ないと言われたためここで待機している。こんなことならキャシー宅で待つていればよかつたのだが、そうなるとアルの能力の有効範囲に不安が出てくる。結局最大限近い位置にいるしかなかつた。

「ねえ、さつきの彼氏?」

「え、ち、違いますよ。仕事仲間です。そんなんじやないです」

急に振られた話に慌てて返事を返す。リーリアとしてはあまり話をしたくはなかつたが、一応もてなされているような状況なのであまり無下な態度も取れない。

「へえ、じゃあ俺でも可能性あるかなあ」

門番の男はあからさまな笑みを浮かべていた。下心しか感じられない。

「あのう、すいません」

リーリアがどう対処したらいいのか悩んでいたと詰所の入り口から声がかけられた。

「あ、ほらー、お密さんですよー。」

リーリアは助かったとばかりに門番に促す。門番は應そつともせずに舌打ちをし、立ち上ると応対に出た。

「なんすか？ 『三捨』に来たんなら許可証いつますよ？ 持つてます？」

その対応は公務員としてどうなんだろ？……。

リーリアは入り口の一人を見た。やつてきたのは若い男だった。中肉中背で取り立てて特徴がない、3日もすれば忘れるような印象の男だ。

「ああ、違つんですよ」

と叫ぶ男とリーリアは目があった。

「そちらの彼女に用事が。依頼主の方からなんですが」「え？」

リーリアは目を丸くした。まさかここで自分が呼ばれるとは思つていなかつた。自分を指さしながら、

「私ですか？」

と問いかけた。

「は」

「えーと、依頼主どうとキャシーさんですか？」

「はい、キャシーさんが言い忘れたことがあるので伝えて欲しい」と

リーリアはなんだらかと思いながら立ち上がり男の元へと近づいた。

「なんでしょうか？」

「あー、ijiじゅぢゅうと……外で話せませんか？」

と男は門番の方を見る。何か言ひづらそうとしていた。

「わかりました」

リーリアは門番の方にちょっと出てきましね、と言つて男の後をついて詰所を出た。

キャシーさんが言い忘れたことってなんだらか、もしかして捨てちゃいけないものでも混ざつてたのかな？

男はゆっくりとリーリアの前を歩いてくる。しばらくして、門からは少し離れた建物の隙間に入つていつた。

リーリアも特に疑問にも思わずついていく。男があまりにも人畜無害に見えたせいもあつた。

少し薄暗い路地だ。人通りはない。ここにいたつてリーリアは若干の不安を覚えた。

「あの……それで何でしょうか。アル君にも関係あるなら戻つて来

てからでも……」「

最後まで言い終えることは出来なかつた。後ろから何者かに抱きすくめられ何かが口元にあてがわれる。リーリアは一瞬で気を失つていた。

「お疲れ様です」

特徴のない男が、やはり特徴のない口調でリーリアの背後の男に声をかけた。

背後の男が口元に当てていた布切れをしまい、リーリアを石畳に横たえる。

「随分と簡単にいつたな」

「こちらの男は頬に傷のある見るからにチンピラといった風情の男だつた。」

「素直な娘ですね。まるで疑われていませんでした」

「で、どうよ、こいつは？」

「ええかなりの上物ですね。高く売れるでしょう」

「ああ、さつきちょっと触つたんだがたまんねーな、特にこの……」

とリーリアの胸に手を伸ばす。触れる直前、男は殴り飛ばされていた。壁に激突してずるずると腰を落とす。

「あなたは馬鹿ですか？ 仕入れたばかりの商品に手を出す商人がどこの世界にいるというんです？」
「てめえ！」

足腰の立たなくなつた状態でいきがつた所で何ほどのこともない。特徴のない男はさらに蹴り飛ばした。

「最近は軍の質も落ちてきたんでしようか。あなたに取つてこれは軍事行動の一巻で、私はその上官にあたるのですよ？ 任務遂行の障害になるなら……」

「わかつた、余計なことはしない」

特に脅そとはせせず淡々と事実を述べただけだという風だつたがそれが、逆に男を怯えさせた。

「では商品の箱詰めと行きましょう」

一人の男はリーリアを、用意してあつた木箱に入れた。木箱は予め台車にのせてある。

「ではあなたはその木箱を隠れ家に運んでください。私はあと二人ほど五星をつけていい少女がいますので、尾行して行動パターンの把握に務めます。今回のノルマはそれで達成出来るでしょう。わかつていいとは思いますが……」

特徴のない男はチンピラ風の男を静かに見つめた。

「あ、ああわかつてるよ。もう手は出さねえ」

「そうですか。ならいいです。行ってください」

一人はそれぞれの目的のため速やかにその場を離れた。寂しげな裏路地にはなんの痕跡も残つてはいなかつた。

馬鹿過ぎる。リーリアはどん底まで落ち込んでいた。なんだつてのこのこと見知らぬ人物について行つたのだろう。

それにまんまと誘導されていたことにも気づいた。あの男は依頼主と言つた。キャシーの名を出したのは自分だ。相手はそこから話を合わせてきた。ということは、何らかの仕事で門までやつてきたことぐらいしか知らず適当に鎌をかけてきたということだ。

路地に入った途端後ろから誰かに抱きつかれ、変な匂いのする布を口にあてがわれたと思うと意識がなくなつた。そして気づいた時にはここで横たわつていた。

周囲は薄暗く周りの様子はあまりよく分からぬ。

同じように連れてこられたのか数人の少女がめそめそと泣いていた。あまり大声で泣くと見張りの男が大声でがなりたてるため皆、涙を押し殺している。

目の前には鉄格子があつた。牢屋の類だらう。氣を失つてからどうぐらゐ経つたのかはよく分からぬ。ここには窓がないため昼なのか夜なのかもわからなかつた。

幸いそう遠くへ連れてこられたわけではなさそうだ。それはリーリアにだけはわかることだつた。今生きているということはアルとそう離れているわけではないということだ。建物の中なので少なくとも首都から出たわけではなさそうだとわかる。

でもどうなんだろ。アル君は私を見つけてくれるかな……。

それがわからない。感覚の同調と操作が出来るというのは身を持つて知つていたがそれはアルが見ている前でのことだ。離れていても場所がわかるなんてことは聞いていなかつた。

大丈夫。私がいなつて気づいたらアル君がなんとかしてくれる。

大した根拠はなかつたがアルを信用していたリーリアは多少冷靜さを取り戻した。そしてアルが助けに来てくれるとしても、自分は自分で最善を尽くすべきだと考える。

あたりを見回す。そう広くはない。10歩も歩けば端から端まで辿り着く正方形の部屋。その一面が鉄格子になつていて、見える範囲には窓がなく、頼りない蠟燭の炎が鉄格子ごしに照らしている。リーリアはここは地下なんだろうと判断した。

全体的に灰色の石のようなもので出来ている。床も壁も天井もそうだった。

部屋の隅にはトイレと簡単な洗面設備がある。衝立もあつたのとそれには少し安心した。

鉄格子の向こうでは男が一人椅子に座つてこちらを見張つていた。鉄格子の扉を見る。外から錠前が付けられているのがわかつた。鍵がかけられている。

外の様子はそれぐらいしかわからなかつた。もう少し動けば廊下の先も見えるのかもしれないが、今はまだ目立つたことはしたくない。

次に牢屋の中を見る。リーリアを含わせて8名、全員が女だつた。皆しゃがみこんでいる。年齢は上が20歳ぐらい、下は10歳ぐらいまでと幅広かつた。

皆さらわれてきたのだろう。それぞれがこれから境遇に思いを巡らせ絶望に沈んでいた。

話しかけるのもまずいかな。

見張りの男をさりげなく見てみた。頬に傷のある男だ。油断なくこちらを見ている。リーリアは野族みたいだと思った。暴力沙汰に

身を置き続ける者の独特的の匂いのようなものを感じる。手は腰の剣をいつでも抜けるように隙なく構えられていた。

その剣呑な雰囲気に怯えながらも観察を続ける。何かないと男の身体を見ていると剣とは反対側の腰に鍵がぶら下げられているのに気づいた。

鍵を奪うことは出来ないかと考えてみたが、すぐに無理だと諦めた。鉄格子越しに手を伸ばしたとして、まったく届く気がしない。今わかるのはこれぐらいのことだった。

リーリアは次にこの状況について考えてみた。女ばかり8名が集められている。いかがわしいことしか思いつかないが、今のところ何をされたわけでもなかつた。周りの様子をみると他の少女達も同様のようだ。となると今日の前にいる男がそういう目的で集めたわけでもなさそうに思える。

牢屋を用意していることにしろ、氣を失わせる薬品が使用されることにしろ、なんらかの組織的な行為に思える。

そう考えると思いつく答えは一つだった。セプテム王国の人さらい部隊。

拉致国家、奴隸王朝、誘拐王国、様々な悪名で呼ばれるセプテム王国。その所業としか思えない。

他の国ではともかくマテウ国では奴隸は完全に禁止されている。歴史上も奴隸制が行われたことは一度もない。それはそもそもが奴隸など使わなくても十分に裕福だったということもあるが国の雰囲気として常春の、のんきなこの国には制度として見合わなかつたということだ。

国の政策、指向はレガリアに多大な影響を受ける。セプテム王国は建国当初から常に奴隸労働を前提としていた。レガリアの能力を最大限有効活用すると自然とこうなる。

レガリア、支配の王錫。対象に絶対の忠誠を植えつけ掌握するこのレガリアに一度でも支配されれば逃れる術はない。レガリアの効力は国内のみなので、国外に出ればその支配から逃れることは出来

るが、支配された時点でそもそも国外に出ようという意識すら発生しなくなる。セプテム国側は、本人の意思でこの国に留まり、忠誠を誓っているのだからとやかく言われる筋合いはないと放言している。他国もそこにレガリアが関わっているのが自明だとしてもどうすることも出来なかつた。

セプテム王国はレガリアで支配した奴隸を使い捨てることによつて発展してきた。そこには一切躊躇はなく完全に道具として割りきつており、減つたならば補充すればいいと考えている。その補充方法の一つが人さらい部隊だ。他国へと何食わぬ顔をして侵入し、密やかに人さらいを行う。この事は広く知れわたり警戒されではいるが、事前に十分な調査と計画を立て行われる少人数を対象とした拉致を防ぐのは中々難しい。セプテム国と国交のある国はほとんどなくマテウ国も例外ではない。一度拉致されてしまえば、外交交渉で取り戻すのはほぼ不可能で今までに戻つたものはなかつた。

リーリアはセプテム国の悪行を思い出すと、ますます絶望的な気分になつた。それならこれはそこらのチンピラの仕業ではなく、國家ぐるみの犯罪的行為といふことだ。

人さらいは、商品の目利きをする奴隸商人と諜報部隊で構成されていると言われている。素人のリーリアにはそんな輩を出し抜いて脱出など出来る気がしなかつた。

人さらい部隊は、高名な科学者、芸術家、商人、政治家などの有能な人物や、見目麗しい男女を狙うとされている。多少強引にでもさらつてしまえば確実に支配出来るので、国家の振興には有効な手段として認識されていた。

セプテム国が相手なら国に連れ帰られるまではひどい目にあうことはないだろう。人さらい側からすれば、下手に手を出して自暴自棄になつて暴れられるのも厄介だ。国に帰れば従順な奴隸へと変えることが出来るのだから焦つて事を起こす必要はない。

それに、とリーリアは思う。このまま連れて行かれればアルとの距離が離れて自分は死んでしまうだろう。他の娘達には悪い気もす

るが綺麗なまま死ねると思つと少し心が安らいた。

アル君は私のことどう思つてるんだろう。

勝手に生き返らせたことに責任を感じているのか、何か目的があつただろにそれを置いてでも付いて来てくれると言ひ。だがそれは義務のようなものにも思える。

リーリアは旅の間にアルの真摯さをどうようなものを十分に理解した。ちゃんと気を使ってくれるし、つっけんじんに思えることもあつたが優しい言葉もかけてくれるし、それを態度で示してくれる。ただリーリアは壁のようなものも感じてもいた。仲良くなつた気はするが、ある一定以上の距離からは踏み込んでこないような印象だ。女としてはあまり見てもらえていないと感じていた。

死体は嫌だとか言つてたのは冗談じゃなかつたのかな……。

たまにアルが顔を赤くするようなことがあつたので、女が嫌いだとか興味がないとかではないはずだ。なら何が駄目なんだろうかとリーリアは考えに耽る。胸が大きい娘は好きじゃないんだろうか。確かに小さい方が好みだという男性も少なくない数がいると聞いたことがあつた。それが魔族の間で育つたということだから魔族の女子がいいんだろうか、などと詮なきことを考えていると泣きたくなつてくる。

私がいなくなつたら、アル君は自由になれるかな。

ますます悲観的な考えが浮かんでくる。今はアルを自分が縛り付けているとしか思えない状況だ。あまり気にしていなかつたがよく考えるとアルが可哀想にも思えてくる。

私なんかと会わなければよかつたの。』

リーリアは血ひらの胸をもみしだきながら思つた。

『え?』

思わず口を疑つ。血ひらの右手が胸をぐじぐじとまさぐつてこる。絶望のあまりにおかしくなつたのかと思ひつと、右手はそのままゆっくりと上半身を這い上がつてきた。首筋を通つて行き、口のあたりにやつてくると口を塞ぐよつとする。

『おこ』

口が勝手に動いた。囁くような声だ。思わず周りを見渡すも誰も気づいてはいないうだつた。

『僕だ。いいか、突然で混乱したかもしれないがまずは落ち着いてくれ。それまではこのままの姿勢だ。落ち着いたなら左手を握つたり開いたりしてくれ』

リーリアはものすごい勢いで左手を開け閉めした。

『元気そうだね。どうかその勢いじゃ落ち着いていよいよにも思えないけど。僕に話しかける時は小さな声で喋つてくれればいい。声にならなくても口の動きでだいたいわかる。周囲には誰かいるのか?』

『う、うん。女の子がいっぱい。牢屋の中にいるんだけど』

リーリアは意識してわざわざへりつて応えた。

『そつか。じやあ、わかっていることがあつたら教えてくれ』

安心した。今確かに自分が何か縛のよだものでアルと繋がつて
いると感じられた。もう大丈夫だと思つたらリーリアの身体から一
気に力が抜ける。

気を落ち着かせるとリーリアは周囲の状況と考へたことをアルに
伝えた。

『セブテム国か。初めて聞くが無茶苦茶だな』

「アル君……さつきはびっくりしてたから氣にしてなかつたんだけ
ど、最初に胸揉んでたよね？」

『ああ、それは感覚の同調を確かめていただけだ』

アルは当然のことのように言った。その後一気に説明を始めたの
は何かごまかそうといふ意思も若干感じられる

『でだ、よく聞いてくれ。感覚の同調は聴覚と触覚のみだ。だから
そちらの様子が僕には直接分からぬ。これは氣をつけて欲しいん
だけどこれから戦闘中には絶対に転けないでくれ。今の僕には上下
の感覚がわかりづらい。接地面の感触でなんとなくはわかるけど、
転げてしまつと立ち直るのに時間がかかる』

「え？ 戦うつて？」

『リーリアが戦うしかそこから逃れる術はない。僕も今街中を探し
てはいるが、組織的な誘拐だというなら簡単に行き先がわかるよう
な証拠は残つていないだろう。リーリアがそこから出でくるしかな
い』

「む、無理！」

『やるんだよ。僕がサポートする。大丈夫。こないだ大魔王に技を
教わつただろ？』

男は牢の入り口の前に椅子を置いて座っていた。牢屋はほぼ正方形で一面が鉄格子になつておりその左端に扉が付いている。中には女が8名。トイレが右奥にある。

女達は全員が平民と聞いていたため、見張りなどは特に必要ないと思われたが念には念をということで、交代で見張りが一人以上立てられることになつっていた。

この牢屋の鉄格子はかなり頑丈に出来ている。時には貴族を捕らえる事もあるからだ。貴族の力を持つてしてもびくともしない強度を誇つっていた。

中には様々なタイプの美少女達だ。男にはその基準はよくわからなかつたが、依頼主の付けた細かな条件に合致する少女が厳選されているらしい。

全員がうつむき座り込んでいる。先程は大声で泣き叫ぶ者もいたから大声で怒鳴りつけた。そのせいかしくしくと押し殺すように泣くばかりになつたのだがそれでも鬱陶しいものだ。

特にすることもないため男は少女達を物色する。やはり一番は最後に連れてきた金髪の少女だと思つた。体型に合わない大柄な服を着ていて見た目からはわからないが、後ろから抱きすくめた時の感触は最高だった。あの奴隸商人の邪魔がなければその場で襲いかかっていたかもしれない。組み伏せ、その可憐な顔を絶望に歪ませることを想像すると自然と身体の一部が熱くなつた。

男が注目していると少女は奇妙な行動を取り始めた。右手で胸を揉みしだいた後、口を抑え、左手を開けしめしている。男がその様子を凝視すると少女は背を向けてしまつた。

氣でも触れたのかと思うと少し不安になる。多少反抗的なぐらいなら問題ないが、完全におかしくなつてしまつとレガリアで支配し

たとしても使い物にならないことがあるからだ。この中でもかなりの上物の少女の商品価値が下がってしまったとなると男の責任も問われるだろう。

しばらく見ていると少女は立ち上がった。部屋の右側へと歩いて行く。男はトイレへ向かうのかと思ったが、少女は奥へは向かわらずそのまま右端まで行つた。

何をするのかと男が見ていると鉄格子を両手で掴む。

「えい！」

可愛らしい掛け声と共に少女が力をこめ鉄格子を左右に引っ張る。何を馬鹿なことをと呆れて見ていると信じがたいことが起こつた。男は思わず腰を浮かせる。

鉄格子はぐにゃりと歪んでいた。

「な！」

男が思わず声を漏らした。見たままのことが信じられない。この隠れ家には設計段階から関わっている。この鉄格子がそんな簡単に変形したりするものではないことは何度も確かめていた。

「アル君、鉄格子はちょっと動いたけど通るのは無理だよ。鉄格子の間隔が狭いし」

『そうか。じゃあ次の手だな』

「みなさん、ちょっと後ろの方にいってもらえますか？」

少女は独り言をつぶやいている。やはりおかしくなつてしまつたのか、一人で会話をしているように見えた。

金髪の少女の言葉に反応してしゃがみ込んでいた少女達は立ち上がり壁側へのろのろと歩き始めた。

何をする気かわからないがこれはまずいと判断した男は牢屋の右端へと走った。少女の前へと向かう。だが鉄格子の前へ辿り着いたときには少女はそこにいなかつた。

男が駆け出すと同時に、滑るように移動して牢の扉の前で構えを取つてゐる。腰を落とし右手を腰のあたりまで引いていた。まさか、と思ひ。何をするつもりなのかはわかつたがそんなことが出来るとはとても思えない。

爆発でも起こつたかのような音がした。扉を殴りつけた音だ。音と共に錠前と蝶番ははじけ飛び、鉄格子で出来た扉は廊下の壁に轟音を立ててめり込み、地下全体を揺らした。

『やはりね。扉が一番もろいと思つたよ』

そう言つと少女は悠々と牢屋の外に出てきた。

「だつたら最初からそうすればよかつたのに」
『見張りが扉の前にいるつて聞いたからね。フェイントはかけておいたほうがいいだろ?』
「今の勢いだつたら、扉」と倒せたような氣もするけど
『武器を持つてんだろ? 邪魔される可能性もある』
「あ、みなさんはもう少し待つてくださいね」

少女が牢屋の中に声をかける。呆然とした男はそれをただ黙つて見つめていた。

少女が歩いてくる。剣の間合いまでもう少しと詰つ所で立ち止まつた。

『相手はどんな様子だ』

『剣を構えてる。あと5・6歩ぐらゐの距離』

『肌も強化されてるから多分切られても大丈夫だけど、攻撃された

らリーリアの判断で避けてくれ

「そんなの無理！」

『大丈夫だつて。そして殴れる距離まで近づいたら合図をしてくれ』

「う、うんやつてみる」

またぶつぶつと何事かをつぶやいている少女が不気味に思える。男は剣を中段に構えた。廊下は狭く横に振り回すには適していない。取れる攻撃手段は突くか、振り下ろし、振り上げぐらいのものだろう。

中段はそのどれかに派生するためのものだつたが、この選択は相手に剣を突きつけ、これ以上こちらに来てくれるなという守りの姿勢でしかなかつた。先ほど扉をぶち破つた攻撃を見ている。あんな力で殴られて生きていらるとはとても思えなかつた。

少女も突き付けられた剣を前に戸惑つていて。攻撃されたならば避けるつもりだつたようだが男は防御を固めることを優先している。

「ど、ど「しょう。剣をまっすぐ向けられてるんだけど」

『相手までは6歩ぐらいか、天井の高さはど「だ?』

「私一人分ぐらいかな?」

『よし』

そう言つと少女の姿が消えた。天井とそして背後で軽いトントンといつう音が立て続けに鳴つた。男は咄嗟に振り向ひつとした。

「アル君、今!」

少女が何かを叫びながら拳を繰り出す。拳は男の背中側にめり込み腎臓と周囲の器官を破壊し、男の意識を刈り取つた。

「みなさん大丈夫ですか？」

リーリアが牢屋の中に声をかける。皆あつけにとられたような顔をしていた。

連行用にかロープがあつたので、これで男を縛り付ける。意識が戻つた所で動きようもなさそうだったが念の為だ。

「もうちょっと待つてくださいね。廊下の先を見てきます」

牢屋から廊下に出た位置から左を見ると、同じような構造の牢が2つあつた。廊下は行き止まりになつていて。

右側を見るとすぐに階段があつた。急勾配の木製の階段だ。ほどんど梯子に近い。

階段を登つてみるとすぐに天井にぶつかる。天井には四角く切れ目がある。ここが出入り口なのだろう。軽く押してみたり、スライドするように動かしてみたが開く気配がなかつた。外から鍵がかけられているらしい。

「アル君どうしよう？」

『見張り役は自由に出られなかつたのかな？ となると定期的に外から開かれるのか、何か合図がいるのか。……いつ開くのかわからぬものを待つても仕方が無いしな。壊そう』

リーリアが掌を天井に設けられた扉に押し付ける。そのまま真上に力を入れると、分厚い石で出来た扉は勢いよく開いた。扉と天井の間には施錠のために金属で出来た門が行き交うような仕組みがあつたがそれはひしゃげてしまつていた。元通りに閉めることはもう

無理だろ？

入り口から顔だけ出して様子を見る。厨房のようだつた。料理中の料理人と目が合う。リーリアは愛想笑いを浮かべた。

料理人達は予想外の出来事に身動きができなくなつていた。手を止めてしまつた炒め物が焦げ臭い煙を立ててゐる。

『どうだ？ 何がある？』

『レストランの厨房かな？ コックさんが5人ぐらいいるけど』

『無関係とは思えないな。敵だと思つたほうがいい』

リーリアはそのまま階段を上ると厨房に出た。先程からのアルのサポートで段々大胆になつてきている。堂々としたものだつた。

「あなた達も人さらいの仲間なんですか？」

その言葉で止まつていた料理人達は叫び声をあげて逃げ出した。この態度から関係者であることは確実だろ？

リーリアは放つたらかしの料理が気になつてしまつた。このままでは火事になつてしまいそうだったので慌てて火を止めた。

「逃げちゃつたけど……」

『まあいいよ。レストランの厨房なら裏口みたいなのがないか？ 多分そこからせらつて來た人たちを運び込んだと思うんだけど』

裏口は簡単に見つかつた。食材の搬入口だ。リーリア達は食材の入つた木箱に偽装されてここから運び込まれていた。念のため扉を開けてみたが、内側から鍵がかけられるようになつてゐるだけなので外に出る分には問題はなかつた。

あたりの様子を伺う。厨房には誰もいなくなつてゐる。裏口とは反対側に行けばレストランの食堂だつた。こつそりと覗き込むと、

「ツクが慌てふためいて飛び出したせいか少しわいついていた。誰も料理を作つていないのでから時間が経てばさらに混乱することだらう。」

『一戻つて中の女の子達を連れてこよう。外に出て大通りにでも出れば大丈夫なはずだ』

地下に戻ろうとリーリアは振り向いた。そこで何か違和感のようなものを感じた。何かがさつきと違つている気がする。

「ねえ、アル君、なにか気になるんだけビ……」

もう一度よく見る。気になるのは裏口だった。先ほビドアが開くかを確認した際に開け放しにしていた。閉めた覚えはないので開いているのは問題ないが、開き方が大きくなっている気がする。

「アル君……」

アルに相談しようとした時、何かが顔をめがけて飛んできた。リーリアは思わず目をつぶり手を交差させてその何かを防いだ。カラシと音を立てて何かが床に落ちる。包丁だった。

「え？」

リーリアの服の腕の部分が切り裂かれていた。肌はアルが言つように強化されているせいか傷一つない。

調理台の陰から男が立ち上がった。北門でリーリアを誘い出した男だ。

「これはどういったことでしょうかね」

やはり特徴のない顔としか思えなかつた。本当にこの男にそりやわれたのかと言わるとリーリアも自信を持つては言つ切れない。

「平民だと聞いていたんですが、間違いだつたようですね。あなたどうして出てきたんです？」

どうしたらいいんだらう。リーリアは困惑う。攻撃自体はアルがやつてくれるとしても、近づくのはリーリアの仕事だ。先ほどのように狭い廊下のような限定された空間ならアルにもやつしあつたが、障害物の多い広い空間ではそれも難しい。

「色仕掛けですかね？あの男はあなたにご執心だったようですし。まあそれでもあの男がただやられるとも思えないんですが」

リーリアは試しに横に一步動いてみた。男は同じだけ横に動いた。一定の距離を保つてゐる。油断はしていいようだつた。

ならば地下へ誘いこむといふのはどうだらう。警戒して近づいてこないといふことであれば地下へ逃げ込めるかもしれない。狭い廊下でなら闘いようもある。

しかし誘いにのつてこなければまた閉じ込められてしまふかもしれない。そう考へるとためらわれる。

食堂側からなら逃げるは出来るはずだがやつてしまつと、地下の女の子達を置いていつてしまふことになる。それは絶対に嫌だつた。

「アル君どうしたらいい？」

つぶやいたがアルの返事は返つてこない。途端に心細くなつた。

「誰かいる振りですか？ 無駄ですよ。」この厨房に他に誰もいないことは確認していますから」

男はリーリアのつぶやきを聞きとがめたのかそう言つてきた。リーリアは地下の入口へと走った。アルは返事をしないしあまりいい方法も思いつかない。

しかし先ほどまであつた馬鹿みたいな力を發揮する」ことは出来ず足を滑らせた。

「あ」

リーリアのイメージでは一足飛びに入り口まで行けるはずだった。アルのサポートがあれば可能なはずだ。だが何故か力が失われている。そして絶対に転けるなど言っていたことを思いだしパニックに陥つた。

その様子を男は冷静に見ている。

リーリアは立ち上がりうどじたばしたが混乱のためか足に力がはいらない。このままではまずいと仰向けになり男の方を見る。男は慌てふためくリーリアをじっくりと観察していた。

男は何かを確信したのか、ゆっくりと近づいてきた。リーリアは必死に後ずさつたが、何かにぶつかってそれ以上下がれない。

男はリーリアの足元までやってくると、そこでも冷静に見下ろした。抵抗の様子がないと見るとリーリアの腰を両足ではさみ込むようになつた。そのまま両手を抑えつける。

「包丁で傷つかないんですから貴族なんでしょうが、私も貴族なんですよ。そして貴族同士なら男のほうが力は上です。ご存知でしょ
うがね」

「いやつー」

リーリアは必死に身動きするも完全に抑え込まれていた、まったく動けない。

「私の依頼主はね、貴族の性奴隸は求めていないのですよ。 ですのあなたは連れていけない」

平民の主人は貴族の奴隸を嫌う。 それは完全に支配していたとしても何かの折に本人が意図せずに力を發揮してしまうことがあるためだ。 戦奴隸としてなら慎重に運用すればいいが、性奴隸でそれはまずいと忌避されている。

リーリアは何故すぐに殺そうとしないのか不審に思つた。 極秘任務の内容をある程度知つてしまつたのだ。 始末されて然るべき状況だ。 リーリアは男の顔を見た。 そしてわかつた。 先ほどまでの商品を吟味するような商人の顔が、獸欲を滾らせた男の顔になつていることを。

商品としての価値を失つた途端、男にはリーリアがひどく魅力的な自分個人の嗜好に合つた獲物に見えてきていた。

「アル君！」

リーリアがもがきながら必死に叫ぶ。

「助けなど呼んでも無駄だと……」

リーリアの手が動いた。 男が掴んでいる手をまったく無視した動きだ。

鈍い音がした。 骨をへし折り、肉を押しつぶし、肺を破裂させた音だ。 リーリアの右拳は男の左胸を陥没させていた。 鍛えられた筋肉も肋骨も何の障害にもならない。 見る間に左胸が萎んでいく。 喰血がリーリアの顔を汚した。

『そつちから近づいてくれて助かつたよ』

力の抜けた男の手をリーリアは左手で掴んだ。そのまま男を跳ね除けると逆に馬乗りになる。

男は右手を必死に伸ばし、首を振る。助けを求めているようにも見えた。

『悪いけど逃がすつもりはまったくないんだ。このままやられてくれよ』

無造作に振り下ろされた鉄槌が男の顔を打つ。技でもなんでもなかつたが力任せに振るわれたそれは男の顔の中心を捉え鼻を中心に入陥没させる。

男が完全に沈黙したのを確認するとリーリアは立ち上がった。

『こいつが馬鹿で助かつたよ。素のリーリアを見せれば油断するかと思つたんだけど、まんまとひつかつてくれた』

「な、何それ！ 私ほんとに怖かつたのに！」

リーリアは怒りの声を上げた。なんの相談もなく勝手にそんなことをされてはたまつたものではない。

『悪かつたよ。でも、あいつから近づいてくれないとビリじょつもなかつただろ』

アルはあくまで冷静だ。それがさうにリーリアの怒りに火をつけ る。

「アル君の馬鹿！ アホ！ 変態！ えーっと、カバツ！」

リーリアの罵倒の語彙は大したことはなかつた。

貴族同士の戦いでは近接戦闘になる公算が高い。アルはこれまでの戦闘からそう考察している。

初手の包丁でリーリアが貴族であると男が確信したように、飛び道具は役に立たないことが多いからだ。

故になんらかのタイミングで近づいてくるだらうとは思つていた。だが実際の所危ない賭けであつたことには変わりはない。アルは胸をなでおろした。

ふりふりと怒るリーリアをなだめながら周囲の様子を強化した聴覚でうかがう。さらに援軍がやつてこなさそなことを確認すると、地下の女性たちを開放した。

裏口から出ると裏路地につながつており、そこから大通りに出られる。

『アル君、ここどこかわかんないんだけど…』

同調したアルの聴覚にリーリアの声が聞こえてきた。

「大通りなんだろ？ 城壁と反対側へ行けば広場だ。僕も広場へ行くからそこで合流しよう

『わかつた。みんなも連れていけばいい？』

「そうだな。役所にでも行つた方がいいだろ？ 一緒に行こう

アルも大通りに出て、広場へと向かう。

雨粒が一滴アルの頬を打つた。空を見上げる。珍しいことに灰色の雨雲が空を覆いつつあつた。アルがマテウ国にやつてきてから初めての雨だ。

マテウ国ではレガリアにより気象制御がされているため昼間に雨が降ることはまれだ。通常は耕作に必要な量の雨が定期的に夜間に降るように調節されていた。ただ降雨調節はある程度ゆらぎをもたせてあるため、にわか雨程度ならたまに降ることはある。

アルは足を早めた。広場にはほどなくして到着する。雨除けを求めてカフェの軒先に入ることにした。軒先はテント状になつていて、その下にはテーブルがいくつかおいてある。雨が降ってきたせいか客はそれほどでもないため、端の方にいれば邪魔になることないだろう。

風が強くなり始めていた。広場の人影はまばらだ。その少数の人々も突然の雨に驚き足早に去つていく。しばらくすると広場には誰もいなくなつていた。滅多に雨の降らないこの国で傘を用意しているものはおらず、雨の中をうろつくような物好きはほとんどいない。

リーリアは大丈夫かな？

8名という大人数だ。雨宿りするのも大変だらうと思つ。アルが感覚を探つてみると歩いていたのでこのままこちらへ真つ直ぐ来ているようだつた。

遠くから雷鳴が聞こえてきた。ますます雨足が強くなり、風も強く吹き荒れる。

何かがおかしい。この国でここまで天氣が荒れるのは異常事態といつていい程だ。アルは周りを見渡した。広場も端の方はけぶる様な雨にかすんでしまいよく見えないが何かが動くのが見えた。

さつきまではいなかつたはずの人影だ。はつきりとはわからないが、かなりの大人数がゆっくりと広場を横断している。東からやつてきたそれらの影は中央の噴水までやつてくるとばらけた。つつあ

る大通りにそれぞれ向かい始める。

明らかに不自然だつた。この雨の中悠長に歩いているのはおかしい。アルはよく見ようと目を凝らした。

ずるり、と一人の人物の上半身がずれた。そのままぼしゃん、と水たまりに上半身が落ちる。

「！？」

近くにいた人影が上半身を拾い上げた。足だけで動き続ける下半身に追いつき、その上に上半身を置く。元の姿に戻つた何者かは何事もなかつたようにそのまま歩き続けた。

なんだこれは？ 何が起こつてゐる？

「見つけました」

少女の声にアルは振り向いた。

衝撃。少女の拳がアルの脇腹にめり込む。振り抜かれた拳にアルは吹つ飛ばされた。店内のテーブルを派手に巻き込みながら壁に激突したが、まだ止まらない。

そのまま壁をぶち抜いてさらに中へと飛んで行き、反対側の壁にぶつかつてようやく止まつた。

激痛に声も出ない。地べたに這いつくばりながらアルは必死に状況を把握しようとした。

わき腹に手をやる。あまりの衝撃に腹が爆発でもしたかと思つたが、感触はわき腹がその存在をとどめていることを伝えてきた。ただ内臓の状態はあまりよくない。口から血があふれてきた。

周りを見る。倉庫のような場所だつた。カフェのバックヤードだろう。樽や木箱が整然と並べられていたようだつたが、衝撃で崩れている。

背を壁にあずけたまま、なんとか立ち上がるつとする。足がふらついた。壁がなければ立つてはいられないだろう。

「殺すなと言わっていたのを忘れていましたが、生きているよう有助かりました。あなたも貴族ですか。私がそつなんですから、被験者は全て貴族と考えるべきでしようか？」

大穴の開いた壁の向こうにまだ幼い少女が立っていた。髪は銀色で肩のあたりで適当に切られていた。前髪も眉の上あたりで適当にまっすぐに切つてある。服装もボロ布を巻きつけただけのような物で、何もかもがどうでもいいといった格好だった。

その背後には数人の男女が立っている。先ほど広場で不自然に歩いていた者達だ。近くでみればそれが生きた人間ではないことがはつきりと分かつた。生氣をまるで感じない。手足の長さが不揃いで歪なシルエットは、まるで一度ばらした後に適当にくつつけたかのようだった。

「テオバルト様にカテゴリーRの被験者5号を発見したと伝えてください」

少女は背後の者達に指示を出す。

アルは必死に呼吸を整えていた。だがそう簡単には動けるようにはならない。少女の一撃はアルをほぼ無力化していた。

「さあ、テオバルト様がおいでになられますよ。こんな薄汚い倉庫でお迎えするのは失礼でしょう?」

少女が近づいてきてアルの髪を掴むと引き倒した。支えを失ったアルは簡単に倒れる。抵抗する余裕すらない。

少女は倒れたアルをそのままずるずると引きずり、広場へとやつ

てくると無造作に放り出した。

外は既に嵐と化している。横殴りの雨がアルを打ち付けた。なんとか起き上がろうと腕に力をいれ上半身を起こす。

目に入ったのは死者の群れだ。その死者の群れが2つに別れ道を作る。死者たちは次々とひざまずいていった。

死者が作る道を悠然と男が歩いてくる。それは千の悪魔を従える者、大魔導師テオバルトと呼ばれる男だつた。

1-1話 対峙（前書き）

サブタイトルは適当なので後で変えるかも知れません。
あと、冒頭時間が若干戻っています。

首都ベイヤーの西門には検問を待つ馬車や人々で溢れかえっていた。

主に商人が多い。商売でやつてきた者達はここで荷を検められ、商材に応じた税を徴収される。

そんな人々の最後尾に今にも壊れそうな異様な馬車が現われた。人々の注目を浴びる中、車輪が外れ大きな音を立てて傾いた。車輪の反対側を支えていた少女は役目を終えた馬車の本体をゆっくりと地面に下ろす。

銀髪のまだ幼い少女だ。ボロ布のよつな服がその愛らしい顔とは不釣り合いに思える。

全身を腐らせ血を滴らせる馬は車輪のない馬車をそれでも引こうと、懸命に前へと進もうとしている。ギチギチと音を立て、引き棒に連結した胸当てが食い込むが車輪のない馬車はほとんど動かない。少女は馬との連結部を引き千切つた。馬は抑えつけられていた力を開放しあたりの人をはね飛ばしながら進むと城壁に激突した。

反対側の連結部も同じように壊す。同じことが繰り返された。馬は再度城壁に激突する。この馬は前に進む以外のことが出来なくなつており用済みになれば放棄するしかなかつた。

その場にいた者達はそれを呆然と見ていた。白昼夢のよつだつた。とても現実とは思えないことが起つていて。

「テオバルト様、街へ到着しました」

少女が馬車の中へと声をかける。

中から一人の男が現われた。全身黒尽くめの男だ。肩まである黒い髪、黒い目、黒いコートで全身を覆つていて、手には節くれだった杖を持っていた。

「何故こんなにも人がいる？」

「数百年もこなれば街も発展します。これぐらいの人人がいるのはあたりまえです」

男が手に持った杖で少女を殴りつけた。少女はそれを黙つて受け入れる。

男は少女に思ったことを包み隠さず全て口にするように命令している。ただそれはこの男の寛大さを示すものでない。その言葉が気に入らなければこのように殴りつけた。

ここに至つて呆けたようになつっていた人々が動いた。商団を護衛する傭兵たちが防御態勢を取る。商人たちはその身を馬車の影へと隠した。

誰何の声など誰もあげなかつた。下手に声をかけるのも恐ろしい。男は余りにも美しすぎた。そしてそれは傭兵たちの本能が最大限の警鐘をかき鳴らす要因でもあつた。魔法使い。ここまで美しい人間が魔法使い以外のわけがない。

傭兵たちは男の一拳手一投足に注目した。魔法使いが魔法を使うには魔器を通して悪魔を使役しなくてはならない。そこには必ずなんらかの動きがあるはずだ。

先制攻撃を考える者もいた。だが足を一步前に出すことすら出来ない。彼らの本能は逃げろと叫び続けていた。

「邪魔だな」

男がそう言つた。一陣の風が吹き荒れるとその場にあつたもの全てが同時にずれた。血しぶきをあげて上半身が落ちる。子供たちは頭部か胸のあたりを切り裂かれ、馬は足を、馬車は車輪と本体の狭間で分断されていた。大地は瞬く間に血で染めあげられる。門の前にいた数百人の人間がただ風が吹いたという、それだけで骸と化し

ていた。

魔法による攻撃だつた。魔法で攻撃する場合にいつとも有力とされるのが空気を利用したものだ。空気は簡単に動くため魔力効率がいいし、どこにでもあるため事前準備もいらない。この場合は薄い刃状に固定した空気を大人の腰ぐらいの高さで広範囲にばらまいた。ただ殺戮を行いたいだけならほとんどの場合これで事足りると言えるだろう。

「テオバルト様、ここにターゲットがいた可能性も……」

殴りつけた。それが日常となつてゐる少女はもう一々反応したりはしない。

小雨が降り始めていた。先ほどの魔法は狂嵐の悪魔ゼトによるものだ。この魔法を使うと大気を依代に具現化した悪魔本体が嬉々として暴れまわり始める。その動きは大気に乱れを生じさせ暗雲を呼び寄せた。魔法の行使自体は素直に受け付けるがそれ以外の制御はできない。気がすむまで暴れまわるにまかせるしかなかつた。

「あれはどんな姿をしている?」

「はい、聞いた所では栗色の髪をしてゐる15・6歳ぐらいの少年とのことです」

「ここにいなか一応確認しろ」

「はい、いないです」

少女はさつとあたりを見回しただけだがそれだけで確認が済んだようだつた。男もそれについては信用しているようで特に咎めることはない

「見つけられるか?」

「条件に該当するものはこの街に無数にいるものと思われます。グ

ラウシェル症候群の罹患者ですから目視出来れば判別は可能ですが「ならばこいつらに探させよう。街中に放ち似たような者を全て確保させる。お前は検分を行えば良い」

「発見後はどうのよつに?」

「拘束しろ。私が直々に見極めよう。殺すなよ」

血まみれの死体達が蠢き始めた。上下にわかれた死体がそれぞれ片割れを探し出し元に戻ろうとする。手近な所にあつた人体の一部を接合して人の形となつたものが次々と立ち上がる。たまたましゃがみ込んでいた数少ない生き残りは、声を押し殺しその様子を見ていた。

先程からこの魔法使いは魔法を使つている様子をまるで見せていなかつた。詠唱も印も陣もない。一言一言喋つただけだ。生き残りの傭兵たちにはそれが信じられなかつた。彼らの常識ではとても考えられない。

立ち上がつた死者達はそこかしこに落ちてゐる武器を拾い始める。生き残り達は怯えあつさりと武器を捨て逃げ去つた。そこには幼すぎるため攻撃のあたらなかつた幼子達も取り残されている。

簡易的な武装を終えた死者たちは行進を始める。統率のとれたものではないが、全員が街を目指してゆっくりと動き始めた。

死者の行進が門を通過していく。咎めるものはいない。一部始終を目撃していた検問所の兵士達はそれを黙つて見送つた。異常事態だ。想定外の事態に何も出来ない。何か余計なことをすると、こちらにやつてくるのではないかと思うと身じろぎすら出来なかつた。

検問所の女性兵士ダフニーは、ほぼ全ての死者が通り過ぎたあとにやつと動き出した。受話器を取り上げると交換手を呼び出し王城への緊急回線をつなぐ。そして死者の軍勢の襲撃を一気呵成に伝えた。

アルはその男を数度しか見たことはなく、直接何かをされたわけでもない。だが見た瞬間からゆっくりと怒りが込み上げてきた。アルの中にあつたのは理詰めの怒りだ。自分の境遇について思いを巡らせるといこの男がその始まりにいる。全ての元凶だ。一時的な激情ではない。常にこの男に対する燐火のような怒りがどこかでくすぐついていた。

怒りに我を忘れる事はない。だが自然と痛みは抑えられていった。怒りを足に込め立ち上るとその男を睨みつけた。

「そつちから来てくれるとはね。探す手間がばぶけたよ」

せいいつぱいの強がりを言つたアルを、男は一瞥するとそれ以上の関心は見せずに隣にやつてきた少女に目をやつた。

「テオバルト様、被験者を発見しました」

「ふむ、私は何故これを見極めねばと思つたのか?」

その言葉に少女は呆れてしまつた。わざわざやつてきて目的を忘れているというのか。

「回収して解体するという話だつたと思いますが」

「これをか? 見たところ取るに足らん。解体するだけ無駄だが、研究の痕跡を残すのはまずいか。お前の意見を聞こう。こいつは4号までと何か違うか?」

少女がアルを見つめた。その鳶色だった瞳はいつの間にか真紅へと変わつてゐる。アルの背筋を悪寒が走つた。とても重要な、だが

自分には絶対気付かない何かが進行してしまっているという感覚。何かのきまぐれで簡単に首を落とされる、生殺与奪を握られてしまっている恐怖。このままではまずい。だが打つ手がない。

「これまでと違うのは死者の完全蘇生能力でしょう。ただこれは、完全に蘇生させないと動かせないという意味では劣化しているとも取れます。そして死者の支配が不完全です。直接操作出来るのは数体で、しかも操作している者以外は自由意志を持つため反逆すら許してしまいます。魔力量、有効範囲等は今までの被験者と大差ありません。カテーテゴリーRとしては完全な失敗作です。この場での消去を提案します」

「本来意図していた造魔としても失敗で、君臨する者にもなれなかつたか。ゴミだな」

言葉通りだ。ゴミを見るような目でアルを見下す。

アルは銀髪の少女を見た。今の自分はあの少女にすら勝つのは難しい。一撃でほぼ行動不能にされた。万全の状態でも無理だろう。周囲は死者の群れに囮まれていた。死者は愚鈍だ。現時点では襲つてくる様子はない。そして目の前のテオバルト。実力は未知数だが、この天候と死者の群れはこの男の力だろうし、千の悪魔を従えるというのだ。これ以上の強力なものをいくらでも用意しているのだろう。

最悪だ。アルはこの男と対峙する前に、なんらかの魔法に対抗しうる力を手に入れるつもりだった。そのために魔法の力を求めたのだ。だが、結局の所魔法についてはろくな手がかりも得ていない。死を覚悟した。ろくに走れない状態で死者の囮いを突破することなどとも出来そうにない。

リーリア……

覚悟とともに思い浮かんだのはリーリアの顔だつた。自分が死ねばリーリアも死ぬ。そんな単純なことにすら思い至れなくなつてしまつていた自分に呆れる。

どうすればいい。リーリアはこちらに向かつている。リーリアだけを逃しても無駄だ。だが、ここに来れば死よりも恐ろしい無惨な事態になるかもしない。

『リーリア！ 広場にはくるな！ 近くに建物があればすぐに入つてそこから出るな！』

自分が死ねばリーリアも死ぬ。それはわかっている。だがそれでリーリアが死ぬところなど見たくはなかつた。死者の群れに蹂躪され殺されるのは自分だけでいい。瞬時に決意しリーリアに伝えた。そしてリーリアが何か言う前に同調を解除した。

無理でもなんでも逃げる努力だけはするつもりだった。リーリアと同調しながらではろくに動けない。

一か八か、死者の群れに飛び込む。目の前の少女に適わない以上それしかない。後ろに飛びすさろうとタイミングを見計らう。

まさに動こうとしたその時、死者の群れが10人ばかり吹き飛んだ。アルから見て右側から飛んできた死者たちは、アルとテオバルト達の間に落ちて潰れた。元々接合が弱かつたのか簡単にその身体をバラけさせる。

アルは死者の包囲が崩れた箇所を見た。白銀の鎧を身につけた男が猛然と剣をふるい死者たちを手当たり次第になぎ倒し、ふつ飛ばし、両断している。以前に広場で見かけたことのある勇者がそこで大立ち回りを繰り広げていた。

聖剣の一撃で死者の群れが切り裂かれ吹き飛ぶ。フォグは確かに手応えを感じていた。聖剣が通用するならこいつらは魔族と同様と考えていい。

アイゼンは率いてきた王直轄の首都防衛軍、その一隊に死者への攻撃を指示していた。痛みを感じず、多少の損傷をものともしない死者の群れを相手にするにはまず心構えが必要だ。それをわかつていたアイゼンは即座に全隊にそれを伝えた。矢や刺突攻撃はあまり効果がない。切断や打撃による押しつぶすような攻撃が有効であることを。

「アイゼン、こいつらは一体何だ？」

「アンデッドでしょう。マキノさんがいればよかつたんですが」

マキノは中央正教の本拠地、聖都へと旅立っていた。信仰への疑問からか最近のマキノは様子がおかしく悩んだ末に数日前、信仰を見つめ直すと言い出し聖都へと向かってしまった。同じようにここ最近飲んだくれていたゲルンも何か考えがあったのか同行を申し出、道中の守護を担うこととなつた。

アンデッドは自然に発生することもあるため、教会ではその対策も考えられている。神聖魔法はその有効な対策の一つだつた。

「ですが、特別アンデッドが脅威というわけでもありません。ここのいるような者達なら一般兵でも対処出来るでしょう」

死者達は特別な能力を持つてはいるわけではなかつた。多少頑丈ではあるが、何度も切りつけ動けなくなるまでばらしてしまえば無力化出来る。燃やすのも効果的だったが雨の中ではそれは無理と早々に諦めた。

防衛軍の数は凡そ500人。死者も多いとはいえたその動きは鈍く、

練度の高い防衛軍は慎重に着実に仕留めつつあった。

「ひひあー」

フォグが聖剣を振るつ度に数十人単位で死者達が吹つ飛んでいく。修復の済んだ聖剣は本来の力を取り戻しつつあった。

アイゼンは少し後方から全体の指揮をとりつつ様子を見ている。

「しかし彼らは何故ここに現われたのでしょうか？ 幸い雨のせいか街の方への被害は出でていないようですが」

「んなもん知るかよ！ とにかく全滅させるー つーか、そこにいるのが街の方じゃないのか？」

フォグが切り開いた死者の壁の間から3人の人間が見えた。アンデッドではなさそうだ。

黒尽くめの痩身の男に、銀髪の少女。その向かいには腹を押されて、今にも倒れそうな様子の少年がいた。

「ありや、あっちの黒いのが悪もんどう？ ん？ どうしたアイゼン？」

アイゼンは黒尽くめの男を見た瞬間から凍りついたよくなつていた。

あまりにも動かないものだから、フォグがアイゼンのもとまでやつてきて肩を掴み揺さぶる。

「おい！ どうしたんだよー！」

「あ、あれは……」

何度もゆがぶつてよじやくアイゼンは動き出した。

「あいつが誰か知つてんのか？　アイゼン？」

「テオバルト……千の悪魔を従える者、人界の魔王、殺戮と虐殺の貴公子など数多くの異名で畏怖されている、大魔導師ですよ！　彼のきまぐれで滅び去つたという街の噂は数知れず、ただ一人で一国すら落としたことがあると聞きます！」

「そんなすげーやつなら俺でも知つてなきゃおかしくねーか？」

「彼は数千年を生きていると言われています。数々の逸話は数百年前のものですよ。ここ最近見かけたという話は聞いたことがなかつたのですが……」

「つーか、アレは本当にそのテオバルトつてやつなのか？」

「はい。あの美貌！　一度見れば忘れるることは出来ません。古い資料に残つていた絵姿で見たものと同一です。レガリアに逆らい嵐を巻き起こし、アンデッドの群れを操る強大な魔力、こんな存在が一人といふとは思えません。間違いないでしょ？」「

「魔族か？　魔王なんだろう？」

「いえ、彼は人間です。魔導の研究の果てに究極の理を見出したとも言われており、畏敬の念を込めて人から産まれし魔王、人界の魔王と呼ばれているのです！」

「チッ！　あいつがそれだとしてだ、どうする？　勝ち目はあるのか？」

「撤退します」

「は？　ふざけてんのか？」

「ふざけてなどいません。彼が何の目的でやつてきたかはわかりませんが、おそらくあの少年が関係あるのでしょうか。ならば、目的を達して立ち去るのをただ待つしかありません！　下手に手を出せばこの街が、国が壊滅してしまいます！　これまでそうだったのです！　決して彼に関わってはならない！」

フォグがアイゼンの襟元を掴み睨みつける。アイゼンは真剣な眼

差しでフォグを見つめ返した。『『『』』』続いたが、やがてフォグが目を逸した。

「ち、わかったよ。お前は隊を撤退させろ。だが俺は逃げない」「馬鹿な！　あなたは何もわかつていない！　大魔導師の恐れじとを！」

「どーみたつてあいつが悪もんでガキがやられそうになつてんだろうが！　勇者だなんだとちやほやされて、おだてられてよ！　そりやこざつて時になんとかしてくれるつてみんなが思つてるからだろうが！　こじで退くよつな奴がどの面下げて勇者だなんて名乗れるつてんだ！」

「わかりました、お気をつけて…」

そう言つたアイゼンの行動は速やかだつた。すぐさま隊をまとめて退却の指示を出そとじしてゐる。

「いや、そこは、私もお供します！　みたいなシーンじゃねーのかよー。」

フォグがアイゼンの方を振り向き慌てて言つ。それとガツンと言ふ音がしたのはほほ同時だつた。

顎だ。巨大な顎があつた。それが閉じた音だ。閉じた顎には全身を甲冑で覆つた兵士が咥えられていた。鋭い牙は甲冑」と肉を貫いている。退却を正に始めようとした兵士たちが、食い殺されていた。顎が上へと伸び上がり、天を向く。それは甲冑もろともぐぢやぐぢやと咀嚼を始め、十分に噛み碎いた後飲み下す。

少し後ずさつたフォグにその全容が見えた。蜥蜴だ。死者を押し混ぜ、形を無理やり整えた巨大な蜥蜴の様な物がそこにいた。

死者達はどれほど細切れにされようが関係無かったのだ。それはどのような姿にならう別の形で利用されるようになつてゐた。

消化器官などない死肉の塊が肉を飲み込んでなにをするというのか、それはすぐに分かつた。背から骨と鉄と肉で出来た翼がせり出し始める。それは取り込んだ血肉を元に、竜のような姿を作ろうとしていた。

「なんだあれはアイゼン！」

「ドラゴン……のようなものとしか……しかし、何故我々が攻撃されるのです！　テオバルトは目的以外のことには目もくれないはずでは！」

その答えはテオバルトの側の少女から聞くことが出来た。

「テオバルト様……竜が目標をそれましたが」

テオバルトは杖で少女を殴りつけた。少年を食い殺すべく創造された竜は、少年を無視して防衛軍を襲つた。それだけの事だった。

フォグは竜に立ち向かうべく行動を起こした。この状況で少年を守るという選択はない。このままでは防衛軍500名が全滅してしまつ。

状況は大して変わっていない。アルはこの僅かに訪れた好機を活かすことが出来なかつた。

囮みが破られた時はそれに乗じて逃げようとしたが、思った以上のダメージで素早く動くことは無理だった。

眼の前で死体が組みあがり巨大な蜥蜴になる間も黙つて見ている

ことしか出来なかつた。その蜥蜴が自分には見向きもせず、やつて来た兵士たちに向かつたのはただの偶然だ。まつすぐ向かつて来られれば、ただ食われるしかなかつた。

手詰まりか。さつきのは勇者だつたが、僕への加勢は無理なようだ。

勇者がいた所でこの局面が好転するとも思えなかつたがさうに時間稼げたかもしれない。

僕は馬鹿か。時間を稼いでどうなる。……いや、回復出来ればあるいは……。

今まで意識したことはなかつたが目の前の少女が自分のことを貴族だと言つていた。あの馬鹿力で殴られて生きていたのだから確かにそうなのだろう。ならば即座にとにかくでも回復は可能なはずだ。貴族は戦闘に特化した頑健な肉体を持っている。戦闘中の負傷をものともせずに死ぬまで戦い続けることが出来ると聞いたことがあつた。

アルは今までのような漠然としたものではなく、回復が出来るはずだと信じて負傷した脇腹に意識を集中する。身体の中で何かが蠢いた。内臓が元の形に戻ろうと蠕動を始めたのが感じられる。

悠長にそんなことをしていいのかなどとは考えない。テオバルトが次につ何をしてくるのか分からぬ以上、今出来ることをするだけだつた。

「私が殺しましょつか？」

少女がテオバルトに問つ。

「やつだな。竜などと戯れが過ぎた。お前がやれ」

少女がゆっくりと近づいてくる。アルはギリギリまで回復に努めることにした。こいつらがその気になればいつでも殺せるのだろう。何を考えているのか遊んでいるといふのならそれは最大限まで利用するだけだ。

少女が拳を大きく引いて顔の横まで持つていく。あからさまな構えだ。ならばカウンターだ。最も練習した中段突きを食らわせる。それだけを考えた。

少女がアルの間合いの一歩手前で止まつた。身体のサイズが違うため単純に殴り合えば、アルの攻撃が先に届く。流石にそこまでは油断していいようだつた。

少女の目が赤く光っている。本気を出しているといふことか。先程と同じように覗き込むような目で何かを探つていて。

「なるほど。私が相手でなければうまくいったかもしれないですね」

少女は振り向くとリーリアの拳をその両手で受け止めた。

アルの失策はこの少女の能力を推し量ろうとしなかつたことだ。少女の赤い瞳は相手の能力を読み取る。発動状態の能力の構成までも把握することができる。アルが何者かを操作していることまで完全に把握されてしまつていた。

そして少女の誤算はリーリアとアルの力を見誤つたことだ。死者を強化し、操作して襲つてくる。それはわかっていた。どの程度強化され、どのタイミングで発動されるのか、それも手に取るように分かる。少女は振り向き自分めがけて繰り出された右拳を余裕を持って受け止めた。だが止まらない。それは突きのように見えるが実質体当たりに近い。足元から生み出された力は余すことなく前方への突進力へと変換される。完璧な構えが創り出す構造は突きの反動すら再利用しさらなる威力を加えた。受け止めるべく前に構えた両

腕が跳ね飛ばされた。拳はその軌道をまつたく変えることなく心臓に叩き込まれる。

少女は崩れ落ちそうになる足元に力をいれ必死に踏みとどまつた。反撃を考えたのだ。だがそれは悪手だ。素直に吹き飛ばされればまだ次の手もあつたのだろう。リーリアがさらに右足踏み込む。腰を落とし体を開き右肘を繰り出す。それは再度身体の中心に突き刺さつた。

少女はアルの後方へと吹き飛んだ。だがアルはそんなことはどうでもよく、リーリアを睨みつけると大声で叫んだ。

「馬鹿か！ 何しにきたんだ！ 隠れてると言つただろう！」「だ、だつて！ 絶対おかしかつたよ！ 何かあるつて思つよ！ それに助かつたでしょ？」「全然だ！ なんにも状況は変わつてないよ！」

リーリアの性格を考えていなかつた。ただ来るなと言つた所での少女が、明らかに慌てた様子のアルを見捨てるわけがない。冷静に論理的に説得すべきだつた。

広場に駆け込んできたリーリアを見た時、アルは咄嗟に同調を開始しそのまま突つ込ませた。リーリアを逃がすために操作すれば自分の身動きがとれずただ殺されてしまう。そうなればリーリアも死ぬ為さほど意味はない。それよりも攻撃に参加させることで局面の打開をはかるほうが二人が生き残れる可能性が高いと判断した。

少女は倒した。確かな手応えがあつた。だがアルが言うように状況は大して変わつていない。テオバルトにはなんの痛痒も与えていない。

そのテオバルトはアルの目前から忽然と消え失せていた。目を放したつもりはない。常に意識の片隅でテオバルトの動向に注目していた。

「え？」

リーリアが何かに驚いた。アルはリーリアの見ている方、先程少
女が飛んでいった方を振り向く。無様に転がったままの少女の隣に
テオバルトが立っていた。

「ア、アル君、あの人急にぱって出てきたんだけど……」

アルの目前から消え、リーリアが見ている前に突然現れる。アル
は戦慄を覚えた。瞬間移動。そんな事が出来る相手にどう立ち向か
えと言うのだ。

「テオバルト様……、申し訳……ありません……」

少女がテオバルトを見上げ、きれぎれの小さな声を振り絞つて謝
罪する。

「あれは面白いな。……とこりでお前はどうなつた?」

テオバルトがリーリアを見ながら、あまり関心のないそぶりで少
女に様子を尋ねる。

「心臓に致命的な障害が発生しました。余命は5分ありません」

「そうか」

どうでもいいようだった。少女に対する興味を失ったテオバルト
はリーリアを見続けていた。

「それはもうつていい」

アルはテオバルトの動きに全神経を集中させていた。瞬間移動などいう馬鹿げた力でもそれが魔法なら、魔器を通して発動する必要がある。予備動作があるはずだ。

だがその期待はあっけなく裏切られた。

気づけば隣にリーリアがいない。テオバルトの足元、傷ついた少女の隣に横たわっていた。その身体には死者の骨で作られたと思しき拘束具が絡みついてる。骨で出来た人間一人を完全に拘束する牢獄だ。

「な！」

驚きのあまりアルは声を漏らした。

わけがわからない。テオバルトは一切何もしていない。そして瞬間移動だとしてもここまであつさりとリーリアを奪われてしまうというのが理解出来ない。

アルはリーリアの身体を操作したが全く身動きが取れなかつた。拘束具は全身に絡みつき可動箇所を完全に抑えつけている。これは力が發揮出来なかつた。

「お前はもういい」

テオバルトが初めてアルの目をまっすぐと見た。虫けらを見るような目だ。

アルはテオバルトへ向かつて一直線に駆け出した。冷静さはかけらもなかつた。今のアルにはリーリアを取り戻す、それしか頭にない。ただ突つ込んで一撃を喰らわせ、リーリアを手に離脱する。それ以外は全て意識の外へと追いやられた。

回復はある程度出来ていた。貴族の力を意識したアルが一撃を加えることができれば、一矢報いるぐらいは出来たのかもしれない。

「死ね」

ただ一言。つぶやくようなその言葉はアルの身体に劇的な変化をもたらした。

駆け出した足がすぐに止まつた。力が入らなくなり足元がぐらつく、目の前が暗くなる、激しく打ちつける雨の音も小さくなつていく。

なんだこれは？ 何が起こつてている？

そう思つたのも束の間、アルの心臓が止まつた。

1-2話 覚醒（前書き）

今回は書き方でなんかしつくつこない所もあったのですが、悩んでるといつまで経っても投稿できないのでとりあえずアップします。後で表現的な部分でいじるかも知れません。シナリオ自体はいじりませんので読み直しは必要ないと思いますが……。いろいろとすいません。

心臓が止まつた。アルは全身を凍りづけにでもされたような感覚に陥つた。実際に体温がこれから下がつていくのだろう。いまこの瞬間からそれは始まつてゐる。

だが直ぐには死はない。死ぬつもりもない。リーリアを取り戻す。思考はその一点に集約される。

身体はなんとか生きよつともがいていた。心臓は強引にでも血液を送り出せようと震えるが、何かに掴まれでもしたかのようにそれ以上動かない。

貴族の身体はそれでも生き長らえよつと全身の筋肉を収縮させ無理やり血液を押し流す。それによりかうづじて脳の機能を維持させていた。

どうすればいい。このままでは遠からず全身の機能が止まる。
死ぬ。

死を意識した瞬間思考が加速した。この状況を打破すべく記憶を洗いざらしひつくり返す。

何かあつたはずだ。なんのために魔法使いになりたいなんて思つていたんだ。じつはこの時のためだらう！

「魔力は存在力とも言つたよな。だから魔法を食らつても諦めるな。結局最後にモノを言つるのは根性だ。魔法に対抗するのは気合いだよ。直接魔法をかけられたとしてもだ、強力な自我を保つていればなんとかなる場合もある」

聞いた時はなにを馬鹿なと思ったキャシーの言葉だ。こんなもの

にでもすがるしかない。気合、根性。だがどうすればいい？

自我の補強。今更にか裏打ちのある自信でも用意しろというのか？ なんでもいい、思い出せ！ 自分を肯定出来る何かを！
自負を！ 誇りを！

そうだ、本を読んだ。何度も何度も、すり切れるほど！ 人間の子供と馬鹿にされ、罵られ、嘲られる他、何もない森での生活で僕を支えたのは本だ。人の言葉で、魔族の言葉で、竜の言葉で、妖精の言葉で、様々な言葉で書かれた様々な本を読んだ。

そして見つけた。それは印刷物ではない、手書きの書物だつた。武術について書かれたものだ。アルは魅了される。そこらの魔族の子供では到底及びもつかない、武の深奥を垣間見た。全てを一撃で屠る突きを。攻防一体の構えを。神速の歩法を！

それこそ飽きることもなく読みふけり、ほんの僅かな汚れも虫の食つた後も全てを完全に記憶した。その本には曖昧な言葉と稚拙な図しかなかつたため、ただ読んだだけでは表面的なことしかわからぬ。それを推量し、検討し、自らの身体を用いて再構成していくた。

それを身に着けるべく練習を重ねた。同じ動作を何度も何度も繰り返した。家の裏手は何度も踏みつけられ、固められ、石のようになり、いまや雑草の一本も生えない。同年代の魔族たちはそのうち手を出して来なくなつた。

「アルはすごいわねえ、何でも知つてゐるのねえ

母の言葉が聞こえる。本で読んだばかりの知識を母親に繰り返し聞かせた。新たに知つたその知識を聞かせたくてたまらなかつた。その度に母はそう言ってアルを褒めた。それがとても嬉しかつた。

アルの他者との関わりはとても薄い。そんな中での数少ない母による肯定はアルの自信の一部だ。

他には？ もっと何か！

そう、野族を、勇者を圧倒的な力でぶち倒した。本で読み、アルの中で再構成された武術は通用したのだ。それはただ筋力を振るうしか能のない輩を、理と術で捩じ伏せた。

そう、僕は強い。僕達は強い！ 僕とリーリアが力を合わせれば！

そしてリーリア。

「アル君は度胸あるよね……」

なんてことのない一言。これはいつのことか、アルのささいな言動に感嘆するリーリアが思い浮かぶ。

「そうかな？」

素っ気なく返したが、リーリアから寄せられる無条件の信頼が心地よかつた。

いつからだらう、リーリアの隣にいるのがこんなにも居心地がいいと感じるようになったのは。

こんなどこの誰ともわからないような奴をよく信用出来るものだと呆れもしたが、一緒にいるのが当たり前になっていた。

だけど、だめだ！ リーリアから向けられる想いは力には出来ない。してはならない！ あれが歪められた気持ちでないとどうしていえる？

そう思つ。だがリーリアの無邪気な、疑うことのないアルにだけ
見せた笑顔を思つた時、心臓は応えた。ドクン！ と一度脈打つ。
右手が無意識に動いて胸を押さえた。

一度だけだつた。心臓はそれ以上ピクリとも動かない。
だが僅かなチャンスを無駄にしたとは思わない。これには意味がある。

アルは生きようと喘ぎのたうつ身体を抑えつけると死をそのまま受け入れることにした。

意識が急速に薄れていく。これは賭けだ。

心臓が止まつた。ならば僕は死んでいる。そして……死んでいるなら……。

アルは自らを死者と無理やり認識した上で能力を使用した。死者の完全蘇生と強化と操作。

心臓を強引に動かす。抵抗はあつたが強化した肉体はそれを打ち破る。血流が戻ることにより意識がはつきりとしてくる。

奇妙なものが見えた。煤の塊のような黒い人影だ。小人のような真つ黒な影は目前に立つておりその手をアルの胸につき入れていた。

お前か！

アルは左手の裏拳を影に叩きつけた。ただ影のようなものが凝り固まつたそれはあつさりとその身を散らす。アルは身の自由を取り戻していた。

テオバルトは動かなくなつたアルを観察していた。

心停止の魔法。対人であればこれほど有効な魔法はない。複数に向けて同時に使えないのが欠点だが使いようでどうでもなることだろう。

相手の魔力に干渉し、心臓を強制的に停止する。生物の本能として多少の抵抗はあつてもテオバルトの魔力があればそれは些細なことだ。よほど魔法に精通して、対抗可能な悪魔と契約でもしていなければまず助かる術はない。

本来心臓が停止した段階で即死する。少なくとも立つてなどいられない。血流の止まつた身体は最大限生き長らえるために、生命の維持に全力を尽くそうとする。ただ立つだけに割く労力などなくなつてしまふはすだ。

だがアルはその場で立ち止まつてている。

テオバルトは少々訝しく思つた。あまりにも時間が経ちすぎている。本来ならすでにその場に倒れ込み屍をさらしているはずだ。

アルの右手が動き胸を抑えた。

しかしそれも最後の足掻きかと、テオバルトはそのまま経緯をうかがう。

「シッ！」

息吹と共にアルの左手が勢い良く横に振られた。まるで目の前にいる何かを殴りつけたようだ。

再び目が合つた。呼吸は大きく乱れているが、目は光を取り戻している。

どうやら抵抗に成功したらしい。テオバルトはそう判断した。

アルがそこから一步踏み出した。完全に復帰出来ていないので足取りが怪しい。

テオバルトの目が細められた。それは踏みつぶして殺したはずの羽虫の羽がぴくりと動いたので注目したといった程度の興味でしか

なかつたが、今までの「」を見るような目からは変わつた。テオバルトは傍らで倒れ伏している少女を蹴つた。

「おい、あれはどうなつてゐる?」

少女はもうほとんど意識を失つていたが、蹴られたことにより朦朧としながらも最後の力を振り絞り返事を返した。

「はい……あれは……自己参照によりループバックか再帰が形成されています。それにより自我、魔力を安定させ、ミクトラを打破しました。……それに関係あると思われますが魔力知覚野の拡張を感じました」

「ほう、面白いな。眼球を奪えば使えるか?」

「いえ、魔力知覚野は脳の……機能です。そう単純には……」

「これなら造魔としてまだ期待出来そうだな、何が原因だ?」

少女は答えなかつた。テオバルトは再度蹴りつける。だが少女がそれ以上口を開くことはなかつた。余命を使い尽くしたようだ。そう判断するとただ邪魔なものをどかすように、大きく少女を蹴飛ばした。見た目どおりの軽い身体は簡単に雨に濡れた石畳を滑りアルの前までやつてきた。

「もう少し追い詰めてみるか?」

テオバルトはそう言つとアルへと杖を向けた。

世界がまるで違つように見える。うすぼんやりとした紗幕が目の前を覆つて いるようだつた。

その幕のようないのには濃淡がある。

天をみれば巨人のようないのが駆けて いる。暴れまわる度に雷が辺りを照らし、雷鳴を轟かせた。

死者たちには黒い影が取り巻いていた。ぼんやりとした影は死者たちの手を取り、足を取りその動きを操つて いる。そしてテオバルト。その内から闇を溢れ出させ、あたりを覆いくさんとしているように見えた。

アルの目には今までとは違う光景が広がつて いる。

先ほどアルの心臓を驚撃みにしていた黒い小人もこれらと同一なのだろう。そこから類推するに、魔力や魔法現象の元のよつなものが形となつて見えて いるように思えた。

テオバルトを睨みつける。同じ手は食わない。先ほどの小人ならもう怖くはない。あんなものを蹴散らすのはいまや造作も無いことだつた。

テオバルトが杖をアルへと向ける。

空から影が奔つた。

とつさにアルは避ける。魔力らしき影が見えるよつになつて いるのだ。発動タイミングを読むのは容易い。

だが中途半端に避けることに意味はなかつた。影はアルの傍で一気に展開しあたりの大気を支配した。

「ぐッ！」

激痛に声が漏れた。アルの腕がみちみちと音を立てて肘からねじれていく。必死に抵抗したが無駄だつた。強大な力で押さえつけられゆつくりと力がかかつて いく。やがて右腕は肘からねじ切られ、水溜りにばしゃんと落ちた。その間まったく身動きが出来なかつた。大気に生じた気圧差はアルの右腕をあつさり奪つて いつた。

苦痛は一瞬だ。出血もそれほどではない。貴族の身体は戦闘を続行するため、痛みを抑え、血流の制御を行う。

だが、問題はそんなことではない。まるで勝ち目がない。絶望的な気分でアルはテオバルトを見つめた。

今のはわざとだ。手加減して右腕だけを狙っていた。その気なら全身のどこにでも攻撃を加えることが出来るだろうし、大気を操れるのなら吹っ飛ばそうが、窒息させようが自由自在だ。そんなものの魔力が見えようがかわしようもない。

「見えているようだな。だが対抗手段がないか。これでは追い詰めるどころかあっさり死んでしまいそうだな」

テオバルトの目はあくまで実験動物を観察するようなものだつた。不意に剣が現われた。目の前だ。拳ひとつ分も離れていない。慌てて首を傾げかわす。剣はアルの頬を掠めて飛んでいき、石畳の上にカラーンと転がつた。

大した威力ではない。だが、突然現われた。アルはそれを誰かが投げた瞬間を確認出来なかつた。

次に3本の剣が同時に目の前の空間に現われた時にその疑問はより色濃くなつた。まさか、時間が止められている？ リーリアを奪われた時もそうだ。まったく知覚出来なかつた。

3本の剣を前に、左腕を顔の前に掲げかばいつつ避ける。剣は、肩を腕を脇腹を傷つけ後方へと飛び去つた。

「うっ！」

太ももに生じた痛みに動きが止まる。背後からやつてきたそれをアルは全く感知出来なかつた。短剣が後ろから左の太ももに突き刺さつている。

全方位からの突然の攻撃。為す術がない。

「くそつ！」

アルは刺さった短剣を抜き取るとそのまま構えるか一瞬悩み、捨て去つた。今更使い慣れていない武器に頼つている場合ではない判断したためだ。

「アル君、逃げて！」

めまぐるしく変わる状況に呆然としていたリーリアが叫んだ。アルは石畳に横たわり雨に打たれ続いているリーリアを見た。泣いているように見えた。怪我をしたアルを見て、アルの身を案じて悲しみで顔を歪めている。

大丈夫、助けるから。それが身勝手に生き返らせたりした僕の義務だから。

一步近づく。テオバルトは動かない。近づけばどうにかできるだろうか？ わからぬが他に手段はなかつた。

足が銀髪の少女に触れた。ぴくりとも動かない。事切れているのがわかつた。手にかけたのは自分が特に罪悪感はない。ただやり返しただけだ。相手が幼く見える少女だろうとそれは関係なかつた。リーリアを見る。拘束されているためまったく身動きが取れない状態だ。だがその左手が動いているように見えた。必死に左手を開け閉めしている。合図だった。それに気づいたアルはリーリアとの同調を開始した。

『アル君、もういいから！ 私のことはもういい！ だから逃げて！』

『無理だよ、逃げる気はないし、こいつも逃がす気なんてないだろ

しかしなぜわざわざそんなことを言つたために合図をしてきたのかと訝しむとリーリアが言った。

『作戦があるの…』

リーリアはテオバルトに聞かれないように声を抑え口だけを動かしアルにその作戦を伝えた。

「ふざけるな！ そんなことが出来るか！」

『ほんとにいいの。だつて私は本当はもうとっくに死んじゃつてゐるんだから。今はただ何かのおまけみたいに生きてるだけなの。いつかこうなるつて覚悟は出来てた。アル君が死ぬ必要なんて全然ない！ アル君は生きて！だから……さよなら』

リーリアの作戦を聞いてしまえばもうそれ以外のことは思いつかなくなつた。悩んでいる暇はない。テオバルトがいつまで遊んでいるのかわからない。

逃げるのは無理だらう。戦つて倒すか、倒せずとも何とか隙を作らなくてはならない。

リーリアは覚悟を決めてぎゅっと手をつぶつた。震えている。それ以上何もしゃべるつもりはないらしい。

「一人共死ぬ意味はない。それは分かる。けど、その作戦しても非常に危うい。成功した所で意味がないかもしだれない。

「これ以上の変化が無いならやはりお前には意味がなかつたな。終わりにするとしたよう」

もう迷つていられない。アルは覚悟を決めた。傷ついていない右足で全力で踏み切るとリーリアがいる反対側、テオバルトの右側へと一気に飛んだ。

後半歩の間合い。アルはなくなつた右腕を前へと構える。左手は引き腰だめにし、左足は前へ、体重を落とす。呼吸を整える。テオバルトは一瞬遅れてアルの側を見た。ここまで肉薄されてもまるで焦る気配はない。何事でもない様子だった。

喰らえ！

銀髪の少女の一撃がテオバルトの腹部に襲いかかった。右足で踏み込み、左拳の縦拳を叩きこむ。

リーリアの作戦は単純なことだつた。リーリアとのリンクを切つて、足元にいた銀髪の少女を操り攻撃する。リーリアが動けない以上、それが最大の攻撃力を産むことの出来る手段だつた。

これが成功する確証はなかつた。足で触れ、蘇生し、強化し、操作する。リーリア以外で成功するかはやつてみるまで解らなかつた。アルの構えはフェイントだ。死者の精密操作時に同時にはうまく動けない。構えを取つた状態で後は銀髪の少女に任せることにした。それは成功した。だが、そこまでだつた。

銀髪の少女の左腕はぐちゃりとひしゃげる。最大限の力が込められた攻撃に少女の腕は耐えられなかつた。拳が突き刺さつたはずのテオバルトの腹部には触れることすら出来ていない。触れる直前何かに遮られていた。

一拍おいて少女は吹き飛んだ。さらに一拍後、遠くで激突音がする。全てを込めた全力の一撃がそつくりそのまま跳ね返され少女を打ち据えていた。

アルはそれでも自ら一撃を繰り出した。半歩右足を踏み込み、左拳を叩きこむ。

ガツン、と壁の様なものにぶつかつた。微動だにしない大地を殴

りつけたような感触。テオバルトまでの指一本分程度の距離が絶望的なまでに遠く感じた。それは加えられた攻撃をそのまま反射しアルを吹き飛ばし、意識も同時に消し飛ばしていた。

雨は弱まりつつあった。テオバルトが離れたからか、それとも魔法の効果が切れつつあるのか。

アルはゆっくりと目を開いた。あたりは暗い。既に太陽は沈み、雲の切れ間からは龍の月があたりを照らしていた。

夜空を彩る星以外の天体は、月と呼ばれていた。それらは巨大な生き物の姿で天をゆっくりと移動する。一定周期でその姿を変え、同じ姿でいる期間が一月とされていた。

アルは全身が碎かれたように感じていた。もう動けない。身体は回復すればいいのかもしれないが心が折れた。あんなものにかなうわけがない。

大気を操り、時間を止め、全ての攻撃を跳ね返す。大量の死体を操り、死竜を作り上げ、心臓を直接止める。

勝てるビジョンが全く思い浮かばない。しかもあれはまったく全力ではない。遊んでいただけだ。本気を出されればどれほどのが出来るのか。アルの心を諦めが支配した。

自分が死んでいない理由はわからない。死んだと思われたのか、殺すまでもないと思われたのか。

アルは仰向けのまま天を見る。視界に端に短剣が映った。少し頭を起こして自らの胸部を確認すればそこには短剣が突き立っていた。

きつちり止めを刺したつもりだったか。

その短剣はゆっくりと筋肉の収縮によつて押し戻されていき、やがてカラーンと音を立てて転がつた。

短剣を突き刺し殺したと思ったテオバルトは去つたのだろう。だが、そう大した力で刺したわけでもない短剣は心臓には達していない。

あいつも適當な奴だ。しかし、どんどん人間離れしていくな。この程度では死なないか。

自嘲する。たいした能力だとは思うが、テオバルトを前にしてこんなもの何の役にも立たないと思う。

首を動かしあたりを見回す。月に照らされた広場には誰もいなかつた。あるのは死体の山だけだ。用済みとなつた屍は広場に打ち捨てられていた。

テオバルトも兵士達も勇者もどこかに行つてしまつた。リーリアの姿もない。

自分は生きている。だが、リーリアは再び死に、その骸も奪われた。これはリーリアの思惑通りなのだろうか。自分はこのまま行き続けていいのかとぼんやりと思う。

復讐。何を考えていたのかと思う。あんなものに復讐。笑えてきた。何もわかつていなかつた。あんなものが想定できるわけがない。不可侵、絶対に手を出してはいけない存在だ。それが身にしみてわかつた。

復讐をあきらめ、リーリアも死に、では自分には何が残るというのか？ 今更のんびりと人間の世界を見て回りたいなどとぼぞくというのか？

もう無理だ。何も考えられない。虚無が心を占めていく。自分がゆっくりと壊れていくのを感じていた。

「何を呆けている！」

アルは声の聞こえた方によつくりと目をやった。

血まみれの狼がそこにいた。血は雨に流され足元を真つ赤に染めている。元は灰色なのだろうが、赤ばかりが目につけた。その目は月の光を反射し爛々と輝いている。

まさか、と思つ。だが狼以外には誰もない。

その狼は足元にあつた、アルの右腕を加えると足をひきすりながら近づいてきた。側までやつてくるとその右腕を放り出す。

「お前……どこから……」

「べあくまと呼べ！ リーリア様から頂いた名だ！ お前などと軽々しく言われたくはないわ！」

「いや……お前、喋れたのか？」

「喋れないなどと言つた覚えはない！」

「それはそうだけど……」

アルはますます呆然とした。考へがまとまらない。なぜここにあの狼がいる？ この狼とは街に入る前に分かれた。リーリアの言ったように犬の振りなど出来るわけがないからだ。

「わざわざ持つてきてやつたのだ！ さつさとくつ付けて立ち上がれ！ リーリア様を取り戻しに行くぞ！」

「お前どうした、怪我をしてるのか？」

「あの魔導師にやられたのだ！ 貴様と同じくな！」

「さつきから、なんで怒鳴りっぱなしなんだよ……」

「不甲斐ない貴様に喝を入れてやつているのであるが！」

「どうしろつて言つんだ？ お前も戦つたのんならわかつただろう？」

「あればどうじょうもない」

「貴様！」

「それに今更リーリアを取り戻してどうするんだ。また生き返らせ

るのか？ 本人の意思を無視して、自分の都合のいい用に想いをねじ曲げて」

アルは力なく答えた。唸りを上げる狼を前にして恐れを抱くことすらなかつた。感情が麻痺している。狼が何を言おうと今更関係がないと思つた。

「なるほどな。貴様のおかしな態度はそれが原因か。道中おかしいと思つていたのだ、いいだらう。貴様のその腐れた性根を叩き直してくれるわ」

そう吼えると狼はアルの肩口に噛み付いた。鎖骨のあたりに牙を突き立てる。身動きの取れないアルは苦痛に顔を歪めた。

「何をする！」

「まだわからんのか！ 私は貴様の支配下になどないということだ！ いつでも貴様の寝首をかくことが出来るぞ！ リーリア様も同じ事だ！ お前に支配されてなどいない！ あの方の想いはあの方だけのものだ！ 断じて貴様などにいいようにされたものではないわ！」

狼はアルに噛み付きながら叫んでいた。器用なことだが、元々狼の口で人の言葉が話せるとも思えない。发声器官以外の何かで会話をしているのだろう。

アルはそれをただ黙つて聞いていた。意味がよくわからない。そんなはずはない。生き返らせた者は自然と忠誠を近い支配されるはずだ。アルはそう思つていた。

「……なら何故、お前は僕に従つていた」

「魔獸は元々魔力を操る術を持っている。故に蘇生され自らの魔力

が主により置き換えられていることを自然と悟る。主が死ねば自分も死ぬのだ。そんな状態で逆らつようなものがいると思うのか？

人間であるリーリア様は魔力などまったく感じておられないわ！故に貴様の都合や、欲情など一切がリーリア様に関係がない！

「そんなわけがあるか……僕が試した動物たちは……いや、まさか

……

「あの森にいるのはほとんどが魔獣よ……そこらの脆弱な生き物と一緒にするでないわ！」

狼がアルの肩からその顎を放し顔を上げ、アルを見下ろす。まだ「ちやーちやー言うようなら今度は首筋にかぶりつくつもりだつた。アルは左手を顔を持つて行くと両手を覆つた。

「あはははは、そうか、そういうことか、僕は馬鹿だな、少しは賢いつもりでいたんだが……馬鹿丸出だな」

「貴様が馬鹿なのは最初からわかつてあるわ！」

「……僕はリーリアを侮辱していたんだな……ちやんと謝らないとな……」

リーリアがアルの事を満更でもなく思つてゐることはわかつていた。だが、それは能力の支配下にあるため自然とそのような感情が発生しているものだとばかり思つていた。自作自演の感情になど意味はない。能力を使用して美少女をかしづかせ、好意を向けさせる。こんな惨めなことはないと思つていた。だから距離をおいた。それに流されてしまえば歯止めが効かなくなる。支配者と被支配者という関係などまつぴら御免だと思つていた。

リーリアの顔を思い浮かべる。とても綺麗だ。蘇生し初めて見た時からそう思つた。蘇生時に自らの願望が入り混じつたのかと思つたぐらいだ。

その碧い大きな瞳で真つ直ぐにアルを見て、楽しそうに笑つてい

たのを思い出す。その純粹な眼差しを自分の邪な想いが創り上げたのかと思つと、己の低劣さにたまらなく嫌気が刺した。

だが、そうではないと言つ。あれがリーリア自身の素直な感情の現われだというなら、とても幸せな想いに浸ることが出来る。

「やる気が出てきたよ」

「ふん！ 雄は現金だな！ リーリア様の想いがわかればそれか！」「どうとでもいえ」

まずは回復だ。アルは石畳に転がる自分の右腕を見る。これは死体だ。そう思いながら左手を向ける。左手から黒い影が伸びた。アルの目にはそう見える。なんらかの魔力現象が黒い影のように見えている。影は右腕を包み込んだ。これまで対象となる死体に触れる必要があつたが、少し離れた距離ぐらいなら問題なく能力を行使出来るようになつていた。

右腕がぴくりと動く。右腕は指を器用に動かして這いつてきた。左手で右腕を掴み右肘に押し付ける。死体に対しての蘇生を行つた。切断部の接合が行われ、その腕が死体ではなくなつたと、アルが認識した時点で能力の効果は切れた。

右手を軽く握り、開く。問題ない。

上体を起こす。全身を鈍痛が包んでいたが、動かすには問題なかつた。先ほどまで動けなかつたのは精神的な問題だ。

「おい！ 私も回復させろ！」

「えらそつだな」

アルは治つたばかりの右腕で狼の頭に触れた。足を痛めているようだつたが、その程度はすぐに修復が出来た。

「じゃあ死ににいくか。ベアくま、お前も付き合え」

「無論…」

勝ち目はない。戦えば確實に死ぬ。だが、勝てないことは戦わない理由にならない。死ぬから戦わないなどといふことはありえない。ここで生きながらえてのうのうと余生を送るなど出来るわけがなかった。

リーリアのために死ぬ。本人は嫌がるかもしれない。だが自然とそう思えた。

「死ぬにしても何か手はないか?」

「知るか! この牙を突き立てるだけよ!」

「そんなことだらうと思つたよ、お前、直情っぽいからな」

膝を立てゆつくりと力を入れる。両手を膝において立ち上がった。空を見上げる。月の光と、弱くなつた雨が降り注いでいた。

あたりを見回した。立つて周囲を見回しても様子は変わらなかつた。あたりにあるのは死体だけだ。

「この死体を利用するか?」

そう考へもしたが、先程散々やられたのだ。同じ事を繰り返すだけだらうと思われた。

「これに似た状況を見たな……死体の山と龍の月。あの儀式だ。他には何がいるのか、地面に書いてあつた図がいるのか?」

アルは夢で見た情景を思い出していた。悪魔召喚の儀式。だが、地面に描かれていた円陣の詳細までは覚えていなかつた。

天を見上げる。龍がこちらを見ている気がした。

アルは大声で叫んだ。

「おい！見ているのか！悪魔でも何でもいい！出でこい！」

「どんな代償でも払つてやる！」

「貴様！おかしくなつたのか？何をほざいている！」

「試してみただけだよ。もしかしたら悪魔に伝わるかもしねりない」

「そんなもので呼べれば苦労はないわ！」

「呼びましたか？」

そんな声が背後から聞こえてきた。アルと狼はそろつて振り向いた。

そこには黒衣の大魔王が穏やかな笑みを浮かべて佇んでいた。

悪魔だと言われてもそう信じるしかない。月の明かりに照らされた大魔王は人間離れした美しさを醸し出していた。

ゆつくりとこちらにやつてくる。

「こんばんは、いい天気ですね」

いつもの大魔王だつた。穏やかな口調だ。実際の天気などまるで頼着していない。

大魔王はこの雨の中まるで濡れていなかつた。アルは雨つぶが大魔王にあたる直前に軌道を変えてしまつ所を目の当たりにした。まるで雨粒自信に意思があり、大魔王を汚すのを恐れているかのようになつた。

「大魔王……何しに来た？」

「おや？ 先程呼ばれた気がしたのですが？」

「悪魔なのか？」

「大魔王ですよ？」

大魔王が可愛く小首を傾げる。いつも通り過ぎて調子が狂いそうだった。

「……まあいい、力を貸してくれのか？」

「お父さんは常々「男は死ね！ 女は助ける！」言つている人だつたのですが、リーリアさんが連れていかれた以上助けないわけにも行きませんね」

「なぜ、リーリアが連れて行かれた事を知つてている？」

「見えてましたから」

「なに？」

「あなたが戦つている所を最初から見ていましたよ」

当たり前のようにそう言われて、アルは頭に血が上りそうになつたが抑えた。大魔王には助力するような義理は元々ない。

「ああ、何か誤解されているかもしれませんから言つておきますけどリーリアさんとアルさんの事はお友達だと思つていますよ？ 戦いに横入りしないと言うのが私のポリシーだというだけのことです」「なんだよそれは。魔界の流儀か何かか？」

「魔界にはそんなものはありませんよ？ 横入り、裏切り、不意打ちなんでもあります。このポリシーはお父さんのものですね。私もそれに従っています」

「……今なら助けてくれるのか？」

「ええ、戦いは終わりましたからね。それにリーリアさんをあんな男にいいようにされるわけには行きません！ きっとおっぱいが気についたのですね！ あんなのに触られたらリーリアさんのおっぱ

いが減つてしまします。それは許せません！」

妙な所に力点がおかれている気がしたがそれは無視することにした。

「しかしリーリアは死んでるんだ。それでも助けてくれるのか？」
「死んでませんよ」

「何？」

「よく目を凝らして左手を見てください、うつすらと線のような者が見えませんか？」

そう言われてもよく分からぬ。言われたように左手をじっくりと見てみた。

薄い、とても薄い墨で引かれたような頼りない線が左手から中空へと伸びていた。その線はそのまま広場の端、北門へと続く大通りへと伸びている。

「……これは？」

「魔力肢と呼ばれるものですね。それがリーリアさんに繋がっています。ですのでリーリアさんとの絆はまだ切れていませんよ、ふふつ、愛の力でしょうか」

「恥ずかしいんだよ、大魔王」

「それとおめでとうござります」

「何が？」

「それが見えると言つことは魔力知覚が出来ているということです。魔力を見るのは、魔人への第一歩です。その調子でがんばってください」

のんびりした大魔王の言葉を聞いているとやはりおかしな調子になつてくる。

こんなことをしている場合ではない。リーリアがどちらへ行つたか検討をしようと思っていた所で図らずもその方角を知ることが出来たのだ。速やかに追うべきだつた。

「代償はどうする？ 大魔王に頼みごとをするには何が必要だ？」

「これは借りということにしてくださいませんか？」

「借り？ 貸しじゃないのか？」

「ええ、私がアルさんから借りるのです。アルさんの大事な敵と復讐の機会を私の都合で取つてしまつわけですからね」

「ははは、なんだそれ！ 優しすぎるんじゃないのか？ 大魔王！」

「そうですか？ きまぐれなだけだと思ひますけどね」

大魔王が目を逸らしとぼけるように言つた。素直じやない、アルはそう思つた。友達だと言つたのは本心だつたのだろう。アルが勝てないのは大魔王もわかつてゐるのだ。でもそつは言わなかつた。代わりにやつてやるとも言わない。借りなのだと、アルには不本意だらうが自分がその機会を奪うのだと言つた。

「その借りを僕はどうやつて返してもらえばいいんだ？」

これではただ助けられてゐるだけだと思つたアルは聞いた。借りだとは言つがこれは実質貸しでしかない。

「そうですね。では私でもかなわないような凄い敵があらわれたら、それを代わりに差し上げます。それで貸し借りなしです」

「大魔王の敵つてなんだよ」

「それはもう、物凄い敵ですよ」

「ははつ、わかつたよ。それでいい」

アルは即答した。もしそれがとんでもない敵だつたとしてもその

時は大魔王の代わりに死ねばいい。そう思った。

「では、行きましょうか。あまりのんびりしていると、リーリアさんのおっぱいが減ってしまいます！」

「のんびりしてる原因のほぼ全ては大魔王のせいだと思つけど」「少し急いで行きましょうか。移動に力を使つのはポリシーから外れるのですが、今回はやむを得ませんね」

そう言つとアルの腰を左手で抱いた。右手は猫の子でも掘むように狼の首根っこを持つていて。

大魔王に密着されアルは少し心拍数が上がった。大魔王の柔らかい感触に顔を赤くする。

「さあ！　私のおっぱいを取り返しに行きますよ！」

「あれは僕のだ、お前のじゃない！」

「むう、仕方ないですね……たまには貸してください」

「考えておくよ」

そんな軽口を叩いていたかと思うと、次の瞬間には一人と一匹の姿は広場から消えていた。

雨の止んだ広場には死体の山だけが残つていた。

1-3話 対決（前書き）

拍手でメッセージもらって嬉しくて調子にのって一気に書いてしました。
とりあえず更新します。おかしなとこ見つけたら直すのはいつも通りということです

「ミミの中に、『ミミと見紛うよつなバラックが立ち並んでいる。』の一帯は夜になつても何かしらの人々が蠢いていた。

そこかしこで篝火が焚かれている。その回りに集まり何かを焼いてそれを食すものや、ただふらふらと歩きまわるもの、何かを殴りつけ、切りつけ乱闘を繰り返すものなど様々だ。

ここはベイヤーの北門外、貧民街と化したゴミ捨て場だ。

「ミミの中、雨でぬかるんだ大地を異形の集団が行進している。全身を欠損し、腐らせ、血をしたたらせる歪んだ身体を持つ死者が歩いて行く。

死者たちは一人の少女を数人がかりで掲げていた。

絹のようになめらかな金の髪が垂れ下がり、行進にあわせてさらさらと揺れている。その肌は青白くとても綺麗に見えたが生きているようには見えなかつた。

少女は全身を骨で出来た拘束具に囚われていたが、それがなくとも動くことはないだろつ。

その集団の先頭には黒衣の魔導師、テオバルトがいる。

北側へとやつてきたことにはそれほど意味はない。自らの居城へ帰るつもりだったが、それはここから西側にある。ここで乗り物を調達して移動手段とするつもりだった。

高速移動魔法を使用してもよかつたが、それは一度使用するたびに再契約が必要となる面倒なものだつた。それよりも、北門の外でうろうろしている人間を材料に乗騎を作成するほうがまだ簡単だつた。

テオバルトは拘束されたままの少女を見た。面白い。そう思つ。

従者の少女を倒した一撃は、数千年の時を生きたこの男も思わず見惚れるようなものだつた。

操つっていたのはあの失敗作だつたのかも知れないが、この少女の

美しさはそれを除いてもあるようを感じた。自分が手を加えればさらなる芸術品として美しさを増すだろうと思いこうやつて持つている。

周囲では死んだような目をしたスラムの住人たちが、遠巻きに見ていた。あからさまに怪しい集団を見ても逃げようとはしない。どうでもいいという様子だ。ただそこにいられるのが邪魔なのだろう。こいつらを利用してまた竜でも作るか。飛んでいくのが早いだろうとテオバルトが考えていると、不意に突風が吹き荒れた。

妙な風だつた。それは上空から大地へと吹き降ろしている。

その場にいた者達でその不自然さに気づいた者が天を見上げた。何ががやつて来る。

そう身構えた時それは起きた。大爆発だ。貧民達は天から地をめがけて放たれる巨大な槌を幻視した。そのようなものでしかこの有様はありえない。辻褄が合わない。

耳をつんざくような爆発音と共にそれはバラックを、ゴミの山を根こそぎ吹き飛ばし、大地を抉つた。土と泥が柱のように上方へと吹き上げられ立ち上る。

土砂が雨のように降り注ぐ、その爆発の中心には何かが立つていた。それは抉られ、すり鉢状となつた穴の底からゆっくりと上がつてくる。

その手に少年と狼を抱えた少女、大魔王だつた。

「大丈夫ですか？」

大魔王は、少年と狼を適当に放り出した。べしゃつとぬかるみに落ちる。一人と一匹は不快さに顔をしかめ猛烈に抗議した。

「死ぬかと思ったよ！ なんだあれは！」

「貴様！ 殺す気か！」

「走つてみたのですが？」

「走つてない！ 一歩でここまで飛んでくるのを走るとは言わない！」

「走ると歩くの違いをご存知ですか？ 両足が地面から離れることがあるのを走ると言つのですよ？」

「それぐらい知つてるよ！ その説明からは両足で交互に地面を蹴るつての抜けてるよね！」

アルと狼は何がなんだかわからないうちに瞬時に北門外までやってきていた。ただの人間と狼なら死んでいただろうという急激な負荷をかけられての高速移動だ。

だがアルにはそんなことに拘泥している暇はない。

「リーリア！」

アルがリーリアを見つけて叫ぶ。

「そうです、そうです、まずはリーリアさんですね」

大魔王がふわりと浮いた。軽く跳躍したのだろう。リーリアを担いでいる死者の頭部に降り立つと、リーリアをその手に抱いた。抵抗の様子を見せた死者の腐りかけた腕は簡単に引き千切られる。リーリアを横抱きにした大魔王は、死者の頭を蹴り飛びたつと直ぐにアルの元へと戻ってきた。拍子抜けするほどあつたりとリーリアを奪還している。

大魔王はリーリアをそつとぬかるんだ地面に横たえた。

その間テオバルトは何もしなかつたわけではない。狂嵐の悪魔ゼトによる気圧操作を行い、大魔王に攻撃をしかけていた。だがそれは大魔王になんらダメージを与えてはいない。

テオバルトはさして驚かない。空気を操る魔法は攻撃手段として魔法使いの間で広く普及しているため対抗手段も無数に考案されて

いる。相手がそれなりの魔法使いなら通用しがあると知っているからだ。テオバルトは黒衣の少女をそれなりのレベルの魔法使いだと認識した。

「これは……ただのおっぱい好きの男かと思っていたのですが、なかなかいい趣味をしていますね」

大魔王がリーリア見ている。骨で出来た拘束具は全身を絡めとっている。その骨の隙間から胸が押し出されるように強調されていた。アルはリーリアの傍らにしゃがみ込むと骨の拘束具を外そうと力を込めてみたがびくともしない。

「おい！ これはなんとか出来ないのか？」

「少々惜しいですが、仕方ないです」

そう言つと大魔王はあっさりと拘束具を引き千切つた。ぶちぶちと数力所をちぎり取ると拘束具はぼろぼろと崩れ去る。

アルは呆然と大魔王を見上げた。まるでこよりで出来た紐でもちぎるようだつた。まつたく力をこめているように見えない。

「お前……何者だよ」

「大魔王です」

大魔王が腰に手を当て胸を張る。妙に子供っぽいしぐさだ。

「ああ、そうだな。聞いた僕が馬鹿だつた」

「ではリーリアさんはお任せしますね。私はあちらのお馬鹿さんにお仕置きです。それとも一緒に戦いますか？」

少し考えこんでからアルは言った。

「いや、これはもう大魔王、あんたに貸した戦いだ。まかせる」「まかされました」

大魔王はテオバルトの方へとゆっくりと歩き出した。

「おい、リーリア！」

いつもより青白い顔をしたリーリアを見てアルは焦った。首筋に手をあて鼓動を確かめる。微かに脈動を感じた。口の前に手をやると呼吸が感じられる。アルは胸をなでおろした。

べあくまがリーリアの頬をぺろぺろと慈しむように舐めている。アルに対する威勢のいい態度とはまるで違い、とても心配そうにしている様子だ。

アルは首の後ろに手をやりそっと上体を持ち上げ、頭を自分の太ももの上に置いた。意識を失っている人間をどうしていいかはわからなかつたが、泥だらけの地面に横たえたままというのが可哀想に思えたからだ。

額に手をやりそっと撫でる。冷たかった。触れて直接能力を行使する。大丈夫なはずだ。

「う……」

リーリアが軽く呻いた。そしてゆっくりと目を開く。

「おい！ リーリア！ 僕だ！ わかるか？」

「……え、アル君？」

「そうだ、アルだ！　忘れてないか！」

「忘れるって……なんで？」

アルの心配は、蘇生時にどこまで生前の状態が保持できているか確証が持てていない所にある。今回の場合は、結局リンクは維持できていたようなので問題はなかつたが、再度死んで蘇生させたとなるとそこが不安な点だつた。だがそれは杞憂に終わつた。

「なんか……大げさだね、あれ、ベアくまちやん？」

「わん！」

「お前……いまさら、わん！　はないだろ？」

「黙れガキが！」

「え？　え？　ベアくまちやん？　え？　夢？」

「こいつについては後で説明するよ。身体の調子はどうだ？」「う、うん、別になんともない……と、思う」

「そうか、よかつた」

「私……どうなつたの？」

「あの男に連れていかれそうになつたのを、大魔王が助けてくれた」

「え、パエリアさん？」

「そうだよ」

「そつか……そうだね、大魔王だもんね」

「ああ……その、すまなかつた」

逡巡した末にアルは謝つた。どう切り出していいのかわからなかつた。リーリアの想いとアルの想い、どつまとめればいいのかわからなかつた。とりあえず謝つた。

「え、何が？」

「リーリアを見捨てるような真似をした」

「いいよ、そんな、私なんてもういつ死んだって……」

「そんなことをもう一度と言つな!」

「だ、だつて……私アル君に迷惑かけるじゃない……私がいなかつたらアル君だつてもつと自由に……」

「迷惑なんかじゃない、いつまでだつてリーリアと一緒にいる。そつう言つただろ!」

「でも……それはアル君が責任を感じて……」

そうじゃない。そう言つて思いの丈をぶつけてしまつのは簡単だつたがそれは躊躇われた。今ここで単に口にだして言つた言葉にどれだけの価値があるというのか。

それはこれから行動で示すべきだ。アルはそう思つた。

アルが真つ直ぐにリーリアを見つめた。今までにない真剣な眼差しにリーリアの心拍数が上がつた。じつと見つめられ続け、恥ずかしさで真つ赤になつてしまつ。

リーリアの心臓がますます早鐘を打つよになつてしまつた。

「……これは、まさか、でも、なんかそれっぽいと言つた。この状況がそういう感じつて言つた……。それなりにロマンチックでもあるというか、助けられた囚われのお姫様的というか……。」

リーリアはアルが口を開くのを今かと待ち構えた。これ以上焦らされると早くなりすぎた心臓が逆に止まつてしまつた。ううと思つ

「責任か。確かにそれもある。だから……その責任は果たす。リーリア、君をちゃんと生き返らせる。大魔王とか、大魔導師とか馬鹿げた連中がいるんだ。どこかにそんな手段もきっとある! だから……それまではずっと一緒にだ」

「……なんかビリーリー……」

それはリーリアの期待していたものとは少し違っていた。これでは期限付だということになってしまった。では、無事生き返ればどうなるのか。その先のビジョンがない。落胆に目を細めた。

「え？」

「もつと情熱的な……まあいいや！ わかったよ、ちゃんと生き返らせてね！ それまではずっと一緒になんでしょう？」

「ああ」

「だったら今はそれでいいや！ これからもよろしくね！」

リーリアはまだアルの心の壁のようなものを感じてはいたが、それは随分ともろくなってしまったているようにも感じた。もう一押しでガラガラと崩れ去つてしまいそうだ。それを想像するとなんだか楽しい気分になつた。

リーリアが微笑んで手を伸ばす。アルはその手を取つて握りしめた。

その様子をベアくまは苦々しげに見つめていたが、リーリアが嬉しそうにしているのを見てそれはそれでよいかと思い直した。

「直接挑戦された訳でもないですし、普段ならあなた程度は無視すると思うのですが、今回はアルさんとリーリアさんの事がありますからね。申し訳ありませんが少しお付き合いください」

大魔王はテオバルトの前にやつてきてそう言った。

テオバルトは目の前の敵を推し量る。魔法使いだろうと思う。それならばそこにいる失敗作よりは多少警戒度は上がる。だがそれだ

けだ。魔法使いとしての実力で自分に適うものなどいない。そのことをこの男は数千年の生の中で確信している。

少々思い上がりしている小娘に実力差を見せつける。そう思い軽く手を振った。まずは小手調べだ。

テオバルトの前に炎弾が現われ、高速で大魔王に放たれた。拳大の炎の塊だ。大魔王はそれをなんなく右手で受け止めた。

「これは……何がしたいのでしょうか？ 意味がわからないのですか……これは燐の様なものを地中から集めて発火させ、投げつけたということだと思うんですが？」

大魔王は手の中の炎を不思議そうに見つめる。しげしげと見た後軽く握りつぶすと納得の顔をした。

「ああ、もしかして私を燃やそうとしたのですか？ でもそれならこんな回りくどいことをしなくてもいいんじゃないですか？ こうすればいいだけでしょう？」

大魔王のその言葉と、テオバルトの黒衣が炎を上げて燃え始めたのは同時だ。テオバルトはあくまで冷静だ。警戒レベルをもう少しあげる。思った以上の実力者らしい。

まず発動の瞬間が見えない。これには自分と同じような仕掛けを使用していると推測した。テオバルト自身は魔器を体内に内蔵することで発動手順が外部に悟られないようにしていた。具体的には眼球だ。眼球を魔器と入れ替えている。焦点を合わせる眼の筋肉の力で魔器を操作し、契約悪魔への指示を出している。他にもいくつか体内に予備の魔器も仕込んでいた。なので発動動作が見えないということ自体はテオバルトに取っては意外ではなかつた。この発想にいたる者も少数ながらいることを知っている。

それよりもやっかいなのが、魔術防御を全てすり抜けられたこと

だ。テオバルトは常時様々な防御用の魔法を使用し続けている。それらが全く用をなさなかつた。これも、幾重にも重ねられたそれぞれの魔法を識別し、それぞれに対しての対抗手段を取ることで可能ではあつた。だが、そうなるとこの小娘の魔法使いとしての実力はかなりのものということになる。

テオバルトは黒衣の炎を打ち消した。特殊な炎というわけではなかつたので、単純な延焼制御でそれは可能だ。

「あなた……もしかして今何故燃やされたのかわかつてないんじやないですか？」

大魔王は呆れたように言つた。

テオバルトは少女のその言葉をはつたりと決めつけた。炎を司る悪魔はそれこそ無数に存在する。テオバルトが知らないものもあるだろう、ただ燃やされただけでそこまで警戒する必要はないと考えた。対処出来るなら問題ない。

「その様子だと私から攻撃するとすぐに終わつてしまいそうですね、いいですよ。お好きなようにやつてみてください」

これまでの人生でテオバルトに対してもここまで見下すような物言いをした者は数少ない。契約悪魔数が1000を超えてからの千年では皆無といつていい。

それはテオバルトの逆鱗に触れた。すぐに終わらせるつもりはない。まずは全く抵抗できずに為す術もなく襲われる恐怖を与える。それから数千年練り上げた魔の真髄と言つものを見せつけてやるつと考えた。

時を司る悪魔テテス、その力を行使する。

テオバルトの主觀において全てが停止した。これはテオバルトの切り札もあるし、常用している魔法でもあつた。時間を止める。

その効果は劇的だ。どんな強者であろうとこの魔法を前に太刀打ち出来るはずもない。他の魔法に比べて魔力消費が極端に大きいと言う訳でもないし、ほぼ不老を獲得しているテオバルトに取つて自分が時を重ねてしまうというのは大した問題ではなく気軽に使用できた。

テオバルトは動きを止めた大魔王へとゆっくりと近づいた。特にこの魔法の制限時間はないため焦る必要はない。

大魔王の前までやつてきたテオバルトはじっくりとその美しい顔を眺めた。「い」と言つた状態で口が開いたまま止まつていて。そんな一瞬でさえ美しいというのは驚嘆に値した。

このふざけた小娘をどうしてくれようと、テオバルトは考える。この状態でただ殺すのは簡単だがそれでは気が済まない。たっぷりと恐怖をその身に刻み込まねばならない。

手足をもぐか、眼球を抉るか、内臓を引きずりだすか。それでは駄目だ。単純すぎると考えたテオバルトはまず辱めを与えることに決めた。ゆっくりと己の愚かしさを染みるように教え込みたい。そう思えば肉体に損傷を与えるのは後回しだ。

まず服を剥ぐ。そう決めたテオバルトは大魔王の胸元へと手を伸ばした。

「やつぱりおつぱいが好きなのですか？」

テオバルトの手が止まつた。衝撃を感じていた。これまでの人生で最大の衝撃と言つてもいい。ありえないことが起きていた。ほぼ表情というものを失つているとすら見えたテオバルトの顔が驚きに歪む。

「なんだと？」

そんな単純な一言しか出でこない。

「私の支配した時の止まつた世界で何故貴様が動ける！」

「声を荒らげたことなど記憶の彼方だ。ここまで取り乱せる自分が信じられない。」

「もう言われましても……時間が止まるなんてあるわけないですよ？」

「ふ……ふざけるな！」

激昂した。ただ怒りのままに叫んだ。

「テテスさんもお茶目ですよね。あなたの魔法は、高速思考制御と、流体制御、肉体強化、高速移動による衝撃の中和等の複数の魔法の合わせ技でしかないですよ。そもそも時間が止まつた中であなただけが動けるってどんな理屈なんですか？」

テオバルトは声を失つた。

「私は今、あなたの速度に合わせて動いているだけです。時が止まつたふりというのもめんどくさいですね。間抜けな顔をしたままあなたが近づいてくるのを待つのは嫌な気分でした、こんな顔を見られたらファンが減つてしまふかもしれません。まあテテスさんは時を司るなんて引込み付かないこと言つちやつて後に引けなくなつたんでしょうか？」

テオバルトは一步後ずさる。何も言つ気になれない。

「では、そろそろこんな状態は止めにしましょうか。アルさん達が見ていない前で決着がつくというのもつまらないでしょう？」

時が動き出した。時が止まっているように見えた世界からテオバルトは解放された。

思わず膝をついた。そのまま大魔王を見上げる。

「貴様！ 何者だ！」

「そういえば名乗つていませんでしたか。大魔王、大魔王パエリアと言います。以後お見知りおきを。まあ、以後はないんですけどね」「そんなわけはあるまい……大魔王がエルシアから出てくるなどありえん、大魔王はここ千年以上代替わりなどしていない」

魔族国家エルシアの大魔王。幾度か謁見の機会があつたためその姿には覚えがある。だがそれは、壮年の男の姿をしていた。このような少女とは似ても似つかない。

「ああ、またその話ですか。めんべくさいです。そのうちそつちの大魔王さんとも話をつけないといけませんね。私が大魔王だと言つてるんですからそれでいいじゃないですか」

大魔王は拗ねたように言つた。

テオバルトは立ち上がる。この少女が何を言つているのかわからぬ。それは尽く己の常識に反している。

理解不能だ。ではどうするか？ 己の理解が及ばないような存在なら消してしまはしない。自我を保つにはそうするしかなかつた。狂嵐の悪魔ゼトに再度指示を出す。だが何も起こらない。ここに至つて最初に少女に対して行使した魔法が、防がれたわけではなく、ただ発動しなかつたということに気づいた。

「なぜだ！」

「己の支配下の悪魔がその命令に逆らつたことなど一度もない。何かがおかしい。この少女が現れてから「己」の見ている世界が変質していくようだ。

「ああ、できたら西方系の方を使うのはやめておいたほうがいいですよ。西方の方はまず私に逆らいませんし、こちらが引くくらい従順です。先ほどのテテスさんのように南方系の方がいとと思います。南方の方はいまだに私に逆らつて何かと喧嘩売つてきますからね。喜んで戦ってくれるんじゃないですか？」

「西方？ 南方？ なんのことだかわからない。悪魔をそのように分類する方法など聞いたこともなかつた。」

「なんだかわからないって顔ですね。単純なことですよ？ 魔界では同じような気性の方が集まることが多いですからね。地方ごとに固まっているんです。西とか南とかはそのままです。魔界のどの方面にその方達がおられるかということです」

テオバルトは悪魔との交渉過程で魔界についてもある程度の知識は得ていた。だがこの少女の知識は自分よりもより奥深いと感じる。それは認めることにした。自分が最強に近い存在だと自負はしているが、絶対の存在であるとまで自惚れているわけでもない。

更に警戒度をあげる。ただ未だ相手は何もしてこない。その為その脅威をどの程度と判断すればいいのか、まだ確証がつかめない。だが今までで最強の存在だと仮定することに決めた。

この場で使用できる最大の魔法を考える。大規模な儀式や設備がいらず、即座に発動出来るなかで最強の魔法。一つ思い浮かんだ。

星落とし。

天を彷徨う、小さな星を引きずり落とし敵にぶつける。小さいとはいってもそれは直径1kmを超える質量の塊だ。サイズによつて

威力は増減するが、直撃すれば首都といえども壊滅は間違いない、国ですら危うい。

テオバルトは即座にそれを発動した。人間の営みになど興味はない。この程度の国がどうなると知ったことではなかつた。

テオバルトは大魔王を見た。つまらなさそりにしている。暇を持て余しているようだつた。

「やっぱり魔法なんてつまらないですよ。手が足きたとこどなら終わらせますけどいいですか？」

「その余裕も終わりだ」

テオバルトが無表情で言い放つ。先ほどまでの混乱はなりを潜めていた。最強に類する魔法の発動により勝算を得た。発動さえしてしまえば、後はただの大質量をぶつけるだけの攻撃だ。どれほど魔法を使えようと今更この魔法を止めるることはできない。それは発動したテオバルトにすら無理な話だ。

テオバルトの知る限りこの規模の物理攻撃を防ぐことの出来る魔法は皆無だ。

大魔王が何かに気づいたのか空を見上げた。龍の月と満点の星々。雨雲は既に去り眩しいほどに輝いている。そこに赤い点が一つ現われた。赤熱化した直径10kmの鉱石の塊。×テオ小隕石。それは真っ直ぐに大魔王を目掛けてやってきていた。もちろんその被害は大魔王だけに留まるものではない。周囲一帯が壊滅するのはもちろん、激突時に発生する土砂は大気中に巻き上げられ百年単位で空を覆うだらう。それは陽の光を遮り寒冷の時代をもたらす。

「はあ、なんでこう面倒くさいことをするんでしょうが。人の迷惑を考えてくださいよ」

テオバルトは隕石の直撃の寸前に逃げ去るつもりだつた。この場

にいてはテオバルトといえども無事ではいられない。直接攻撃を反射する魔術もこの規模の質量の直撃には耐えられない。

大魔王はテオバルトなど、どうでもいいようゴミの山を漁り始めた。「こそそとやつていたかと思うと何かを取り出す。

するりと引き出されたそれは金属の塊だった。アイロンストーブと呼ばれるものだ。複数のアイロンを同時に熱するための設備で抱えほどもある。

それを空めがけて投げた。下手投げだ。無造作にひきずるように持っていたアイロンストーブを軽くぶん投げた。一切重さを感じさせない動きだ。大魔王を見ていると、重量や硬度に関する感覚が狂つてくるようだつた。

テオバルトは無意識にそれを目で追つてしまつた。

目視出来るほどの大さになつていた赤熱化した塊は、テオバルトが見ている前で、ふつとその姿を消した。砕かれたのか、弾かれたのかそれはわからなかつた。

「大体ですね、人の力を使って何かしようというのがいただけません。魔法使いなんて言つても自分で何もしていられないじゃないですか？」

大魔王は何事もなかつたかのようにテオバルトに語りかけてきた。

「一々対応するのもめんどくさいので、周りを巻き込むようなのはやめてもらいたいですね。他に私だけに効くような攻撃はないんですか？」

大魔王は本当に面倒くさそうにそう言つた。

テオバルトは空の彼方を見たままだつた。その衝撃は時の止まつた世界で話しかけられた時以上だ。あれはまだ分かる。相手も同じような魔法を使ってきたとすれば、あの状況はありえる。大魔王の悪戯によつて必要以上に驚愕したが今考えれば同じ程度の実力者同

士であればありえたのだ。

だが、これはどうしたことか？ 星を碎いたにせよ、弾いたにせよそれは小隕石の質量に打ち勝ったということだ。それ程の魔法が存在するというのか？ テオバルトにはわからなかつた。心当たりはある。星落としが最強の魔法というわけではない。ただそれには儀式や設備が必要だ。より強力な悪魔を使役する為の準備を必要とする。

少女は特に何をしたようにも見えなかつた。魔法を使つたようにも見えない。ただ何かの塊を投げつけただけだつた。

ここまでくればテオバルトにもわかつた。この少女は常識の埒外、とても今の今まで適う相手ではないということがだ。そう、今まででは。何も諦めたわけではない。負けを認めることなど出来ない。準備が必要だ。一旦仕切り直す必要がある。

テオバルトは大魔王を睨みつける。憤怒の形相。ここまで荒ぶつたことはかつてない。必ずこの少女を躊躇し、跪かせると心に誓つた。

「いいだらう、この場は退いてやる」

忸怩たる思いだ。ここまで打ちのめされ、無様な気分になつたのはいつ以来か。彼とて最初から最強の大魔導師として君臨していたわけではない。魔法使いとして歩み出してすぐの頃は何度も死にそうな目にあい、それを乗り越えてきた。

久しぶりのこの感覚をテオバルトは必要なものだと考えた。最近の退屈とすらいえる日常を思えば気概すら湧いてこようといつものだ。

テオバルトの姿が搔き消えた。使用回数制限があるため使いあぐねていた高速移動魔法。それを使用した。

「え？ おい！ 大魔王！」

ここまで戦っているのかそうでないのかよくわからない経緯を見ていたアルは叫んだ。これは不味い。逃げられてしまえば、今度いつ何時やつてこられるかわからない。これからもその恐怖に怯えながら暮らすことになる。

「まあまあ、アルさん、これは私の戦いなんですから口出しは無用ですよ？」

大魔王はいつものように可憐に笑った。

そこは第一魔族領と呼ばれる地域のすぐ側だ。巨大な城がある。第一魔族領の発生とともに廃棄された元王城だ。

周囲には城下街が広がっている。この城下街の半分程は魔族領の圈内だ。そこには魔族が生息している。

王城のすぐそば、魔族領圏外の城下街はどれほどの年月が経っているのかわからないがどうの昔に朽ち果てていた。

魔族は基本的には魔族領から出てこないとはい、目と鼻の先にある王城については何度も占領を試みていた。

だが、それは一人の人間によつてことごとく退けられた。

大魔導師テオバルト、この男の手によつてだ。現在では魔族とは同盟関係にある。魔族側もこの人間離れした大魔導師と敵対するより協力関係にあつたほうが都合がいいと判断したためだ。元々人間側の立場かどうかも怪しいテオバルトはあつさりと魔族側についた。テオバルトは廃棄されたこの城を居城として使用している。

元々そう大した城でもなかつたが、幾重にも重ねられた魔導的改

良により異形の城と化している。無秩序に増築された城は歪で巨大な姿をしていた。

この城は魔族に対するためにこのよつた姿になつたわけではない。目的は別のところにあつた。テオバルトに敵対する7人の魔女。その襲撃から身を守り、撃退するためだ。その目的は4人の魔女を打ち倒した時点で半ば達成されていた。魔女たちもそれ以来沈黙している。7人で無理だつたものを3人で襲撃したところで結果は目に見えているためだ。

テオバルトはその城の門前に現れた。高速移動魔法はどれほど早かろうが空間転移のようなものではない。建物内には入れなかつた。自らの居城を見上げる。数千年をかけて改良に改良を重ねた伏魔殿。久々にその全機能を稼働させようと考えた。

「面白いですね。こういうの好きですよ。あなたを倒したら私のものということでいいですね？」

まさか、という思いとやはりという思いが半々だ。今日何度目の衝撃か。テオバルトはゆっくりと振り向いた。

大魔王が城を見上げている。天高くそびえる尖塔を追うように見上げていき、そり返りそつになつていて。どこか楽しげだつた。

「貴様……どうやつてここに……」

思つたことがそのまま口に出た。取り繕つことも出来ない。

「知らなかつたんですか？ 大魔王からは逃げられないんですよ？」

大魔王は当たり前のようになつて言つた。

14話 光（前書き）

なにか急にアクセスが増えて戸惑っています。

急に注目されるようになつてから初めての更新ですが、いつも勢いで書いたまま投稿して、後でちょくちょく直すような感じです。誤字脱字等ご指摘いただければありがたいです。今までの分も誤字脱字は山ほどあるんですが、それも2章終わった時点でいろいろ手を入れようと思っていますのでご協力お願いします。

あと、15話も書きました。この後に投稿します。

「逃げられて追いかけてきたというのが正確な所ですが、場所を変えていただけるならありがたいと思いまして便乗してみました。でも、本当に逃さないでおこうと思つたら出来たんですよ?」

テオバルトの形容しがたい表情を非難と捉えたのか、少し言い訳がましく大魔王が言つた。

城門と城壁の間はちょっとした庭園になつてゐる。月の光が異様な庭園を照らし出していた。

草花の類はあまりないがそれなりに手入れが行われてゐる様子が見受けられる。異様なのは庭園の各所に設置された彫像だ。ほとんどが人の姿で苦悶の表情を浮かべていた。生きていた人間をそのまま固めたかのような生々しいオブジェだ。正面から乗り込んで来たものはこの異様な雰囲気に恐れをなすことだろう。

大魔王は見あげるのには飽きたのか庭園を見渡していた。テオバルトは少しずつ後ずさり距離を取ろうとしている。

テオバルトの帰還を察知したのか城が動きを見せた。

この城は土台となつてゐる部分は、古い時代の物で石造りの砦のような武骨なものだ。その上に無秩序に増築された部分がのつてゐる。その増築部分に設置されていた彫像が動き出した。人と蝙蝠を混ぜあわせたような醜悪な容姿の怪物。ガーゴイルと呼ばれる魔導人形だ。それらが一斉に飛び立つと、テオバルトと大魔王の間に降り立つ。

それに呼応するかのよう重厚な木製の城門も内側へと開きだし、中からは全身を甲冑で固めた兵士達が現われた。テオバルトを囲むように布陣する。

ガーゴイルの一体が大魔王に襲いかかる。突進してくると鋭い鉤爪を大魔王の顔目掛けて振り下ろした。

大魔王はその鉤爪を受け止めるが、ガーゴイルをつかんだまま水平になぎ払う。石が碎け散る音が連続して発生し、ほとんどのガーゴイルが破壊されていた。大魔王の右手には、ガーゴイルの肘から先だけが残っている。ガーゴイルの破碎で発生した破片はまわりの彫像をも巻き込んで庭園を瓦礫の山へと変えていた。

テオバルトはそのすきに兵士たちと共に城内へと逃げ去っている。大魔王もそれは見逃した。何かをするためにここまでやつてきたのだろうから、それを見ずにここで決着をつけてしまうのもつまらない。

大魔王はガーゴイルの腕を捨てると城門へとゆっくり歩き出した。

「ちよっとちよっと！」

若い女の声が聞こえた。大魔王はその声の方を見る。城門手前にある一体の彫像からその声はしていた。

「こんばんは」

女の彫像だ。他と比べると穏やかな顔をしており、三角帽子にマントとおどぎ話に出てくるような魔女のような姿だ。

大魔王は丁寧に挨拶をする。

「はい、こんばんは。つていやあ、人と会ったの何年ぶり？ 100年以上ここにいると思うけどめったに人こないからねえ」

「ここで何をされているんですか？」

「見てわかんない？」

「修行？」

「どんな苦行よ、それ。なんで100年以上ここでつづたつてなきゃいけないのよ。あいつよ、あいつ。テオバルトに石にされたの」

「石になりたいとは変わった趣味ですね」

「だから、好きでやつてんじゃないって。あいつがたまに襲つてく
るやつらを石に変えてこの庭に放置してんのよ。悪趣味だよねえ」
「ああ、ではここの彫像はみなさんそういう方ですか？ だとした
ら悪いことをしましたね。大半壊してしまいましたが」

大魔王はあたりを見回した。ガーゴイルをなぎはらつた際にあた
りの彫像も巻き添えを食らつて半壊している。

「大丈夫、大丈夫。私以外はみんな死んでるようなもんだし。私は
魔女だからね。こりやつて何とか意識も保つてるし話ぐらいは出来
るつてわけ」

「そうでしたか。それは退屈そうですね」

「もう死ぬほど退屈だつて！ ああ、それはそつと何しに来たの？
もしかしてテオバルト殺りに来た？」

「多分そうです」

曖昧だがそう答えた。殺すかどうかはまだ決まっていなかつた。

「そつかあ、でもやめといったほうがいいと思つよ？ 私ら魔女7人
がかりでも駄目だつたし。そりや倒してくれるなら私も元に戻れる
し嬉しいけどさあ」

「戻りたいんですか？」

「そりやそうでしょ！ なんでこんなとこでずっと固まつてなきや
いけないのよ！」

「じゃあ戻しましょう」

べたん、と魔女が転げた。

「はあ？」

いきなり地面に顔をぶつけた魔女は何がなんだかわからない。気づけば身体が動く。灰色だつた体が色を取り戻していた。

体を起こし、その場にへたり込んだ。呆然と大魔王を見上げる。手を開け閉めし、肩を回し動きを確認する。特に問題なく何事もないかのように普通に動いた。

「え？ え？ 何が起こつたん？」

「石化していた方とあなたのリンクを切断しました」

「うそ！ そんなんできるの？」

「うそじやないですよ」

魔女は信じられないという顔をしながら立ち上がった。大魔王より頭1つ分背が低い。黒い三角帽子に、黒いマント。本人の申告がなくとも魔女のイメージだ。

「えーと、ありがとう」

「いえいえ、たいしたことはしていませんよ」

魔女は手を差し出した。大魔王はそれを握り返し握手を行つた。

「あんたも魔女？ 私が石になつてる間に増えた？」

「大魔王ですよ」

「うわあ、大きく出たねえ。それがあんたの二つ名？ まあ、私の妖炎の美姫つてのもひどいと思うけどさあ。あ、私はロベルティーネって言うの。よろしくね」

「はい、私はパエリアと言います」

「でさ、テオバルトやるつてマジ？」

「マジ、ですよ」

マジという言い方が気に入つたのか、大魔王はそこに特に力を入

れて言った。

「そつかあ、石化解除とか出来ちゃうんだから行けるのかもねえ。
……よし！ 私も一緒に行くよ！ 中を案内したげる！」

「中をご存じなんですか？」

「まあね。元々この城は3階建てなんだけど、その上に10階分増築されて全部で13階。で、まあ10階ぐらいまでは攻め込んだかな」

「そう言えば7人おられるとか聞きましたが」

「そうそう、7人でね。何回も襲撃かけたんだけどね。何百年前だつたかにかなり本気で攻め込んだのよ。その時に10階まで行つたんだけどさ、3人やられちゃつたの。で、3人はそれ見て逃げちゃつた。で！ 私はそれでもやられた3人を見捨てられなくて、孤軍奮闘、獅子奮迅の活躍を……つて、おーい、一人で勝手に行くなあ。あんたが聞いたんだろうが！」

大魔王は一人、城門へと歩いていた。
ロベルティーネがその後を慌てて追う。

「ああ、話が長そうでしたので」
「いやいや、ちゃんと聞いてよ」

「それでそのやられた3人の方はどうされたんですか？ この庭におられるんですか？」

「さあねえ。ここにはいない見たい。まあ、あいつらは、むちむちつ！ つて感じだったし、なんかエロいことでもされてんじゃないの？」

大魔王がロベルティーネを見る。平坦な体だ。憐れみの表情を浮かべそつとロベルティーネの肩に手を置いた。

「大丈夫です。そのうちあなたもエロいことをされるようになります」

「されたくないって。つか、私の身体はずつとこんな感じだよ！」

憐れむな！同情すんな！」

そんな会話を繰り広げながら一人は城内へと足を踏み入れた。

ロベルティースが言つようこそ階までは石造りの古式の城の作りで特に何事もなかった。

4階への階段。その前に一人はいる。

「エリからが本番でわけよ。あいつの悪趣味なテーマパークつてやつ？」

そんな説明を聞いているのかいないのか、大魔王はあつさりと4階へと登つた。

4階からは周囲の雰囲気が一変している。床や壁が黒く艶やかだ。天井も高く通路も広い。

「この階はここを真つすぐ行くと広間になつてゐるぐらいかな。そこに敵さんがわんさかいるつて感じ」

「そうですか。では行きましょつか」

二人は長い通路を歩き出した。通路には一定間隔で明かりが灯つてゐる。窓はないがそれなりの明るさが保たれていた。

やがてロベルティースが言つところの広間に出了る。

そこにいたのは巨人だつた。巨大な金属の塊。2階建ての民家ぐらいの背丈がある。それが10体以上。広間を埋め尽くしてゐる。

「こりや凄いねえ。あいつも本気じゃん。アイアンゴーレム？ いや鉄じゃないのかな？ 光沢があるよくな」

「この方たちはずっとここにいるのでしょうか？ あんなにいると立つたりしゃがんだりぐらいしかできないんじゃないですか？」

「別に意思とかはないんじゃないの？ 入ってきた敵に襲いかかるぐらいで、つて言つてるそばから入つてかないで！」

大魔王が広間に足を踏み入れた途端、巨大な拳が振り下ろされた。その影は大魔王をすっかり覆うほどの大さだ。ロベルティースは惨劇の予感に思わず目を閉じた。

だがその後に訪れると予想した床に叩きつけられる轟音は聞こえてこない。ゆっくりと目を開くと片手を上げ、巨大な拳を抑えている大魔王の姿があつた。

「へ？」

ロベルティースは間抜けな声を出した。だがただ見ているだけでは案内を勝手出た意味もない。ロベルティースは叫んだ。

「ゴーレムの弱点は額の文字！ それを削るの！」

「そうですか」

大魔王の手がゴーレムの中指にみしりとめり込む。掴むには巨大だつたので、適当に持ち手を作つた状態だ。それをそのまま振り回した。庭園でガーゴイルに対してやつたのと同じだ。ただ規模が違つた。

鉱石で出来たゴーレム達が次々と黒光りする壁に激突する。それ

は壁とゴーレム双方にダメージを与えた。ゴーレムは半壊し、壁は砕け外の光景が見えた。

大魔王は倒れ動かなくなつたゴーレムの頭へと近づき額の文字を確認する。掌を当て真下へと力を込めた。ゴーレムの頭部が粉微塵になりその動きを完全に停止する。

「おお！ 確かに止まりましたよ！ 面白いですね！」

大魔王がはしゃいでいる。ロベルティースは呆れたようにそれを見つつ言つた。

「ああ、いや、それ削るとかじやなくてただ壊してるだけだと思つ……」

その後もただ大魔王がゴーレムを壊していくのをロベルティースは見続けた。人形遊び。そう思えた。それもまま」とに乱入してきた弟のような所業に思えた。

ひと通り壊し終えた大魔王は広間の奥へと向かうと5階への階段を登り始めた。ロベルティースもそれに続く。

「5階以降は迷路つて感じかな。て、おおい、先進まないでよ、もう！」

大魔王は進んだ先で高速で飛来する髑髏を蹴り返していた。カタカタと口を開きながら、着弾の際に哀れな獲物の肉を噛み千切つてやろうとするその異様な弾丸は大魔王の蹴りと手刀に粉碎されて行く。いくつかはその軌道を替え、壁、床、天井に激突していた。

廊下の端にある砲台からそれは発射されている。それを操るのは骸骨の兵士たち。自らの頭部を砲台に込め次々と発射していく。

やがて全弾を撃ち尽くした砲台は沈黙した。骸骨の兵士たちはそ

れ以外のことは出来ないのか、首のない状態でただ、たたずんでいた。

大魔王は前方を見た。砲台のある通路の端までの間には十字路が數十ある。迷路になつていてどうことだらけ。どこを行けばいいのか。それはまるでわからない。

大魔王は腕を組み、あごに手をやつた。何か考えているらしい。少しして考えがまとまつたのか、その右手を上げ掌を上へと向けていた。

ロベルティースは嫌な予感に叫んだ。

「ストーッپ！ ねえ、今何しようとしてんの？」

「迷路とかめんどくわやつなので、もひにじから上、全部吹き飛ばそうかと思いまして」

「やめてえ！ それはやめて、お願ひ！」

ロベルティースは大魔王にすがりついた。それはまことに。とても困る。

「どうですか。何かすごく必死な感じなのでやめよつかとは思いますが、何か理由があるのですか？」

「神獣！ もふもふ！ 私らがテオバルトと争つてたのは神獣のせいなの。それ奪い合つてんの！」

「なるほど。その方が上層階にいらっしゃると？」

「そう、そうなの！だから全部吹つ飛ばすとかそーゆーのはやめて！ 迷路の抜け方は知つてるから！ ちゃんと案内するから！」

「わかりました。もふもふにはあまり興味がないんですが、何か大事そうなのでやめておきます」

ロベルティースはほつと胸をなで下ろす。何をする気かはわからなかつたが、このまま放つておいたらその言葉どおりになつっていた

のだろう。

「「「ひち。ついてきて」

ロベルティーヌが先導する。言つようく迷路の構造は把握しているらしい。以前に辿りついた10階層以上も下調べはしていたらしい。迷いなく進み1-3階層、最上階へと辿りついた。途中、敵や罠は幾度か現われたのだが、鎧袖一触を文字通りに体現する大魔王の前には何の障害にもなつていなかつた。

ただそんな事はテオバルト側もわかつっていた。彼らがやつていたのは時間稼ぎ。大規模な儀式が完成するまでに少しでも足止めになればいいというものだつた。そしてその心もとない目論見は辛うじて達成された。儀式は成功したのだ。

ロベルティーヌは1-3階層へと辿りついた時、満天の星空と龍の月の明るさに屋外へ出てきたのかと勘違ひした。

最上階はほとんど何も無い巨大な空間だつた。空はよく見れば微妙ながら星明りに歪みを感じることが出来る。ガラス状の物質で天井全体が構築されていた。複雑な面で構成された円蓋は星々と月の光を一点に集め、巨大な円陣の中心を照らしている。

その円陣の中心、その一身に光を浴びてテオバルトは立つていた。テオバルトの表情には余裕がまるでない。鬼気迫るものだつた。

その右目は眼窩を晒している。魔器である眼球は抉り取られていた。

「気づかれたのですか？」

大魔王が床に捨て去られた眼珠を見て訊ねた。他にもいくつか血糊のベツタリとついた拳大の石のようなものも見受けられた。これらは全て魔器だ。

「そうだ。貴様……魔器に接続できるのだな」

「はい。というかあなたを初めて見た時びっくりしました。ここまで脆弱性をむき出しにしてこれまで生きてこられたとは驚きです。そのままでしたら、自決してください、とでも命令するつもりでしたが」

魔器を通じて悪魔へ指示を出す。魔法の基本だ。その際当然、悪魔側は魔器へと接続しその指示を受け取っている。当然それが魔法防御などで妨害されるわけがない。体内に内蔵してしまつたら尚更だ。大魔王はその経路を通じて安々と魔力をテオバルトへと行使することができた。

「……悪魔か。肉体をもつたまま人間界に現れるなどとは……それとも傀儡か？」

「傀儡扱いは心外ですね。これは生身の私自身の身体ですよ？」

テオバルトは杖を両手で構え前方へと突き出した。魔法使いとして最初期から使い続けていた最後に残された魔器だ。

詠唱が始まった。テオバルト自身が呪文を唱えたのはいつ以来か。それは巨大な空間に朗々と響き渡った。

「ち、ちょっとヤバイよ！ あれ止めないと… つか私どうしたらいいの？」

「側にいてもらひでかまいませんよ？」

ロベルティースが大魔王に食つてかかる。

「いやいや、そんなのんきにしてる場合じゃないって！ あれマズイよ？ あれは魔界の3魔王、炎王ザミニ、蛇王バグラス、雷王ゾネの力を一気に開放するつもりなの！ 魔王って言つても魔族領にいるようなのじゃないよ？ 魔界の本物の魔王の力！ あいつ、魔王と契約してんの！ マジ化物なんだって！」

「魔王ですか？」

「そう！ 魔王と契約できたのは人間ではあいつだけ！ あんた一体なにやつてあいつあそこまで怒らせてんの！ 一体の力でもここら一帯、更地になっちゃうよ！ 3体同時なら大陸が消し飛ぶかも！」

「それは困りますね」

全く困つていそには見えなかつた。いや、困つていると言えば困つているのだが、その表情があまりに場違いだつたためロベルティースは呆然とした。大魔王は恥じらいの表情を浮かべていた。

「ちょ、ちょっと！ あんた何照れてんの！ なにも褒めてないよ！」

「うーん、これは……あの方も中々やりますね。最後に私に一矢報いることが出来たということでしょうか？」

「はあ？ 意味分かんないんだけど！」

「まあまあ、もうすぐ終わるみたいですから」

テオバルトの詠唱が終わつた。

何も起こらなかつた。

大魔王以外の二人はその結果に言葉もでない。この詠唱は暗号化されていない。これはテオバルトのみが契約している悪魔に対してのものためわざわざそんなことをする必要がなく、妨害出来る魔法も知られていないためだ。

それ故ロベルティーヌは魔法の詳細を把握出来た。意味のわからない単語も多いが、それらは定型文として大体パターンが決まっている。どのような結果が現出するかがありありと想像が出来た。詠唱に間違いはなく、儀式の手順や円陣の構築にも不備は見られない。発動しないわけがなかつた。

テオバルトはその場にくずれ落ちた。膝をつき、うつむいている。

「なぜだ？」

そこには感情は見られなかつた。ただつぶやいたと言つだけだ。

「褒め殺しというのは中々効きますね。すごく恥ずかしい感じですよ、なにかむずがゆいものを感じました。さすがこんなお城を持っているだけのことありますね。あなたお名前はなんと言いましたっけ？」

テオバルトは答えない。一向に応える気配がなかつたため大魔王はロベルティーヌを見た。

「え？ あんたこいつの名前知らなかつたの？ テオバルトってんだけど」

「ああ確かにそう呼ばれていましたね」

大魔王はテオバルトの名前を思い出した。今までの会話で出てきたような気がした。

「テオバルトさん、何か納得がいかないといった様子ですね」

テオバルトは応えない。いまだ自らの内に潜り込んでいる。

「私の名前は、パエリアと自己紹介させて頂きましたが、本名はもつと長いんです。パエリア・グンネル・ガンボア・マカレナ・ショブローム・スタゴリア……と、まあ全部言つと大変ですので端折りますが、前から513番目がザミイで、634番目がバグラス、713番目がゾネと言います……お分かりですか？」

テオバルトにはわからない。聞こえてはいたが意味がよく理解出来ない。

「魔界には名前について人間とはまた違つ慣習がありまして、倒した相手の名前が後ろについていくんです。ですのであなたは先程から、私に魔法の使用許可を取つていたという次第です。しかしあそこまで持ちあげなくてもいいんじゃないですか？」さすがに恥ずかしくなつてきました。ゾネさんは女は褒められて美しくなるとおつしゃつてましたけど……」

テオバルトがのろのろと顔をあげ大魔王を見た。一気に老け込んだようにも見える。

「普段は魔王への魔術行使の依頼はそれぞれに委託しているので私は関係ないんですが、の方達今回は何か面白がつて私に中継してきました。あなたやつぱりおつぱりに並々ならぬ愛情を注いでるんでしょうか。なにか私の胸の美しさをこれでもかと讃えておられましたが」

「ふ、ふざけるな！」「この私が！4千年を生きたこの私が！魔の真髓を極めたこの私が！貴様などに！貴様などに！」

「4千年ですか。私は十数年しか生きていませんが……あなたが4千年頑張つてこの程度ということでしたら随分と無駄な時をお過ごしになつたんですね」

大魔王が優しく微笑む。ロベルティーヌはそれを見て随分とえげつないと思った。ここまで短い道中、のんびりとやつてきたがさすがに大魔王を名乗るだけのことはあると思った。

この言葉は大魔王の思惑通りに、テオバルトの心を折った。

「さて、これ以上何か出でくることはないですよね？ でしたら……どうします？ 人間はあまり殺さないようにしているんです。でも今回はアルさんの件がありますからね、今後手を出せないようにはさせてもらいますけど。ふふふ、大魔王の呪い。受けてみます？」

「殺せ」

それがテオバルトの最後の矜持だった。このままおめおめと生き永らえることなど出来なかつた。この先何千年生きようとこの存在にはかなわない。それが身にしみてわかつた。

「……お前は……結局魔法らしい魔法を見せなかつたな。ならば……」

「魔法が見たいですか？ そうですね。では私のお気に入りの魔法をお見せしましょう」

大魔王がテオバルトのそばに寄ると襟元を掴んだ。

「ちょっと地上で使うには不向きなのでこんなやり方になりますが」

大魔王がテオバルトを真上に向けて投げた。

テオバルトがプリズムとなつてている円蓋を突き破りはるか彼方へと飛翔していく。砕かれた破片が星明りを反射しキラキラと輝いていた。

ロベルティーヌは今までの確執を忘れ宙を行くテオバルトを美しいとすら思った。

空を飛び続けたテオバルトは少しづつその速度を落としやがて静止した。そこから先は重力に引かれ下降に転じる。

大魔王が空を見上げ、右手を掌を上にして上げる。

「光子魚雷」
フォトントウビーム

大魔王がつぶやくよに言つ。光が立ち上つた。

大魔王の手から生み出されたその熱量は収束し、天を駆ける。その光は直線上のガラスを大気を焼き尽くしついでのようにテオバルトを消滅させた。

ロベルティースはただ空を見上げあつけにとられている。気のせいだとは思うが龍の月の腕が欠けているように見えた。龍が身をよじつている様に見えるのは気のせいだと思いたい。

「名前がお気に入りなのです。トウで入った気合がピードで抜けるような感じがいいと思いませんか？」

「……えーと、大魔王……さんでしたっけ？」

「はい」

「今は一体……」

「もう少し派手な方がよかつたでしょつか？ 1k^g程、重水素を対消滅させるというお手軽な技だつたんですが」

「ジュウスイソ？ ツイシヨウメツ？ それは魔界語でござりますでしょ？ 大魔王様」

「そうですね。魔界でも一部地方で使われる言葉ですね。とにかく話し方が違うような気がするんですが」

大魔王が小首をかしげる。ロベルティースは慌てて両手を前にだし振りながら答えた。

「いえいえ、めつそつもございません」

「そうですか？ ところでお仲間やもふもふの方は探さなくていいんですか？」

「あー」

「ここの階には何もなさそうですから、下の階でしょうか」

テオバルトの消滅により、城は全機能を停止していた。その為探索は簡単だったが魔女は見つからなかつた。

「まあ、魔女つつてもさ、別にそんなにつるんでるつてわけでもないのよ。普段はそんなに交流もないしねえ。でも、なんかさみんな神獣好きみたいなのよ、で、テオバルトにさらわれた神獣を助けるために一致団結したつてわけ。だからまあ、見つからないならそれはそれで仕方ないね」

結局ロベルティーヌの話し方は元に戻つていた。取り繕つていてもすぐに地が出る性質らしい。

「で、この子よ。この子」

ひよこだつた。背丈がロベルティーヌと同じぐらいの巨大ひよこだつた。

「ひよー。」

神獣は大きめの部屋を与えられそこでなに不自由なく暮らしていらっしゃい。特に虐待されていた様子はなかつた。

ひよこに家具は必要ないのだろう。端に机があいてある以外にはなにもない部屋だつた。

ロベルティーヌはひよこに飛びつくと羽毛に顔をうずめ頬ずりする。ひよこもおとなしいものでされるがままになつていて。人なつ

っこい性格らしい。

大魔王は机の上にあるものが気になつたのでそれを手にした。
ひよちゃん観察日記と書いてある田子だ。ひよちゃんと名付けられていたらしい。ぱらぱらとめくつてみる。

絵日記のようだつた。子供の字と絵で小さな女の子がひよこと戯れる様子がそこにはつづられていた。

ひと通り田を通すと絵日記を机の上に戻しひよこを見た。そこには絵日記に書かれていたような光景がロベルティースにより再現されていた。

「美味しそうですね」

「あやーやめてーー！」の子は食べ物じゃないーー。」

ロベルティースは食材を見る田の大魔王と、神獣の間に両手を大きく開いて立ちはだかつた。

「ふふつ、冗談です。ひよこは食べませんよ。……といひゆうの方は、成長すると大きな鶏になるんでしょうか？」

ロベルティースは大魔王の田を覗き込む。

「これは……鶏になつたら食べたいなあ、という田だ！」

「ううんー。この子はずつといのまんま！ 神獣だからねー。」

成長するといづなるかなぞ知らなかつたがでまかせを言つた。

「そうですか」

大魔王が残念そうな表情を浮かべた。諦めたらしい。

「では私は帰ることになります。あなたはどうされるんですか？」

「うーん、とりあえずしばらくはここにようつかと思うんだけど……100年以上経っちゃってるし、今更つまに帰つてもねえ。あ、ここひで大魔王さんのものつてことになるの？」

「やうなりますね。でも別にここにいてもらつても構いませんよ。とこひで……ここからベイヤーに帰るにはどちらに行けばいいですか？」

ロベルティースは大魔王が飛んでやつてくるのを見ていたので、てっきり同じように飛んでいくのかと思つたがなにかこだわりがあるらしい。

大魔王はマテウ国の西の端から1週間以上をかけて徒步で帰つた。

15話 その後（前書き）

14話もほぼ同時に更新しています。ご注意ください。

キャシー宅の裏庭。アルは日課となつている練習を早朝から行なつていた。

すでにゴミの山は片付いている
テオバルトの襲撃から一週間程が過ぎた。街は平穏を取り戻している。

アル達はあれからひどいありさまでキャシー宅へと戻つたが、ゴミ捨てるだけで時間かかりすぎじゃないか？ と軽く嫌味を言われただけだった。

一週間をかけてキャシー宅の掃除を行い完了させた。仕事は終了している。だが旅立つまでいていいといわれその好意に甘えていた。

「おはようございます」

大魔王があらわれた。

「おはよう。ここでまた会えると思つてたよ」

アルが練習をやめ挨拶を返す。

「心配はしてくれなかつたんですね？ もしかしたらもう二度と会えなかつたのかもしませんよ」

「ないだろ。それは。あいつはどうなつた？」

「消滅しました」

アルは聞いてはみたものの特になんとも思わなかつた。もつと消失のようなものが生まれるかと思っていたが、出てきたのは「そうか」ぐらいのそつけないものだつた。

あまりに自分に関係ない所で話が進んでいたせいかもしれない。

「ありがとう」「

「お礼を言われるのはおかしいですよ？ 借りだと言つたはずですか？」

「ああ、そうだね。いつか返してもらいつよ」

そんな時がくるのか？ とも思つ。大魔王をじつと見た。この大魔王が苦戦するような敵。想像が出来なかつた。

「体で返せとおっしゃるんですか？」

アルの視線をどうとらえたのか大魔王がみずからを抱きしめ後ずさつた。冗談だらうが、アルは少しどきっとした。

リーリアを見慣れたせいかそう思わなかつたが、意外に大魔王も胸あるな……。

アルは周囲を見渡した。こういつ時にリーリアがやつてきそうな気がした。

「何かおさがしで？」

「いや、なんでもない」

あらためて大魔王を見る。確かに美しいがそれほど強いようにはまるで見えない。だがテオバルトを終始圧倒していたし消滅させたという。その底しぬなさに寒気がするような思いもあるが、それならばと聞いてみた。

「なあ大魔王。リーリアが不完全な状態で生きているのはわかつて

ると思うんだけどなんとか元に戻す方法はないか?」

大魔王は常識外の力を持つている。ならば何か知っているかもしないし、あわよくば大魔王の力で元に戻すことが出来るかもしない。

「リーリアさんですか? ……私では無理ですね。方法もわかりません。私の力は破壊一邊倒ですし、怪我を治してくれる方にも心あたりはあります。死んでしまってはいるが無理です」

「そうか、それは自分で探すことにするよ」

「お役に立てなくて申し訳ありません」

大魔王でも無理となると厳しいのか? とも思うが世の中は広い。何があるかもしないと前向きに考えることにした。
旅に出てその何かを探す。アルの当面の目標だ。

「大魔王、魔法を教えてくれないか?」

リーリアを元に戻す方法として考えたうちの一つがアルの能力の成長だ。それにより可能になるかも知れない。自分の能力が魔法のようなものだとわかつて来たが詳細はわかつていない。

大魔王を名乗るぐらいだ。魔法には詳しいんじゃないかと思いたずねてみた。

「それは正しいとも間違っているとも言えますね」

「どういう意味だ?」

「正しいというのは、私は魔界で最強ですから当然魔法も最強なのです。ですので私から教わるというのは最強へ近づくには良い手だと思います」

臆面も無く最強と言つてのけた。

「間違いといつのは、アルさんではまだ無理だといつ」

「無理？」

「そうですね、実際に見せしましょ」

大魔王の腕が肩口から一つ増えた。黒い腕だ。それはアルの魔術視覚野に映し出された。

「これが魔力肢です。今のアルさんには見えていると思いますが」

「ああ」

その黒い腕が伸び、庭に落ちてある石をひとつ取り上げた。はたから見れば、石が浮いているように見えるだろう。

「魔力肢は対象の構成要素を分析し状態を変化させます。このように

石が崩れ落ち跡形もなくなつた。

「アルさんもやってみてください」

「僕がか？ まあやってみるよ」

説明の一環として意味があるのでと思い従つことにした。右手で落ちている石を拾い、左手から大魔王がいうところの魔力肢を出す。それ自体は一度出来ていたので簡単に出来た。だがそれは随分と貧弱なものに見えた。腕などといえる程のものでもない。黒い糸のようなものだった。それを石に伸ばす。そこでアルはどうしていいかわからなくなつた。

「どうです？魔力肢が触れた物質の状態がわかりますか？」

「わからない……何がある。ぐらいしか」

「それが解像度、粒度の違いですね。物質のもつと細かい単位で操
作出来ないと魔法は無理です。ああ、落ち込まないでくださいね。
そのうち出来るようになると思いますよ」

アルにはまるでイメージが出来なかつたが、出来るようになると
言われたのでそういうものかと思つた。

「それだけだと私が意地悪言つてるだけみたいですね。ではいいこ
とを教えてあげましょう！」

大魔王がそのいいことを思いついたのか、いい笑顔でアルを見た。

「今のアルさんには細かな魔力操作は無理です。ですが、それで敵
の魔法を妨害することが可能ですよ」

「どういうことだ？」

「アルさんの魔力肢を敵の魔力にぶつけて適当に魔力を発動させれ
ばいいのです。細かな操作はいりません。相手の魔法をぐちゃぐち
やにしてしまえばいいのです。それだけで相手は魔法を使えなくな
ります」

「そんなことでいいのか？」

「ええ、人間で魔力肢を使える方は少ないでしょうから、魔法使い
相手なら無敵ですよ！ よかつたですね！」

「なるほど、使い勝手がよさそうだ。練習してみるよ」

「頑張ってください。熟練するには実践あるのみです」

テオバルトがどうなつたか、その結果を伝えにくるのが目的だつ
た大魔王はアルの質問が終わつたとみると去つていつた。
残されたアルは練習を再開した。

「あはははははは！」

キャシーの笑い声が朝の食堂に響き渡る。掃除は完了して、ゴミの山は片付いたため、食事には食堂が使われていた。
アルのしかめつ面がツボに嵌つたらしく。

「なぜお前らがここにいるー！」

練習を終え朝食を食べにアルは食堂にやってきた。
アルは食卓を見ている。一人暮らしにしては大きめだ。来客を想定しているのだろう。

そこには、リーリア、狼、銀髪の少女、キャシーが座っている。

「なんでしょうか、にいさん」

「にいさん！ なんだそれは、いや、待て！ お前と僕は血縁関係にあつたのか？」

「そんなわけないじゃないですか」

銀髪の少女が馬鹿を見るような目でアルを見た。

「じゃあ、なにが、にいさんだ！」

「これはおかしいことを。にいさん、あなたは血縁関係どころか種族すら違う魔族の母親をかあさんと呼んでいたのではありませんか？ それならば、テオバルト様の実験体であるあなたと私を兄妹ととらえることになんの問題があるというのでしょうか？」

反論できない。いや、だからどうだといつよくな問題だ。アルは矛先を変えた。

「おい、狼！お前がなんで食卓で、椅子に座つてる！」

「私が主人であるリーリア様のそばにいることの何がおかしい！」

「じゃなくて、床でいいだろ！なんで椅子に座つてご飯食べてるんだ！」

「なぜ私がお前より、下で食事をせねばならんのだ！」

アルはリーリアを見た。ビリしていいかわからない。想定外だ。なんだこれば。

「えーと、この子もあの魔法使いに無理強いされてただけで悪い子じゃないと思うんだけど……。べアくまちゃんもおとなしくしてるし……」

「おとなしい？これがか？というか、リーリアが主人てのはどういうことだ？主人は僕じゃないのか？」

「貴様、ふざけているのか！私はリーリア様に名をいただいた。それ故リーリア様が主だ。貴様などただの魔力の供給源にしか過ぎん！」

アルは途方にくれてキャシーを見た。

「どうこいつとなんですか？」

「どうもこいつも……、アル君の妹だという娘と、リーリアちゃんの下僕だというのがやつてきたんだ。歓待するだらうへ。」「しなくていいですよ」

アルはつづたつていても仕方が無いので食卓の席についた。頭が

痛い。念の為と、魔力視覚野を発動する。3本の黒い線が自分から、リーリア、銀髪の少女、狼に伸びていた。ため息をついた。既に問題はリーリアだけの事ではなくなっていた。

「お前、どうやってここに来たんだ?」

狼はわかる。嗅覚が発達して、いそだし匂いをたどつて来たのだろ。

「にいさんは馬鹿なんですか? 私には魔力が見えるんですよ? これを辿つてきたにきまつていてるでしょう?」

銀髪の少女の瞳が赤くなり、アルから伸びている頬りない魔力肢を指さした。

「なにしに来た?」

「はあ……にいさん、あなたは私にもう一度死ねと。そうおっしゃるんですか? 隨分と冷たいんですね。こちらの巨乳には隨分と甘いようですが、私のようなものはどうでもいいですか。そうですね、流石になんのためらいもなく私のような幼い少女の心臓をうちぬくだけのことはありますね。おまけにテオバルト様に突っ込まれて……おかげさまで、動けるようになるのに今までかかりました。ところでこの左腕は修復してもらえるんでしょうか? 利き腕ではないとはいえますが、これはこれから活動に支障をきたすと思つのですが」

そう言わると辛い。確かにあの時は敵対していたが、こいつやってただ会話をしていると、ただの美少女だ。罪悪感に襲われる。

その姿をよく見てみると、銀髪の少女。前髪は真っ直ぐに切られている。自分で切つたのだろうか、処理が適当だ。後ろ髪などはもつ

と適当で肩のあたりでざくざくと鍔を入れただけのようだった。

格好はボロ布を巻きつけただけのような姿で、ちょっと前のリーリアを彷彿とさせる。

左腕はそのボロ布が巻きつけたが捻くれたままで痛々しい様子だ。

アルの少女を見る視線に気づいたのか、キヤシーが答えた。

「ああ、流石に子供物の服はなくてな。すぐに用意は出来ない。後で買って来てやつたらどうだ?」

「髪は私が切つてあげるよ、これ自分で切つたの?」

「余計なお世話です。服は着てあげてもいいです。にいさんなら妹にプレゼントぐらこするでしょ?」

銀髪の少女はリーリアは一言で切つてすて、アルに向き直る。上から田線でたかる気満々だった。

「えーっと、アルくーん?」

リーリアが情けない顔でアルを見た。アルは首を横にふる。諦めた。受け入れるしかない。受け入れないならそれは殺すといつことだ。こうやって話をしてしまった上で今更それは出来ない。

アルは右手を少女の左腕にそっと添えた。しばらくすると少女の左腕は元のように動くようになった。

「おお、そりやすい。信じていなかつたが田の当たりこするとな

キヤシーがその様子を見て感嘆の声を上げた。

「お前、名前は?」

「ありませんよ」

「は？」

「テオバルト様には、お前としか呼ばれていません。あなたもさつきからそう呼んでいるんです。それでいいんじゃないですか？」

「あ、いや……それは悪かつたよ。じゃあ何かないのか？ 自分で付けるとか」

「そうですね、では……にいさんがアルですのでイルでいいです」「適当すぎるだろ？」

「あ、だつたら私が！」

リーリアが元気よく手を上げた。

「リーリア……君がつけるのだけは勘弁してくれ。いくらこんな奴でもそれは可哀想だ」

リーリアが慄然とした顔をした。納得がいかないらしい。アルは一応聞いてみた。

「ちなみにどんな名前だ？」

「さるモンキー」

「いくらなんでもひどすぎるー。」

アルとキャシーが珍しく同時に突っ込んだ。銀髪の少女も恐ろしいものを見る目でリーリアを見ている。ベアくまは特に疑問には思わなかつたようだ。べるべると水のはいつた皿をなめていた。

「」なんのん気な顔をしながら、さりげなく私を人間扱いしないとは……若干この方に対する認識をあらためないといけませんね……」「あー、リーリアにそんなつもりは全くない。ネーミングセンスが壊滅的なだけだ」

「えー、 そつかなー」

リーリアはやはり納得がいかない様子だ。

「しかしなんだな。人が多いと食事も楽しいもんだな」

キャシーが楽しげに言つ。

「全然楽しくないですよー」

「そうか？ 一人の食事など味氣ないものだぞ？」

「それはそつかもせんが……」

アルは口をにじした。母親と一人で過ごしていた時のことを思つと、樂しくないとも言つ切れない。

「しかしあれだな、ハーレムと言つやつだな」「は？」

アルは聞きなれない言葉を耳にした。なんだそれは？

「なんだ氣付いていないのか？ ここにいるのはアル君以外は全員女だ。果報者だな！」

「え…… つと、ここつもか？」

アルはベアくまを見た。

「貴様！ 私を雄だと思っていたのか！ ふざけあつて！ 噛み殺すぞ！」

「いや…… そう言われても狼の性別なんてわからないよー。」

そんなことで非難されても困るとアルは思った。多分見た目では無理だ。ひっくり返して股間でもみない限りはわからないだろ？。そしてわざわざそんなことをしてまで確認する理由もない。

「え、『めん、私も男の子だと思つて、ベアくまつてつけちやつた……』

「『めん、ベアくまが男の子の名前だつてところからわからない』『リーリア様……』

銀髪の少女はしょんぼりしているベアくまを見た。リーリアの名付けの被害者だ。そう思つと可哀想にも思えてきた。おつかなびつくりベアくまに手を伸ばすと頭に手を乗せなでた。ベアくまもされるがままになつていた。

「話は戻りますが、ハーレムつてなんですか？」

「ああ、まあ定義にはいろいろあるのかもしかんが、広義には一人の男が複数の女を囲うよつなことを言つな」

「これが……そなんですか？」

「ああ、死姦、幼女姦、獣姦、熟女姦……よりどりみどりだな！とこうかこう言つとアル君が凄い変態に聞こえるな！」

キャシーが凄い笑顔で言つ。アルは全く笑えなかつた。

「それは……私もテオバルト様には様々な虐待を受けてきましたが……そこまではされませんでした。しかし……命を盾にとられ、体の自由までも奪われてしまつよつな状況では逆らつことも……」

銀髪の少女が椅子と後ろに下がる。引いている。不審者を見る目つきだ。

「いや……それはお前……一応だな私にも番がいてだな、操を立てているのだが……貴様、獸か！見境なしか！」

ベアくまが困った末に吠えた。

「アル君……」

リーリアが何か言いたげにアルを見ている。

「お前ら……キャシーさんが勝手なこと言つてるだけだろ？ まに受けるなよ……」

アルは机に突っ伏す。なんなんだこの状況は。対処しがたい。

「まあそれは半分冗談としてだな」

キャシーの決まり文句のようだ。アルはそう思つ。

「これからどうするんだ？ 掃除はもう終わつたし、給金も支払つた。ああ、いや別に出て行けと言つていいわけじゃないぞ」「そうですね。とりあえずはリーリアの実家のある街へと行こうと思つんですが」

「なんだ？ 娘さんを僕にぐださい！ とか言いに行くのか？」「……そんなわけないでしょ……」

リーリアが少し落胆したようだがそれには誰も気付いていなかつた。

「まあ旅を続けるなら実家の許可もいるかもしませんね。リーリアを人間に戻す方法を探しに行きますのでリーリアも一緒に来ても

らう必要がありますし」

「人間に戻す……か。あてはあるのか？」

「それがまつたく。とりあえず旅をして各所で情報収集を行おうと思っていますが」

「あてならありますよ」

銀髪の少女が言つ。

「なに？」

「グラウシール博士。テオバルト様と共同で研究を行なつていました。カテゴリーR、君臨するものについて造詣の深い方です」

「なんだそれは？」

「詳しい話は端折りますが、現在カテゴリーRは5名。そのうちの一人があなたと同じような能力ですが、さらに規模が大きく、死者の軍団を形成していますが、その能力範囲に制限はありません、何かのヒントになる可能性はあります」

銀髪の少女に言われるまで考えもしなかつた。なぜ自分がいきなりテオバルトに襲われたのか？ テオバルトを目にした時に考えたのは復讐だけだった。それ以上の事情について考察していなかつた。

「にいさん、人間に戻れるというなら私も協力しましょう。幼い妹に欲情するようなにいさんから離れる事ができないと、このお互いに不幸なことです」

「……いや……妹とか言つてるのはお前だけだし、幼女がどうとかはキヤシーさんが勝手に言つてるだけなんだけど……」

なんだろう。嫌な予感しかしない、とアルは思つ。これから先ずっとこんな感じでからかわれ続ける気がしてきた。

「で、その博士はどこにいるんだ？」

「セプテム王国とティアル王国の間にある小国バヘド。そこにおられます。レガリアを所持する7大王国には数えられていませんが色々発展している国です。レガリアに対抗するための魔導の研究が盛んですね」

「なるほどな。ここから行くとしたらどうしたらいいんだ？」

「さあ、私は地理には疎いので……」

「リーリア？」

「えーっと、私はマテウ国内でも怪しい感じなんだけど……」

アルも大陸の大体の位置関係は本で読んで大体わかつていたが、具体的にどう行けばいいのかはわからなかつた。

誰もわからない様子だったのでキャシーが助け舟を出した。

「ああ、ビヘドへ行くなら大きくは2つだな。セプテム王国経由か、ティアル王国経由だ。セプテム王国はマテウ国とは国交がない。バリバリの敵対国家だな。こっちへ行くなら無理やり押し通る必要がある。ティアル王国はまあ、比較的おだやかな国だから入国自体は問題ないが……こちらは経路が問題だ。第1魔族領を通りの必要がある。なんとかいう冒険者が行路を開発していただはずだ。詳しくはしらんが調べればわかるだろう」

「セプテム王国……ですか。あれは中々無茶な感じの国ですね」

「ああ、そつちはお薦めしない。下手すれば洗脳されて二度と出で来れなくなるな」

「そうですね。魔族領を通るほうがまだなんとかなる気もします」

魔族領ならなんとかなる気がした。だが少しアルは誤解している。魔族領と聞いて今まで自分が住んでいたような森だと思っていた。森ならどうにでも隠れながら進める気がしていただが、第1魔族領はほぼ平原と捨てられた都市部で構成されている。

「えーっと、とりあえず、名前はイルでいいか？」

今更のようにアルが銀髪の少女に聞く。名前についてうやむやになつてた。

「はい、にいさんがそれでいいのなら」

「そのグラウシェル博士ってのはどんな奴だ？ テオバルトと共同研究していくつて聞くと警戒心がわくんだけど」

「あの方はまともな方ですよ、テオバルト様に比べれば」

わざわざまともだと説明するのが逆に怪しく思える。アルは会つ時には最大限注意を払おうと心に誓つた。

アルは大体の今後の計画を大雑把に心に描けた。ならば準備だ。

「今日から旅の準備をしようと思つ。しばらくは買い物をして装備を整えたり、情報収集だ。それからリーリアの街へ向かう。その後は第1魔族領を通つてティアル王国を経由してビヘドだ。いいか？」

「わかりました」

イルが無表情でそう言つ。

「ついていくしかなかろうが！ リーリア様もおられるしなー！」

ベアくまが吼える。

「うんー。」

リーリアが嬉しそうにうなずいた。

アルは思う。森を出ようと決意した時にはこんなことになるなんて想像もつかなかつた。まだ森を出てそう田にちも経つていないのにこんな状態だ。これから先どうなるのか。

期待と不安がないまぜになつた気持ちでアルは仲間たちを見渡す。仲間、これも森にいたままでは望むべくもなかつたものだ。まだ出会つたばかり。仲間としては不安な点も多々あるし、アルの力によつて結びついているというのは、純粹な仲間としては歪にも感じる。イルとベアくまなどまだどのような者達かはつきりしないところもある。

だからこそ仲間たちを必ず元に戻す。そう決意をあらたにした。

一つの伝説がある。戦場に現れるという化け物の話だ。

それは死靈の王とも、魔法殺し、異能殺しとも呼ばれる5身一体の怪物だ。

それは5つの体を駆使し、からみつき、結びつき、わかつれ、まるでひとつ生き物のように戦場を蹂躪する。

それが現われた後には何も残らない。全てを喰らい尽くした後、喰い残された無惨な骸達は自らの足で起き上がりいずこかへ去るという。

それは千年を生きる大魔導師が創り上げたとも、魔界の大魔王が創り上げたとも言われている。

それは3人の異能の王の三つ巴の戦いに介入し、その全てを滅ぼしたと言われている。

そして……それは一人の少年と3人の少女、一匹の狼の姿をして

いたと伝説にはうたわれていた。

15話 その後（後書き）

2章の話 자체はこれで終わりです。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

後1話、1章と同じように幕間に入る予定です。

これも消化できるかどうかよくわからない、風呂敷広げるだけの話です。w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2219w/>

大魔王が倒せない

2011年10月29日16時54分発行